

テ容易ニ近寄り得ル場所ニ於テ筒ニ自働不還辨ヲ取附クベシ

第九章 二重底

第五十七條 一六メートル以上ノ船舶ニ付テハ左ノ各號ノ部分ニ二重底ヲ設クベシ

一 一七六メートル未満ノ船舶ニ在リテハ機關室前端隔壁ヨリ船首隔壁迄

二 一七六メートル以上一〇〇メートル未満ノ船舶ニ在リテハ機關室前端隔壁ヨリ船尾隔壁迄

三 一〇〇メートル以上ノ船舶ニ在リテハ船首隔壁ヨリ船尾隔壁迄

前項ノ船舶ニ於テ船首隔壁又ハ船尾隔壁迄二重底ヲ達セシムルコト實際上不可能ナルトキハ出來得ル限リ其ノ近ク迄之ヲ達セシムベシ

第五十八條 前條ニ依リ設クル二重底ニ在リテハ二重底線板ト彎曲部外板トノ交線ハ何レノ部分ニ於テモ一ノ中央ニ於テ船底基線上船體中心線ヨリ船ノ幅ノ二分ノ一ノ距離ニ在ル點ヲ通り該基線ニ對シ二十五度ノ傾斜ヲ以テ引キタル横斜線ト肋骨線トノ交點ヲ通ル水平面ノ上方ニ在ルコトヲ要ス

第五十九條 排水ノ目的ノ爲ニ二重底ニ設クル滄水溜ハ必要ナル程度ヲ超エテ其ノ深サヲ大ナラシムルコトヲ得ズ且如何ナル場合ト雖モ縁板ノ内縁又ハ外板ヨリ〇・四五メートル未満ノ箇所ニ在ルコトヲ得ズ但シ螺旋推進器ヲ備フル船舶ニ付テハ軸路ノ後端ニ於テ外板迄達スル一箇ノ滄水溜ヲ設クルコトヲ得

第十章 水密隔壁等ノ構造及最初ノ試験

第六十條 水密隔壁ハ鋼船構造規程ニ適合スルモノナルコトヲ要ス

隔壁ノ階段部及屈折部ハ水密ニシテ且其ノ箇所ニ在ルベキ隔壁ト同一ノ強力ヲ有スル構造ト爲スベシ

肋骨又ハ梁ガ水密甲板若ハ隔壁ヲ貫通スル部分ハ木材又ハ「セメント」ヲ用キズシテ水密ヲ保ツ構造ト爲スベシ

第六十一條 本令ニ掲グル水密戸、舷窓、舷門、載貨門、載炭門、辨、管、灰棄筒及芥棄筒ノ設計、材料及構造ニ付テハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ルベシ

第六十二條 隔壁ニ設クル水密戸ハ之ヲ設クル箇所ニ於ケル限界線迄ノ水高壓力ヲ以テ之ヲ試験スベシ

前項ノ試験ハ船舶ノ就航前ニ於テ戸ノ取附前又ハ取附後ニ之ヲ行フベシ

第六十三條 二重底(溝形龍骨ヲ含ム)及内側外板ハ限界線

迄ノ水高壓力ヲ以テ之ヲ試験スベシ

液體ヲ容ルル槽ニシテ水密區畫ノ一部ヲ成スモノハ最高區畫滿載吃水線迄ノ高サ、龍骨ノ上面ヨリ槽ノ箇所ニ於ケル限界線迄ノ高サノ三分ノ二及槽ノ頂板上〇・九二メートル迄ノ高サノ中最大ナルモノニ相當スル水高壓力ヲ以テ之ヲ試験スベシ

第六十四條 甲板、圍壁、隧道、溝形龍骨又ハ通風筒ニシテ水密ナルコトヲ要スルモノハ其ノ箇所ニ在ルベキ水密隔壁ト同一ノ強力ヲ有スル構造ト爲シ圍壁及通風筒ハ少クトモ限界線迄水密ニ構造セラレタルモノナルコトヲ要ス

前項ノ甲板、圍壁、隧道等ノ水密ナルコトヲ要スル構造及之ニ設クル開口ノ閉鎖裝置ニ付テハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ルベシ

第六十五條 水密甲板ハ漲水又ハ射水ニ依リ、水密ナル圍壁、隧道及通風筒ハ射水ニ依リ之ヲ試験スベシ

第十一章 耐火隔壁、水密區畫室ヨリノ出口

第六十六條 船舶ニハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依リ隔壁甲板ヨリ上部ニ於テ船側ヨリ船側迄達スル耐火隔壁ヲ設クベシ

船樓内ニ於ケル耐火隔壁ノ間隔ハ四〇メートルヲ超ユル

コトヲ得ズ但シ管海官廳差支ナシト認ムルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第六十七條 耐火隔壁ハ隔壁ニ於テ八一五度ノ溫度ヲ生ズル火ノ蔓延ヲ一時間阻止シ得ベキ金屬其ノ他ノ耐火材料ヲ以テ適當ニ之ヲ構造スルコトヲ要ス

鋼製隔壁ニシテ隔壁甲板直下ノ甲板間ニ於ケル水密隔壁ノ構造ト同一ノ構造ヲ有スルモノガ可燃性材料ノ内張ヲ有セザルトキハ之ヲ前項ノ規定ニ適合スル耐火隔壁ト看做ス

第六十八條 耐火隔壁ニ於ケル階段部及屈折部ハ隔壁ト同一ノ效力ヲ有スルモノナルコトヲ要シ又開口ノ閉鎖裝置ハ耐火性ニシテ且焰ノ浸入ヲ防ギ得ルモノナルコトヲ要ス

第六十九條 船舶ニハ旅客室又ハ船員室ノ在ル各水密區畫室ヨリ其ノ居住者ガ非常ノ際上甲板以上ノ開放セル場所ニ退去シ得ル爲適當ナル設備ヲ爲スベシ

各機關室、軸路其ノ他ノ作業場所ニハ非常ノ際ニ於ケル船員ノ避難ノ爲水密戸ト別箇ニ適當ナル設備ヲ備フベシ

第十二章 「ボンパ」排水裝置

第七十條 船舶ニハ主機關ニ依リ動作スル正滄水「ボンパ」又ハ之ニ代ル獨立機關ニ依リ動作スル正滄水「ボンパ」ノ



外獨立ノ動力ニ依リ操作セラルル二箇ノ副滄水「ポンプ」ヲ備フベシ但シ五九一・五メートル未満ニシテ標準數三〇未満ノ船舶ニ在リテハ船舶ノ前部及後部ニ各一箇ノ「クランク」型手動「ポンプ」ヲ備フルカ又ハ移動式動力「ポンプ」一箇ヲ備フルトキハ副滄水「ポンプ」ハ之ヲ一箇ト爲スコトヲ得

標準數三〇ヲ超ユル船舶ニ在リテハ前項ノ規定ニ依ル副滄水「ポンプ」ノ外獨立ノ動力ニ依リ操作セラルル副滄水「ポンプ」一箇ヲ増備スベシ

衛生、脚荷又ハ雜用ノ「ポンプ」ガ滄水吸出管ニ適當ニ連結セラルルトキハ之ヲ前二項ノ副滄水「ポンプ」ト看做ス  
第七十一條 前條ニ依リ二箇以上ノ副滄水「ポンプ」ヲ要スル船舶ニ在リテハ内一箇ハ潜水型ノ非常用「ポンプ」トシ隔壁甲板ノ上方ニ設置シタル動源ニ依リ非常ノ際之ヲ動作シ得ル装置ト爲スベシ

第七十二條 動力滄水「ポンプ」ハ成ルベク同一ノ損傷ニ依リ迅速ニ浸水スル虞ナキ別々ノ水密區畫室ニ之ヲ設置スベシ若シ機關室ガ二箇以上ノ水密區畫室ヨリ成ルトキハ滄水「ポンプ」ヲ出來得ル限り各室ニ分布スルコトヲ要ス  
第七十三條 各滄水「ポンプ」ハ船首尾艙ニノミ使用スルモノヲ除キ手動ノモノナルト動力操作ノモノナルトヲ間ハ

ヨリ、滄水支管ノ内徑ハ五センチメートルヨリ小ナラザルコトヲ要シ又滄水支管ノ内徑ハ一〇センチメートルヨリ大ナルコトヲ要セズ

第七十六條 蒸汽機關ニ依リ推進スル船舶ニ在リテハ主海水吸入管ノ徑ノ三分ノ二以上ノ徑ヲ有スル不還辦附直接吸水管ヲ主循環「ポンプ」ニ取附ケ之ヲ機關室内ノ滄水ノ最低吸水位置迄導クベシ又燃料トシテ石炭ヲ使用シ若ハ使用スルコトアル船舶ニ於テ汽機室ト汽機室トノ間ニ水密隔壁ナキトキハ少クトモ一箇ノ循環「ポンプ」ヨリ復水器ヲ通過セズシテ直接船外へ排水スル爲別箇ノ排水管ヲ取附クルカ又ハ循環水排出管ニ連結セル支管ヲ設クベシ  
第七十七條 貨物艙又ハ機關室ノ排水ニ用ウル管ハ水槽又ハ油槽ニ對スル管ト區別スベシ  
石炭庫若ハ燃料油庫ノ下部、汽機室又ハ汽機室内ニハ排水用管トシテ鉛管ヲ使用スルコトヲ得ズ沈澱油槽又ハ燃料油「ポンプ」ヲ設置シタル發動機室内ニ於ケル排水用管ニ付亦同ジ

第七十八條 滄水及脚荷水ノ管系ハ海水若ハ脚荷水ガ貨物艙若ハ機關室ニ流入シ又ハ一區畫室ニ在ル水ガ他ノ區畫室ニ流入スルノ虞ナキ装置ト爲スベシ脚荷水及滄水ノ管系ニ連結セラルル深水槽ニ付テハ之ニ貨物ヲ積載シタル

ズ船舶ノ各船艙又ハ機關室ヨリ排水シ得ル様装置スベシ  
第七十四條 各副滄水「ポンプ」ハ滄水主管ヲ通ル水ニ一分間一二メートル以上ノ速度ヲ與ヘ得ルモノナルコトヲ要シ且之ヲ設置シタル區畫室ニ對シ滄水主管ノ徑ヨリ小ナラザル徑ノ直接吸水管ヲ備フベシ  
直接吸水管ハ船内ノ各側ヨリ吸水シ得ル様之ヲ配置スベシ

第七十五條 滄水「ポンプ」ニ連結スル滄水主管及各水密區畫室ニ對スル滄水支管ノ内徑ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

一 滄水主管ノ徑ノ算式  
$$\sqrt{\frac{1(B+D)}{36}} + 2.5 \text{ センチメートル}$$

二 滄水支管ノ徑ノ算式  
$$\sqrt{\frac{1(B+D)}{216}} + 2.5 \text{ センチメートル}$$

Bハ船ノ幅(メートルニテ)  
DハLノ中央ニ於テ龍骨ノ上面ヨリ隔壁甲板ノ船側ニ於ケル上面迄ノ深サ(メートルニテ)  
ハ當該支管ニ依リ排水スベキ區畫室ノ長サ(メートルニテ)  
前項ノ規定ニ拘ラズ滄水主管ノ内徑ハ六センチメートル

場合ニ於テ不意ニ海水流入シ又之ニ脚荷水ヲ積載シタル場合ニ於テ脚荷水ガ滄水管ニ依リ吸出サルコトナキ様特別ノ設備ヲ爲スベシ

第七十九條 或區畫室ノ排水ニ使用スル滄水管ガ船舶ノ衝突又ハ乗揚等ニ因リ該區畫室外ノ場所ニ於テ損傷ヲ受ケ該區畫室ニ浸水スル虞アルモノナルトキハ之ヲ防止スル爲適當ノ設備ヲ爲スベシ滄水管ノ何レカノ部分ガ船側ニ近ク設置セラルルカ又ハ溝形龍骨内ニ設置セラルルトキハ此ノ目的ノ爲管ノ開放端ノ在ル區畫室ニ於テ之ニ不還辦ヲ取附クルカ又ハ隔壁甲板ノ上方ノ場所ヨリ操作シ得ル螺締辦ヲ取附クベシ  
第八十條 滄水排出裝置用ノ配流箱、「コック」及辨ハ船舶ガ通常ノ状態ニ在ル場合ニ於テ常ニ近寄り得ル場所ニ之ヲ設ケ且非常用滄水「ポンプ」ヲ備フル船舶ニ在リテハ之ニ依リ何レノ區畫室ヨリモ吸水シ得ル様配置スベシ若シ各滄水「ポンプ」ニ共通ナル一管系ノミヲ備フルトキハ該「コック」又ハ辨ハ隔壁甲板ノ上ヨリ之ヲ操作シ得ルモノナルコトヲ要シ又主滄水管系ノ外非常用滄水管系ヲ備フルトキハ之ヲ主管系ヨリ獨立セシメ且非常用「ポンプ」ニ依リ浸水状態ニ在ル何レノ區畫室ヨリモ吸水シ得ル様装置スベシ



第十三章 特殊ノ航路又ハ特殊旅客ノ運送ニ使

用スル船舶ニ對スル特別規定

第八十一條 管海官廳短國際航海ニ從事スル旅客船ニ付特ニ必要アリト認ムルトキハ第七章乃至第九章及第十二章ニ規定スル事項ニ付適當ニ斟酌スルコトヲ得

第八十二條 管海官廳ハ天候又ハ交通ノ狀況ニ因リ特ニ危険多キ航路ニ於テ專ラ旅客ノ運送ニ從事スル船舶ニ付必要アリト認ムルトキハ其ノ區畫ヲ第四章及第五章ニ規定スルモノヨリ更ニ細密ナラシムルコトヲ得

第八十三條 管海官廳一定區域ノ航路ニ於テ臨時旅客又ハ甲板旅客ヲ運送スル船舶ニ付本令ノ規定ヲ適用スルコト實際上不可能ナリト認ムルトキハ當該航路及旅客ノ種類ヲ考慮シ適當ト認ムル程度迄之ヲ斟酌スルコトヲ得

附 則

第八十四條 本令ハ昭和九年三月一日ヨリ之ヲ施行ス

第八十五條 昭和六年六月三十日以前ニ龍骨ヲ据附ケ旅客船トシテ製造シタル船舶又ハ同日以前旅客船ニ變更シタル船舶ニ付テハ管海官廳ニ於テ其ノ水密區畫其ノ他ノ設備ヲ考慮シ實行不可能ニシテ且不適當ナリト認ムル限り本令ニ依ラシメザルコトヲ得

● 遞信省令第九號

木船構造規程左ノ通定ム

昭和九年二月一日

遞信大臣 南

弘

木船構造規程

目 次

- 第一章 總則
- 第二章 材料
- 第三章 龍骨、船首材、船尾材、舵柱、力材、船尾縱翼材、船尾橫翼材及船尾管胴材
- 第四章 舵
- 第五章 肋骨
- 第六章 內龍骨、側內厚板、側內龍骨及彎曲部縱通材
- 第七章 船殼、梁壓材、副梁壓材、梁受板、副梁受板、船側縱通材及內部腰板
- 第八章 梁及梁ノ配置
- 第九章 梁曲材
- 第十章 梁柱
- 第十一章 外板、舷牆及內張板
- 第十二章 甲板
- 第十三章 船首肘材及船尾肘材

第十四章 適當比例ノ船舶

第十五章 甲板口及船側口

第十六章 固著釘及固著法

第十七章 填絮及船底包板

第十八章 機關室

第十九章 船樓及甲板室

第二十章 橋、帆架及斜橋

第二十一章 通風間隙及淹水路

第二十二章 排水裝置及諸管

第二十三章 操舵機具及揚錨、揚貨、繫船等ノ裝置

第二十四章 油運搬船

附 則

木船構造規程

第一章 總 則

第一條 本令ニ於テ上甲板トハ最上層ノ甲板ヲ謂ヒ第二甲板トハ第二層ノ甲板ヲ謂フ

第二條 本令ニ於テ重甲板船トハ其ノ上甲板下ニ重量ノ貨物ヲ積載シ得ル船舶ヲ謂フ

本令ニ於テ輕甲板船トハ二層以上ノ甲板ヲ有シ其ノ第二甲板以上ニハ專ラ船員、旅客又ハ輕量ノ貨物ヲ搭載スルニ適スル構造輕ナル汽船ニシテ其ノ上甲板上ニハ船首樓

船尾樓又ハ全甲板面積ノ十分ノ一ヲ超ユル船橋樓若ハ甲板室ヲ設置スルニ適セザルモノヲ謂フ

第三條 本令ニ於テ船ノ長サトハ上甲板梁上ニ於テ船首材ノ前面ヨリ推進器孔ヲ有スル船舶ニ在リテハ舵柱ノ後面迄、之ヲ有セザル船舶ニ在リテハ船尾材ノ後面迄ノ水平距離ヲ謂フ但シ上部突出ノ船首材ヲ有スル船舶ニ付テハ該材下部ノ前面ニ沿ヒ延長シタル直線ヲ以テ船首材ノ前面トシ、外軸ト内軸トヲ併有スル船舶ニ付テハ内軸前面ヲ以テ船首材ノ前面トシ又舵柱ヲ有セズ且舵ヲ船尾材ニ取附ケザル船舶ニ付テハ舵頭ノ中心ヲ以テ舵柱ノ後面トス本令ニ於テ船ノ幅トハ船體最廣部ニ於テ肋骨ノ外面ヨリ外面迄ノ水平距離ヲ謂フ但シ舷端突出ノ肋骨ヲ有スル船舶ニ付テハ肋骨下部ノ外面ニ沿ヒ延長シタル直線ヲ肋骨ノ外面ト看做ス

本令ニ於テ船ノ深サトハ船ノ長サノ中央ニ於テ龍骨ノ上面ヨリ上甲板梁ノ船側ニ於ケル上面迄ノ垂直距離ヲ謂フ

第四條 本令ニ於テ第一數トハ重甲板船ニ在リテハ船ノ深サト幅ノ二分ノ一トヲ加ヘタル數ヲ謂ヒ輕甲板船ニ在リテハ船側ニ於ケル上甲板梁ノ上面ト第二甲板梁ノ上面トノ中央迄ノ深サト幅ノ二分ノ一トヲ加ヘタル數ヲ謂フ

本令ニ於テ第二數トハ重甲板船ニ在リテハ船ノ長サト幅



ト深サト相乗ジタル數ヲ謂ヒ輕甲板船ニ在リテハ長サト幅ト船側ニ於ケル上甲板梁ノ上面ト第二甲板梁ノ上面トノ中央迄ノ深サト相乗ジタル數ヲ謂フ

本條ノ長サ、幅及深サハメートルヲ以テ單位トシ單位下ハ二位ニ止メ第三位ハ四捨五入トス

第五條 本令ハ特ニ定アル場合ヲ除クノ外船ノ長サガ深サノ十倍ヲ超ユルコトナク且幅ノ六倍ヲ超エザル船舶ノ構造ヲ示シ又寸法及箇數ハ最小ノ限度ヲ、距離ハ最大ノ限度ヲ示シタルモノトス

第六條 船ノ長サ三〇メートル以上ノ船舶ニ付テハ管海官應ニ於テ差支ナシト認ムル場合ノ外其ノ長サヲ深サノ十倍以上ト爲スコトヲ得ズ

第七條 肋骨ノ寸法及心距ハ第一數ニ依リ、船首材、龍骨、船尾材、舵柱、船尾縱翼材、船尾橫翼材、舵心材、舵針、蝶番、内龍骨、側内厚板、側内龍骨、彎曲部縱通材、船側縱通材、内部腰板、梁受板、副梁受板、梁壓材、副梁壓材、船鈔、木甲板、内張板、外板及固著釘等ノ寸法ハ第二數ニ依リ、梁、梁曲材、船首肘材及船尾肘材等ノ寸法ハ船ノ幅ニ依リ之ヲ定ムベシ

第八條 船體各部ノ工事ハ良好且有效ナルコトヲ要ス  
第九條 本令ノ規定ニ該當セザル船體ノ構造竝ニ材料及其

ノ寸法ハ管海官應ニ於テ本令ニ定ムルモノト同一ノ效力ヲ有スト認ムルモノニ限リ本令ニ適合スルモノト看做ス

第十條 管海官應ハ船舶ノ用途、航路ノ狀況又ハ載貨ノ種類ニ應ジ本令ノ規定ニ拘ラズ船體ノ構造及材料寸法ヲ適當ニ斟酌スルコトヲ得

第十一條 第三級船及第四級船ノ船體ノ構造竝ニ材料及其ノ寸法ハ管海官應ノ適當ト認ムル所ニ依ル但シ第八條及第十四條及第二十二章ニ規定スルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第二章 材料

第十二條 船體ノ構造ニ使用スル木材ハ有害ナル節瘤其ノ他ノ缺點ヲ有セズシテ十分乾燥シタルモノナルコトヲ要ス

第十三條 船體ノ構造ニ使用スル曲材ハ天然ノ屈曲材ニシテ木理ノ通りタルモノナルコトヲ要ス

第十四條 船體構造材料ノ等級ハ第一號表ニ依ル

本令ニ規定スル縱梁、梁柱、梁下縱通材、橋孔板竝ニ船口ノ蓋板、縱材及船口梁ノ寸法ハ乙材ヲ用キタルトキノ寸法トシ船口縁材、副龍骨、副内龍骨及第四百四條ニ規定スル添材内龍骨ノ寸法ハ甲材ヲ用キタルトキノ寸法トス

第十五條 別表ニ掲グル木材ハ第一號表ニ掲グル同一等級ノ他ノ木材ヲ以テ代用スルコトヲ得

別表ニ掲グル木材ノ代リニ第一號表ニ掲グル他ノ等級ノ木材又ハ「チーク」若ハ赤樫ヲ用ウルトキハ左ノ各號ノ規定ニ依ル

一 甲材ノ代リニ乙材ヲ用ウルトキハ百分ノ十、丙材ヲ用ウルトキハ百分ノ二十、又丁材ヲ用ウルトキハ百分ノ三十以上其ノ截面積ヲ別表ニ掲グルモノヨリ増スコトヲ要ス

二 乙材ノ代リニ丙材ヲ用ウルトキハ百分ノ十又丁材ヲ用ウルトキハ百分ノ二十以上其ノ截面積ヲ別表ニ掲グルモノヨリ増スコトヲ要ス

三 乙材ノ代リニ甲材ヲ用ウルトキハ百分ノ十以下其ノ截面積ヲ別表ニ掲グルモノヨリ減ズルコトヲ得

四 「チーク」若ハ赤樫ヲ甲材ノ代リニ用ウルトキハ百分ノ十、乙材ノ代リニ用ウルトキハ百分ノ二十以下其ノ截面積ヲ別表ニ掲グルモノヨリ減ズルコトヲ得

第十六條 第一級船ニ在リテハ本令ニ依リ甲材又ハ乙材ヲ使用スベキ場合ニ於テ丙材又ハ丁材ヲ使用スルコトヲ得ズ

第十七條 鋼材ハ同一寸法ノ鐵材ヲ以テ之ニ代用スルコト

ヲ得

第十八條 本令ニ規定スル堅材トハ樫、「チーク」、樺、松、山毛櫸、栗、櫻、楠、樟、赤櫛、椎、鹽地又ハ之ニ類似ノ木材ヲ謂ヒ柔材トハ松、杉、米松、樺、赤松、桂、姫子松、檜、赤身杉、檜、杉、蝦夷松、樺又ハ之ニ類似ノ木材ヲ謂フ

第三章 龍骨、船首材、船尾材、舵柱、力材、船尾縱翼材、船尾橫翼材及船尾管胴材

第十九條 龍骨、船首材、船尾材及舵柱ノ寸法ハ第三號表ニ依ル

第二十條 龍骨ヲ構成スル各材ノ長サハ船ノ首尾兩端ニ用ウルモノヲ除クノ外一〇・五メートル以上ナルコトヲ要ス

前項ノ長サヨリ短キ材ヲ龍骨ニ使用スルトキハ其ノ下面ニ副龍骨ヲ附スベシ此ノ場合ニ於ケル龍骨ノ深サハ規定ノ深サノ三分ノ二以上、副龍骨ノ深サハ龍骨ノ規定ノ深サノ二分ノ一以上ト爲シ肋骨心距ヨリ大ナラザル心距ニ敲釘ヲ用キテ相互ニ緊著セシムベシ

前二項ノ規定ハ長サ三〇メートル未滿ノ船舶ニ付テハ管海官應ニ於テ適當ニ之ヲ斟酌スルコトヲ得

龍骨ニハ龍骨翼板ヲ受クルニ適當ナル溝ヲ穿チ且溝ノ上



部ニハ適當ナル縁ヲ殘シ置クベシ

第二十一條 龍骨ノ接手ハ鈎形水平嵌接ト爲スコトヲ要ス但シ嵌接ノ中央ニ大ナル木栓ヲ打込ムトキハ平面水平嵌接ト爲スコトヲ得

龍骨ノ嵌接ハ其ノ長サヲ用材ノ深サノ五倍以上、其ノ端末ノ深サヲ用材ノ深サノ四分ノ一以上ト爲シ其ノ兩端ニ二箇宛、其ノ中間ニ三〇センチメートルノ心距ニ敲釘ヲ用キテ相互ニ緊著セシムベシ

龍骨ノ嵌接ニハ適當ノ位置ニ浸水ヲ防グ爲水留栓ヲ打込ムベシ

龍骨ノ嵌接ハ副龍骨及龍骨翼板ノ嵌接ト一・五メートル以上相避距セシメ且橋根及艙口ト適當ニ避距セシムベシ

第二十二條 船首材ノ寸法ハ滿載吃水線ヨリ上部ニ至ルニ從ヒ漸次減少シテ其ノ頂上ニ於ケル截面積ハ規定ノ截面積ノ四分ノ三ト爲スコトヲ得

船首材ハ一材ヲ以テ作ルベシ但シ長サ三〇メートル以上ノ船船ニシテ其ノ船首材ノ嵌接ノ長サヲ用材ノ深サノ三倍半以上ト爲シ且適當ノ副船首材ヲ設クル場合ニ於テハ二材ヲ以テ作ルコトヲ得

船首材ト龍骨トノ嵌接ノ長サハ用材ノ深サノ四倍以上ト爲シ且前條ニ規定スル龍骨ノ嵌接ニ等シキ構造ト爲スベシ

シ

船首材ノ下部屈曲セズシテ龍骨ニ銜接スルトキハ筋ニテ相嵌込ミ兩面ニ適當ナル金具ヲ附シ且内部ニ根曲材ヲ設ケ其ノ銜接部ヲ緊著スベシ又接合部ニハ適當ノ位置ニ浸水ヲ防グ爲水留栓ヲ打込ムベシ

第二十三條 車軸孔ヲ有セザル船尾材ハ眞直ナル一材ヲ以テ作り其ノ上部ヲ上甲板梁ニ固著シ其ノ下部ニ於ケル龍骨トノ固著ハ前條第四項ノ規定ニ依ルベシ

前項ノ船尾材ノ寸法ハ舵頭管ノ下部ヨリ漸次減少シテ其ノ頂上ニ於ケル截面積ハ規定ノ截面積ノ四分ノ三ト爲スコトヲ得

第二十四條 車軸孔ヲ有スル船尾材ハ眞直ナル一材ヲ以テ作り其ノ上部ヲ上甲板梁又ハ第二甲板梁ニ固著シ其ノ下部ニ於ケル龍骨トノ固著ハ第二十二條第四項ノ規定ニ依ルベシ但シ第二數八〇〇未滿ノ船舶ニ在リテハ根曲材ヲ省略シ船尾材ト龍骨トヲ直接緊著スルモ妨ナシ

前項ノ船尾材ノ車軸孔ノ各側ニ於テハ其ノ截面積ヲ船尾材ノ規定ノ截面積ノ五分ノ三以上ト爲シ其ノ厚サヲ規定ノ厚サノ二分ノ一以上ト爲スベシ

第二十五條 舵柱ハ眞直ナル一材ヲ以テ作り上甲板迄達セシメ其ノ下部ニ於テハ筋ニテ龍骨ニ嵌込ミ且船尾材、龍

第二十八條 船ノ首尾ニハ斜肋骨ヲ取附クルニ十分ナル高さ及長サヲ有シ龍骨ノ厚サヨリ小ナラザル厚サヲ有スル力材ヲ設クベシ

第二十九條 船尾管胴材ハ堅材ヲ以テ作り其ノ寸法ハ船尾管ノ徑ノ二倍以上ト爲スベシ

船尾管胴材ハ成ルベク上下二材ヲ以テ構成シ孔ノ兩側ニ於テ三〇センチメートルヲ超エザル心距ニ敲釘ヲ用キテ相互ニ緊著セシムベシ

船尾管胴材上部ニハ堅曲材ヲ設ケ船尾材及管胴材ヲ緊著スベシ

船尾管ノ外面ハ少クトモ其ノ前後部ニ於テハ船尾管胴材及船尾材ノ孔面ニ密接セシムルコトヲ要ス

第四章 舵

第三十條 舵心材ノ徑ハ第三號表ニ依ル

航海速力一時間ニ付十海里以上ノ汽船及船體ノ大サニ比シ特ニ大ナル舵ヲ有スル船舶ノ舵心材ハ適當ニ其ノ徑ヲ增加スベシ

第三十一條 舵心材ハ舵頭迄一材ヲ以テ作り之ヲ矧材ト緊著セシムベシ

矧材ノ厚サハ之ヲ舵心材ノ厚サト等シクシ其ノ後端ニ至ルニ從ヒ適當ニ其ノ厚サヲ減ズルコトヲ得

骨及舵柱ニ跨ル黃銅製金具ヲ兩面ニ取附ケ三材ノ結合ヲ堅固ナラシムベシ但シ長サ三〇メートル未滿ノ船舶ニ付テハ管海官廳ニ於テ固著方ヲ適當ニ斟酌スルコトヲ得

龍骨ヲ船尾材ニ止ムルトキハ第三號表ニ掲グル龍骨ノ寸法ノ五分ノ一ヨリ小ナラザル厚サヲ有スル黃銅製連結材ヲ設ケ之ヲ船尾材、龍骨及舵柱ニ堅牢ニ固著スベシ

第二十六條 船尾材ト舵柱トハ其ノ上部空間ニ堅材ヲ挿入シ其ノ兩面ニ第三號表ニ掲グル船尾縱翼材ヲ設ケ之ヲ緊著セシムベシ

船尾縱翼材ハ舵柱ノ接面ヨリ上部ニ至ルニ從ヒ其ノ截面積ヲ減ジ其ノ頂上ニ於ケル截面積ハ規定ノモノノ三分ノ二ト爲スコトヲ得

舵柱ヲ有セザル船舶ニ在リテハ前二項ノ規定ニ準ジ船尾縱翼材ヲ設クルカ又ハ船尾材前面ニ船尾橫翼材ヲ設ケ之ヲ船尾材ニ緊著シ且其ノ兩端ヲ橫曲材ヲ以テ船側ニ固著スベシ

船尾橫翼材ハ成ルベク一材ヲ以テ作り其ノ寸法ハ第三號表ニ依ルベシ但シ其ノ兩端ニ於ケル截面積ハ規定ノモノノ四分ノ三ト爲スコトヲ得

第二十七條 船首材及船尾材ニハ外板ヲ受クルニ適當ナル溝ヲ穿ツベシ



舵心材頂柄取附部ハ成ルベク角形ト爲シ且其ノ截面積ヲ適當ニ増加スベシ

舵心材筆先部ノ長サハ舵心材ノ徑ノ二倍半ヨリ大ナルコトヲ要ス

第三十二條 舵針及壺金ノ材料、寸法及蝶番ノ數ハ第三號表ニ依ル

最上ノ蝶番ハ成ルベク舵頭管ニ近ク之ヲ設クベシ

第三十三條 銅又ハ黃銅ノ船底包板ヲ有スル船舶ノ蝶番及舵針ハ黃銅製ナルコトヲ要ス

第五章 肋骨

第三十四條 肋骨ハ天然ノ曲材ヲ以テ構成シ其ノ寸法及心距ハ第二號表ニ依ル

肋骨ノ心距ハ肋骨ノ寸法ヲ規定ノ寸法ヨリ大ト爲ストキハ其ノ寸法ニ應ジ第二號表ニ掲グルモノヨリ大ト爲スコトヲ得

肋骨心距ガ第二號表ニ掲グル肋骨心距ノ一倍四分ノ一ヲ超ユルトキハ適當ノ斜帶板ヲ肋骨外面ニ取附クベシ

第三十五條 肋根材ヲ龍骨ノ上面ニ於テ累接シ長短肢配置ト爲ストキハ船ノ中央部ニ於テハ各肋根材ノ長サヲ船ノ幅ノ五分ノ二以上ト爲シ且累接ノ長サヲ船ノ幅ノ七分ノ一以上ト爲スベシ

第三十六條 肋根材及半肋根材ヲ以テ肋骨ヲ構成スルトキハ船ノ中央部ニ於テハ肋根材ノ長サヲ船ノ幅ノ四分ノ一以上、半肋根材ノ總長ヲ船ノ幅ノ五分ノ三以上ト爲スベシ

半肋根材ノ銜接ハ龍骨ノ中心線ヲ交五ニ五センチメートル以上左右ニ隔離セシムルコトヲ要ス

第三十七條 長肋根材ト短肋根材トヲ以テ肋骨ヲ構成スルトキハ船ノ中央部ニ於テハ長肋根材ノ長サヲ船ノ幅ノ二分ノ一以上、短肋根材ノ長サヲ船ノ幅ノ七分ノ一以上ト爲シ龍骨ノ上面ニ於テ相累接セシムベシ

第三十八條 二材合セ肋骨ノ肋材銜接ノ避距ハ第一數七以下ノ船舶ニ於テハ船ノ幅ノ八分ノ一以上、第一數七ヲ超ユル船舶ニ於テハ船ノ幅ノ九分ノ一以上ト爲スベシ  
肋材ノ銜接ハ總テ密接セシメ木栓ヲ以テ相嵌合セシムベシ但シ第一數七以下ノ船舶ニ付テハ木栓ヲ省略スルコトヲ得

肋骨ヲ構成スル肋材ハ其ノ銜接ノ兩側ニ於テ敲釘又ハ木釘ヲ以テ他ノ肋材ニ緊著セシメ且銜接ノ中間ニ於テ心距四五センチメートル以内ニ木釘又ハ打込釘ヲ以テ固著セシムベシ

第三十九條 銜接又ハ嵌接シタル單材ヲ以テ肋骨ヲ構成ス

ルトキハ船ノ中央部ニ於テハ肋根材ノ長サヲ船ノ幅ノ五分ノ三以上ト爲シ其ノ他ノ肋材ノ長サヲ船ノ幅ノ三分ノ一以上ト爲スベシ

單材肋骨ノ銜接又ハ嵌接ハ之ヲ其ノ隣接肋骨ノ銜接又ハ嵌接ト船ノ幅ノ七分ノ一以上相避距セシムベシ

單材肋骨ノ銜接部ニハ用材ノ截面積以上ノ截面積ヲ有シ用材ノ深サノ四倍以上ノ長サヲ有スル添材ヲ取附ケ銜接ノ兩側ニ於テ二箇以上ノ敲釘ヲ以テ之ヲ緊著セシムベシ又其ノ嵌接部ハ嵌接ノ長サヲ用材ノ深サノ三倍以上ト爲シ三箇以上ノ敲釘ヲ以テ之ヲ緊密セシムベシ但シ肋根材ヲ龍骨ノ上面ニ於テ銜接又ハ嵌接スルトキハ船ノ幅ノ五分ノ一以上ノ長サヲ有スル添材ヲ設クルコトヲ要ス

第四十條 蒸曲材ヲ以テ肋骨ヲ構成スルトキハ第二號表ニ掲グルモノヨリ其ノ寸法ヲ減ズルコトヲ得但シ此ノ場合ニ於テハ肋骨ノ心距ヲ適當ニ減ズベシ

第四十一條 船ノ幅ガ深サノ三倍以上ナル船舶ニ於テハ中央部船ノ長サノ三分ノ二間ハ底部肋骨ノ寸法ヲ増加スベシ  
船底彎曲部ノ彎曲半徑小ナル船舶ニ於テハ彎曲部肋骨ヲ適當ニ補強スベシ

第四十二條 斜肋骨ノ踵部ハ力材ニ植込ミ敲釘ヲ以テ緊牢ニ緊著セシムベシ

第四十三條 船首肋材及鑄鑽孔材ハ各一材ヲ以テ作り其ノ厚サヲ肋骨ノ厚サノ二倍以上ト爲スベシ

船首材ヨリ鑄鑽孔材ノ後方適當ナル距離迄船首肋材、鑄鑽孔材及肋骨ノ間隙ニハ填材ヲ挿入スベシ

第四十四條 船尾肋材ハ其ノ心距ヲ頂部ニ於テ第二號表ニ掲グル心距以下、踵部ニ於テ二分ノ一以下ト爲シ其ノ截面積ヲ踵部ニ於テ規定ノ單材肋骨ノ頂材ノ截面積ノ一倍三分ノ一以上、頂部ニ於テ四分ノ三以上ト爲スベシ  
船尾肋材ハ船尾縱翼材又ハ船尾橫翼材ニ植込ミ敲釘ヲ以テ相互ニ緊著セシムベシ

第六章 內龍骨、側內厚板、側內龍骨及彎曲部

第四十五條 內龍骨、側內厚板及側內龍骨ノ寸法竝ニ彎曲部縱通材ノ厚サハ第三號表ニ依ル

第四十六條 內龍骨ヲ構成スル各材ノ長サハ船ノ首尾兩端ニ使用スルモノヲ除クノ外九メートル以上ナルコトヲ要ス  
前項ノ長サヨリ短キ材ヲ以テ內龍骨ヲ構成スルトキハ其ノ上面ニ副內龍骨ヲ附スベシ此ノ場合ニ於ケル內龍骨ノ深サハ規定ノ深サノ三分ノ二以上、副內龍骨ノ深サハ內龍骨ノ規定ノ深サノ二分ノ一以上ト爲シ肋骨心距ヨリ大



ナラザル心距ニ敲釘ヲ用キテ相互ニ緊著セシムベシ  
前二項ノ規定ハ長サ三〇メートル未満ノ船舶ニ付テハ管  
海官廳ニ於テ適當ニ之ヲ斟酌スルコトヲ得

第四十七條 内龍骨ノ嵌接ハ水平嵌接ト爲シ其ノ長サハ用  
材ノ深サノ五倍以上、其ノ端末ノ深サハ四分ノ一以上ト  
爲シ其ノ兩端ニ二箇宛、其ノ中間ニ三〇センチメートル  
ノ心距ニ敲釘ヲ用キテ相互ニ緊著セシムベシ  
内龍骨ノ嵌接ハ龍骨及副内龍骨ノ嵌接ト一・五メートル  
以上相避距セシメ又機關ト適當ニ避距セシムベシ

第四十八條 内龍骨ト船ノ首尾ニ於ケル力材トハ二肋骨心  
距以上相累ネ龍骨迄貫通スル敲釘ヲ以テ之ヲ固著セシム  
ベシ

第四十九條 橋ハ橋座ニ嵌込ミ直接内龍骨ニ嵌込ムコトヲ  
得ズ

第五十條 側内厚板ハ成ルベク肋根材ト第一肋材トノ接合  
部ニ之ヲ設クベシ

第五十一條 側内龍骨ハ第二數四五〇以上ノ船舶ニ之ヲ設  
ケ其ノ寸法ハ船ノ首尾兩端ニ於テハ適當ニ減少スルコト  
ヲ得  
側内龍骨ノ嵌接ノ長サハ用材ノ深サノ四倍以上ト爲シ四  
箇以上ノ敲釘ヲ以テ相互ニ緊著セシムベシ

幅以上ナルコトヲ要ス  
第五十七條 副梁壓材ハ第二數八〇〇以上ノ船舶ノ各層甲  
板梁ニ之ヲ設ケ其ノ寸法ハ第三號表ニ依ル

第五十八條 梁受板ハ各層梁ニ之ヲ設ケ其ノ寸法ハ第三號  
表ニ依ル但シ船梁ニ設クルモノハ同表ニ掲グル二段上級  
ノモノト爲スコトヲ要ス

第五十九條 副梁受板ハ第二數三七五ヲ超ユル船舶ノ各層  
梁ニ之ヲ設ケ其ノ寸法ハ第三號表ニ依ル

第六十條 船側縦通材ハ船ノ長サノ中央ニ於テ最下層梁ノ  
船側ニ於ケル上面迄ノ深サガ三メートル以上ナル船舶ニ  
之ヲ設ケ其ノ寸法ハ第三號表ニ依ル

第六十一條 内部腰板ハ第二甲板梁又ハ船梁ノ梁壓材上ニ  
之ヲ設ケ其ノ寸法ハ第三號表ニ依ル

第六十二條 船錨、梁壓材、副梁壓材、梁受板、副梁受板  
、船側縦通材及内部腰板ノ嵌接ノ長サハ用材ノ幅ノ三倍  
以上ト爲シ三箇以上ノ敲釘ヲ以テ相互ニ緊著セシムベシ  
但シ副梁壓材、副梁受板及内部腰板ノ嵌接ニ付テハ敲釘  
ノ代リニ打込釘ヲ用ウルコトヲ得  
前項ニ掲グル各材ノ嵌接ハ適當ニ相互ニ避距セシムベシ

第八章 梁及梁ノ配置

第六十三條 甲板梁及船梁ノ寸法ハ第四號表ニ依ル但シ輕  
法 命 篇

第五十二條 船底彎曲部ニハ船ノ首尾ニ通ズル彎曲部縦通  
材ヲ設ケ其ノ各側ニ於ケル總幅ハ船ノ幅ノ六分ノ一以上  
ト爲スベシ但シ船ノ首尾ニ於テハ總幅ヲ適當ニ減ズルコ  
トヲ得

第五十三條 側内厚板及彎曲部縦通材ノ嵌接ノ長サハ用材  
ノ幅ノ三倍以上ト爲シ成ルベク三箇以上ノ敲釘ヲ以テ相  
互ニ緊著セシムベシ

第七章 船錨、梁壓材、副梁壓材、梁受板、副  
梁受板、船側縦通材及内部腰板

第五十四條 船錨ハ船ノ長サ二〇メートル以上ノ船舶ニ之  
ヲ設クベシ但シ第二數四五〇未満ノ船舶ニ於テハ梁壓材  
ノ幅ヲ第三號表ニ掲グルモノノ一倍半以上ト爲シ之ヲ船  
錨ニ兼用スルモ妨ナシ

第五十五條 船錨ノ厚サハ第三號表ニ依リ其ノ幅ハ外板及  
梁壓材ニ固著スルニ十分ナルモノト爲スコトヲ要ス  
船錨ヲ貫キテ舷柱ヲ設クルトキハ船錨ハ二材ヲ以テ構  
成スルコトヲ得

第五十六條 梁壓材ハ各層梁ニ之ヲ設ケ其ノ寸法ハ第三號  
表ニ依ル但シ船梁ニ設クルモノハ同表ニ掲グル二段上級  
ノモノト爲スコトヲ要ス  
梁トノ接合ニ於ケル梁壓材ノ幅ハ第四號表ニ掲グル梁ノ

甲板船ノ甲板梁ノ寸法ハ同表ニ掲グル二段下級ノモノ迄  
減ズルコトヲ得  
船ノ首尾ニ於テ甲板ノ幅ガ中央部ニ於ケル船ノ幅ノ四分  
ノ三ヨリ小ナル部分ニ附スル梁ハ其ノ面積ヲ前項ニ掲  
グルモノノ四分ノ三迄減ズルコトヲ得

第六十四條 甲板梁ノ心距ハ肋骨心距ノ二倍ト爲スベシ但  
シ二〇センチメートルヲ超過スルコトヲ得ズ

第六十五條 梁ハ其ノ中央ヨリ兩端ニ至ルニ從ヒ漸次其ノ  
深サヲ減少シテ梁端ニ於テハ中央ノ深サノ十分ノ九ト爲  
スコトヲ得

第六十六條 上甲板梁ノ梁矢ハ梁ノ長サノ五十分ノ一、第  
二甲板梁ノ梁矢ハ梁ノ長サノ百分ノ一ト爲スベシ

第六十七條 各層ニ於ケル梁ハ成ルベク肋骨ノ位置ニ設ケ  
肋骨ニ密接セシメ且梁受板上ノ鳩尾形溝ニ嵌込ムベシ  
各層ニ於ケル梁ハ上下相累ネテ之ヲ設クベシ

第六十八條 甲板口ノ端梁ノ面積積ハ甲板梁ノ規定ノ截面  
積ニ左ノ係數ヲ乗ジタルモノト爲スベシ但シ機關室口ノ  
端梁ノ寸法ハ第四號表ニ掲グル船梁ノ寸法以上ナルコト  
ヲ要ス

甲板口ノ長サ(米)

係數

二・五未満

一・一



二・五以上  
三・五未滿  
三・五以上  
四・五未滿

一・二  
一・四

甲板口ノ位置ニ特設梁ヲ設ケタル場合ニ於テハ甲板口ノ端ヨリ特設梁迄ノ距離ヲ甲板口ノ長サニ充テ前項ノ規定ヲ適用スベシ  
橋ノ前後ノ梁ノ面積ハ甲板梁ノ規定ノ面積ノ一・一倍ト爲スベシ

機關室口ノ端梁ハ堅材ナルコトヲ要ス

第六十九條 甲板口ノ兩側ニ設クル半梁ノ面積ハ甲板梁ノ四分ノ三ト爲シ其ノ心距ハ甲板梁ノ心距ニ等シク爲スベシ但シ船ノ幅ノ四分ノ一以下ノ長サヲ有スル半梁ノ寸法ハ適當ニ之ヲ減ズルコトヲ得

第七十條 甲板口及橋孔ノ兩側ニハ縱梁ヲ設クベシ

縱梁ノ面積ハ甲板梁ノ規定ノ面積ニ左ノ係數ヲ乘ジタルモノト爲スベシ

縱梁ノ長サ(米)  
二・五未滿  
二・五以上  
三・五未滿  
三・五以上  
四・五未滿

係數  
〇・八  
一・〇  
一・二

機關室口ノ縱梁ハ堅材ナルコトヲ要ス

第七十一條 船ノ長サノ中央ニ於テ最下甲板梁ノ船側ニ於ケル上面迄ノ深サガ四メートル以上五メートル未滿ナル船舶ニ於テハ船ノ長サノ中央部二分ノ一間ハ上甲板梁一本置ニ輪梁ヲ設クベシ  
前項ノ深サガ五メートル以上ナル船舶ニ付テハ船ノ首尾ヲ通ジ上甲板梁一本置ニ輪梁ヲ設クベシ

第七十二條 前條第一項ノ船舶ニ在リテハ船ノ長サノ中央部二分ノ一間ニ於テ船側肋骨、船底肋骨及甲板梁ノ面積ヲ規定ノ面積ノ五分ノ一以上、彎曲部肋骨ノ面積ヲ規定ノ面積ノ三分ノ一以上増加シ且第六十條ニ規定スル船側通材ノ面積ヲ輪梁ノ規定ノ面積以上ト爲ストキハ輪梁ヲ設ケザルモ妨ナシ

前條第二項ノ船舶ニ在リテ船ノ全長ニ亘リ前項ノ補強ヲ爲ストキハ輪梁ヲ設ケザルモ妨ナシ

前二項ノ船側通材ノ嵌接ノ長サハ用材ノ幅ノ四倍以上ト爲シ四箇以上ノ敲釘ヲ以テ相互ニ緊著セシムベシ

第七十三條 船口、機關室等ノ部分ニ於テ本章ノ規定ニ依リ梁ヲ配當スルコト能ハザルトキハ適當ノ補強構造ヲ爲スベシ  
揚錨機斜橋等ヲ支フル梁ハ其ノ寸法ヲ適當ニ増加スベシ

第九章 梁曲材

第七十四條 各層甲板梁ニハ梁毎ニ第四號表ニ掲グル堅梁曲材ヲ取附クベシ但シ船ノ幅五メートル未滿ノ船舶ニ付テハ堅梁曲材ノ寸法ヲ同表ニ掲グル二段上級ノモノト爲ストキハ甲板梁一本置ニ之ヲ取附クルコトヲ得

甲板口端梁ニ附スル堅梁曲材ハ梁ノ寸法ニ應ジ適當ニ其ノ寸法ヲ増スコトヲ要ス

輕甲板船ノ甲板梁ニ附スル堅梁曲材ノ寸法ハ第四號表ニ掲グル二段下級ノモノ迄減ズルコトヲ得

第七十五條 輪梁ニハ梁毎ニ第四號表ニ掲グル三段上級ノ堅梁曲材ヲ取附クベシ

第七十六條 堅梁曲材ノ代リニ鋼製肘板及山形材ヲ用ウルトキハ其ノ寸法ハ第四號表ニ依ル但シ梁腕及側腕ニ於ケル山形材ノ長サハ堅梁曲材ノ腕ノ長サト等シクスベシ

第七十七條 橋孔前後ノ梁又ハ長サ二・五メートル超エル甲板口ノ縱梁及端梁ノ兩端ニハ橫梁曲材ヲ取附クベシ

機關室口及長サ三・五メートル超ユル船口ノ端梁ニハ其ノ兩面ニ前項ノ橫梁曲材ヲ設クベシ

橫梁曲材ノ厚サ及幅ハ第四號表ニ掲グル堅梁曲材ノ厚サ及幅ノ四分ノ三以上ト爲スベシ

第七十八條 甲板口ノ兩側ニ設クル半梁ハ堅梁曲材ヲ以テ

之ヲ船側ニ固著セシムルノ外其ノ兩端ニハ橫梁曲材ヲ設ケテ之ヲ船側及縱梁ニ固著セシムベシ但シ船ノ幅ノ四分ノ一以下ノ長サヲ有スル半梁ニ於テハ堅梁曲材ハ之ヲ梁毎ニ附セザルモ妨ナク又長サ二・五メートル未滿ノ甲板口ニ於ケル半梁ニ付テハ管海官廳ニ於テ橫梁曲材ノ取附ヲ適當ニ斟酌スルコトヲ得

第七十九條 肋骨間ニ於テ堅梁曲材ヲ固著セシムルトキハ該部ニ填材ヲ挿入スベシ

第十章 梁柱

第八十條 梁柱ハ梁毎ニ之ヲ設クベシ但シ船ノ首尾ニ於テ上甲板ノ幅ガ船ノ幅ノ二分ノ一以下ナル部分ニ設クル梁ニハ之ヲ設ケザルモ妨ナシ

上層梁ニ梁柱ヲ設クルトキハ下層ノ梁ニモ亦之ヲ設クベシ

第八十一條 甲板梁ノ規定ノ面積以上ノ面積ヲ有スル梁下通材ヲ設ケ且梁柱ノ面積ヲ第八十三條ニ依ルモノノ一倍半ト爲ストキハ梁一本置ニ梁柱ヲ省略スルコトヲ得

前項ノ梁下通材ノ接手ハ嵌接ト爲スコトヲ要シ其ノ長サハ用材ノ深サノ三倍以上ト爲スベシ

第八十二條 船ノ幅五メートル未滿ノ船舶ニ於テハ梁及之



ニ附スル堅梁曲材ノ寸法ヲ表ニ掲グル三段上級ノモノト爲ストキハ梁柱ヲ設ケザルモ妨ナシ

第八十三條 船内ニ於ケル木製梁柱ノ各邊ノ寸法左ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ小ナルコトヲ得ズ

$$S = 15(N+2)$$

Sハ各邊ノ寸法(ミリメートルニテ)

Nハ第一數

鐵製中實梁柱ノ徑ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ小ナルコトヲ得ズ

$$D = 6(N+1)$$

Dハ徑(ミリメートルニテ)

Nハ第一數

甲板間ノ梁柱ノ截面積ハ前二項ノ規定ニ依ルモノノ四分ノ三ト爲スコトヲ得

第八十四條 梁ノ心距ガ規定ノモノヨリ大ナルトキハ梁柱ノ寸法ハ前條ノ規定ニ依ルモノヨリ適當ニ其ノ寸法ヲ増加スベシ

第八十五條 梁柱ガ木製ナルトキハ適當ナル金具ヲ以テ又鑄製ナルトキハ二箇以上ノ螺釘又ハ捻込釘ヲ以テ十分ニ其ノ兩端ヲ固著セシムベシ

第八十六條 甲板室、斜橋、揚錨機及揚貨機等ヲ支フル梁

其ノ他必要ノ箇所ニハ特ニ梁柱ヲ設クベシ

第十一章 外板、舷牆及内張板

第八十七條 外板、外部腰板、舷側厚板及龍骨翼板ノ寸法ハ第三號表ニ依ル但シ船ノ首尾兩端ニ於テ船ノ長サノ五分ノ一間ハ車軸覆板ノ附近ニ於ケル外板ヲ除キ漸次其ノ厚サヲ減ジ船ノ首尾ニ在リテハ同表ニ掲グル寸法ノ十分ノ八ト爲スコトヲ得

第八十八條 外板、外部腰板、舷側厚板及龍骨翼板ノ長サハ船ノ首尾兩端ニ用ウルモノヲ除クノ外五・五メートル以上ト爲シ外板及外部腰板ノ幅ハ三〇センチメートル以下ト爲スベシ

第八十九條 外板、外部腰板、舷側厚板及龍骨翼板ノ横線ハ上下ニ隣接スルトキハ三肋骨心距以上、一條ヲ隔ツルトキハ二肋骨心距以上、二條ヲ隔ツルトキハ一肋骨心距以上相互ニ避距セシムルコトヲ要シ又三條ヲ隔ツルニ非ザレバ同一ノ肋骨上ニ之ヲ置クコトヲ得ズ但シ船ノ首尾兩端ニ於テハ之ヲ適用セザルコトヲ得

第九十條 龍骨翼板ノ兩舷ニ於ケル横線ハ相互ニ三肋骨心距以上且龍骨ノ嵌接ト一・五メートル以上避距セシムベシ

龍骨翼板ノ横線ハ嵌接ト爲スコトヲ要シ其ノ長サハ用材

ノ幅ノ三倍以上ト爲シ三箇以上ノ敲釘ヲ以テ相互ニ緊著セシムベシ但シ長サ三〇メートル未滿ノ船舶ニ於ケル龍骨翼板ノ嵌接ニ付テハ敲釘ノ代リニ龍骨迄達スル長サヲ有スル打込釘ヲ用ウルコトヲ得

第九十一條 外部腰板ハ吃水線附近ニ取附ケ其ノ總幅ハ左表ニ依ル

船ノ長サノ深サニ對スル割合	外部腰板ノ總幅ト船ノ深サトノ割合
六倍以下	百分ノ二十五
六倍ヲ超エ下	百分ノ三十
八倍ヲ超エ下	百分ノ三十五
十倍ヲ超ユルトキ	百分ノ四十

第九十二條 舷側厚板ハ其ノ幅三〇センチメートルヲ超ユルトキハ二材ヲ以テ之ヲ構成スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ各材ハ肋骨ノ間ニ於テ二肋骨心距ヨリ大ナラザル心距ニ敲釘ヲ用キテ相互ニ緊著セシムベシ

舷側厚板ノ横線ハ梁壓材及梁受板ノ嵌接ト適當ニ避距セシムベシ舷側厚板ノ横線ハ嵌接ト爲スコトヲ要シ其ノ長サハ用材ノ幅ノ三倍以上ト爲シ三箇以上ノ敲釘ヲ以テ相互ニ緊著セシムベシ

第九十三條 重甲板船ノ暴露上甲板ニハ適當ナル高サヲ有スル舷牆ヲ設クベシ

第九十四條 内張板ノ厚サハ第三號表ニ依ル但シ船ノ首尾兩端ニ於テハ同表ニ掲グル厚サノ十分ノ八ト爲スコトヲ得

第九十五條 木甲板ノ厚サハ第三號表ニ依ル木甲板ノ幅ハ二五センチメートルヲ超ユルトヲ得ズ又其ノ端末ニ於ケル幅ハ填絮ヲ施スニ十分ナルコトヲ要ス

第九十六條 木甲板ノ横線ハ相隣接スル木甲板ニ付テハ梁心距ノ二倍以上相互ニ避距セシムルコトヲ要シ又木甲板三條ヲ隔ツルニ非ザレバ同一ノ梁上ニ之ヲ置クコトヲ得

第九十七條 船口、機關室口其ノ他大ナル甲板口ガ相接近スルトキハ該口間ノ木甲板ハ其ノ厚サヲ適當ニ増加シ之ヲ特ニ堅牢ニ梁ト固著セシムベシ

第九十八條 揚錨機、揚貨機、繫船機具等ノ下部ニ於ケル

第九十九條 揚錨機、揚貨機、繫船機具等ノ下部ニ於ケル

第十二章 甲板

第九十五條 木甲板ノ厚サハ第三號表ニ依ル木甲板ノ幅ハ二五センチメートルヲ超ユルトヲ得ズ又其ノ端末ニ於ケル幅ハ填絮ヲ施スニ十分ナルコトヲ要ス

第九十六條 木甲板ノ横線ハ相隣接スル木甲板ニ付テハ梁心距ノ二倍以上相互ニ避距セシムルコトヲ要シ又木甲板三條ヲ隔ツルニ非ザレバ同一ノ梁上ニ之ヲ置クコトヲ得

第九十七條 船口、機關室口其ノ他大ナル甲板口ガ相接近スルトキハ該口間ノ木甲板ハ其ノ厚サヲ適當ニ増加シ之ヲ特ニ堅牢ニ梁ト固著セシムベシ

第九十八條 揚錨機、揚貨機、繫船機具等ノ下部ニ於ケル



甲板ニハ適當ナル補強構造ヲ爲スベシ  
第十三章 船首肘材及船尾肘材  
第九十九條 最下層梁ノ下方ニ於テハ左表ニ定ムル數ノ船

首肘材及船尾肘材ヲ設ケ層梁間ニ於テハ一箇以上ノ船首肘材ヲ設クベシ

種類	船ノ長サノ中央ニ於テ龍骨ノ上面ヨリ最下層梁ノ船側ニ於ケル上面迄ノ垂直距離		
	一・五メートル以下ノトキ	一・五メートル超エ三メートル以下ノトキ	三メートル超エ四メートル以下ノトキ
船首肘材ノ數	一箇	二箇	三箇
船尾肘材ノ數	一箇	二箇	三箇

第百條 船首肘材及船尾肘材ノ寸法ハ第四號表ニ依ル  
 第百一條 各層梁受板ノ端末ニハ別ニ肘材ヲ設クベシ  
 第百二條 船首肘材及船尾肘材ハ成ルベク縱通材ノ位置ニ之ヲ設ケ下部ニ用ウルモノハ其ノ部分ニ於ケル内張板ニ四五度ノ角度ヲ以テ之ヲ交叉セシムベシ  
 第十四章 適當比例ノ船舶  
 第百三條 本章ニ於テ適當比例ノ船舶トハ其ノ長サガ深サ

ノ十倍ヲ超ユルカ又ハ幅ノ六倍ヲ超ユル船舶ヲ謂フ  
 第百四條 適當比例ノ船舶ニハ其ノ長サト深サ又ハ長サト幅トノ割合ニ依リ左表ニ從ヒ上部ニ於テハ梁壓材及舷側厚板ノ截面積ヲ増シ下部ニ於テハ内龍骨若ハ側内龍骨ノ截面積ヲ増スカ又ハ内龍骨ノ兩側ニ添材内龍骨ヲ増設スベシ

長サト深サ又ハ幅トノ比	梁壓材ノ增加舷側厚板ノ增加内龍骨ノ截面積若ハ兩側ノ側内龍骨ノ合計截面積ノ增加スベキ截面積トノ割合又ハ兩側ニ増設スベキ添材内龍骨ノ合計截面積トノ割合
長サガ深サノ十倍ヲ超ユル以下又ハ幅ノ六倍ヲ超ユル以下	百分ノ十五
長サガ深サノ十倍以下又ハ幅ノ七倍ヲ超ユル以下	百分ノ三十
長サガ深サノ十二倍ヲ超ユル以下又ハ幅ノ八倍ヲ超ユル以下	百分ノ五十

長サガ深サノ十倍ヲ超ユル以下又ハ幅ノ六倍ヲ超ユル以下	長サガ深サノ十倍以下又ハ幅ノ七倍ヲ超ユル以下	長サガ深サノ十二倍ヲ超ユル以下又ハ幅ノ八倍ヲ超ユル以下
百分ノ十五	百分ノ三十	百分ノ五十
百分ノ十五	百分ノ三十	百分ノ五十
百分ノ十五	百分ノ三十	百分ノ五十

第百五條 第二數八〇〇ヲ超ユル適當比例ノ船舶ニ付テハ船ノ首尾ヲ通シ鋼製斜帶板ヲ肋骨ノ外面ニ取附クベシ  
 前項ノ斜帶板ノ幅ハ肋骨心距ノ六分ノ一以上ト爲シ其ノ厚サハ幅ノ八分ノ一以上ト爲スベシ  
 第百六條 斜帶板ハ肋骨ニ四五度ノ角度ニ取附ケ船首ニ於テハ其ノ頭部ヲ後方ニ向ハシメ船尾ニ於テハ之ヲ前方ニ向ハシムル様配置シ船鏝ノ下部ヨリ肋根材迄達セシメ其ノ心距ハ左表ニ依ル

長サガ深サノ十二倍ヲ超ユルカ又ハ幅ノ八倍ヲ超ユルモノ  
 一八〇  
 第百七條 斜帶板ハ船ノ中央部ニ於テハ三本以上相交又セシメソノ交叉部ハ板ノ厚サノ二倍以上ノ徑ヲ有スル鉸釘一箇ヲ以テ固著セシムベシ  
 斜帶板ノ累接部ハ累接ノ長サヲ板ノ幅以上ト爲シ板ノ厚サノ二倍以上ノ徑ヲ有スル鉸釘二箇以上ヲ以テ固著セシムベシ  
 第十五章 甲板口及船側口

長サト深サ又ハ幅トノ比	心距(糧)
長サガ深サノ十倍ヲ超ユル以下又ハ幅ノ六倍ヲ超ユル以下	二四〇
長サガ深サノ十一倍ヲ超ユル以下又ハ幅ノ七倍ヲ超ユル以下	二一〇

第百八條 暴露甲板ニ設ケル艙口、機關室口、載炭口、出入口、天窗、通風器等ノ諸口及甲板口ヲ蔽圍スル甲板室ニハ緣材ヲ設ケ其ノ甲板上ノ高サハ左表ニ依ルベシ但シ



第三級船ノ上甲板ニ設クル大ナル艙口ニ於テ挿板條ヲ以テ之ヲ蔽固スル構造ト爲スモノニ付テハ其ノ水密裝置適

當ナラザル限リ艙口縁材ノ甲板上ノ高サヲ四五センチメートル以上ト爲スベシ

甲板ノ種類	船舶ノ種別	
	第一級船又ハ長サ六〇メートルヲ超ユル第二級船	第三級船
重甲板船ノ上甲板	四五種	一五種
輕甲板船ノ上甲板、低船首樓甲板及低船尾樓甲板	三〇種	一五種
船尾樓甲板ヲ除ク	二三種	一五種
船尾樓甲板	二三種	一〇種

船樓甲板又ハ第三級船以下ノ船舶ノ上甲板ニ於テハ平載炭孔ヲ設クルコトヲ得

前項ノ平載炭孔ノ枠及蓋ハ黃銅製又ハ鋼製ニテ堅牢ニ之ヲ構造シ其ノ蓋ハ螺旋込又ハ挿込接合ト爲シ若シ蝶番ニ依リ取附ケラレザルトキハ鎖ヲ以テ常ニ枠ニ連結シ置クコトヲ要ス

暴露甲板ニ設クル艙口及機關室口ノ縁材ノ厚サハ第一項ノ表ニ掲グル縁材ノ高サノ三分ノ一以上ト爲スベシ但シ縁材ノ實際ノ高サノ五分ノ一ヨリ小ナラズ且七センチメートルヨリ小ナラザルコトヲ要ス

第九條 帆船ニ付テハ上甲板及橋ヲ楔止メト爲ス甲板ニ

於ケル橋ノ前後梁ノ間ニハ橋ノ兩側ニ縱梁ヲ設ケ填材及橫梁曲材ヲ以テ固メ且其ノ上面ニ甲板ノ厚サノ一倍三分ノ一ノ厚サト橋徑ノ二倍ヨリ少カラザル幅ト有スル橋孔板ヲ設クベシ但シ小ナル橋孔ニ付テハ管海官廳ニ於テ適當ニ斟酌スルコトヲ得

第十條 長サ二・五メートル以上ノ艙口ニハ中央ニ堅牢ナル取外シ得ベキ梁ヲ設ケ縱梁ニ堅固ニ取附ケラレタル堅材ノ受臺ニ嵌込ムベシ  
長サ三・五メートル以上ノ艙口ニハ前項ノ梁ノ代リニ第四號表ニ掲グル輪梁ノ寸法以上ノ寸法ヲ有スル特設梁ヲ設ケ其ノ兩端ハ堅梁曲材一箇及橫梁曲材二箇ヲ以テ之ヲ

船側ニ固著セシムベシ

長サ四・五メートルヲ超ユル艙口又ハ船ノ幅ノ三分ノ一ヲ超ユル幅ヲ有スル艙口ニ在リテハ管海官廳ノ適當ト認ムル方法ニ依リ船體ノ強力ヲ補強スベシ  
第十一條 艙口ニハ蓋板ヲ備ヘ縦材又ハ艙口梁ヲ以テ之ヲ支フル裝置ト爲スベシ

艙口ノ縦材又ハ艙口梁ノ心距ハ一・五メートル以内ト爲シ其ノ兩端ハ縁材ニ堅牢ニ取附ケラレタル堅材ノ受臺ニ嵌込ムベシ  
蓋板ノ厚サハ支點間ノ間隔一メートルニ付三・五センチメートルト爲スベシ但シ三・五センチメートルヨリ小ナルコトヲ得ズ  
縦材又ハ艙口梁ノ寸法ハ其ノ長サニ應ジ左表ニ依リ之ヲ定ムベシ

縦材又ハ艙口梁ノ長サ(米)	縦材又ハ艙口梁ノ心距	
	一・五メートルノトキ	一メートル以下ノトキ
一・五	一三稜角	一一稜角
二・五	一八稜角	一六稜角
三・五	二二稜角	二〇稜角

四・五 二六稜角 二三稜角

長サ三〇メートル未満ノ船舶又ハ輕甲板船ノ上甲板、低船首樓甲板及低船尾樓甲板ニ於ケル艙口ノ蓋板、縦材又ハ艙口梁ノ寸法ハ前二項ニ依ルモノノ十分ノ八ト爲スコトヲ得

第十二條 暴露甲板ノ艙口縁材ノ外面ニハ七五センチメートル以内ノ心距ニ及艙口ノ四隅ヨリ二〇センチメートルヲ超エザル距離ニ堅牢ナル帶金受ヲ取附ケ覆布、帶金又ハ帶板及楔ヲ以テ密閉シ得ベキ裝置ト爲スベシ但シ小ナル艙口ノ密閉裝置ハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依リ近海以上ノ航行區域ヲ有スル總噸數一五〇噸以上ノ船舶ノ暴露セル各艙口ニハ艙口覆布試驗規程ニ依ル甲種覆布二枚ヲ備ヘ且艙口ノ長サ三メートル以上ナルトキハ適當ナル壓材ヲ以テ之ヲ締附クル裝置ヲ備フベシ

第十三條 長サ三・五メートル以上ノ機關室口ノ中央ニハ第四號表ニ掲グル輪梁ノ寸法以上ノ寸法ヲ有スル堅材ノ特設梁ヲ設ケ其ノ兩端ハ堅梁曲材一箇及橫梁曲材二箇ヲ以テ之ヲ船側ニ固著セシムベシ  
長サ四・五メートルヲ超ユル機關室口又ハ船ノ幅ノ三分ノ一ヲ超ユル幅ヲ有スル機關室口ニ在リテハ管海官廳ノ



暴露甲板ニ設クル機關室口ノ圍壁ニハ第八條第一項ニ適當ト認ムル方法ニ依リ船體ノ強力ヲ補強スベシ  
第百十四條 機關室口ハ成ルベク小サク之ヲ作り其ノ周圍ニハ縁材ヲ取附ケ甲板間ニ圍壁ヲ設クベシ

ヲ有スル堅牢ナル圍壁ヲ以テ之ヲ蔽圍スベシ但シ小ナル機關室口ニ付テハ管海官廳ニ於テ圍壁ノ高サヲ適當ニ斟酌スルコトヲ得

船舶ノ種類	第一級船又ハ長サ六〇メートルヲ超スル第二級船			第三級船
	長サ六〇メートル以下ノ第二級船	第一級船又ハ長サ六〇メートルヲ超スル第二級船	第三級船	
甲板ノ種類	重甲板船ノ上甲板	輕甲板船ノ上甲板	低船首樓甲板及低船尾樓甲板	船尾樓甲板ヲ除ク
重甲板船ノ上甲板	一五〇糎	一二〇糎	六〇糎	
輕甲板船ノ上甲板	一二〇糎	九〇糎	六〇糎	
低船首樓甲板及低船尾樓甲板			六〇糎	
船尾樓甲板ヲ除ク			六〇糎	

暴露甲板ニ設クル機關室口ハ左表ニ掲グル甲板上ノ高サ規定スル縁材ノ高サ以上ノ高サニ於テ出入口ヲ設クルコトヲ得但シ之ヲ設ケタルトキハ堅牢ナル戸ヲ備フベシ

裝置ヲ備フベシ

第百十五條 機關室口圍壁ノ頂部ニハ天窗ヲ設クベシ

第百十七條 船側ニ載貨門又ハ載炭門其ノ他大ナル開口ヲ設クルトキハ其ノ周圍ニハ適當ノ補強構造ヲ爲シ其ノ枠ハ堅材ヲ使用シ其ノ戸ハ堅牢ニ作り適當ノ締具ヲ備ヘ閉鎖シタルトキ水密トナルベキ構造ト爲スベシ

前項ノ天窗ニハ縁材ヲ設ケ且適當ナル覆蓋ヲ備フベシ  
汽罐室圍壁ノ頂部ニ開口ヲ設クルトキハ蝶番ヲ以テ固著シタル鋼製ノ蓋板ヲ備フベシ

第百十六條 暴露甲板ニ設クル載炭口其ノ他ノ諸口ニハ覆蓋、覆布及適當ノ締具ヲ備フルカ其ノ他水密トナルベキ

第百十八條 船側口ハ舷側厚板、梁受板、副梁受板及内部腰板ヲ切缺ギテ之ヲ設クルコトヲ得但シ特ニ相當ノ補

強構造ヲ爲ストキハ此ノ限ニ在ラズ

螺釘ハ敲釘ノ代リニ之ヲ用ウルコトヲ得

第百十九條 滿載吃水線ヲ標示スル船舶ノ上甲板下ニ設クル舷窓ニシテ海水ニ於ケル最高滿載吃水線ヨリ一五センチメートル未満ノ箇所ニ其ノ下縁ヲ有スルモノハ舷窓試驗規程ニ適合スル甲種舷窓又ハ之ト同等以上ノモノ又海水ニ於ケル最高滿載吃水線ヨリ一二センチメートル未満ノ箇所ニ下面ノ最低點ヲ有スル甲板ノ下方ニ設クル舷窓ハ同規程ニ適合スル乙種舷窓又ハ之ト同等以上ノモノナルコトヲ要ス

第十六章 固著釘及固著法

第百二十條 堅梁曲材ニ用ウル固著釘ノ徑ハ第四號表ニ依リ其ノ他重要ナル部分ニ用ウル固著釘ノ徑ハ第五號表ニ依ル但シ用材ノ寸法ガ規定ノ寸法ヨリ大ナルトキハ固著釘ノ徑ヲ適當ニ増加スベシ

打込釘ノ徑ハ第五號表ニ掲グル敲釘ノ徑ヨリ三ミリメートル減ジタルモノト爲スコトヲ得

圓釘ノ代リニ角釘ヲ用ウルトキハ其ノ邊ハ圓釘ノ徑ノ十分ノ九ト爲スベシ

敲釘ヲ打込ムベキ釘孔ノ徑ハ釘徑ヨリ一・五ミリメートル以上小ナルモノト爲スベシ

敲釘ハ總テ同金屬ノ座金ノ上ニテ敲著セシムベシ

小ナルモノト爲スベシ

第百二十三條 銅又ハ黃銅ノ船底包板ヲ施スベキ外板等ノ固著釘ニ鋼又ハ亞鉛鍍鋼ヲ使用スルトキハ其ノ頸部ニ填絮ヲ卷附ケタル儘之ヲ打込ミ且其ノ頸部ヲ緊密ニ打込ミタル木栓等ヲ以テ保護スベシ  
外板及甲板等水密ヲ要スル場所ニ使用スル敲釘又ハ打込

第百二十一條 打込釘ノ長サハ固著スベキ材料ノ厚サニ應ジ成ルベク長キモノヲ用ウベシ

板ヲ肋骨又ハ梁等ニ固著スル打込釘ノ長サハ板ノ厚サノ二倍四分ノ一以上ト爲スベシ

第百二十二條 木釘ヲ用ウルトキハ其ノ兩端ハ固著セラルル用材ノ木理ニ直角ノ方向ニ之ヲ切開シテ楔止メト爲スベシ但シ外板及外部腰板ヲ固著スル木釘ノ外端ハ楔止メ代リニ填絮ヲ施スベシ

頭部ヲ三ミリメートル以上太メタル勾配木釘ヲ用ウルトキハ其ノ頭端ニ付テハ前項ノ施工ヲ爲スコトヲ要セズ  
木釘ハ固著セラルル用材ノ厚サノ和ヨリ適當ニ長キモノヲ使用スベシ

木釘ヲ打込ムベキ孔ノ徑ハ釘徑ヨリ一ミリメートル以上小ナルモノト爲スベシ



釘ニ付テハ前項ニ該當セザルモノト雖モ成ルベク前項ノ  
施工ヲ爲スベシ

第二百二十四條 船ノ首尾ニ於ケル力材又ハ内龍骨ト船首材  
、船尾材又ハ龍骨トハ此等ヲ貫通スル敲釘ヲ以テ四五セ  
ンチメートル以内ノ心距ニ於テ固著セシムベシ但シ内龍  
骨ト力材トガ相累接スル箇所ニ於テハ敲釘ハ内龍骨ヲ貫  
通セシムルコトヲ要ス

舵柱ハ推進器孔ノ上部ニ於テ四五センチメートル以内ノ  
心距ニ船尾材迄貫通スル敲釘ヲ以テ之ヲ固著セシムベシ  
第二百二十五條 舵心材ト矧材トハ四五センチメートル以内  
ノ心距ニ敲釘ヲ以テ固著セシムベシ

第二百二十六條 肋骨ハ打込釘ヲ以テ之ヲ龍骨ニ固著セシム  
ベシ

第二百二十七條 龍骨ト内龍骨トハ肋骨毎ニ肋骨ヲ貫通スル  
敲釘ヲ以テ固著セシムベシ

第二百二十八條 側内厚板ハ肋骨毎ニ敲釘及打込釘ヲ以テ之  
ヲ肋骨ニ固著セシムベシ

第二百二十九條 側内龍骨ハ肋骨毎ニ敲釘ヲ以テ之ヲ肋骨ニ  
固著セシムベシ

第二百三十條 彎曲部縦通材ハ其ノ幅一五センチメートル以  
下ナルトキハ肋骨毎ニ敲釘ヲ以テ、幅一五センチメートル

間ニ於テ交互ニ敲釘ト打込釘トヲ以テ之ヲ舷側厚板ニ  
固著セシムベシ

五 舷柱トノ固著 船鍰ニ兼用スル梁壓材ヲ貫キテ舷  
柱ヲ設クルトキハ舷柱毎ニ敲釘ヲ以テ之ヲ緊著セ  
シムベシ

第二百三十三條 副梁壓材ハ梁毎ニ敲釘及打込釘ヲ以テ之ヲ  
梁ニ固著セシムベシ

第二數一、七五〇ヲ超ユル船舶ニ於テハ副梁壓材ハ肋骨  
一本置ニ梁壓材、肋骨及外板ヲ貫通スル敲釘ヲ以テ之ヲ  
固著セシムベシ

第二百三十四條 船鍰ハ肋骨ノ間ニ於テ交互ニ敲釘ト打込釘  
トヲ以テ之ヲ舷側厚板ニ固著セシムベシ

船鍰ハ梁毎ニ梁壓材、梁及梁受板ヲ貫通スル敲釘ヲ以テ  
之ヲ固著セシムベシ且梁ノ間ニ於テ打込釘ヲ以テ之ヲ梁壓材  
ニ固著セシムベシ

船鍰ヲ貫キテ舷柱ヲ設クルトキハ船鍰ハ舷柱毎ニ敲  
釘ヲ以テ之ヲ緊著セシムベシ且船鍰ヲ二材合セト爲ストキハ  
舷柱ノ間ニ於テモ敲釘ヲ以テ之ヲ相互ニ緊著セシムベ  
シ但シ肋骨毎ニ肋材ヲ延長シテ舷柱ト爲ス場合ニ於テ  
船鍰ガ一材ヨリ成ルモノナルトキハ舷柱毎ニ用ウル敲  
釘ハ舷柱一本置ニ十分ナル長サヲ有スル打込釘ヲ以テ

ルヲ超ユルトキハ肋骨毎ニ敲釘及打込釘ヲ以テ之ヲ肋骨  
ニ固著セシムベシ但シ其ノ幅二〇センチメートルヲ超ユ  
ルトキハ肋骨毎ニ用ウベキ固著釘ノ數ヲ適當ニ増加スベ  
シ

前項ノ敲釘ハ外板迄貫通スルコトヲ要ス

第二百三十一條 梁受板及副梁受板ハ肋骨毎ニ敲釘及打込釘  
ヲ以テ之ヲ肋骨ニ固著セシムベシ

梁受板ノ敲釘ハ外板迄貫通スルコトヲ要ス

第二百三十二條 梁壓材ノ固著ハ左ノ各號ノ規定ニ依ル

一 肋骨トノ固著 船鍰ニ兼用セザル梁壓材ハ肋骨毎ニ  
梁壓材、肋骨及外板ヲ貫通スル敲釘ヲ以テ之ヲ固著セ  
シムベシ但シ第二甲板又ハ輪梁ニ於ケル梁壓材ノ敲釘  
ハ外板ヲ貫通セザルモ妨ナシ

二 梁トノ固著 梁壓材ハ梁毎ニ打込釘ヲ以テ之ヲ梁ニ  
固著セシムベシ

三 梁受板トノ固著 船鍰ニ兼用スル梁壓材又ハ第一甲  
板若ハ輪梁ノ梁壓材ハ梁毎ニ梁及梁受板ヲ貫通スル敲  
釘ヲ以テ之ヲ固著セシムベシ但シ第二數四五〇未満ノ  
船舶ニ付テハ管海官廳ニ於テ適當ニ之ヲ斟酌スルコト  
ヲ得

四 舷側厚板トノ固著 船鍰ニ兼用スル梁壓材ハ肋骨ノ

之ニ代用スルコトヲ得又船鍰ガ二材合セナル場合ニ於テ  
舷柱ノ心距ガ肋骨心距以下ナルトキハ舷柱ノ間ニ於  
ケル敲釘ハ之ヲ省略スルコトヲ得

第二百三十五條 船側縦通材ハ肋骨毎ニ敲釘及打込釘ヲ以テ  
之ヲ肋骨ニ固著セシムベシ但シ第七十二條第一項又ハ第  
二項ヲ適用シタル場合ノ船側縦通材ニ在リテハ肋骨毎ニ

外板ヲ貫通スル敲釘二箇ヲ以テ之ヲ固著セシムベシ

第二百三十六條 内部腰板ハ肋骨毎ニ敲釘及打込釘ヲ以テ之  
ヲ肋骨ニ固著セシムベシ

第二百三十七條 堅梁曲材ニ用ウル敲釘ノ心距ハ木製梁曲材  
ニ在リテハ二三センチメートルヲ、鋼製梁曲材ニ在リテ  
ハ三〇センチメートルヲ超ユルトヲ得ズ又敲釘ノ數ハ  
側腕ニ於テハ咽喉部釘ヲ含ミ三箇以上、梁腕ニ於テハ二  
箇以上ナルコトヲ要ス

柔材ヲ以テ肋骨ヲ構成シタル船舶ニ於ケル堅梁曲材ノ側  
腕ニ用ウル敲釘ハ總テ外板迄貫通セシムルコトヲ要ス  
横梁曲材ノ各腕ニ於ケル敲釘ノ數ハ二箇以上ナルコトヲ  
要ス

第二百三十八條 外板、外部腰板、龍骨翼板及舷側厚板ハ其  
ノ幅二〇センチメートル以下ナルトキハ肋骨毎ニ二箇、  
幅二〇センチメートルヲ超ユ二五センチメートル以下ナ



ルトキハ肋骨毎ニ三箇、幅二五センチメートルヲ超エ三〇センチメートル以下ナルトキハ肋骨毎ニ四箇ノ固著釘ヲ以テ之ヲ肋骨ニ固著セシムベシ但シ肋骨單材ナルトキハ幅二五センチメートルヲ超ユル場合ト雖モ固著釘ノ數ヲ三箇ト爲スコトヲ得

三〇センチメートルヲ超ユル幅ヲ有スル龍骨翼板及舷側厚板ニ在リテハ之ヲ肋骨毎ニ固著セシムベキ固著釘ノ總數ハ幅七・五センチメートル毎ニ及其ノ端數ニ付一箇ノ割合ヲ以テ之ヲ定ムベシ但シ肋骨單材ナルトキノ固著釘ノ總數ハ之ヨリ一箇ヲ減ズルコトヲ得

龍骨翼板及舷側厚板ニ於テハ前二項ノ固著釘ノ中其ノ幅三五センチメートル以下ナルトキハ肋骨毎ニ一箇以上、幅三五センチメートルヲ超ユルトキハ肋骨毎ニ二箇以上ノ敲釘ヲ用ウベシ

外板及外部腰板ニ於テハ第一項ノ固著釘ノ中肋骨一本置ニ一箇以上ノ敲釘又ハ木釘ヲ用ウベシ但シ肋骨毎ニ敲釘又ハ木釘一箇以上ヲ用ウルトキハ固著釘四箇ヲ要スル場合ト雖モ之ヲ三箇ト爲スコトヲ得

船底彎曲部ノ彎曲半徑小ナル船舶ノ彎曲部外板ニ於テハ肋骨毎ニ一箇以上ノ敲釘ヲ用ウベシ

第三百二十九條 外板及外部腰板ハ肋骨ノ箇所ニ於テ衝接シ在ラズ

第十七章 填架及船底包板

第四百四十五條 水密ト爲スベキ接合部ニハ填架ヲ施スベシ

第四百四十六條 填架ヲ施シタル部分ハ射水又ハ漲水ニ依ル水密試験ニ堪フルモノナルコトヲ要ス

第四百四十七條 船底ニハ滿載吃水線附近ノ所迄船底包板ヲ張詰ムベシ但シ適當ノ防腐劑ヲ塗布スルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第十八章 機關室

第四百四十八條 機關室ノ前後ニハ少クトモ第二甲板ニ達スル隔壁ヲ設クベシ

第二數一、五〇〇ヲ超ユル船舶ニ付テハ前項ノ隔壁及石炭庫ノ圍壁ヲ鋼製ト爲スベシ

第四百四十九條 機關室ノ甲板間ニ於ケル部分ノ周圍ニハ圍壁ヲ設ケ之ヲ暴露甲板迄達セシムベシ

第五百十條 機關ノ下部ニ於ケル内龍骨ハ成ルベク堅材ヲ使用シ且汽罐ノ下部ト内龍骨ノ上部トヲ三〇センチメートル以上隔離スルカ又ハ該部ニ適當ノ防熱工事ヲ施スベシ

第五百十一條 隔壁、圍壁其ノ他船體ノ部分ガ木製ニシテ發動機又ハ汽罐ニ接近シ燃燒ノ虞アルモノナルトキハ之ニ金屬板ヲ張ルカ又ハ其ノ他ノ方法ニ依リ燃燒ヲ豫防シ

横線ノ兩側ニ於テハ敲釘及打込釘ヲ以テ之ヲ肋骨ニ固著セシムベシ但シ該肋骨ニ隣接スル肋骨ニ敲釘ヲ以テ固著セシメタル外板及外部腰板ニ付テハ其ノ横線ノ兩側ニハ打込釘ノミヲ用ウルモ妨ナシ

第四百十條 第二數一、五〇〇ヲ超ユル船舶ノ中央部船ノ長サノ五分ノ三間ニ於テハ龍骨翼板ヲ肋骨ノ間ニ於テニ肋骨心距以内ノ心距ニ敲釘ヲ以テ之ヲ龍骨ニ固著セシムベシ

第四百十一條 木甲板ハ幅一五センチメートル以下ナルトキハ一箇以上、幅一五センチメートルヲ超ユルトキハ二箇以上ノ打込釘ヲ以テ之ヲ梁毎ニ固著セシムベシ

第四百十二條 船首肘材又ハ船尾肘材ハ其ノ咽喉部ヲ船首材又ハ船尾材ニ敲釘ヲ以テ固著セシメソノ兩腕ハ四五センチメートル以内ノ心距ニ成ルベク肋骨ノ箇所ニ於テ外板迄貫通スル敲釘ヲ以テ之ヲ固著セシムベシ

船首肘材又ハ船尾肘材ノ各腕ニ於ケル敲釘ノ數ハ咽喉部釘ヲ除キ二箇以上ナルコトヲ要ス

第四百十三條 斜帶板ハ板ノ厚サノ二倍以上ノ徑ヲ有スル敲釘ヲ以テ之ヲ肋骨毎ニ固著セシムベシ

第四百十四條 甲板口ノ縁材ハ四五センチメートル以内ノ心距ニ敲釘ヲ以テ端梁又ハ縱梁ニ固著セシムベシ

且汽罐ニ接近スル場合ニハ防熱ノ爲金屬板ノ下ニ石綿若ハ毛紙ヲ敷クカ又ハ適當ノ間隔ヲ置クベシ

電動機船ノ蓄電池室ニハ通風ノ裝置ヲ爲シ其ノ床ハ鉛板ヲ以テ之ヲ覆フベシ

第五百十二條 機關室ニ付テハ第一百三條ニ依ル機關室口ノ補強ヲ爲スノ外機關ノ種類及馬力ニ應ジ肋骨及縱通材ニ適當ノ補強ヲ爲スベシ

第五百十三條 機關臺ハ成ルベク長キ堅材ヲ以テ適當ニ構造シ肋骨毎ニ敲釘ヲ以テ之ヲ固著スルノ外必要ニ應ジ肋骨ノ位置ニ於テ機關臺ノ兩側ニ堅曲材ヲ取附ケ之ヲ堅牢ニ船底ニ固著セシムベシ

第五百十四條 第二數二、〇〇〇ヲ超ユル船舶ニ付テハ機關室ヨリ船尾管ニ達スル通行シ得ベキ軸路ヲ設クベシ但シ甲板ヨリ各軸受及船尾管ニ達シ得ベキ昇降路ヲ設クルトキハ軸路ハ通行シ得ザルモノナルモ妨ナシ

第十九章 船樓及甲板室

第五百十五條 輕甲板船ニ在リテハ甲板室又ハ船橋樓ノ高さハ二・一メートルヲ超ユルコトヲ得ズ又船ノ首尾ニ於テ船ノ長サノ五分ノ一間ニハ甲板室ヲ設クルコトヲ得ズ

第五百十六條 船首樓、船橋樓及船尾樓ノ各材ノ截面積ハ上甲板下ノ各材ノ截面積ノ四分ノ三以上ト爲スベシ



船首樓、船橋樓又ハ船尾樓ヲ設クルトキハ上甲板ニ於ケル肋骨間ノ空隙ハ船鏝ヲ以テ閉塞シ之ヲ水密ト爲スベシ

第五十七條 低船首樓又ハ低船尾樓ノ各材ノ寸法ハ上甲板以下ニ要スルモノニ等シクスベシ

低船首樓又ハ低船尾樓ヲ設クルトキハ上甲板ノ梁壓材及梁受板ヲ該船樓内ニ五肋骨心距以上延長スベシ但シ第二數四五〇未滿ナルトキハ七肋骨心距以上、第二數二五〇未滿ナルトキハ三肋骨心距以上、第二數一二五未滿ナル

トキハ二肋骨心距以上之ヲ延長スルニ止ムルモ妨ナシ

低船首樓又ハ低船尾樓ヲ設クル船舶ニ付テハ上甲板ノ高サニ於テ船ノ首尾ヲ通ジ舷側厚板ヲ設クベシ

第五十八條 甲板室ハ堅牢ニ構造シ少クトモ其ノ四隅ハ甲板室頂部ヨリ梁下面迄貫通スル螺釘ヲ以テ之ヲ緊著セシムベシ

第二十章 橋、帆架及斜橋

第五十九條 帆船ノ橋、帆架、斜橋等ノ寸法ハ左表ニ依ル

名	稱	材料	徑
「シツプ」、「バーク」及「ブリツグ」ノ前橋、正橋、前上橋及正上橋		杉	長サ一メートルニ付 三センチメートル
頂橋、「シツプ」及「バーク」ノ後橋、「バーク」ノ後上橋並ニ「バーク」ノ「ラツガイ」、「カツター」、「ケツチ」及「スクリュー」ノ橋		杉	長サ一メートルニ付 三センチメートル
「ヤード」、「ブーム」、「ガフ」、「ジブブーム」及「フライイングジブブーム」		杉	長サ一メートルニ付 二センチメートル
斜橋		杉	長サ一メートルニ付 五センチメートル

前項ノ橋ノ長サハ上橋ニ在リテハ上橋索具帶金ヨリ下部固定帶金迄、下橋ニ在リテハ下橋索具帶金ヨリ内龍骨上面迄ノ長サトシ其ノ徑ハ上橋ニ在リテハ下橋上端部、下橋ニ在リテハ上甲板楔止部ニ於ケル徑ト爲スベシ

前二項ノ規定ハ一材橋ノ寸法ヲ定ムル場合ニ之ヲ準用ス

但シ内龍骨ノ上面ヨリ下橋索具ヲ取附クル帶金迄ノ長サヲ下橋ノ長サトシ其ノ上部上橋索具ヲ取附クル帶金迄ノ長サヲ上橋ノ長サトス

第六十條 下橋ノ上端ノ徑ハ上橋ノ下端ノ徑ヨリ小ナルコトヲ得ズ

第二十一章 通風間隙及滄水路

第六十一條 各層甲板梁ノ梁受板又ハ副梁受板ノ直下ニハ通風ノ爲船ノ首尾ヲ通ジ間隙ヲ設クベシ

船首艙又ハ船尾艙ニ於テハ前項ノ間隙ノ外梁受板ト内龍骨トノ間ニ通風間隙ヲ設クベシ

第六十二條 龍骨ノ兩側ニ於ケル肋骨ノ下面ニハ船ノ首尾ヲ通ジ適當ノ滄水路ヲ設クベシ外板ノ縱線ニ之ヲ設クルコトヲ得ズ

第二十二章 排水装置及諸管

第六十三條 舷塘ニハ甲板上ノ水ヲ排除スル爲適當ナル排水口ヲ設クベシ

暴露甲板上ニハ船外ニ通ズル適當ナル排水孔ヲ設クベシ

第六十四條 第二甲板以下ノ甲板及蔽圍セラレタル船樓内ノ上甲板ニハ適當ノ排水管ヲ設ケ之ヲ滄水道ニ導クベシ

第六十五條 手動滄水「ポンプ」及測水管ハ各艙ニ之ヲ設クベシ但シ管海官廳ノ見込ニ依リ手動滄水「ポンプ」ノ數ヲ減ジ又平水ノ航行區域ヲ有スル船舶ニ限リ手動滄水「ポンプ」及測水管ヲ設ケザルコトヲ得

前項ノ手動滄水「ポンプ」ハ滿載吃水線以上ノ高サニ於テ何時ニテモ近寄り得ベキ場所ニ之ヲ裝置スベシ

第六十六條 手動滄水「ポンプ」ノ吸水管ノ内徑ハ四センチメートル以上ニシテ船ノ大サニ應ジ適當ノモノト爲スベシ但シ一〇センチメートルヨリ大ナルコトヲ要セズ

手動滄水「ポンプ」ノ内徑ハ吸水管ノ内徑ノ二倍以上ト爲スベシ

滄水吸水管ノ端末ニハ適當ナル芥除箱ヲ設クベシ

第六十七條 動力ニ依ル滄水「ポンプ」ヲ備フル船舶ニ付テハ各艙ニ其ノ吸水管ヲ導キ各艙ノ滄水ヲ排除シ得ベキ裝置ト爲スベシ但シ第二數一、五〇〇以下ノ船舶ニ在リテハ管海官廳ノ見込ニ依リ滄水吸水管ヲ各艙ニ導カザルモ妨ナシ

第六十八條 艙内又ハ石炭庫ヲ通過スル諸管ニハ貨物又ハ石炭ノ積載等ニ依リ破損セザル様堅固ナル覆箱又ハ覆板ヲ設クベシ

汽管其ノ他高内壓力ヲ受クル諸管ハ艙内又ハ石炭庫ヲ通過セシムルコトヲ得ズ但シ適當ノ圍壁又ハ隧道ヲ設クルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第六十九條 滿載吃水線ヲ標示スル船舶ニ在リテハ滿載吃水線下ニ開口ヲ有スル各排泄管ニハ白蠟不還辨二箇ヲ備ヘ中一箇ハ何時ニテモ近寄り得ル場所ニ之ヲ設クベシ但シ滿載吃水線以上ノ高サニ於ケル甲板上ノ何時ニテモ















- 第七節 排水、吸水、循環水及潤滑油ニ關スル裝置
- 第八節 管
- 第九節 給水、排水其ノ他ノ裝置ノ水壓試驗
- 第十節 燃油裝置

第四章 發動機ヲ備フル船舶ノ機關

- 第一節 發動機
- 第二節 油槽、油管、潤滑油裝置等
- 第三節 廢氣裝置及空氣壓縮機
- 第四節 氣槽
- 第五節 排水、吸水及冷却水ニ關スル裝置
- 第六節 水壓試驗
- 第七節 補汽罐

第五章 艤裝品及備品

附則船舶機關規程

第一章 總 則

第一條 本令ニ於テ汽機又ハ發動機トハ特ニ規定スル場合ヲ除クノ外推進軸系ニ連接スル汽機又ハ發動機ヲ謂フ  
 本令ニ於テ汽罐トハ補汽罐ヲモ包含ス  
 本令ニ於テ第一種螺旋軸トハ一體被金ヲ有スルカ又ハ之ト同等ノ耐蝕性ヲ有スル螺旋軸ヲ謂ヒ第二種螺旋軸トハ其ノ他ノ螺旋軸ヲ謂フ

適當ナル船尾管内潤滑油裝置ヲ備フル螺旋軸ハ前項ノ規定ニ拘ラズ之ヲ第一種螺旋軸ト看做ス

第二條 船舶ノ推進機關ヲ分チテ甲種、乙種及丙種ノ三種トス

乙種機關ハ第一級船又ハ第二級汽船ノ推進機關トシテ之ヲ使用スルコトヲ得ズ

丙種機關ハ第一級船又ハ第二級船ノ推進機關トシテ之ヲ使用スルコトヲ得ズ

第三條 汽罐ニ付テハ第三章第二節又ハ第三節ノ規定ニ依リ算定シタル汽罐各部ノ強力ニ對スル制限汽壓中最小ノモノヲ以テ其ノ制限汽壓トス但シ該汽罐ニ連絡スル汽機汽管又ハ給水管ノ強力ニ對スル制限汽壓ヨリ大ナルコトヲ得ズ

第四條 本令ニ依ル試驗ハ管海官廳ノ監督ヲ受ケ之ヲ執行スベシ

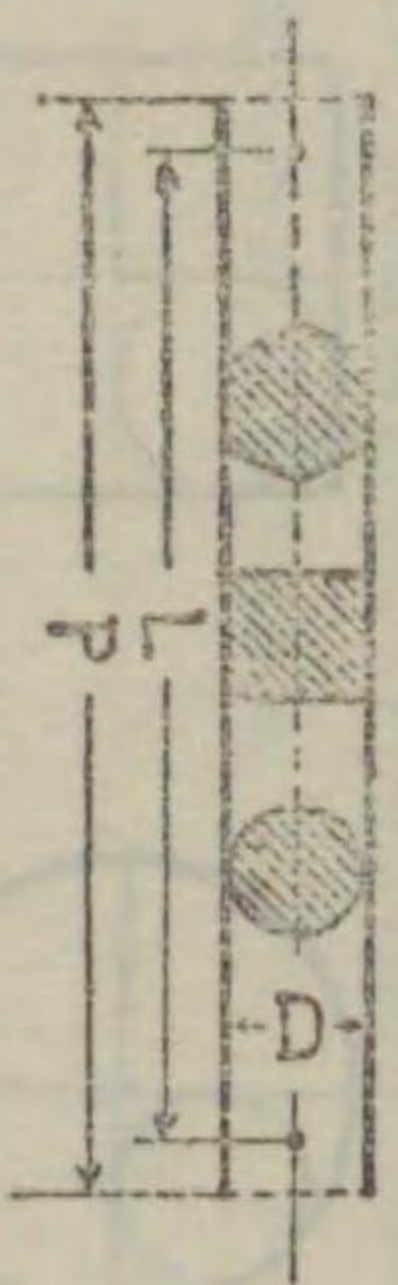
試驗機ハ船用品試驗機試驗規程ニ適合スルモノナルコトヲ要ス

本令ニ依ル試驗ハ管海官廳ノ適當ト認ムル證明書アルモノニ付テハ之ヲ省略スルコトヲ得

第五條 機關ノ構造若ハ寸法又ハ機關ニ關スル設備ニシテ本令ノ規定ニ該當セザルモノト雖モ管海官廳ニ於テ本令

九以上二三以下	五〇以下
九未満	六〇以下

二 第二號試驗片 主トシテ徑(又ハ對邊距離)二五耗以下ノ棒鋼ニ對シテ用ウルモノ



標點距離Lハ徑(又ハ對邊距離)Dノ八倍、兩端ヲ太クスルモノニ在リテハ平行部ノ長サPハDノ約九倍  
 平行部ハ壓延セル儘トシ又ハ機械仕上ニ依リ之ヲ作製スルコトヲ得

三 第三號試驗片 徑(又ハ對邊距離)二五耗ヲ超ユル棒鋼ニ對シテ用ウルモノ



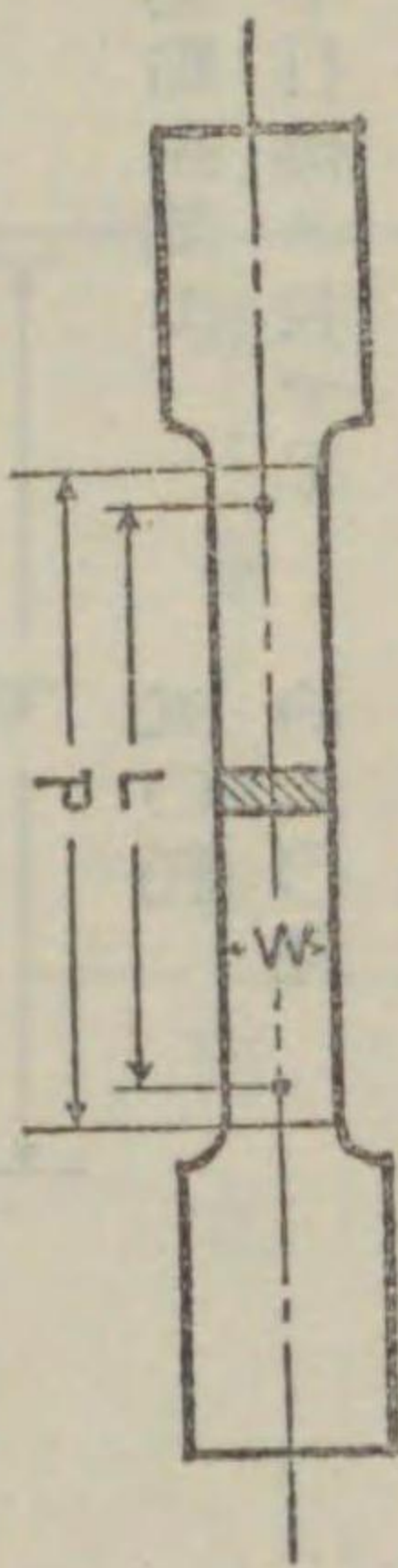
標點距離Lハ徑(又ハ對邊距離)Dノ四倍、兩端ヲ太クスルモノニ在リテハ平行部ノ長サPハDノ約四・五倍  
 平行部ハ壓延セル儘トシ又ハ機械仕上ニヨリ之ヲ作成

ノ規定ニ該當スルモノト同一ノ效力ヲ有スト認ムルモノ又ハ機關ノ用途ニ依リ差支ナシト認ムルモノニ限り之ヲ本令ニ適合スルモノト看做ス  
 第六條 機關ノ構造若ハ寸法又ハ機關ニ關スル設備ニシテ本令ニ規定ナキモノニ付テハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第二章 材料及材料試驗

第一節 試驗片

第七條 抗張試驗ニ用ウル標準試驗片ハ左ノ形狀及寸法ト爲スベシ但シ其ノ兩端ハ試驗機ニ應ジ之ニ適合スル形狀ニ仕上グルモノトス  
 一 第一號試驗片 主トシテ鋼板、平鋼及形鋼ニ對シテ用ウルモノ



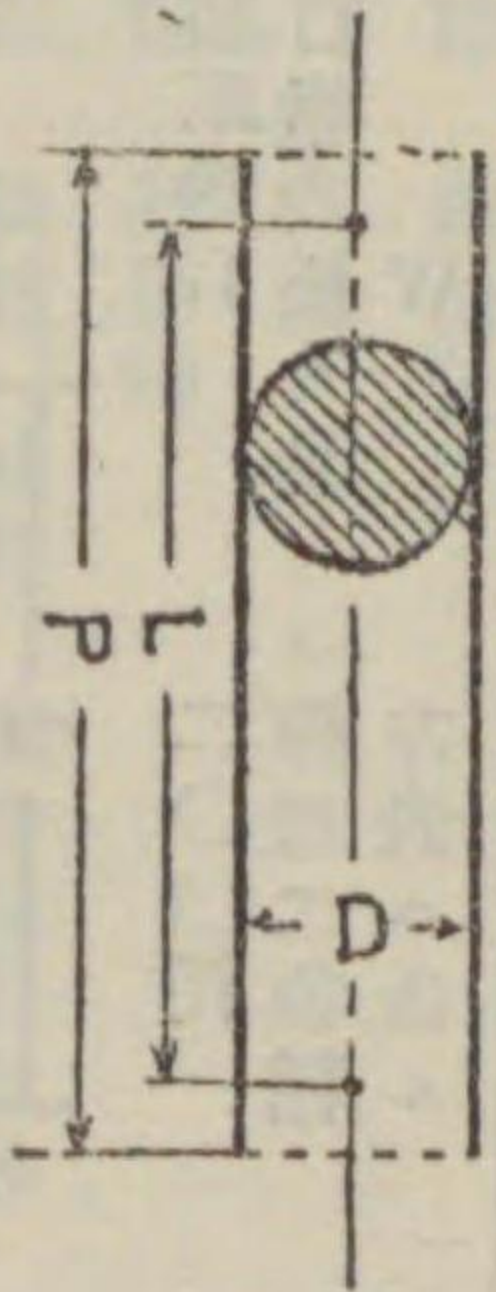
標點距離L 二〇〇耗  
 平行部ノ長サP 約二二〇耗  
 幅 W 左表ニ依ル

試驗片ノ厚サ(耗)	試驗片ノ幅W(耗)
二三ヲ超ユルモノ	四〇以下



スルコトヲ得

四 第四號試驗片 主トシテ鍛鋼材、鑄鋼材並ニ非鐵金屬(又ハ其ノ合金)棒ニ對シテ用ウルモノ



標點距離L 五〇耗  
平行部ノ長サP 約六〇耗  
徑 D 一四耗

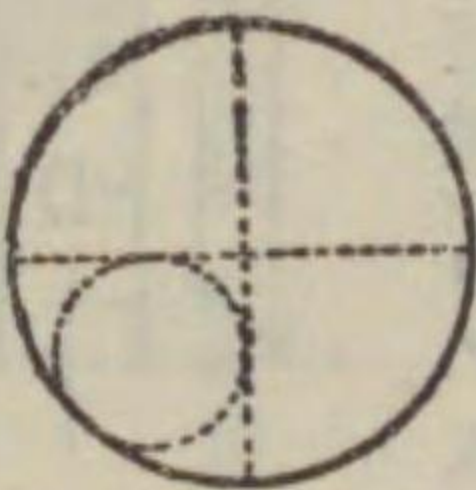
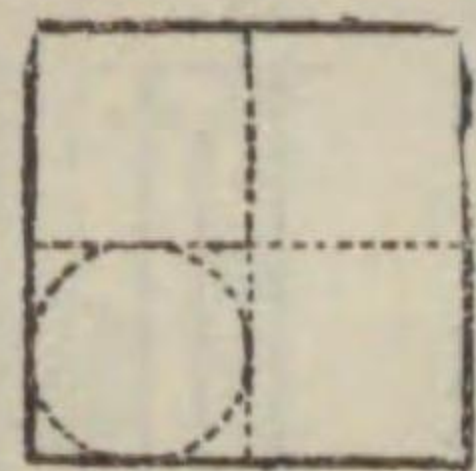
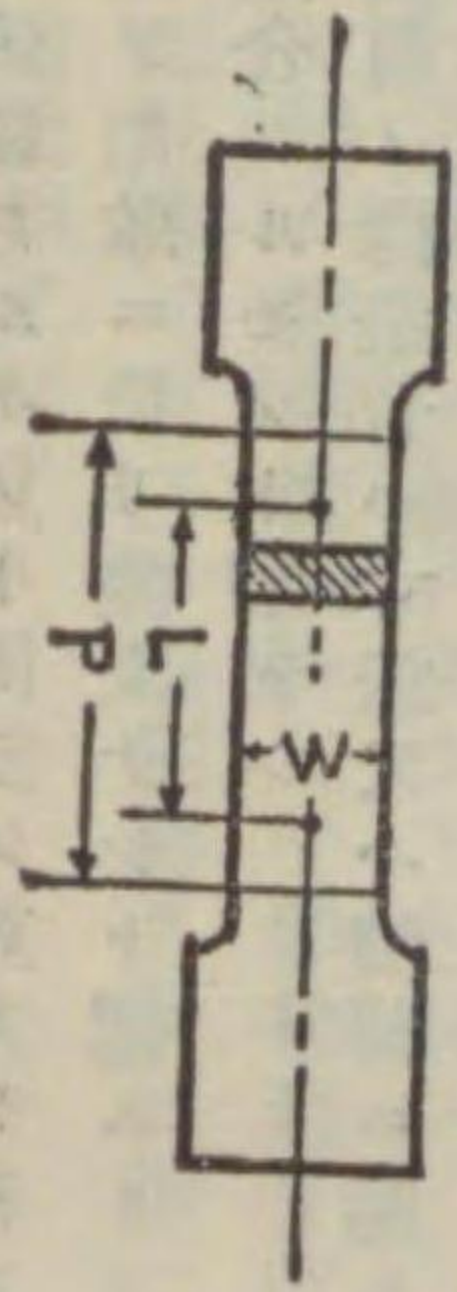
材料ノ都合ニ依リ右ノ寸法ト爲シ得ザルトキハ左ノ算式ニ依リ標點距離ヲ定ムルコトヲ得

$$L = 4 \sqrt{A}$$

Lハ標點距離(耗ニテ)

Aハ横截面積(平方耗ニテ)

五 第五號試驗片 主トシテ管類並ニ非鐵金屬(又ハ其ノ合金)板ニ對シテ用ウルモノ



第九條 壓延鋼材ノ屈曲試驗片ノ幅、徑又ハ對邊距離ハ三五耗以上ナルコトヲ要ス但シ「フランヂ」ノ幅五〇耗未滿ノ形鋼ヨリ採取セル試驗片ノ幅ハ三五耗未滿ナルモ妨ナク又徑又ハ對邊距離三五耗未滿ノ棒鋼ニ對シテ用ウル試驗片ハ壓延セル儘ノ材料ヲ使用スベシ

「フランヂ」ノ幅五〇耗未滿ノ形鋼ニ在リテハ之ニ壓力ヲ

標點距離L 五〇耗

平行部ノ長サP 約七〇耗

幅 W 二五耗

厚サ 原厚サノ儘トス

第八條 壓延鋼材ノ抗張試驗片ニハ成ルベク壓延肌ヲ殘スベシ

前項ノ規定ニ拘ラズ徑又ハ對邊距離七五耗以下ノ棒鋼ノ試驗片ニ付テハ適宜機械仕上ヲ爲シ又七五耗ヲ超ユル棒鋼ニ在リテハ左圖ニ於テ小圓ヲ以テ示ス位置ヨリ試驗片ヲ採取スルコトヲ得

加ヘ若ハ鏡打シテ扁平ト爲シタルモノヨリ試驗片ヲ採取スルコトヲ得

壓延鋼材ノ屈曲試驗片ニハ左ノ加工以外ノ加工ヲ爲スコトヲ得ズ

一 剪斷ノ爲生ジタル稜角又ハ縁ノ不整ヲ鑷又ハ研磨機ニ依リ削除スルコト

二 厚サ二五耗以上ノモノニ付剪斷面ヲ機械仕上ト爲スコト

厚サ一ニ耗未滿ノ燒入屈曲試驗片ニハ前項各號ノ加工ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得ズ

第十條 鍛鋼材又ハ鑄鋼材ノ屈曲試驗片ハ幅二五耗厚サ一

九耗ノ截面ヲ有シ角隅ニハ半徑一・五耗ノ丸味ヲ附シタルモノトス

第十一條 抗張試驗片及屈曲試驗片ノ數ハ特ニ規定スル場合ヲ除クノ外左表ニ依ル

種類	種類	抗張試驗片ノ數	屈曲試驗片ノ數
加工ノ爲加熱スル鋼板又ハ使用中火焔ニ接觸スル鋼板	壓延シタル儘ノ鋼板一箇每ニ一箇但シ其ノ重量二・五越ヲ超ユルトキハ其ノ兩端ヨリ各一箇	壓延シタル儘ノ鋼板一箇每ニ燒入屈曲試驗片一箇但シ其ノ重量二・五越ヲ超ユルトキハ兩端ヨリ各一箇	壓延シタル儘ノ鋼板一箇每ニ常溫屈曲試驗片一箇但シ其ノ重量二・五越ヲ超ユルトキハ其ノ兩端ヨリ各一箇
其ノ他ノ鋼板	同右	抗張力毎平方耗五三疋以上ニシテ汽罐若ハ汽槽ノ屈曲試驗片一箇	同右
形鋼、棒鋼又ハ鋸材	同一截面積ノ鋼材一五箇又ハ其ノ端數毎ニ一箇	同一截面積ノ鋼材一五箇又ハ其ノ端數毎ニ一箇	同一截面積ノ鋼材一五箇又ハ其ノ端數毎ニ一箇
	ハ鋸材ニ在リテハ右ノ一五箇ヲ五〇	管不明ナルトキハ同一種類ノ材料	管不明ナルトキハ同一種類ノ材料
	ヨリ管海官廳ノ適當ト認ムル數	管不明ナルトキハ同一種類ノ材料	管不明ナルトキハ同一種類ノ材料
	ヨリ管海官廳ノ適當ト認ムル數	管不明ナルトキハ同一種類ノ材料	管不明ナルトキハ同一種類ノ材料



鑄鋼材	鍛鋼材	鋌
同一徑ノモノノ重量四分ノ一ニ又ハ其ノ端數毎ニ一箇 鍛鋼材一箇毎ニ一箇但シ一箇ノ重量五〇〇瓦未滿ニシテ同一鋼塊ヨリ鍛造シタル多數ノ鍛鋼材ニ付テハ管海官廳ノ適當ト認ムル數 二銻鋼以上ヲ使用シ一箇ノ鑄鋼材ヲ鑄造スル場合ニ於テハ該鑄鋼材一箇毎ニ四箇 一銻鋼ヲ使用シ鑄造スル場合ニ於テハ鑄鋼材一箇毎ニ一箇但シ一銻鋼ヲ使用シ鑄造スル多數ノ同形鑄鋼材ニ付テハ管海官廳ノ適當ト認ムル數	同上	同上

第十二條

壓延鋼材ノ試験片ハ鋼板ニ在リテハ横又ハ縦ノ方向ヨリ形鋼又ハ棒鋼ニ在リテハ長サノ方向ヨリ之ヲ採取シ矯正ノ必要アルトキハ常溫ノ儘矯正スベシ  
 壓延鋼材ノ試験片ハ鋼材ト共ニスル場合ノ外之ニ燒鈍其ノ他ノ熱處理ヲ爲スコトヲ得ズ

第十三條

鍛鋼材ノ試験片ハ鍛鋼材ニ適當ナル熱處理ヲ爲シタル後其ノ主體ヨリ小ナラザル截面ヲ有スル部分ヨリ縦ニ切取ルモノトス但シ鍛鋼品ノ形狀又ハ用途ニ依リ横ニ切取ルモ妨ナシ

第十四條

鑄鋼材ノ試験片ハ之ヲ鑄鋼材ニ附著又ハ連結シテ鑄造シ鑄鋼材ト共ニ熱處理ヲ爲シタル後切取ルベシ

第二節 壓延鋼材

第十五條

機關ノ重要部分ニ用ウル壓延鋼材ハ酸性又ハ鹽基性ノ平爐ニ依リ製造セラレ裂疵其ノ他ノ缺點ナキモノナルコトヲ要ス

第十六條

前條ノ壓延鋼材ハ其ノ試験片ガ左ノ各號ノ試験ニ合格シタルモノナルコトヲ要ス但シ同一ノ汽罐又ハ氣槽ニ於テ同一ノ用途ニ供スル鋼板又ハ縱支柱用棒鋼ノ抗張力ノ差ノ範圍ハ每平方耗七瓦ヲ超ユルコトヲ得ズ  
 一 抗張試験 抗張力及標點間伸長百分率ハ左表ニ依ルコト

種類	抗張力(每平方耗瓦)	標準抗張試驗片	標點間伸長百分率
加工ノ爲加熱スル鋼板又ハ使用中火焰ニ接觸スル鋼板	四一以上四八以下	第一號	厚サ九耗以上 二〇以上 厚サ九耗未滿 二〇以上
其ノ他ノ鋼板	四四以上五五以下	第一號	厚サ九耗以上 二〇以上 厚サ九耗未滿 一七以上
形鋼	四四以上五〇以下	第一號	厚サ九耗以上 二〇以上 厚サ九耗未滿 一七以上
鋌材	四一以上四八以下	第二號	二五以上
汽罐ノ燃燒室又ハ火爐ノ支柱用棒鋼	四一以上四八以下	第二號	二三以上
其ノ他ノ棒鋼	四四以上五五以下	第三號	二〇以上 二四以上

二 屈曲試験

燒入屈曲試験ニ於テハ試験片ヲ濃紅色(日光ノ直射セザル室内ニ於テ判定スルモノニシテ約六五〇度)ニ熱シテ約二八度ノ水中ニ急冷シタル後常溫屈曲試験ニ於テハ常溫ノ儘試験片ニ壓力ヲ加ヘ又ハ鎚打ニ依リ左表ノ内側半徑ニテ一八〇度屈曲スルモ裂疵ヲ生ゼザルコト

種類  
鋼板  
形鋼  
棒鋼

内側半徑  
試驗片ノ厚サノ一・五倍以内  
試驗片ノ厚サノ一・五倍以内  
試驗片ノ徑又ハ對邊距離ノ一・五倍以内

鋌材

密著

第十七條 前條ノ抗張試験ニ於テ試験片ガ標點間ノ中心ヨリ標點距離ノ四分ノ一以外ニ於テ切斷シタルトキハ其ノ試験ヲ無効トシ更ニ最初ニ試験片ヲ採取シタル鋼材ニ付再試験ヲ行フコトヲ得  
 抗張試験又ハ屈曲試験ガ不合格ト爲リタルトキハ其ノ試験片一箇ニ付更ニ二箇ノ試験片ヲ採取シ再試験ヲ行フコトヲ得  
 前項ノ再試験ヲ行ヒタル場合ニ於テ試験片中一箇ト雖モ合格セザルモノアルトキハ之ニ依リ試験ヲ行ヒタル鋼材



ハ總テ不合格トス

第十八條 機關ノ重要部分ニ用ウル鉄ハ左ノ各號ノ試験ニ合格シタルモノナルコトヲ要ス但シ第十六條各號ノ試験ニ合格シタル鉄材ヨリ製作シタル鉄ニ付テハ抗張試験ヲ省略スルモ妨ナシ

一 抗張試験 抗張力ハ每平方耗四一疋以上四八疋以下ナルコト

二 屈曲試験 常溫ノ儘脚部ヲ一八〇度屈曲シテ密著セシムルモ屈曲部ノ外側ニ裂痕ヲ生ゼザルコト

三 打展試験 頭部ヲ赤熱シテ脚部ノ徑ノ二・五倍迄扁平ニ打展スルモ其ノ縁ニ裂痕ヲ生ゼザルコト

前項第三號ノ試験ニ用ウル鉄ノ數ハ同一徑ノモノノ重量四分ノ一疋又ハ其ノ端數毎ニ一箇トス

前條ノ規定ハ鉄ノ再試験ニ付テハ準用ス

第十九條 厚サ六耗未滿ノ壓延鋼材及抗張力ヲ重要トセザル部分ニ使用スル壓延鋼材ニハ抗張試験及燒入屈曲試験ヲ省略スルコトヲ得

第三節 鍛鋼材

第二十條 機關ノ重要部分ニ用ウル鍛鋼材ハ平爐、坩堝爐又ハ電氣爐ニ依リ製造シタル鋼塊ヨリ鍛造シ品質均一ニシテ裂痕其ノ他ノ缺點ナキモノナルコトヲ要ス

前項ノ鍛鋼材ニハ適當ナル熱處理ヲ爲スベシ

第二十一條 主機ノ軸、「ピストン」桿、十字頭、連接桿、推進軸系ノ軸類其ノ他強力ヲ重要トスル部分ニ用ウル鍛鋼材ノ主體ハ其ノ截面積ヲ原鋼塊ノ平均截面積ノ四分ノ一以內ニ、主體以外ノ部分ハ其ノ截面積ヲ原鋼塊ノ平均截面積ノ三分ノ二以內ニ鍛鍊スベシ但シ一體型又ハ半組成型ノ「クランク」軸ノ「クランク」部ニ用ウル鍛鋼材ニ付テハ其ノ截面積ノ割合ハ二分ノ一以內トス

前項ノ規定ハ船舶ノ推進ニ關係ヲ有スル補機ノ「クランク」軸ニ用ウル鍛鋼材ニ之ヲ準用ス

第二十二條 前條第一項ニ掲グル部分ニ用ウル鍛鋼材ニシテ大サ又ハ形狀ニ依リ其ノ截面積ノ割合ガ前條第一項ノ規定ニ依リ難キモノニ付テハ其ノ割合ハ管海官廳ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第二十三條 第二十一條ニ掲グル部分ニ用ウル鍛鋼材ハ其ノ試験片ガ左ノ各號ノ試験ニ合格シタルモノナルコトヲ要ス

一 抗張試験 抗張力ガ每平方耗四四疋以上五五疋以下ニシテ其ノ數値ト標點間伸長百分率ノ一・五八倍トノ和ガ九〇以上ナルコト

二 屈曲試験 常溫ノ儘六耗以下ノ内側半徑ヲ以テ一八

〇度屈曲スルモ裂痕ヲ生ゼザルコト但シ抗張力每平方耗五〇疋以上ノモノニ付テハ屈曲ノ内側半徑ヲ一〇耗迄増スコトヲ得

軸ノ計畫仕上徑二五〇耗以上ノ一體型「クランク」軸又ハ半組成型「クランク」軸ノ「クランク」部ハ該鍛造物ノ成ル

試験片採取方向	抗張力 (每平方耗疋)	標點間伸長百分率	裂痕ヲ生ゼザルコトヲ要スル屈曲角度
軸ノ中心線ニ平行ナル方向	四二・五以上五三・五以下	二七以上	一八〇
「クランク」腕ノ中心線ニ平行ナル方向	四二・五以上五三・五以下	二七以上	一五〇
前二方向ニ直角ナル方向	四一・〇以上五三・五以下	一九以上	一二五

備考 屈曲試験ニ於ケル屈曲ノ内側半徑ハ軸ノ中心線ニ平行ナル方向ノ抗張力ガ每平方耗四九疋未滿ナルトキハ六耗以下、四九疋以上ナルトキハ一〇耗以下ト爲スベシ

鍛造ノ割合ニ關シ前條ノ規定ニ依リタル鍛鋼材ハ第一項又ハ第二項ノ規定ニ依リ試験ノ外管海官廳ノ適當ト認ムル試験ニ合格シタルモノナルコトヲ要ス

第二項ノ「クランク」軸ノ「クランク」部ニシテ鍛造ノ方法其ノ他ノ事由ニ因リ同項ノ規定ニ依リ難キモノハ第一項ノ試験ノ外管海官廳ノ適當ト認ムル試験ニ合格シタルモノナルコトヲ要ス

第二十四條 前條ノ抗張試験ニ於テ試験片ガ標點間ノ中心

ベク中心部ニ於テ五ニ直角ナル三方向ニ採取シタル試験片ニ付抗張試験及屈曲試験ヲ執行シ左表ノ規格ニ適合スルコトヲ要ス此ノ場合ニ於テハ前項ノ試験ヲ省略スルコトヲ得

ヨリ標點距離ノ四分ノ一以外ニ於テ切斷シタルトキハ再試験ヲ行フコトヲ得

前條ノ材料試験ニ合格セザルトキハ管海官廳ニ於テ試験片ノ成績ガ材質ヲ適當ニ表明セザルモノト認メタル場合ニ限リ當該試験ニ對シ更ニ二箇ノ試験片ヲ採取シテ再試験ヲ行フコトヲ得

前項ノ再試験ヲ行ヒタル場合ニ於テ試験片中一箇ト雖モ合格セザルモノアルトキハ之ニ依リ試験ヲ行ヒタル鍛鋼



材ハ不合格トス  
第二十五條 第二十三條ノ材料試験ガ不合格トナリタルトキハ更ニ鍛鋼材ニ熱處理ヲ爲スコトヲ得  
前項ノ熱處理ヲ爲シタル場合ニ於テハ新ニ抗張試験及屈曲試験ノ全部ヲ行フモノトス

第四節 鑄鋼材

第二十六條 機關ノ重要部分ニ用ウル鑄鋼材ハ平爐、轉爐、電氣爐又ハ坩堝爐ニ依リ鑄造シ其ノ品質均一ニシテ有害ナル疵、鑄集其ノ他ノ缺點ナキモノナルコトヲ要ス  
前項ノ鑄鋼材ニハ適當ナル熱處理ヲ爲スベシ  
鑄鋼材ノ疵等ニシテ強力ニ對スル影響輕微ナリト認ムルモノニ付テハ管海官廳ハ鑄掛、電氣銻接又ハ他ノ適當ナル方法ニ依リ之ヲ補修セシムルコトヲ得  
前項ノ補修ヲ爲シタル場合ニ於テ管海官廳必要アリト認ムルトキハ補修後更ニ該鑄鋼材ニ適當ナル熱處理ヲ爲サシムルコトヲ得

第二十七條 機關ノ重要部分ニ用ウル鑄鋼材ハ其ノ試験片ガ左ノ第一號及第二號ノ試験ニ合格シ且該鑄鋼材ガ左ノ第三號及第四號ノ試験ニ合格スルコトヲ要ス但シ強力ヲ重要トモザル部分ニ用ウル鑄鋼材ニ付テハ第一號及第二號ノ試験ヲ省略スルコトヲ得

フコトヲ得  
前項ノ再試験ヲ行ヒタル場合ニ於テ試験片中一箇ト雖モ合格セザルモノアルトキハ其ノ試験片ニ依リ代表セラルル鑄鋼材ハ之ヲ不合格トス  
鑄鋼材ニハ再試験用試験片採取前更ニ熱處理ヲ爲スコトヲ得  
前項ノ熱處理ヲ爲シタル場合ニ於テハ既ニ合格シタル試験ニ付テモ更ニ試験ヲ行フコトヲ要ス

第五節 管

第二十九條 機關ノ重要部分ニ用ウル鋼管ハ良質ノ平爐鋼又ハ電爐鋼ヲ用キ常溫引拔法又ハ高溫仕上法ニ依リ無接合ニ製造シ裂疵其ノ他ノ缺點ナキモノナルコトヲ要ス但シ管海官廳ニ於テ差支ナシト認ムルトキハ鍛接合管又ハ鍛接合管ナルモ妨ナシ  
水管汽罐ノ水管ニ用ウル鋼管ニシテ外徑四〇耗未滿ノモノ又ハ汽罐ノ給水管ニ用ウル鋼管ハ前項ノ規定ニ拘ラズ常溫引拔法ニ依リ製造シタルモノナルコトヲ要ス  
常溫引拔無接合鋼管及鍛接合鋼管ハ製造後之ニ適當ナル熱處理ヲ爲スベシ

第三十條 機關ノ重要部分ニ用ウル銅管ハ常溫引拔法ニ依リ無接合ニ製造シ裂疵其ノ他ノ缺點ナキモノナルコトヲ

一 抗張試験 抗張力ハ每平方糎四一疋以上五五疋以下ニシテ標點間伸長百分率ハ二〇以上ナルコト  
二 屈曲試験 常溫ノ儘二五疋以下ノ内側半徑ヲ以テ一〇〇度以上屈曲スルモ裂疵ヲ生ゼザルコト  
三 落下試験 鑄鋼材ヲ約三米ノ高サヨリ硬質ノ地面ニ落下シ裂疵其ノ他ノ缺點ヲ生ゼザルコト  
四 鈍打試験 前號ノ試験執行後鑄鋼材ヲ吊シ其ノ重量ニ應ジ三疋乃至七疋ノ鈍ヲ以テ其ノ表面ヲ打ツモ有害ナル裂疵、鑄集、偏肉其ノ他ノ缺點ヲ認メザルコト  
形狀特ニ複雜又ハ長大ニシテ落下試験ヲ執行スルトキハ變形ノ虞アリト認ムルモノニ付テハ該鑄鋼材ノ成ルベク隔リタル兩端ヨリ採取シタル各二箇ノ試験片ガ前項第一號及第二號ノ試験ニ合格スルトキハ落下試験ヲ省略スルコトヲ得此ノ場合ト雖モ鈍打試験ハ之ヲ省略スルコトヲ得ズ

第二十八條 前條ノ抗張試験ニ於テ試験片ガ標點間ノ中心ヨリ標點距離ノ四分ノ一以外ニ於テ切斷シタルトキハ再試験ヲ行フコトヲ得  
抗張試験又ハ屈曲試験ニ合格セザルトキハ管海官廳ニ於テ試験片ノ成績ガ材質ヲ適當ニ表明セザルモノト認メタル場合ニ限り更ニ之ト同數ノ試験片ヲ採取シ再試験ヲ行

要ス但シ每平方糎五疋以上ノ壓力ヲ受ケザルモノハ鐵附管ナルモ妨ナシ  
每平方糎一二・五疋以上ノ壓力ヲ受クル外徑一三五糎以上ノ汽管ニハ銅管ヲ用ウルコトヲ得ズ

第六節 雜 則

第三十一條 管、特殊鋼材、黃銅材、可鍛鑄鐵材又ハ鑄鐵材ニ付テハ管海官廳ニ於テ特ニ必要アリト認ムル場合ニ限り其ノ指示スル所ニ依リ材料試験ヲ行フ  
第三十二條 乙種機關又ハ丙種機關ニ用ウル材料ニ付テハ管海官廳ノ見込ニ依リ材料試験ヲ省略スルコトヲ得但シ軸ノ一部ニ用ウル鑄鋼材ノ材料試験及汽罐又ハ每平方糎一〇疋以上ノ壓力ヲ受クル氣槽ニ用ウル鋼板ノ屈曲試験ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ  
第三十三條 管海官廳ハ材料規格ニ適合セザル材料ト雖モ其ノ使用ノ方法若ハ箇所ヲ限リ又ハ其ノ他ノ條件ヲ附シテ之ヲ使用セシムルコトヲ得

第三章 蒸汽機關ヲ備フル船舶ノ機關

第一節 汽 機

第三十四條 汽機ハ容易ニ反轉セシメ且船舶ニ充分ナル後退力ヲ有セシメ得ルモノナルコトヲ要ス  
第三十五條 軸ノ寸法ハ汽機及軸ノ種類ニ應ジ左ノ各號ノ



算式ニ依リ算定シタルモノヨリ小ナルコトヲ得ズ  
 一 往復動汽機ニ用ウル鍛鋼製ノ「クランク」軸、中間軸  
 又ハ推力軸ノ徑

$$d = K \sqrt[3]{PD^2S}$$

d ハ軸ノ徑(耗ニテ)

D<sup>2</sup> ハ一推進軸系ニ於ケル低壓汽筒ノ數又ハ單式汽機

ノ汽筒ノ數一箇ナルトキハ其ノ徑(耗ニテ)ノ二乗、  
 二箇ナルトキハ各汽筒ノ徑(耗ニテ)ノ二乗ノ和  
 P ハ復水器ヲ備ヘザルトキハ汽罐ノ制限汽壓(每平方  
 糎ニテ)、復水器ヲ備フルトキハ汽罐ノ制限汽壓  
 (每平方糎ニテ)ニ一ヲ加ヘタルモノ  
 S ハ行長(糎ニテ)  
 K ハ定數ニシテ左表ニ依ル

往復動汽機ノ種類	「クランク」ノ數			「クランク」軸又ハ推力軸		
	甲種機關又ハ乙種機關	丙種機關	中間軸	甲種機關又ハ乙種機關	丙種機關	中間軸
單式汽機	一	一・四九	一・四二	一・四二	一・三三	一・三五
	二(「クランク」角九〇度ノモノ)	一・三八	一・三一	一・三一	一・二五	一・四〇
	二(「クランク」角一八〇度ノモノ)	一・五五	一・四七	一・四七	一・四〇	一・四〇
	二(「クランク」角九〇度ノモノ)	一・〇七	一・〇二	一・〇二	〇・九六	一・〇八
二聯成汽機	三又ハ四	一・二〇	一・一四	一・一四	一・〇八	一・〇八
	三又ハ四	一・〇三	〇・九八	〇・九八	〇・九三	〇・九三
三聯成汽機	三又ハ四	〇・八八	〇・八四	〇・八四	〇・七九	〇・七九
四聯成汽機	四	〇・八六	〇・八二	〇・八二	〇・七八	〇・七八

二 鋼製「クランク」腕ノ厚サ及幅

組成型「クランク」軸又ハ半組成型「クランク」軸ナルトキ

一體型「クランク」軸ナルトキ  $b^2 = 0.417d^3$

t ハ軸ノ方向ノ腕ノ厚サ(耗ニテ)

W ハ組成型「クランク」軸又ハ半組成型「クランク」軸ニ於ケル腕ノ孔ノ周圍ノ半徑方向ノ厚サ(耗ニテ)

b ハ一體型「クランク」軸ノ腕ノ幅(耗ニテ)

d ハ前號ノ規定ニ依リ算定シタル「クランク」軸ノ徑(耗ニテ)

三 「タービン」汽機ノ鍛鋼製ノ中間軸又ハ推力軸ノ徑

$$d = K \sqrt[3]{\frac{T}{R}}$$

d ハ軸ノ徑(耗ニテ)

T ハ計畫軸馬力

R ハ軸ノ計畫每分回轉數

K ハ定數ニシテ左表ニ依ル

軸ノ種類	中間軸		推力軸	
	甲種機關又ハ乙種機關	丙種機關	甲種機關又ハ乙種機關	丙種機關
K	一〇〇	九五	一〇五	一〇〇

四 三聯成汽機ト「タービン」汽機ト同一推進軸系ニ聯動スル汽機ノ鍛鋼製ノ中間軸又ハ推力軸ノ徑

$$d = K \sqrt[3]{(68,000 \times \frac{T}{R} + 0.032PD^2S \times (1 + \frac{14,500D^2S}{WG^2R^2}))}$$

d ハ軸ノ徑(耗ニテ)

P ハ汽罐ノ制限汽壓(每平方糎ニテ)

D ハ低壓汽筒ノ徑(糎ニテ)

S ハ行長(糎ニテ)

T ハ「タービン」汽機ノ計畫軸馬力

R ハ當該推進軸系ノ計畫每分回轉數

W ハ聯動裝置ノ親齒車ノ重量(糎ニテ)

G ハ聯動裝置ノ親齒車ノ心圈ノ徑(糎ニテ)

K ハ定數ニシテ左表ニ依ル

軸ノ種類	中間軸		推力軸	
	甲種機關又ハ乙種機關	丙種機關	甲種機關又ハ乙種機關	丙種機關
K	二・四三	二・三一	二・五五	二・四二

五 鍛鋼製螺旋軸ノ徑



$$d^2 = d + \frac{P}{C}$$

d ハ螺旋軸ノ徑(耗ニテ)

d ハ汽機ノ種類ニ應ジ第一號、第三號、前號又ハ第二項ノ規定ニ依リ算定シタル中間軸ノ徑(耗ニテ)

P ハ螺旋推進器ノ徑(耗ニテ)

C ハ定數ニシテ左表ニ依ル

第一種螺旋軸ナルトキ 一四四

第二種螺旋軸ナルトキ 一〇〇

前項第四號ノ汽機ノ中間軸又ハ推力軸ノ徑ハ前項ノ規定ニ拘ラズ夫々同項第一號ノ規定ニ依リ算定シタル中間軸又ハ推力軸ノ徑ヨリ小ナルコトヲ得ズ

螺旋軸ハ前部軸ノ附近ニ於テハ其ノ徑ガ汽機ノ種類ニ應ジ第一項第一號、第三號、第四號又ハ前項ノ規定ニ依リ算定シタル中間軸ノ徑ノ一・〇五倍トナル迄漸次之ヲ減ズルコトヲ得

第三十六條 軸銜ヲ連結スル螺釘ノ軸銜連結面ニ於ケル徑ノ種類ニ應ジ第一項第一號、第三號、第四號又ハ第二項ノ規定ニ依リ算定シタル中間軸ノ徑トナル迄漸次之ヲ減ズルコトヲ得

ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ小ナルコトヲ得ズ

$$D = 0.75 \sqrt{\frac{D^3}{Nd}}$$

d ハ螺釘ノ徑(耗ニテ)

N ハ螺釘ノ數

d ハ螺釘心圈ノ徑(耗ニテ)

D ハ前條ノ規定ニ依リ算定シタル中間軸ノ徑(耗ニテ)

第三十七條 船尾管後端ノ軸受部ノ長サハ第三十五條第一項第五號ノ算式ニ依リ算定シタル軸ノ徑ノ四倍未滿ト爲スコトヲ得ズ

船尾管後端ノ軸受上部ノ内面ト螺旋軸トノ間隙C(耗ニテ)ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ大ナルコトヲ得ズ

$$C = 0.015 d + 2.5$$

d ハ螺旋軸ノ該部分ニ於ケル被金上ノ徑(耗ニテ)

第三十八條 甲種機關又ハ乙種機關ニ在リテハ往復動汽機ニハ各汽筒ノ兩端及汽筒間ノ蒸汽通路ニ、「タービン」汽機ニハ適當ノ箇所ニ有效ナル逃出辨ヲ備ヘ該部ニ於ケル最大汽壓ノ一・四倍以下ノ壓力ニ於テ逃汽スル様之ヲ調整スベシ

第三十九條 汽筒ニハ適當ナル排水裝置ヲ備フベシ

第四十條 汽機ノ動作部ニ對シテハ適當ナル圍牆又ハ柵欄ヲ設クベシ

第四十一條 汽筒又ハ之ニ附屬スル辨匣等ハ之ヲ製造シ制仕上ヲ爲シタルトキ夫々左ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行スベシ但シ内外全面ヲ割仕上ゲタル内筒ニ付テハ管海官廳ノ見込ニ依リ之ヲ省略スルコトヲ得

一 單式汽機ノ汽筒、汽罐ノ制限汽壓ガ每平方糎六疋以上ナルトキハ汽罐ノ制限汽壓ニ每平方糎六疋ヲ加ヘタル壓力

汽罐ノ制限汽壓ガ每平方糎六疋未滿ナルトキハ汽罐ノ制限汽壓ノ二倍ノ壓力

二 二聯成汽機

高壓汽筒 單式汽機ノ汽筒ニ同ジ

低壓汽筒 汽罐ノ制限汽壓ニ〇・五〇ヲ乘ジタル壓力

三 三聯成汽機

高壓汽筒 汽罐ノ制限汽壓ニ每平方糎六疋ヲ加ヘタル壓力

中壓汽筒

汽罐ノ制限汽壓ニ〇・七五ヲ乘ジタル壓力

力

低壓汽筒 汽罐ノ制限汽壓ニ〇・三〇ヲ乘ジタル壓力

四 四聯成汽機

高壓汽筒 汽罐ノ制限汽壓ニ每平方糎六疋ヲ加ヘタル壓力

第一中壓汽筒 汽罐ノ制限汽壓

第二中壓汽筒 汽罐ノ制限汽壓ニ・五〇ヲ乘ジタル壓力

低壓汽筒 汽罐ノ制限汽壓ニ〇・二五ヲ乘ジタル壓力

「タービン」汽機ノ汽筒 各膨脹階段ノ初壓力ノ一・五〇倍及每平方糎二疋ノ中大ナル壓力

六 高壓「タービン」汽機ノ配汽室 汽罐ノ制限汽壓ノ一・五〇倍ノ壓力但シ適當ナル逃出辨ヲ備フルモノハ配汽室内蒸汽壓力ノ一・五〇倍ノ壓力

七 中壓又ハ低壓「タービン」汽機ノ配汽室 該室内蒸汽壓力ノ一・五〇倍ノ壓力

八 收汽室、收汽管、汽包室、汽筒蓋、辨匣及辨匣蓋 其ノ附屬スル汽筒ニ對スル壓力ト同一ノ壓力

第四十二條 復水器管ノ管板間ノ長サガ管ノ外徑ノ一二〇倍以上ナルトキハ一二〇倍毎ニ一箇ノ割合ヲ以テ支板ヲ設クベシ

第四十三條 復水器ノ器胴、通水室又ハ蓋ハ之ヲ製造シタルトキ每平方糎一・五疋ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行ス



復水器管ヲ取附ケタルトキハ二米以上ノ水高壓力ヲ以テ漏否試験ヲ執行スベシ

第二節 筒形汽罐及直立汽罐

第四十四條 主トシテ張力ヲ受クル部分ハ鍛合又ハ銲接スルコトヲ得ズ但シ鍛合部又ハ銲接部ニ覆板ヲ附シ適當ナル銲接合ト爲ストキハ此ノ限ニ在ラズ  
小ナル汽兜ノ胴板又ハ直立汽罐ノ又管ノ縱接合ハ前項ノ規定ニ拘ラズ之ヲ鍛合又ハ銲接スルコトヲ得

第四十五條 工事ノ爲加熱シタル鋼板又ハ鋼製支柱ニハ適當ナル熱處理ヲ爲スベシ

二枚以上ノ鋼板ヲ銲接合スル場合ニ於テハ之ヲ銲締スル以前ニ於テモ此等ノ鋼板ガ充分密著スル状態ト爲シ且銲孔ハ成ルベク該鋼板ヲ假接合シタル後鑽孔スベシ  
鋼板ノ銲孔ハ鑽孔シタルモノト爲スベシ

第四十六條 胴板ニ設クル隋圓形ノ孔ハ短徑ヲ罐ノ長サニ平行セシムベシ

胴板ヲ設クル人孔又ハ他ノ孔ノ徑ガ胴板ノ厚サノ二・五倍ニ七〇耗ヲ加ヘタルモノヨリ大ナルトキハ適當ナル補強環ヲ附シ該部分ノ強率ヲ胴板ノ縱接合ニ於ケル強率ヨリ小ナラザルモノト爲スベシ

長徑一五〇耗ヲ超ユル人孔其ノ他ノ孔ヲ鏡板ニ設クルトキハ相當ノ強力ヲ有スル緣環又ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ小ナラザル深サヲ有スル曲線ニ依リテ鏡板ヲ補強スベシ

$$R = \sqrt{t \times W}$$

h 八孔ノ短徑部ニ於テ板ノ外面ヨリ測リタル曲線ノ深サ(耗ニテ)

t 八板ノ厚サ(耗ニテ)

W 八孔ノ短徑(耗ニテ)

第四十七條 人孔其ノ他ノ孔ニ用ウル押壓製ノ蓋ハ適當ナル熱處理ヲ爲シタルモノナルコトヲ要ス  
孔蓋ト孔トノ間隙ハ孔ノ周ノ各點ニ於テ一・五耗ヲ超ユルコトヲ得ズ

第四十八條 胴板ノ縱接合ニ用ウル覆板ハ胴板ト同質ノ板ヲ用キ其ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ小ナルコトヲ得ズ

一 各列ノ銲數ガ同一ナル場合

$$t_o = \frac{5}{8} \times T$$

$$t = \frac{5}{8} \times T + 3$$

二 外列ノ銲數ガ其ノ他ノ列ノ銲數ノ半數ナル場合

$$t_o = \frac{5}{8} \times \frac{T(P-d)}{(P-2d)}$$

$$t = \frac{5}{8} \times \frac{T(P-d)}{(P-2d)} + 3$$

T 八接合スベキ胴板ノ厚サ(耗ニテ)

t\_o 八外覆板ノ厚サ(耗ニテ)

t 八内覆板ノ厚サ(耗ニテ)

p 八外列ニ於ケル銲ノ心距(耗ニテ)

d 八銲孔ノ徑(耗ニテ)

第四十九條 端列ニ於ケル銲孔ノ中心ヨリ板端迄ノ距離ハ其ノ孔徑ノ一・五倍以上ナルコトヲ要ス  
二列以上ノ銲接合ニ於ケル銲列間ノ距離ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ小ナルコトヲ得ズ  
一 各列ノ銲數ガ同一ナル場合

$$V_1 = 0.33p + 0.67d$$

千鳥形銲

トキ

$$V_1 = 2d$$

竝列銲接

二 外列ノ銲數ガ其ノ他ノ列ノ銲數ノ半數ナル場合

$$\left. \begin{aligned} V &= 0.2p + 1.15d \\ V_1 &= 0.165p + 0.67d \end{aligned} \right\} \begin{aligned} &\text{千鳥形銲} \\ &\text{接合ナルトキ} \end{aligned}$$

$$\left. \begin{aligned} V_1 &= 0.33p + 0.67d \\ V &= 2d \end{aligned} \right\} \begin{aligned} &\text{竝列銲接} \\ &\text{合ナルトキ} \end{aligned}$$

第五十條 胴板ノ縱接合ニ於ケル銲ノ心距ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ大ナルコトヲ得ズ

$$P = C \times T + 40$$

p 八銲ノ心距(耗ニテ)

T 八板ノ厚サ(耗ニテ)

C 八定數ニシテ左表ニ依ル

Pナル心距ニ於ケル銲數	累接合ナルトキ	兩覆板衝接合ナルトキ
1	1・111	1・75
11	11・611	3・50
111	33・47	4・63



四	四・一四	五・五二
五	一	六・〇〇

第五十一條 胴板ト鏡板トノ接合ハ接合強率ヲ〇・四二以上ト爲シ胴板ノ厚サ一六耗ヲ超ユルトキハ接合銲列數ハ二以上ト爲スベシ

筒形汽罐ノ胴板相互ノ周圍接合ハ片面型汽罐ニ在リテハ接合強率ヲ〇・六〇以上ト爲シ接合銲列數ヲ胴板ノ厚サ一六耗ヲ超ユルトキハ二以上、三五耗ヲ超ユルトキハ三以上ト爲シ兩面型汽罐ニ在リテハ接合強率ヲ〇・六二以上ト爲シ接合銲列數ヲ胴板ノ厚サ一三耗ヲ超ユルトキハ二以上、三〇耗ヲ超ユルトキハ三以上ト爲スベシ

直立汽罐ノ胴板相互ノ周圍接合ハ接合強率ヲ〇・四二以上ト爲シ其ノ接合ガ全周ニ亘ラザルトキハ又ハ胴板ノ厚サ一六耗ヲ超ユルトキハ接合銲列數ヲ二以上ト爲スベシ

第五十二條 胴板ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノトス

$$P = \frac{(T-a) \times S \times C \times J}{D}$$

P ハ制限汽壓(每平方糎ニテ)

T ハ胴板ノ厚サ(耗ニテ)

S ハ胴板ノ最小抗張力(每平方糎ニテ)  
D ハ胴ノ最大内徑(耗ニテ)  
J ハ縦接合ノ強率ニシテ第二項ニ依リ定メタルモノ  
a ハ胴板ノ厚サ四五耗未滿ナルトキハ一・五、四五耗以上ナルトキハ零  
C ハ定數ニシテ左表ニ依ル

縦接合ガ兩覆板ヲ有シ胴板ノ厚サ四五耗未滿ナルトキ	五二・一
縦接合ガ兩覆板ヲ有シ胴板ノ厚サ四五耗以上ナルトキ	五〇・〇
縦接合ガ累接三列銲ナルトキ	五〇・五
縦接合ガ累接二列銲ナルトキ	四九・三
縦接合ガ累接一列銲ナルトキ	四三・三

縦接合ノ強率ハ左ノ各號ノ強率中最小ノモノトス

一 接合ニ於ケル胴板ノ強率

$$J_1 = \frac{P-D}{P}$$

II 接合ニ於ケル銲ノ強率

$$J_2 = \frac{D \times C^2 \times K}{P \times T}$$

三 外列ノ銲ノ心距ガ其ノ他ノ列ノ銲ノ心距ノ二倍ナル

トキノ銲及胴板ノ聯合強率

$$J_3 = \frac{P-2d}{P} + \frac{J_5}{a}$$

T ハ胴板ノ厚サ(耗ニテ)

P ハ外列ニ於ケル心距(耗ニテ)

d ハ銲孔ノ徑(耗ニテ)

n ハPナル心距ニ於ケル銲數

k ハ兩覆板ヲ有スル場合ニ於テハ一・二一、其ノ他ノ場合ニ於テハ〇・六四

第四十四條第二項ニ依リ鍛合又ハ鑄接シタル胴板ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ管海官廳ノ定ムル所ニ依ル

三箇以上ノ螺旋支柱ノ取附孔ガ胴ノ中心線ニ平行又ハ略平行ニ配置セラルトキハ孔ノ間隔ハ該支柱間ニ於ケル胴板ノ強率ガ縱接合ノ強率ヨリ小ナラザル様之ヲ定ムベシ

第五十三條 平板ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノノ中最小ノモノトス

一 螺旋支柱又ハ其ノ他ノ支柱ヲ以テ支ハラレタル部分

$$P = C_1 \times \frac{(T-1)S + KW^2}{d_1^2 + d_2^2}$$

P ハ制限汽壓(每平方糎ニテ)

T ハ板ノ厚サ(耗ニテ)

a ハ支柱各列中心線ノ距離(耗ニテ)

b ハ各列ニ於ケル支柱心距(耗ニテ)

W ハ座金、條板又ハ二重張板ノ厚サ(耗ニテ)

K ハ定數ニシテ左表ニ依ル但シ座金、條板又ハ二重張板ヲ取附ケザルトキ又ハ板ニ固著セザル座金ヲ備フル場合ニ於テ其ノ厚サ又ハ徑ガ表ニ掲グル寸法ニ適合セザルトキハ零

厚サハ板ノ厚サノ一・〇〇乃至〇・六六倍徑ハ支柱ノ徑ノ三・五倍以上ノ座金ヲ外面ニ備フルトキ	〇・一五
厚サハ板ノ厚サノ一・〇〇乃至〇・六六倍徑ハ支柱ノ心距ノ〇・六六倍以上ノ座金ヲ銲ニテ板ニ固著シタルトキ	〇・三五
厚サハ板ノ厚サノ一・〇〇乃至〇・六六倍幅ハ支柱ノ心距ノ〇・六六倍以上ノ條板ヲ銲ニテ板ニ固著シタルトキ	〇・五五
厚サハ板ノ厚サノ一・〇〇乃至〇・六六倍ナル二重張板ヲ銲ニテ板ニ固著シタルトキ	〇・八五



C<sub>1</sub>ハ定數ニシテ左表ニ依ル

支點ノ種類	板ガ火焰ノ接觸ヲ受ケザルモノナルトキ	板ガ火焰ノ接觸ヲ受クルモノナルトキ
支柱ヲ板ニ挿込ミ其ノ端ヲ絞締シタルトキ	四二〇〇	三七一〇
支柱ヲ板ニ挿込ミ外面ヨリ母螺締ト爲シタルトキ	六三一〇	五五二〇
支柱ヲ板ニ挿込ミ内外ヨリ母螺締ト爲シタルトキ	七〇〇〇	六一五〇
支柱ヲ板ニ挿込ミ外面ニハ座金條板又ハ二重張板ヲ當テ内外ヨリ母螺締ト爲シタルトキ	七三六〇	六四五〇
管支柱ヲ管板ニ挿込ミ其ノ端ヲ擴張シ緊著シタルトキ	—	三八二〇
管支柱ヲ管板ニ挿込ミ其ノ端ヲ擴張シ且外面ヨリ母螺締ト爲シタルトキ	—	五二八〇

二 管支柱ヲ以テ支ヘラレタル管板ノ焰管集相互間又ハ焰管集ト胴板トノ間ノ部分

$$P = C_2 \times \frac{(T-1)^2 + Kw^2}{a^2 + D^2}$$

P 及 T ハ前號ニ同ジ

a ハ管支柱ノ水平心距(耗ニテ)

b ハ管支柱ノ縦心距(耗ニテ)

w ハ二重張板ヲ取附ケタルトキハ其ノ厚サ(耗ニテ)

k ハ二重張板ヲ取附ケタルトキハ〇・五五之ヲ取附ケザルトキハ零

C<sub>2</sub>ハ定數ニシテ左表ニ依ル

端列ノ管支柱ノ外端ヲ母螺締ト爲サザルトキ 三八一〇

端列ノ管支柱ノ外端ヲ一箇置ニ母螺締ト爲シタルトキ 四六三〇

端列ノ管支柱ノ外端ヲ總テ母螺締ト爲シタルトキ 五二八〇

三 管支柱ヲ以テ支ヘラレタル管板ノ焰管集ニ於ケル部分

$$P = C_3 \times \frac{(T-1)^2}{P_2}$$

P 及 T ハ第一號ニ同ジ

p ハ當該部分ニ於ケル四箇ノ管支柱ノ中心點ノ構成スル四邊ノ形四邊ノ平均ノ長サ(耗ニテ)

C<sub>3</sub>ハ定數ニシテ左表ニ依ル

管支柱ヲ管板ニ挿込ミ其ノ端ヲ擴張シ緊著シタルトキ 二八〇〇

管支柱ヲ管板ニ挿込ミ其ノ端ヲ擴張シ且外面ヨリ母螺締ト爲シタルトキ 三六〇〇

前項ノ算式ヲ適用スルニ當リ當該部分ニ於ケル支點ノ種類ガ同一ナルザルトキ定數 C<sub>1</sub>, C<sub>2</sub>, C<sub>3</sub> 及 K ハ各種類ノ支點ノ數ニ之ニ對スル定數ヲ乗ジタルモノノ和ヲ支點ノ總數ニテ除シタルモノトス

前二項ノ規定ヲ支點ノ配置不規則ナル部分又ハ曲線シタル板ノ曲線ニ近キ部分ニ適用スルニ當リテハ左ノ規定ニ依ル

- 一 曲線ノ彎曲起點ハ之ヲ支點ト看做シ其ノ彎曲内半徑ガ板ノ厚サノ二・五倍ヨリ大ナルトキハ曲線ノ外面ヨリ板ノ厚サノ三・五倍ノ距離ノ點ヲ彎曲起點ト看做ス
- 二 少クトモ三支點ヲ通り内部ニ支點ヲ有セザル最大圓ノ徑ヲ d トシ第一項ノ算式中ノ  $\frac{1}{2}d$  ノ代リニ  $\frac{1}{2}d$  ヲ用ウ

三 曲線ノ彎曲起點ガ支點ナル場合ノ定數 C<sub>1</sub> ハ板ガ火焰ノ接觸ヲ受ケザルモノナルトキハ八〇六〇、板ガ火焰ノ接觸ヲ受クルモノナルトキハ七〇四〇トス

第五十四條 支柱ヲ板ニ挿込ミ其ノ端ヲ絞締スル場合ニ於ケル板ノ厚サハ支柱ノ螺糸底ニ於ケル徑ノ二分ノ一ヨリ小ナルコトヲ得ズ

燃燒室ノ頂板及側板ニ於テ後管板又ハ背板ニ最モ近キ支柱列ト後管板又ハ背板ノ曲線ノ彎曲部起點トノ距離ハ第三條本文ノ規定ニ依リ定メタル汽罐ノ制限汽壓ヲ前條第一項第一號ノ算式ニ用キ算定シタル a ヨリ大ナルコトヲ得ズ

燃燒室ノ頂板ヲ側板ト接合スル爲ノ彎曲部ノ彎曲外半徑ガ第三條本文ノ規定ニ依リ定メタル汽罐ノ制限汽壓ヲ第五十七條ノ算式ニ用キ算定シタル支梁ノ心距 D ノ二分ノ一ヨリ小ナル片ハ側板ノ内面ト之ニ最モ近キ支梁ノ中心トノ距離ハ D ヨリ大ナルコトヲ得ズ又右ノ彎曲外半徑ガ D ノ二分ノ一ヨリ大ナル片ハ支梁ノ中心ヨリ彎曲起點迄測リタル平坦部ノ幅ハ D ノ二分ノ一ヨリ大ナルコトヲ得ズ

第五十五條 焰管集形ヲ成スル焰管ガ水平ナル直立汽罐ノ管板ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ第五十三條ノ規定ニ拘ラズ同條ノ算式及左ノ算式ニ依リ算定シタルモノノ中最小



ノモノトス

$$P = \frac{4.92 \times (T-1.5) \times S \times (p-d)}{D \times p}$$

P ハ制限汽壓(毎平方糎ニテ)

T ハ管板ノ厚サ(耗ニテ)

S ハ管板ノ抗張力(毎平方糎ニテ)

D ハ胴ノ中心ヨリ縦端列ニ於ケル管孔ノ中心迄ノ距離ノ二倍(耗ニテ)

p ハ管ノ縦心距(耗ニテ)

d ハ管板ニ於ケル管孔ノ徑(耗ニテ)

前項ノ管板ノ縦端列ニ於ケル管ハ少クトモ一箇置ニ管支柱ト爲スベシ

第五十六條 筒形汽罐ノ後管板ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ

第五十三條ノ規定ニ拘ラズ同條ノ算式及左ノ算式ニ依リ算定シタルモノノ中最小ノモノトス

$$P = \frac{2,100(D-d)T}{W \times D}$$

P ハ制限汽壓(毎平方糎ニテ)

T ハ管板ノ厚サ(耗ニテ)

D ハ焰管ノ水平心距(耗ニテ)

d ハ普通焰管ニ對スル管孔ノ徑(耗ニテ)

W ハ燃燒室上部ノ奥行(耗ニテ)

第五十七條 燃燒室ノ頂板ヲ支フル鋼製支梁ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノトス

$$P = \frac{Q \times \sqrt{2} \times T \times S}{(L-p) \times D \times I}$$

P ハ制限汽壓(毎平方糎ニテ)

d ハ支梁中央部ノ深サ(耗ニテ)

T ハ支梁ノ厚サ但シ二板合セ支梁ナルトキハ各板ノ厚サノ和(耗ニテ)

L ハ燃燒室上部ノ内側ニ於テ測リタル奥行(耗ニテ)

p ハ支梁ノ支フル支柱ノ心距(耗ニテ)

D ハ支梁ノ心距(耗ニテ)

S ハ支梁ニ用ウル鋼材ノ最少抗張力(毎平方糎ニテ)

Q ハ定數ニシテ左表ニ依ル

各支梁ノ支フル支柱ノ數nガ奇數ナルトキ  $\frac{p}{p+1} \times 2.5.3$

各支梁ノ支フル支柱ノ數nガ偶數ナルトキ  $\frac{p+1}{p+2} \times 2.5.3$

第五十八條 燃燒室ノ筒形底部ニシテ支柱其ノ他ニ依リ補強セラレザル部分ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノノ中小ナルモノトス

P H O 及 C<sub>1</sub>ハ前條ニ同ジ

T ハ火爐鋼板ノ厚サ(耗ニテ)

D ハ火爐ノ外徑(耗ニテ)

L ハ火爐ノ長サニシテ火爐鋼板ヲ曲縁ト爲シ板、補強環等ト接合スル場合ニ於テハ曲縁ノ彎曲起點ヨリ又火爐鋼板ヲ他ノ鋼板ノ曲縁ト鋼接合スル場合ニ於テハ鋸ノ中心線ヨリ測リタルモノ(耗ニテ)

第六十條 皺形火爐ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノトス

$$P = \frac{C(T-1)}{C}$$

P ハ制限汽壓(毎平方糎ニテ)

T ハ火爐ノ皺形部ニ於ケル鋼板ノ最小厚サ(耗ニテ)

D ハ火爐ノ皺形部ニ於ケル最小外徑(耗ニテ)

C ハ定數ニシテ左表ニ依ル

火爐ノ種類	C
「モリソン」式、「デイトン」式又ハ之ニ類スルモノ	1090
「リーズ、フオージ、バルブ」式又ハ之ニ類スルモノ	1160

第六十二條 支柱又ハ其ノ他ニ依リ補強セラレザル半球狀火爐ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ左ノ算式ニ依リ算定シタ

第五十九條 筒形火爐ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノノ中小ナルモノトス

$$P = \frac{Q \times (T-1)^2}{(L+610) \times D}$$

$$P = \frac{Q_1 \times [325(T-1) - L]}{D}$$

縦接合ノ種類	C	C <sub>1</sub>
鍛合	107000	352
鋸接合	96000	316

C 及 C<sub>1</sub>ハ定數ニシテ左表ニ依ル

$$P = \frac{Q \times (T-1)^2}{(L+610) \times D}$$

$$P = \frac{Q_1 \times [325(T-1) - L]}{D}$$

P ハ制限汽壓(毎平方糎ニテ)

T ハ燃燒室底部ノ鋼板ノ厚サ(耗ニテ)

D ハ燃燒室底部ノ外徑(耗ニテ)

L ハ燃燒室底部ノ奥行ニシテ該部ヲ形成スル鋼板ヲ他ノ鋼板ト鋸接合スル鋸ノ中心線ヨリ測リタルモノ(耗ニテ)

C 及 C<sub>1</sub>ハ定數ニシテ左表ニ依ル



ルモノトス

$$P = \frac{627(T-1)}{R}$$

P ハ制限汽壓(毎平方糶疋ニテ)

T ハ火爐鋼板ノ厚サ(糶ニテ)

R ハ火爐ノ球面外半徑(糶ニテ)

第六十二條 截頭圓錐形直立火爐ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ左ノ記號ヲ用キ第五十九條ノ算式ニ依リ算定シタルモノノ中小ナルモノトス

D ハ火爐板ト頂板トノ接合銕ノ中心線ニ於テ測リタル外徑ト火爐底部ノ補強部ニ接合スル箇所ニ於テ測リタル外徑トノ平均(糶ニテ)

L ハ火爐板ト頂板トノ接合銕ノ中心線ヨリ火爐底部ノ補強部ニ接合スル箇所迄ノ距離(糶ニテ)

火爐底部ト胴板トヲ螺旋支柱列ニ依リ連結シタル場合ニ於テ螺旋支柱ノ心距ガ其ノ端ヲ絞締シタルモノニ在リテハ火爐板ノ厚サノ一四倍ヲ、母螺締ト爲シタルモノニ在リテハ一六倍ヲ超ユルコトナク且螺旋支柱ノ螺系上ノ徑ガ火爐板ノ厚サノ二・二五倍以上ナルトキハ前項ノLハ螺旋支柱列ノ中心迄測ルコトヲ得

第六十三條 直立汽罐ノ火爐底部ト胴板トヲ接合スル「オ

ジー」環ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノトス

$$P = \frac{10,300(T-1)^2}{D \times (D-d)}$$

P ハ制限汽壓(毎平方糶疋ニテ)

T ハ「オジー」環ノ厚サ(糶ニテ)

D ハ胴ノ内徑(糶ニテ)

d ハ火爐底部ノ外徑ニシテ「オジー」環トノ接合部ニ於テ測リタルモノ(糶ニテ)

第六十四條 火爐板ノ厚サハ二糶以上ナルコトヲ得ズ  
第六十五條 胴ノ内徑ヨリ大ナラザル内半徑ヲ有シ外方ニ突出スル球面狀鏡板ニシテ支柱其ノ他ニ依リ補強セラレザルモノノ強力ニ對スル制限汽壓ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノトス

$$P = \frac{216 \times 6 \times (T-1)}{R}$$

P ハ制限汽壓(毎平方糶疋ニテ)

T ハ鏡板ノ厚サ(糶ニテ)但シ鏡板ニ人孔ヲ設ケタル場合ニ於テハ其ノ厚サヨリ三糶ヲ減ジタルモノ

R ハ鏡板ノ球面内半徑(糶ニテ)

S ハ鏡板ノ抗張力(毎平方糶疋ニテ)

前項ノ鏡板ニ在リテハ其ノ周圍ノ曲線部ニ於ケル曲線ノ

彎曲内半徑ハ鏡板ノ厚サノ四倍未満ナルコトヲ得ズ

第六十六條 二枚以上ノ板ヨリ成リ外方ニ突出スル半球狀鏡板ニシテ支柱其ノ他ニ依リ補強セラレザルモノノ強力ニ對スル制限汽壓ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノトス

$$P = \frac{C \times (T-1.5) \times 6 \times T}{R}$$

P ハ制限汽壓(毎平方糶疋ニテ)

T ハ鏡板ノ厚サ(糶ニテ)

S ハ鏡板ノ最小抗張力(毎平方糶疋ニテ)

J ハ鏡板相互ノ最小接合強率

R ハ鏡板ノ球面内半徑(糶ニテ)

C ハ定數ニシテ左表ニ依ル

鏡板相互ノ接合ガ一列銕ナルトキ 〇・四三

鏡板相互ノ接合ガ二列銕ナルトキ 〇・四九

鏡板相互ノ接合ガ三列銕ナルトキ 〇・五〇

第六十七條 螺旋支柱又ハ縱支柱ノ螺系底又ハ其ノ他ノ部分ニ於ケル最小ノ徑ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ小ナルコトヲ得ズ

$$\sqrt{PA+3}$$

d ハ螺旋支柱又ハ縱支柱ノ最小ノ徑(糶ニテ)

P ハ制限汽壓(毎平方糶疋ニテ)

A ハ平板中該支柱ノ支持スベキ部分ノ實面積(平方糶ニテ)

C ハ定數ニシテ左表ニ依ル

螺旋支柱ナルトキ 〇・四四

縱支柱ナルトキ 〇・四〇

前項ノ算式ヲ斜向支柱ニ適用スル場合ニ於テハ算式中ノ

Cノ代リニ左ノCヲ用ウベシ

$$C1 = C \times \sqrt{\frac{T}{H}}$$

C ハ前項ニ同ジ

L ハ斜向支柱ノ長サ(糶ニテ)

H ハ斜向支柱ノ一端ニ於ケル平板ヨリ他端迄ノ距離(糶ニテ)

燃燒室ノ内側ニ於ケル螺旋支柱ノ母螺ノ高サハ該螺旋支柱ノ螺絲部ノ徑ノ二分ノ一ヨリ小ナルコトヲ得ズ

第六十八條 管板ヲ支持スベキ管支柱ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノトス

$$P = \frac{527.2a}{A}$$

P ハ制限汽壓(毎平方糶疋ニテ)



a ハ管支柱ノ最小横截實面積(平方糎ニテ)  
A ハ管板中該管支柱ノ支持スベキ部分ノ實面積(平方糎ニテ)

管支柱ノ厚サハ管支柱ガ焰管巢ノ外周列ニ在ルモノナルトキハ六・〇糎以上、其ノ他ノモノナルトキハ四・五糎以上ナルコトヲ要ス

管支柱ハ兩管板ニ振込ミタル上之ヲ適當ニ擴張シ緊著スベシ

管支柱ノ燃燒室端ニハ母螺ヲ附スベカラズ

第六十九條 前二條ノ支柱ノ螺糸ハ成ルベク左表ニ依ルベシ

支柱ノ種類	螺	距(糎)
螺旋支柱	二・〇以上	三・〇以下
縱支柱	四・〇以上	六・五以下
管支柱	二・五以上	三・五以下

第七十條 焰管ノ厚サハ成ルベク左ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ小ナラザルモノト爲スベシ

$$T = \frac{PD}{100} + 2$$

d ハ管孔ノ徑(糎ニテ)

管板ノ厚サハ胴板又ハ鏡板ト接合スル部分ニ於テハ第五十二條ノ規定ニ依ル胴板ノ強力ニ相當スル厚サ迄之ヲ減ズルコトヲ得但シ此ノ場合ニ於テハ厚サノ急激ナル變化ヲ避ケ且其ノ部分ヲ機械仕上トスベシ

第七十四條 水管汽罐ノ胴、管寄等ニ設クル管孔ハ管ヲ緊密ニ取附ケ得ルモノト爲スベシ

管孔ヲ其ノ中心線ガ管板ニ垂直ナル様穿ツトキハ孔ノ管座ノ深サヲ一〇糎以上ト爲シ斜ニ穿ツトキハ孔ノ管座ノ直圓筒部ノ深サヲ一三糎以上ト爲スベシ

第七十五條 水管汽罐ノ水管ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノトス

$$P = \frac{1,400(T-a)}{D} - 23$$

P ハ制限汽壓(每平方糎ニテ)

T ハ水管ノ厚サ(糎ニテ)

D ハ水管ノ外徑(糎ニテ)

a ハ定數ニシテ左表ニ依ル

火焰若ハ高熱瓦斯ノ通路ニ直面スル管巢端列又ハ其ノ次ノ列ノ管ナルトキ  
其ノ他ノ管ナルトキ

二・〇

一・五

T ハ焰管ノ厚サ(糎ニテ)

D ハ焰管ノ外徑(糎ニテ)

P ハ制限汽壓(每平方糎ニテ)

第三節 水管汽罐及過熱器

第七十一條 水管汽罐ノ構造ハ本節ニ特ニ規定シタルモノノ外前節ノ規定ニ依ルベシ

第七十二條 水管汽罐ノ汽胴又ハ水胴ノ縱接合ハ胴ノ縱接合部ニ於ケル内徑ガ該接合部ニ於ケル胴板ノ厚サノ一〇〇倍未滿ナルトキハ累接ト爲スコトナク該部ノ横截内面ヲ圓形ナラシムベシ

第七十三條 水管汽罐ノ汽胴又ハ水胴ノ一部ヲ成ス管板ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノトス

$$P = \frac{47.2 \times S \times (T-3)}{D} \times \frac{P-d}{P}$$

P ハ制限汽壓(每平方糎ニテ)

D ハ胴ノ内徑(糎ニテ)

T ハ管板ノ厚サ(糎ニテ)

S ハ管板ノ抗張力(每平方糎ニテ)

P ハ胴ノ中心線ニ平行ニ測リタル管孔ノ心距(糎ニテ)

水管ノ厚サハ八糎ヲ超ユルコトヲ得ズ

水管ハ總テ擴張其ノ他ノ適當ナル方法ニ依リ之ヲ管板ニ緊密ニ取附ケ管端ハ管座ヨリ六糎以上突出セシムベシ

水管ハ脱出セザル様其ノ兩端ヲ固定スベシ單ニ其ノ端部ヲ喇叭形ニ擴張シテ固定シタル場合ニ於テハ端部ノ外徑ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノ以上ト爲スベシ

$$D = 103d + 1.5$$

D ハ水管端部ノ外徑(糎ニテ)

d ハ水管ノ外徑(糎ニテ)

第七十六條 管寄其ノ他之ニ類似ノモノノ管ヲ取附ケザル平面部ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノトス

$$P = C \times \left( \frac{T-2.5}{B} \right)^2$$

P ハ制限汽壓(每平方糎ニテ)

T ハ平面部ノ厚サ(糎ニテ)

B ハ内側支點間ニ於テ測リタル平面部ノ幅(糎ニテ)

C ハ定數ニシテ左表ニ依ル

鍛鋼ナルトキ 五八三〇  
鑄鋼ナルトキ 四六〇〇

管寄ノ管ヲ取附ケル平面部ノ厚サハ左ノ算式ニ依リ算定



シタルモノヨリ小ナルコトヲ得ズ

$$T = 0.47 \sqrt{D} + 6.5$$

Tハ平面部ノ厚サ(耗ニテ)

dハ管孔ノ徑(耗ニテ)

過熱器ノ管寄其ノ他火焰ノ放射熱ニ暴露シ又ハ高熱瓦斯ノ衝擊ヲ受ケ且使用中内部ニ蒸汽ノミヲ有スル管寄ノ厚サハ前二項ニ依リ算定シタルモノノ一・一二五倍ヨリ小ナルコトヲ得ズ

管寄ノ視孔部ハ蓋ヲ有效ニ取附ケ得ル様機械仕上ト爲スベシ此ノ場合該部分ノ厚サハ第一項ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ二・五耗ヲ減ズルコトヲ得但シ八耗未滿ト爲スコトヲ得ズ

視孔ノ蓋ハ堅牢ナル構造ト爲シ取外及取附作業ヲ繰返スモ安全ヲ害スル虞ナキコトヲ要シ蓋ヲ螺釘ニ依リ取附クル構造ト爲ストキハ該取附螺釘ノ折損シタル場合ニ於テモ危険ナキモノト爲スベシ

第四節 汽罐附屬品

第七十七條 汽罐ニ接続スル管ニハ罐板ト接合スル部分ニ於テ接近シ易キ箇所ニ辨又ハ「コック」ヲ備フベシ

第七十八條 汽罐ニハ徑四〇耗以上ノ發條式安全辨二箇以

上ヲ備ヘ汽罐ノ制限汽壓毎平方糎二〇庇以下ナルトキハ其ノ合計面積ヲ左ノ算式ニ依リ算定シタル面積ヨリ小ナラザルモノト爲スベシ但シ安全辨ハ左ノ算式ニ依リ算定シタル面積ガ一九・五平方糎未滿ナルトキハ徑五〇耗以上ノモノ一箇、一二・五平方糎未滿ナルトキハ徑四〇耗以上ノモノ一箇ト爲スコトヲ得又先驅辨ヲ有スルモノノ徑ハ適當ニ之ヲ減ズルコトヲ得

$$A = K \times \frac{H}{P+1}$$

Aハ安全辨ノ合計面積(平方糎ニテ)

Hハ汽罐ノ受熱面積(平方米ニテ)ニシテ一面ガ火焰

又ハ燃燒瓦斯ニ暴露シ反對ノ面ガ水ニ接觸スル部分ノ火焰又ハ燃燒瓦斯ニ暴露スル面ノ面積トス但シ筒形汽罐又ハ直立汽罐ニ在リテハ前管板ハ之ヲ除外シ且焰管ハ外徑ヲ基トシテ算定シ水管汽罐ニ在リテハ汽胴及水胴ハ之ヲ除外スルモノトス

Pハ汽罐ノ制限汽壓(毎平方糎庇ニテ)

Kハ定數ニシテ左表ニ依ル

筒形汽罐又ハ直立汽罐	六・一
機關室密閉式強壓通風ヲ使用セズシテ石炭ノミヲ手焚スルモノ	七・三
其ノ他ノモノ	

水管汽罐	五・三
自然通風ニ依リ石炭ノミヲ手焚スルモノ	六・一
其ノ他ノモノ	

汽罐ノ制限汽壓ヲ低下シタル爲安全辨ノ面積ガ前項ノ規定ニ適合セザルモノト爲リタル場合ニ於テ安全辨ガ第八十條第二項ノ規定ニ適合スルモノナルトキハ前項ノ規定ニ拘ラズ管海官廳ノ見込ニ依リ之ヲ合格ト爲スコトヲ得

第七十九條 安全辨ノ辨匣ハ汽罐ニ直接取附ケ他ノ辨ニ共用スルコトヲ得ズ

安全辨ノ辨匣ノ蒸汽進入路ノ横截面積ハ安全辨ノ合計面積ノ二分ノ一以上ト爲シ廢汽路及廢汽管ノ横截面積ハ安全辨ノ合計面積ノ一・一倍以上ト爲スベシ

廢汽路ニハ適當ナル排水裝置ヲ設クベシ安全辨ニハ辨ヲ同時ニ辨徑ノ四分ノ一以上開キ得ル揚辨裝置ヲ設ケ其ノ把手ハ之ヲ適當ノ位置ニ導クベシ

安全辨發條ハ汽罐ノ制限汽壓ニ相當スル壓力ヲ加ヘタル

トキ其ノ長サガ辨徑ノ四分ノ一以上短縮シ更ニ之ヲ辨徑ノ四分ノ一壓縮スルモ原形ニ復スルモノナルコトヲ要ス

第八十條 安全辨ハ汽罐ノ制限汽壓ノ一・〇三倍以下ノ壓力ニ於テ自然ニ噴汽スル様調整スベシ

安全辨ハ塞汽辨ヲ閉ヂ充分ニ焚火シ水管汽罐ニ在リテハ數分間、其ノ他ノ汽罐ニ在リテハ一五分間以上噴汽セシムルモ汽壓ノ昇騰尙汽罐ノ制限汽壓ノ十分ノ一ヲ超エザルモノナルコトヲ要ス此ノ場合ニ於テハ汽罐ニ適當ナル水準ヲ維持セシムルニ必要ナル程度ヲ超エ給水ヲ爲スコトヲ得ズ

第八十一條 蒸汽過熱器ト汽罐トノ連絡ヲ遮斷シ得ル裝置アルトキハ蒸汽過熱器ニ適當ナル逃出辨ヲ備ヘ之ヲ容易ニ操縱シ得ル揚辨裝置ヲ設クベシ

第八十二條 汽罐ニハ左表ニ依リ罐内ノ水準面ヲ容易ニ知リ得ベキ裝置ヲ互ニ近接セザル位置ニ備ヘ且筒形汽罐及直立汽罐ニハ燃燒室頂部ノ高サヲ適當ニ標示スベシ

汽罐ノ種類	裝置ノ種類及數	摘	要
直立汽罐	硝子示面計一箇及 面「コック」一組		



筒形片面汽罐	硝子示面計二箇	徑五米未満ノ汽罐ニ在リテハ中一箇ヲ驗面「コック」一組ヲ以テ代用スルコトヲ得
筒形兩面汽罐	硝子示面計二箇及驗面「コック」二組	硝子示面計及驗面「コック」ハ夫々汽罐ノ各面ニ於テ他面ニ於ケルト反對ノ位置ニ取附クベシ
水管汽罐	硝子示面計二箇	長サ四米ヲ超ユル船體ニ對シ横ニ配置シタル場合ニ於テハ胴ノ兩端ニ近ク取附クベシ

前項ノ驗面「コック」ハ三箇ヲ以テ一組ト爲スベシ但シ徑二・五米未満ノ筒形汽罐又ハ高サ二五米未満ノ直立汽罐ニ在リテハ二箇ヲ以テ一組ト爲スコトヲ得

硝子示面計及驗面「コック」ハ成ルベク之ヲ汽罐ニ直接取附ケ已ムコトヲ得ザル場合ニ於テハ適當ナル内徑及強力ヲ有スル筒ニ取附クベシ

前項ノ筒ハ成ルベク汽罐ニ近接シテ固定スルコトヲ要シ筒ヲ導管ニ依リ汽罐ニ連絡セシムル場合ニ於テハ筒ノ位置ガ不慮ニ變動セザル様取附ケ汽側ノ導管ハ凝結水ノ滯溜セザルモノト爲スベシ

第八十三條 汽罐ニハ焚口面ノ見易キ位置ニ壓力計一箇ヲ備フベシ焚口ガ汽罐ノ兩面ニ在ル場合ニ於テハ各焚口面ニ之ヲ備フベシ

第八十四條 汽罐ニハ正副二組ノ給水制限辨ヲ備フベシ

第八十五條 汽罐ニハ適當ノ位置ニ檢鹽辨又ハ檢鹽「コック」ヲ備フベシ但シ湖沼ノミヲ航行スル船舶ノ汽罐ニ在

リテハ之ヲ備ヘザルコトヲ得

第八十六條 汽罐ノ放水辨又放水「コック」ヨリ船外ニ通ズル放水管ハ内徑二〇耗以上ナルコトヲ要ス

二箇以上ノ汽罐ヲ備フル船舶ニ在リテ各汽罐ノ放水管ヲ一箇ノ共通管ニ接続セシムル場合ニ於テハ振締不還辨ニ依リ各汽罐ノ連絡ヲ遮斷シ得ル裝置ト爲スベシ

第五節 汽罐ニ關スル雜則

第八十七條 汽罐ハ移動セザル様之ヲ船體ニ据附クベシ

第八十八條 汽罐ニ取附ケタル辨又ハ「コック」ノ周圍ニハ相當ノ空積ヲ存スベシ

第八十九條 汽罐ハ之ヲ製造シタルトキ左ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行スベシ

一 汽罐ノ制限汽壓ガ每平方糎七疋以下ナルトキハ汽罐ノ制限汽壓ノ二倍ノ壓力

二 汽罐ノ制限汽壓ガ每平方糎七疋ヲ超ユルトキハ其ノ一・五倍ニ每平方糎三・五疋ヲ加ヘタル壓力

第九十條 蒸汽過熱器ハ之ヲ製造シタルトキ汽罐ノ制限汽壓ノ二倍ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行スベシ

第九十一條 汽罐ニ取附クル辨、「コック」、第八十二條末項ノ導管又ハ筒ハ之ヲ製造シタルトキ汽罐ノ制限汽壓ノ二倍ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行スベシ

第六節 給水裝置

第九十二條 主汽罐ノ給水裝置ハ正給水裝置及副給水裝置ヨリ成リ各裝置ハ汽機ヲ全力ニ於テ運轉スル場合ニ必要ナル給水能力ヲ有スルモノナルコトヲ要ス

第九十三條 正給水裝置ノ「ポンプ」ガ主機ニ依リ動作セララルモノナルトキハ該「ポンプ」ハ發條逃出辨ヲ備ヘタルモノニシテ其ノ數ハ二箇トシ各「ポンプ」ハ必要ナル全給水ヲ爲シ得ルモノニシテ其ノ一箇ヲ使用中ト雖モ他ヲ解放シ得ルモノト爲スベシ但シ長サ五〇米未満ノ船舶ノ機關ニ在リテハ正給水裝置ノ「ポンプ」ヲ一箇ト爲スコトヲ得

二箇ノ主機ヲ備フル船舶ニ於テ前項ノ給水「ポンプ」ヲ各主機ニ一箇宛配置シタルトキハ各「ポンプ」ガ雙方ノ温水溜ヨリ吸水シ得ル様裝置スベシ  
正給水裝置ノ「ポンプ」ガ獨立ノ動力ニ依リ動作セラルルモノナルトキハ之ニ自働調整裝置ヲ備フベシ

第七節 排水、吸水、循環水及潤滑油ニ關スル裝置

第九十四條 副給水裝置ノ「ポンプ」ハ獨立ノ動力ニ依リ動作セラルモノニシテ温水溜及清水槽ヨリ吸水シ得ルモノナルコトヲ要ス但シ受熱面積二〇平方糎未満ノ汽罐ノ副給水裝置ハ之ヲ給水注射器ト爲スコトヲ得

第九十五條 補汽罐ニハ適當ナル正副二重ノ給水裝置ヲ備フベシ但シ受熱面積二〇平方糎未満ノ補汽罐ノ副給水裝置ハ之ヲ給水注射器ト爲スコトヲ得

第九十六條 正滄水「ポンプ」ガ主機ニ依リ動作セラルモノナルトキハ其ノ數ハ二箇トシ一箇ヲ使用中ト雖モ他ヲ解放シ得ル裝置ト爲スベシ但シ長サ五〇米未満ノ船舶ノ機關ニ在リテハ一箇ト爲スコトヲ得

二箇ノ主機ヲ備フル船舶ニ在リテハ前項ノ滄水「ポンプ」ノ數ヲ各主機ニ付一箇ト爲スコトヲ得



正滄水「ポンプ」が獨立ノ動力ニ依リ動作セラルルモノナルトキハ其ノ數ヲ一箇ト爲スコトヲ得

第九十七條 長サ四〇米以上ノ船舶又ハ長サ三〇米以上ノ旅客船ニ在リテハ前條ノ正滄水「ポンプ」ノ外獨立ノ動力ニ依リ動作セラルル副滄水「ポンプ」ヲ備ヘ之ヲ滄水管系ニ接続セシムベシ但シ副給水「ポンプ」ヲ以テ副滄水「ポンプ」ニ充ツルコトヲ得之ニ充ツル場合ニ於テハ第九十四條第一項ノ吸水管ト滄水吸引管トハ別箇ノモノト爲スベシ

第九十八條 滄水排水装置ハ左ノ各號ノ規定ニ適合スルモノナルコトヲ要ス

- 一 各滄水「ポンプ」ハ手動「ポンプ」ノミニテ差支ナキ箇所ヲ除クノ外各艙、機關室及軸路ヨリ吸水シ得ル配置ト爲スコト
- 二 各獨立動力「ポンプ」ハ通常ノ操作状態ニ於テ滄水管ノ最大徑ノ箇所ノ流速ガ毎分一二二米以上トナル吸水能力ヲ有スルコト
- 三 獨立動力「ポンプ」中少クトモ一箇ハ他ノ滄水「ポンプ」ガ船體ノ他ノ箇所ヨリ吸水中ト雖モ直接機關室ヨリ排水シ得ル装置ト爲スコト
- 四 機關室ニ於ケル滄水吸引管ハ之ヲ泥芥箱ニ接続シ泥

芥箱ハ滄水溜ニ通ズル成ルベク眞直ナル尾管及急速ニ

閉閉シ得ル構造ノ蓋ヲ有シ且成ルベク機關室床上ノ近寄り易キ場所ニ之ヲ設置スルコト但シ管海官廳ニ於テ船體ノ構造、吸引管ノ配置其ノ他ニ依リ差支ナシト認ムル箇所ニ限り吸引管端ニ附シタル芥除箱ヲ以テ泥芥箱ニ代用シ得ルコト

五 各艙及軸路ニ於ケル吸水水管端ニハ吸水水管ノ接合部ヲ取外サザルモ容易ニ掃除シ得ル構造ノ芥除箱ヲ備フルコト

芥除箱ノ各孔ノ徑ハ一〇耗以下ニシテ孔ノ總面積ハ吸水水管ノ横截面積ノ二倍以上ナルコト

第九十九條 循環水「ポンプ」ハ不還辨ヲ經テ機關室ノ成ルベク最低部ヨリ直接滄水ヲ吸引シ得ル装置ト爲シ其ノ吸水管ノ内徑ハ該「ポンプ」ノ海水吸引管ノ内徑ノ三分ノ二以上ト爲スベシ

前項ノ不還辨ニハ其ノ鑄著キタル場合ニ備フル爲成ルベク適當ナル揚辨装置ヲ備フベシ

第一百條 長サ四〇米以上ノ船舶又ハ長サ三〇米以上ノ旅客船ニ在リテハ海水ヲ吸引シテ甲板上ニ送水シ且同時ニ船體ノ前後部ニ配水シ得ル獨立動力「ポンプ」ヲ備フベシ但シ副給水「ポンプ」又ハ副滄水「ポンプ」ヲ以テ之ニ充ツル

コトヲ得

第一百一條 海水又ハ水槽ノ水ガ艙内又ハ機關室ニ流入シ若ハ一區畫ヨリ他區畫ニ流入スルコトヲ防止スル爲海水ヲ吸引シ得ル「ポンプ」ト滄水管系トノ連絡ハ不還辨又ハ滄水管系ト海水若ハ水槽トニ同時ニ開口シ得ザル「コック」ニ依リ之ヲ爲スベシ

滄水配流箱ニ於ケル辨ハ總テ不還辨ト爲スベシ  
滄水吸引管ヲ連絡スル辨又ハ「コック」ハ機關室床板以上ノ近寄り易キ場所ニ之ヲ取附クベシ

滄水管ハ總テ水槽ノ充水又ハ排水ニ使用スル管ト區別スベシ

第一百二條 二重底又ハ水槽ヲ有スル船舶ハ獨立動力「ポンプ」ニ依リ二重底又ハ水槽ノ排水ニ適スル装置ヲ備フベシ

第一百三條 長サ四〇米以上ノ船舶又ハ長サ三〇米以上ノ旅客船ニ在リテハ循環水「ポンプ」ニ依ラズシテ海水ヲ復水器ニ送り得ル装置ヲモ備フベシ但シ獨立ノ動力ニ依リ動作セラルル循環水「ポンプ」二箇以上ヲ備ヘ其ノ吐出口ニ於テ互ニ連絡スル装置アルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第一百四條 相當ノ壓力ヲ以テ潤滑油ヲ循環セシムルコトヲ要スル汽機ヲ備フル船舶ニ在リテハ常用動力潤滑油「ボ

ンプ」ノ外該「ポンプ」中最大能力ノモノト同等ノ能力ヲ有シ且遲滯ナク使用シ得ル配置ト爲シタル豫備動力潤滑油「ポンプ」ヲ備ヘ且油冷却器ヲ備フルトキハ二様ノ冷却水送水装置ヲ備フベシ

前項ノ豫備潤滑油「ポンプ」ハ管海官廳ニ於テ差支ナシト認ムルトキハ之ヲ手動「ポンプ」ト爲スモ妨ナシ

第一百五條 船外ヨリ吸水スル管ハ海水辨又ハ海水「コック」ニ連絡シ海水辨又ハ海水「コック」ハ機關室床板以上ニ於テ之ヲ外板ニ取附クルカ又ハ床板上ニ達セシムル高サヲ有スル堅牢ナル脚筒ニ之ヲ取附クベシ

第一百六條 鋼船ノ最大吃水線ノ下部及其ノ附近ニ於テ辨又ハ「コック」ヲ外板ニ取附クル螺釘ハ之ヲ外板ニ嵌込ムカ又ハ埋頭ト爲スベシ

第一百七條 第八十六條ノ放水水管ハ外板ニ取附ケタル辨又ハ「コック」ニ連絡スベシ

前項ノ辨又ハ「コック」ハ其ノ開閉状態ヲ見易キモノト爲シ且「コック」ナルトキハ之ヲ閉鎖スルニ非ザレバ其ノ開閉把手ヲ取放チ得ザル装置ト爲シ成ルベク之ヲ二重ニ備フベシ

鋼船ニ在リテハ前項ノ辨又ハ「コック」ハ外板ヲ貫通スル突出口ヲ備ヘ外面ニハ黃銅製又ハ青銅製ノ環ヲ取附クベ



第百八條 排水管ハ成ルベク近寄り易キ場所ニ於テ外板ニ取附ケタル排水管又ハ排水「コック」ニ連結スベシ但シ長さ三〇米未満ノ船舶ニ在リテハ最大吃水線以上ニ於テ船外ニ通ズル排水管ニ限リ管海官廳ノ見込ニ依リ辨又ハ「コック」ヲ備ヘザルコトヲ得

第八節 管

第百九條 汽管又ハ給水管ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノトス但シ小徑ノ過熱汽管ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

$$P = \frac{(T-a)}{D} \times K$$

P ハ制限汽壓(毎平方糎ニテ)

D ハ管ノ内徑(糎ニテ)

T ハ管ノ厚サ(糎ニテ)

a 及 K ハ定數ニシテ左表ニ依ル

管ノ種類	a	K
引拔銅管	一・〇	四四〇
鐵附銅管	一・〇	三三〇

ベシ

汽管ニハ適當ナル排水装置ヲ備フベシ  
減壓辨ヲ備フル場合ニ於テハ減壓蒸汽ノ側ニ適當ナル逃出辨ヲ備フベシ

第百十三條 汽罐二箇以上ヲ備フル船舶ニ在リテハ少クトモ二箇ノ汽罐ヨリ汽笛、操舵汽機及發電汽機ニ送汽シ得ル装置ト爲スベシ

第百十四條 二二〇度以上ノ蒸汽ヲ通ズル辨匣、膨脹接手等ハ鑄鋼其ノ他ノ適當ナル材料ヲ以テ製造スルコトヲ要ス  
第百十五條 管ハ振動ヲ防止スル爲帶金其ノ他ノ方法ニ依リ適當ニ之ヲ取附クベシ

第九節 給水、排水其ノ他ノ装置ノ水壓試驗

第百十六條 給水「ポンプ」ノ水筒ハ之ヲ製造シ削仕上ヲ爲シタルトキ汽罐ノ制限汽壓ノ二倍ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行スベシ  
給水「ポンプ」ノ送水側ニ於ケル辨、「コック」給水加熱器、給水濾器等ニシテ給水ノ壓力ヲ受クル部分ハ之ヲ製造シ仕上ゲタルトキハ汽罐ノ制限汽壓ノ二倍ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行スベシ  
給水「ポンプ」ノ送水側ニ於ケル管ハ銕ヲ附シ仕上ヲ爲シタルトキ左ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行スベシ

管	給水管	管	管	管
常溫引拔銅管	鐵附銅管	引拔銅管	鍛合銅管	高溫仕上無接合鋼管
二・〇	一・〇	一・〇	三・〇	三・〇
七〇三	二六六	三五五	六三三	六四四
				八四四

第八十二條末項ノ導管中汽側ノモノノ強力ニ對スル制限汽壓ハ前項汽管ノ例ニ依リ水側ノモノ及第八十六條ノ放水管ノ強力ニ對スル制限汽壓ハ前項給水管ノ例ニ依ル  
第百十條銅管ハ之ヲ彎曲スル場合ニ於テハ前條ニ依リ算定シタル厚サヨリ大ナル厚サノモノヲ用キ且管ノ中心線ニ於テ測リタル彎曲半徑ヲ管ノ外徑ノ二倍以上ト爲スベシ  
第百十一條 汽管、給水管、第八十二條末項ノ導管又ハ第八十六條ノ放水管ニ用ウル銅管ハ之ヲ取附クル前適當ニ熱處理ヲ爲スベシ  
鋼管ニシテ工事ノ爲加熱シタルモノハ之ヲ取附クル前適當ニ熱處理ヲ爲スベシ  
第百十二條 汽管ハ伸縮ノ影響ヲ緩和スル様適當ニ裝置ス

銅管ナルトキ

汽罐ノ制限汽壓ノ二・五倍ノ壓力

鋼管ナルトキ 汽罐ノ制限汽壓ノ四・〇倍ノ壓力

第百十七條 主汽管ハ銕ヲ附シ仕上ヲ爲シタルトキ左ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行スベシ

銅管ナルトキ 汽罐ノ制限汽壓ノ二倍ノ壓力

鋼管ナルトキ 汽罐ノ制限汽壓ノ三倍ノ壓力

第百十八條 循環水「ポンプ」ノ水筒又ハ扇車匣ハ之ヲ製造シ削仕上ヲ爲シタルトキ每平方糎四疋ノ壓力ヲ以テ水壓

試驗ヲ執行スベシ

第百十九條 抽氣「ポンプ」ノ氣筒又ハ扇車匣ハ之ヲ製造シ削仕上ヲ爲シタルトキ每平方糎二疋ノ壓力ヲ以テ水壓

試驗ヲ執行スベシ

第百二十條 潤滑油「ポンプ」ノ油筒又ハ扇車匣ハ之ヲ製造シ削仕上ヲ爲シタルトキ每平方糎二疋ノ壓力ヲ以テ水壓

試驗ヲ執行スベシ

第百二十一條 滲水「ポンプ」ノ水筒又ハ扇車匣ハ之ヲ製造シ削仕上ヲ爲シタルトキ每平方糎二疋ノ壓力ヲ以テ水壓

試驗ヲ執行スベシ

第百二十二條 最大吃水線以下ノ外板ニ取附クル辨匣、「コック」又ハ第百五條ノ脚筒ハ之ヲ製造シタルトキ每平方

糎二疋ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行スベシ

第百二十三條 最大吃水線以下ノ外板ニ取附クル辨匣、「コック」又ハ第百五條ノ脚筒ハ之ヲ製造シタルトキ每平方

糎二疋ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行スベシ

第百二十四條 最大吃水線以下ノ外板ニ取附クル辨匣、「コック」又ハ第百五條ノ脚筒ハ之ヲ製造シタルトキ每平方

糎二疋ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行スベシ

第百二十五條 最大吃水線以下ノ外板ニ取附クル辨匣、「コック」又ハ第百五條ノ脚筒ハ之ヲ製造シタルトキ每平方

糎二疋ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行スベシ



第十節 燃油裝置

第二百二十三條 本節ノ規定ハ「エーベル」式密閉試驗ニ依ル引火點六五度以上ノ燃料油ヲ汽罐ニ於テ燃焼スル裝置ヲ有スル船舶ニ之ヲ適用ス

第二百二十四條 汽罐ニハ適當ナル防熱裝置ヲ施シ且之ト油槽ノ側壁又ハ二重底頂板トハ適當ノ間隔ヲ保タシムベシ  
第二百二十五條 油ノミヲ燃焼スル汽罐ニ在リテハ煙突又ハ煙路内ニ堰板ヲ設クルコトヲ得ズ  
隨時ニ石炭又ハ油ヲ燃焼シ得ル裝置ヲ備フル汽罐ニ在リテ煙突又ハ煙路内ニ堰板ヲ有スルトキハ該堰板ヲ全開シ得ル構造ト爲シ且全開シタルトキハ不慮ニ開度ヲ變更スル虞ナキモノト爲スベシ

第二百二十六條 噴油「ポンプ」、油噴器及燃料油加熱器ハ充分ナル能力ヲ有シ且隨時使用シ得ルモノニ組以上ヲ備フベシ但シ補汽罐ニ在リテハ之ヲ一組ニ止ムルコトヲ得  
噴油「ポンプ」ハ吸油側及送油側ニ辨又ハ「コック」ヲ附シ且送油側ニ有效ナル逃出辨ヲ備ヘ之ヨリ逃出シタル油ヲ該「ポンプ」ノ吸油側ニ導入スル裝置ト爲スベシ燃油裝置ヲ有スル汽罐二箇以上ヲ備フル船舶ニ在リテハ噴油「ポンプ」ノ送油管ヲ配油辨匣ニ接續スルカ又ハ各汽罐ニ對スル送油管ニ辨又ハ「コック」、ヲ備フベシ噴油器、噴油

「ポンプ」加熱器及油噴器等ヨリノ漏油ニ對シテハ適當ナル油受ヲ設クベシ  
第二百二十七條 噴油「ポンプ」及之ニ接續スル管系ハ給水「ポンプ」、滄水「ポンプ」又ハ脚荷水「ポンプ」及此等ニ接續スル管系ト兼用スルコトヲ得ズ  
油管ハ總テ清水管ト兼用スルコトヲ得ズ  
第二百二十八條 噴油「ポンプ」ノ送油側ニ於ケル油管ハ無接合鋼管トシ其ノ管鈔ハ之ヲ機械仕上ト爲シ且成ルベク直接接合ト爲シ接合材ヲ用ウル場合ニ於テハ高溫ノ油ノ滲透セザル薄キモノヲ用ウベシ  
前項以外ノ油管ハ鋼管又ハ鐵管ト爲スベシ  
油管ハ機關室ニ於テハ檢査及修繕ニ便宜ナル位置ニ之ヲ取附クベシ

第二百二十九條 噴油「ポンプ」ノ動力裝置ハ其ノ所在區畫室ニ於テ又該區畫室ノ失火ノ際ニハ接近シ得ベキ他ノ場所ニ於テ之ヲ操縱シ得ルモノナルコトヲ要ス  
第三百十條 油槽ニハ硝子製示面計ヲ取附クルコトヲ得ズ但シ厚硝子板ヲ備フルモノ又ハ自働閉塞式辨若ハ「コック」及適當ノ硝子保護裝置ヲ備フルモノニ在リテハ此ノ限ニ在ラズ  
第三百十一條 燃料油槽ト脚荷水槽トニ兼用スル區畫室ニ

「ポンプ」加熱器及油噴器等ヨリノ漏油ニ對シテハ適當ナル油受ヲ設クベシ  
第二百二十七條 噴油「ポンプ」及之ニ接續スル管系ハ給水「ポンプ」、滄水「ポンプ」又ハ脚荷水「ポンプ」及此等ニ接續スル管系ト兼用スルコトヲ得ズ  
油管ハ總テ清水管ト兼用スルコトヲ得ズ  
第二百二十八條 噴油「ポンプ」ノ送油側ニ於ケル油管ハ無接合鋼管トシ其ノ管鈔ハ之ヲ機械仕上ト爲シ且成ルベク直接接合ト爲シ接合材ヲ用ウル場合ニ於テハ高溫ノ油ノ滲透セザル薄キモノヲ用ウベシ  
前項以外ノ油管ハ鋼管又ハ鐵管ト爲スベシ  
油管ハ機關室ニ於テハ檢査及修繕ニ便宜ナル位置ニ之ヲ取附クベシ

第三百二十四條 二重底ヲ有スル船舶ニ在リテハ成ルベク滄油槽及常用油槽ノ底部附近ヨリ燃料油ヲ二重底ニ導ク管ヲ設ケ槽ニ接續スル箇所ニ於テ之ニ前條ノ辨又ハ「コック」ヲ備フベシ  
第三百二十五條 機關室内ノ油槽ノ底面又ハ側壁ニ附スル充油管ニハ底面又ハ側壁ニ於テ第三百三十三條ノ辨若ハ「コック」ヲ備フルカ又ハ不還辨ヲ備フベシ但シ充油管ヲ側壁ノ頂部ニ附スルトキハ此ノ限ニ在ラズ  
第三百二十六條 機關室内ノ油管ニ附スル辨又ハ「コック」ハ機關室床板以上ニ於テ閉閉シ得ルモノト爲スベシ  
第三百二十七條 機關室内ノ油槽ニ附スル沈澱水ノ排出管ニハ自動閉塞式又ハ封鎖裝置附ノ辨若ハ「コック」ヲ備フベシ  
第三百二十八條 燃氣ニ依リ燃料油ヲ加熱スル場合ニ於テハ加熱用蒸氣管ノ末端ハ凝汽中ニ於ケル油ノ有無ヲ檢査シ得ル様之ヲ驗水槽ニ導クベシ  
燃料油ト接觸スル加熱用蒸氣管ハ之ヲ鋼管又ハ鐵管ト爲スベシ  
第三百二十九條 機關室ニ於ケル滄水吸入管ニハ鉛管ヲ使用スルコトヲ得ズ  
第四百十條 燃油裝置ノ各部分ハ左ノ壓力ヲ以テ之ヲ試驗シ

管以上ヲ有スル船舶ニ在リテハ移油「ポンプ」ニテ該區畫室中ノ一室ヨリ吸油中脚荷水「ポンプ」ニテ他室ノ排水ヲ爲シ得ル裝置ト爲スベシ但シ容積大ニシテ屢補充スルヲ要セザル滄油槽又ハ常用油槽ヲ備フルモノニ在リテハ此ノ限ニ在ラズ  
深水槽ヲ貨物艙、脚荷水槽又ハ燃料油槽ニ兼用スル船舶ニ在リテハ該槽ニ貨物ヲ積載スル場合脚荷水及燃料油ノ注入管竝ニ吸出管ニ、該槽ヲ燃料油槽又ハ脚荷水槽トシテ使用スル場合滄水吸出管ニ盲蓋ヲ取附ケ得ル裝置ト爲スベシ  
第三百三十二條 移油管ニハ機關室又ハ「ポンプ」室隔壁ノ内側ニ辨又ハ「コック」ヲ備ヘ移油「ポンプ」ニハ之ヲ解放スル場合移油管ト遮斷シ得ル様其ノ吸油側ニ辨又ハ「コック」ヲ備フベシ  
第三百三十三條 二重底ヲ除クノ外燃料油槽ヨリ吸油スル管ニハ槽壁ニ於テ辨又ハ「コック」ヲ備ヘ其ノ所在區畫ノ失火ノ際接近シ易キ他ノ場所ヨリ閉閉シ得ル裝置ト爲スベシ  
燃料油ヲ積載スル船首艙又ハ船尾艙ヨリ吸油スル管ニ在リテハ前項ノ辨又ハ「コック」ハ之ヲ該艙ノ内壁ニ附スベシ

「ポンプ」加熱器及油噴器等ヨリノ漏油ニ對シテハ適當ナル油受ヲ設クベシ  
第二百二十七條 噴油「ポンプ」及之ニ接續スル管系ハ給水「ポンプ」、滄水「ポンプ」又ハ脚荷水「ポンプ」及此等ニ接續スル管系ト兼用スルコトヲ得ズ  
油管ハ總テ清水管ト兼用スルコトヲ得ズ  
第二百二十八條 噴油「ポンプ」ノ送油側ニ於ケル油管ハ無接合鋼管トシ其ノ管鈔ハ之ヲ機械仕上ト爲シ且成ルベク直接接合ト爲シ接合材ヲ用ウル場合ニ於テハ高溫ノ油ノ滲透セザル薄キモノヲ用ウベシ  
前項以外ノ油管ハ鋼管又ハ鐵管ト爲スベシ  
油管ハ機關室ニ於テハ檢査及修繕ニ便宜ナル位置ニ之ヲ取附クベシ

第三百二十九條 噴油「ポンプ」ノ動力裝置ハ其ノ所在區畫室ニ於テ又該區畫室ノ失火ノ際ニハ接近シ得ベキ他ノ場所ニ於テ之ヲ操縱シ得ルモノナルコトヲ要ス  
第三百十條 油槽ニハ硝子製示面計ヲ取附クルコトヲ得ズ但シ厚硝子板ヲ備フルモノ又ハ自働閉塞式辨若ハ「コック」及適當ノ硝子保護裝置ヲ備フルモノニ在リテハ此ノ限ニ在ラズ  
第三百十一條 燃料油槽ト脚荷水槽トニ兼用スル區畫室ニ

第三百二十四條 二重底ヲ有スル船舶ニ在リテハ成ルベク滄油槽及常用油槽ノ底部附近ヨリ燃料油ヲ二重底ニ導ク管ヲ設ケ槽ニ接續スル箇所ニ於テ之ニ前條ノ辨又ハ「コック」ヲ備フベシ  
第三百二十五條 機關室内ノ油槽ノ底面又ハ側壁ニ附スル充油管ニハ底面又ハ側壁ニ於テ第三百三十三條ノ辨若ハ「コック」ヲ備フルカ又ハ不還辨ヲ備フベシ但シ充油管ヲ側壁ノ頂部ニ附スルトキハ此ノ限ニ在ラズ  
第三百二十六條 機關室内ノ油管ニ附スル辨又ハ「コック」ハ機關室床板以上ニ於テ閉閉シ得ルモノト爲スベシ  
第三百二十七條 機關室内ノ油槽ニ附スル沈澱水ノ排出管ニハ自動閉塞式又ハ封鎖裝置附ノ辨若ハ「コック」ヲ備フベシ  
第三百二十八條 燃氣ニ依リ燃料油ヲ加熱スル場合ニ於テハ加熱用蒸氣管ノ末端ハ凝汽中ニ於ケル油ノ有無ヲ檢査シ得ル様之ヲ驗水槽ニ導クベシ  
燃料油ト接觸スル加熱用蒸氣管ハ之ヲ鋼管又ハ鐵管ト爲スベシ  
第三百二十九條 機關室ニ於ケル滄水吸入管ニハ鉛管ヲ使用スルコトヲ得ズ  
第四百十條 燃油裝置ノ各部分ハ左ノ壓力ヲ以テ之ヲ試驗シ

第三百三十四條 二重底ヲ有スル船舶ニ在リテハ成ルベク滄油槽及常用油槽ノ底部附近ヨリ燃料油ヲ二重底ニ導ク管ヲ設ケ槽ニ接續スル箇所ニ於テ之ニ前條ノ辨又ハ「コック」ヲ備フベシ  
第三百三十五條 機關室内ノ油槽ノ底面又ハ側壁ニ附スル充油管ニハ底面又ハ側壁ニ於テ第三百三十三條ノ辨若ハ「コック」ヲ備フルカ又ハ不還辨ヲ備フベシ但シ充油管ヲ側壁ノ頂部ニ附スルトキハ此ノ限ニ在ラズ  
第三百三十六條 機關室内ノ油管ニ附スル辨又ハ「コック」ハ機關室床板以上ニ於テ閉閉シ得ルモノト爲スベシ  
第三百三十七條 機關室内ノ油槽ニ附スル沈澱水ノ排出管ニハ自動閉塞式又ハ封鎖裝置附ノ辨若ハ「コック」ヲ備フベシ  
第三百三十八條 燃氣ニ依リ燃料油ヲ加熱スル場合ニ於テハ加熱用蒸氣管ノ末端ハ凝汽中ニ於ケル油ノ有無ヲ檢査シ得ル様之ヲ驗水槽ニ導クベシ  
燃料油ト接觸スル加熱用蒸氣管ハ之ヲ鋼管又ハ鐵管ト爲スベシ  
第三百三十九條 機關室ニ於ケル滄水吸入管ニハ鉛管ヲ使用スルコトヲ得ズ  
第四百十條 燃油裝置ノ各部分ハ左ノ壓力ヲ以テ之ヲ試驗シ



- スベシ
- 一 噴油「ポンプ」ノ油筒又ハ之ニ附屬スル辨ハ常用最大壓力ノ二倍ノ壓力
  - 二 噴油「ポンプ」ノ送油辨ヨリ噴油器ニ至ル管、燃料油加熱器及其ノ附屬具ハ常用最大壓力ノ二倍ト每平方糎二八疋トノ中大ナル壓力
  - 三 前號以外ノ油管ニシテ機關室ニ在ルモノハ每平方糎二疋
  - 四 燃料油ト接觸スル加熱用蒸汽管ハ常用最大汽壓ノ二倍ノ壓力

前項第一號ニ掲グルモノノ試験ハ製造シ割仕上ヲ爲シタルトキ、第二號乃至第四號ニ掲グルモノノ試験ハ船内取附後之ヲ執行スベシ

第四章 發動機ヲ備フル船舶ノ機關  
第一節 發動機

第四百十一條 發動機ハ容易ニ推進器ヲ反轉セシメ且船舶ニ充分ナル後退力ヲ有セシメ得ルモノナルコトヲ要ス  
軸馬力三〇〇ヲ超ユル發動機ハ成ルベク自己反轉式ノモノト爲スベシ  
軸馬力六〇ヲ超ユル發動機ニシテ「クラッチ」ヲ用キ推進器ヲ反轉スルモノハ適當ナル整速裝置ヲ備フベシ

第四百十二條 徑二五〇耗以上ノ氣筒ニシテ最大壓力每平方糎三五疋以上ノモノニハ取扱者ニ危害ヲ及ボス虞ナキ位置ニ適當ナル安全辨又ハ逃氣ヲ備ヘ最大壓力ノ一・四倍以下ノ壓力ニ於テ逃氣スル様調整スベシ  
第四百十三條 輕油、燈油、揮發油又ハ瓦斯ヲ燃料トスル單働發動機ニシテ氣筒内ノ最大壓力每平方糎一八疋以下ノモノノ鍛鋼製ノ軸ノ徑ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ小ナルコトヲ得ズ

$$P = C \sqrt{D^2 S}$$

d ハ軸ノ徑(耗ニテ)

D ハ氣筒ノ徑(耗ニテ)

S ハ行長(耗ニテ)

C ハ定數ニシテ左表ニ依ル

發動機ノ種類	氣筒數		軸	中間軸	第一種螺旋軸		第二種螺旋軸	
	甲種機關ハ	乙種機關ハ			甲種機關ハ	乙種機關ハ	甲種機關ハ	乙種機關ハ
二衝程發動機	一	〇・三七三	〇・三五四	〇・二二二	〇・二二二	〇・二二二	〇・二二二	〇・二二二
	二	〇・三七三	〇・三五四	〇・二二二	〇・二二二	〇・二二二	〇・二二二	〇・二二二
	三	〇・三八一	〇・三六二	〇・二六三	〇・二五〇	〇・二七五	〇・二六一	〇・二九三
	四	〇・三八八	〇・三六九	〇・二七八	〇・二六五	〇・二七七	〇・三〇九	〇・二九四
	五	〇・三九三	〇・三七三	〇・二九二	〇・二七八	〇・二九一	〇・三二四	〇・三〇八
	六	〇・三九三	〇・三七九	〇・二九〇	〇・二九〇	〇・三〇三	〇・三三八	〇・三二一
四衝程發動機	一	〇・三三一	〇・三一五	〇・一七五	〇・一六七	〇・一八四	〇・一七五	〇・一九五
	二	〇・三五三	〇・三五五	〇・一九七	〇・一八八	〇・一九九	〇・一九七	〇・二一〇
	三	〇・三六八	〇・三五〇	〇・二一六	〇・二〇六	〇・二〇七	〇・二一六	〇・二二九
	四	〇・三八一	〇・三六二	〇・二三三	〇・二二〇	〇・二二七	〇・二三一	〇・二四一
	五	〇・三九〇	〇・三七七	〇・二四七	〇・二三三	〇・二四三	〇・二四五	〇・二五〇
	六	〇・四〇一	〇・三八二	〇・二五九	〇・二四七	〇・二五八	〇・二五八	〇・二七〇



機		機		機		機		機	
ア	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ヘ	ヘ	ヘ
0.203	0.213	0.220	0.227	0.234	0.241	0.248	0.255	0.262	0.269
0.276	0.283	0.290	0.297	0.304	0.311	0.318	0.325	0.332	0.339
0.346	0.353	0.360	0.367	0.374	0.381	0.388	0.395	0.402	0.409

第四百四十四條 前條ノ發動機ニシテ氣筒内ノ最大壓力毎平方糎一八疋ヲ超ユルモノノ鍛鋼製ノ軸ノ徑ハ前條ノ規定ニ依リ算定シタルモノニ左ノ係數Kヲ乗ジタルモノヨリ小ナルコトヲ得ズ

$$K = \sqrt[3]{\frac{P}{18}}$$

Pハ氣筒内ノ最大壓力(毎平方糎疋ニテ)  
 第四百四十五條 重油ヲ燃料トスル燒球式ニ衝程單働發動機ニシテ氣筒内ノ最大壓力毎平方糎二五疋以下ノモノノ鍛鋼製ノ軸ノ寸法ハ左ノ各號ノ算式ニ依リ算定シタルモノ

ヨリ小ナルコトヲ得ズ  
 一「クランク」軸ノ徑

$$d_o = \sqrt[3]{\frac{D^2 \times (AS + BL)}{100}}$$

d。ハ「クランク」軸ノ徑(耗ニテ)

Dハ氣筒ノ徑(耗ニテ)

Sハ行長(耗ニテ)

Lハ「クランク」ノ兩側ニ於ケル軸受金内側間ノ距離(耗ニテ)

A及Bハ定數ニシテ左表ニ依ル

氣筒數	「クランク」ノ配置	甲種機關又ハ乙種機關		丙種機關	
		A	B	A	B
一	—	二・七五	二・六九	二・三六	二・三一
二	—	二・七五	二・六九	二・三六	二・三一

機	機	機	機	機	機	機		機	
						ア	イ	ロ	ハ
一	二	三	四	五	六	六・八三	五・〇八	四・二九	三・八八
二	三	四	五	六	六・八三	五・〇八	四・二九	三・八八	三・四三
三	四	五	六	六・八三	五・〇八	四・二九	三・八八	三・四三	二・六〇
四	五	六	六・八三	五・〇八	四・二九	三・八八	三・四三	二・六〇	二・九四
五	六	六・八三	五・〇八	四・二九	三・八八	三・四三	二・六〇	二・九四	二・二三
六	六・八三	五・〇八	四・二九	三・八八	三・四三	二・六〇	二・九四	二・二三	二・二五
七	六・八三	五・〇八	四・二九	三・八八	三・四三	二・六〇	二・九四	二・二三	二・一四
八	六・八三	五・〇八	四・二九	三・八八	三・四三	二・六〇	二・九四	二・二三	二・〇八
九	六・八三	五・〇八	四・二九	三・八八	三・四三	二・六〇	二・九四	二・二三	一・九八
十	六・八三	五・〇八	四・二九	三・八八	三・四三	二・六〇	二・九四	二・二三	一・八〇
十一	六・八三	五・〇八	四・二九	三・八八	三・四三	二・六〇	二・九四	二・二三	一・八〇
十二	六・八三	五・〇八	四・二九	三・八八	三・四三	二・六〇	二・九四	二・二三	一・八一

二 一體型「クランク」軸ノ腕ノ幅又ハ厚サ

$$bt^2 = 0.417P^{0.8}$$

d。ハ前號ノ規定ニ依リ算定シタル「クランク」軸ノ徑(耗ニテ)

bハ腕ノ幅(耗ニテ)

tハ腕ノ厚サ(耗ニテ)

三 推力軸、中間軸又ハ螺旋軸ノ徑

$$d = 0.3 \sqrt{D^2 S}$$

dハ軸ノ徑(耗ニテ)











氣筒數	「クランク」ノ配置	甲種機關又ハ乙種機關		丙種機關	
一	二	三	四	五	六
一〇・八六	一〇・八六	一〇・八六	一〇・八六	一〇・八六	一〇・八六
一・六〇	一・六〇	一・六〇	一・六〇	一・六〇	一・六〇
九・三二	九・三二	九・三二	九・三二	九・三二	九・三二
一・三七	一・三七	一・三七	一・三七	一・三七	一・三七
一〇・八六	一〇・八六	一〇・八六	一〇・八六	一〇・八六	一〇・八六
一・五二	一・五二	一・五二	一・五二	一・五二	一・五二
一・四八	一・四八	一・四八	一・四八	一・四八	一・四八
一・四五	一・四五	一・四五	一・四五	一・四五	一・四五
一四・五一	一四・五一	一四・五一	一四・五一	一四・五一	一四・五一

三 二衝程複働式ナルトキ

氣筒數	「クランク」ノ配置	甲種機關又ハ乙種機關		丙種機關	
一	二	三	四	五	六
一〇・八六	一〇・八六	一〇・八六	一〇・八六	一〇・八六	一〇・八六
一・六〇	一・六〇	一・六〇	一・六〇	一・六〇	一・六〇
九・三二	九・三二	九・三二	九・三二	九・三二	九・三二
一・三七	一・三七	一・三七	一・三七	一・三七	一・三七
一〇・八六	一〇・八六	一〇・八六	一〇・八六	一〇・八六	一〇・八六
一・四三	一・四三	一・四三	一・四三	一・四三	一・四三
一・四五	一・四五	一・四五	一・四五	一・四五	一・四五
一四・五一	一四・五一	一四・五一	一四・五一	一四・五一	一四・五一



氣筒數	「クランク」ノ配置						甲種機關又ハ乙種機關		丙種機關	
	六	五	四	三	二	一	A	B	A	B
							一四・五〇	一・三〇	一二・四四	一・一二
							一四・五〇	一・三〇	一二・四四	一・一二
							一五・六八	一・二六	一三・四五	一・〇八
							一三・四一	一・三九	一一・五〇	一・一九
							一四・四八	一・三〇	一二・四一	一・一二
							一二・八一	一・四三	一〇・九九	一・二三
							一〇・八六	一・六〇	九・三二	一・三七
							四八・二〇	〇・九七	四一・三六	〇・八三

四 四衝程複働式ナルトキ

二	一	〇	九	八	七	六			
三八・五四	三四・六八	三六・八三	三一・四三	二七・九三	二六・八三	二二・三四	二三・五〇	二〇・六六	二一・二〇
〇・九九	一・〇〇	一・〇一	一・〇二	一・〇三	一・〇七	一・一一	一・一二	一・一五	一・一二
三三・〇七	二九・七六	三一・六〇	二六・九七	二三・九七	二三・〇一	一九・一七	二〇・一六	一七・七二	一八・一八
〇・八五	〇・八六	〇・八七	〇・八八	〇・八八	〇・九二	〇・九五	〇・九六	〇・九九	〇・九六



一一二	一一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一
二二・一〇	二一・七二	二八・四二	二〇・〇四	二〇・〇四	二一・六〇	二一・三一	一八・七〇	一八・三九	一九・七〇	一一・一九	一六・九〇
一・一五	一・一六	一・〇八	一・一八	一・一八	一・一五	一・一六	一・二一	一・二二	一・一九	一・一五	一・一〇
一八・九六	一八・六三	二四・三八	一七・二〇	一七・二〇	一八・五三	一八・二八	一六・〇四	一五・七七	一六・九〇	一・一五	一・一〇
〇・九九	一・〇〇	〇・九三	一・〇一	一・〇一	〇・九九	一・〇〇	一・〇四	一・〇五	一・〇二	一・一五	一・一〇

備考		二六・五〇	一・〇九	二二・七三	〇・九四
----	--	-------	------	-------	------

第四百四十八條 「デイーゼル式」發動機ノ「クランク」軸ノ鋼製ノ腕ノ幅又ハ厚サハ左ノ算式ニ依リ定メタルモノヨリ小ナルコトヲ得ズ

組成型「クランク」軸又ハ半組成型「クランク」軸ノ腕ノ幅又ハ厚サハ左ノ算式ニ依リ定メタルモノヨリ小ナルコトヲ得ズ

$$w = 0.438D^2$$

$$t = 0.625D^2$$

一 一體型「クランク」軸ナ  
 ルトキ  $D_1 = 0.417D^2$

d 〇ハ前條ノ規定ニ依リ算定シタル「クランク」軸ノ徑(耗ニテ)

w ハ組成型「クランク」軸又ハ半組成型「クランク」軸ニ於ケル腕ノ孔ノ周圍ノ半徑方向ノ厚サ(耗ニテ)

t ハ軸ノ方向ノ腕ノ厚サ(耗ニテ)

b ハ一體型「クランク」軸ノ腕ノ幅(耗ニテ)

一 二衝程單働式ナルトキ

前項ノ規定ハ高速機關ニ付テハ之ヲ適當ニ斟酌スルコトヲ得

第四百四十九條 「デイーゼル」式發動機ノ鍛鋼製ノ中間軸ノ徑ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ小ナルコトヲ得ズ

$$D = 0.4 \sqrt{(1+M) D^2 S p}$$

d ハ中間軸ノ徑(耗ニテ)

D ハ氣筒ノ徑(耗ニテ)

S ハ行長(耗ニテ)

P ハ氣筒内平均有效圖示壓力(每平方糎ニテ)

M ハ第二項ノ規定ニ依リ算定シタル數ト左表ニ掲ゲルZトノ中小ナルモノ

C ハ定數ニシテ左表ニ依ル



二		一	一〇	九	八	七
三・五	二五・二	〇・二	〇・三	五・七	〇・四	〇・七
〇・〇四〇	〇・一三二	〇・〇〇四	〇・〇〇五	〇・〇六二	〇・〇〇八	〇・〇一二
	〇・二六六		〇・二五九		〇・二四一	〇・二二二
	〇・二五三		〇・二四六		〇・二三九	〇・二二一

六		五	四	三	二	一	氣筒數
							「クランク」ノ配置
一八・二	一一・八	二・〇	二・九	三六・二	四・五	八・四	K
〇・一九一	〇・一三二	〇・〇四一	〇・〇五九	〇・三二六	〇・一〇六	〇・二〇〇	Z
	〇・二一一		〇・一九八	〇・一八四	〇・一六八	〇・一四六	C 甲種機關又ハ乙種機關 丙種機關
	〇・二〇〇		〇・一八八	〇・一七五	〇・一六〇	〇・一三九	



二 四衝程單働式ナルトキ

氣筒數	「クランク」ノ配置	K	Z	C	
一		三一・八	〇・六八〇	甲種機關又 ハ乙種機關	乙種機關
二		四一・〇	〇・五二七	〇・一一八	〇・〇九二
三		二四・一	〇・四一〇	〇・一三五	〇・一一二
四		一六・八	〇・三二六	〇・一四九	〇・一四二
五		一三・八	〇・二五三	〇・一六一	〇・二五三
六		八・四	〇・二〇〇	〇・一七一	〇・一六二
七		六・三	〇・一四〇	〇・一八〇	〇・一七一
八		四・五	〇・一〇六	〇・一八八	〇・一七九

三 二衝程複働式ナルトキ

氣筒數	「クランク」ノ配置	K	Z	C	
九		四・一	〇・〇八四	〇・一九六	〇・一八六
一〇		三・四	〇・〇六二	〇・二〇三	〇・一九三
一一		二・八	〇・〇四九	〇・二〇九	〇・一九九
一二		二・〇	〇・〇四〇	〇・二一五	〇・二〇四
一		一六・八	〇・三三〇	〇・一四〇	〇・一三三
二		四・五	〇・一〇六	〇・一七六	〇・一六七
三		二・〇	〇・〇四一	〇・二〇一	〇・一九一
四		九・二	〇・一〇六	〇・二二二	〇・二一一



四衝程複働式ナルトキ					
氣筒數	一	二	三	四	五
「クランク」ノ配置					
K	二六・二	一六・八	三一・三	四・五	一六・二
Z	〇・五二七	〇・三二六	〇・三〇〇	〇・一〇六	〇・一八四
C	甲種機關又 ハ乙種機關	〇・一一三	〇・一四二	〇・一六三	〇・一九三
	丙種機關	〇・一〇七	〇・一三五	〇・一五五	〇・一八三

二	一〇	九	八	七	六	五
〇・二	一・〇	一・〇	〇・二	一・七	〇・二	三・五
〇・〇〇二	〇・〇〇八	〇・〇〇八	〇・〇〇三	〇・〇一九	〇・〇〇四	〇・〇四一
〇・三一	〇・三〇二	〇・二九一	〇・二八〇	〇・二六七	〇・二五四	〇・二三九
〇・二九五	〇・二八七	〇・二七六	〇・二六六	〇・二五四	〇・二四一	〇・二二七



一一	一〇	九	八	七	六
一・八	三三・五	〇・四	〇・四	四・五	九・二
〇・〇三二	〇・一八〇	〇・〇〇八	〇・〇〇八	〇・〇五三	〇・一〇六
〇・二五一	〇・二四三	〇・二三五	〇・二二六	〇・二一六	〇・二〇五
〇・二三八	〇・二三一	〇・二二三	〇・二一五	〇・二〇五	〇・一九五

備考 印ヲ附シタルモノハ二箇ノ氣筒ガ同時ニ點火スルモノナルコトヲ示ス

一一			〇・二五九	〇・二四六
三・五	〇・〇四〇	〇・〇四〇	〇・二五九	〇・二四六

Mハ左ノ算式ニ依リ之ヲ算定スベシ

$$M = K \frac{10,000D^2 S}{(6.24Wb^2 + WF^2)R^2}$$

- Dハ氣筒ノ徑(耗ニテ)
- Sハ行長(耗ニテ)
- wハ「クランク」腕ニ附シタル鈎合錘ノ重量(耗ニテ)
- bハ「クランク」腕ニ附シタル鈎合錘ノ重心點ヨリ「クランク」軸ノ中心線ニ至ル距離(耗ニテ)
- Wハ勢車ノ重量(耗ニテ)
- Fハ勢車ノ外徑(耗ニテ)
- Rハ軸ノ毎分回轉數
- Kハ定數ニシテ前項ノ表ニ依ル

第一百五十條 「デイズル」式發動機ノ鍛鋼製ノ推力軸ノ徑ハ前條ノ規定ニ依リ算定シタル中間軸ノ徑ノ一・〇五倍

ヨリ小ナルコトヲ得ズ  
 第一百五十一條 「デイズル」式發動機ノ鍛鋼製ノ螺旋軸ノ徑ハ左ノ算定ニ依リ算定シタルモノヨリ小ナルコトヲ得ズ

$$dp = d + \frac{P}{Q}$$

- dpハ螺旋軸ノ徑(耗ニテ)
  - dハ第四百九十九條ノ規定ニ依リ算定シタル中間軸ノ徑(耗ニテ)
  - Pハ螺旋推進器ノ徑(耗ニテ)
  - Qハ定數ニシテ左表ニ依ル
- |            |     |
|------------|-----|
| 第一種螺旋軸ナルトキ | 一四四 |
| 第二種螺旋軸ナルトキ | 一〇〇 |
- 第一百五十二條 船舶ノ推進ニ關係ヲ有スル發電機又ハ空氣



壓縮機ヲ動作スル發動機ノ「クランク」軸ノ寸法ハ發動機ノ種類ニ應ジ第四百四十三條乃至第四百四十八條ノ規定ニ依リ丙種機關トシテ算定シタルモノヨリ小ナルコトヲ得ズ

第五百十三條 鍛鋼製中空軸ノ外徑ハ發動機及軸ノ種類ニ應ジ第四百四十三條乃至第四百四十七條、第四百四十九條乃至第五百一十一條又ハ前條ノ規定ニ依リ算定シタルモノニ左ノ係數Kヲ乗タジルモノヨリ小ナルコトヲ得ズ但シ内徑ガ外徑ノ三分ノ一未滿ナルトキハ此ノ限ニ在ラズ

$$K = \sqrt[3]{\frac{I}{I-PR^4}}$$

R ハ中空軸ノ内徑ヲ外徑ニテ除シタル商

第五百十四條 鍛鋼製推力軸ハ推力受臺ノ前部及後部ニ於テハ其ノ徑ハ發動機ノ種類ニ應ジ第四百四十三條乃至第四百四十六條、第四百四十九條又ハ前條ノ規定ニ依リ算定シタル中間軸ノ徑トナル迄漸次之ヲ減ズルコトヲ得

鍛鋼製螺旋軸ハ前部軸鈔ノ附近ニ於テハ其ノ徑ガ發動機ノ種類ニ應ジ第四百四十三條乃至第四百四十六條、第四百四十九條又ハ前條ノ規定ニ依リ算定シタル中間軸ノ徑ノ一・〇五倍トナル迄漸次之ヲ減ズルコトヲ得

第五百十五條 抗張力ガ不明ナル厭延黃銅製螺旋軸ノ徑ハ

發動機ノ種類ニ應ジ第四百四十三條乃至第四百四十六條又ハ第五百一十一條ノ規定ニ依リ算定シタル鍛鋼製第一種螺旋軸ノ徑ノ一・〇五倍以上ト爲スベシ

第五百十六條 軸鈔ヲ連結スル螺釘ノ軸鈔連結面ニ於ケル徑ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ小ナルコトヲ得ズ

$$D = 0.015 \sqrt{\frac{D^3}{N \cdot P}}$$

d ハ螺釘ノ徑(耗ニテ)

N ハ螺釘ノ數

d<sub>1</sub> ハ螺釘心圈ノ徑(耗ニテ)

D ハ發動機ノ種類ニ應ジ第四百四十三條乃至第四百四十六條又ハ第四百四十九條ノ規定ニ依リ算定シタル中間軸ノ徑(耗ニテ)

第五百十七條 船尾管後端ノ軸受部ノ長サハ第四百四十三條乃至第四百四十六條、第五百一十一條又ハ第五百五十五條ノ規定ニ依リ算定シタル螺旋軸ノ徑ノ四倍未滿ト爲スコトヲ得ズ

船尾管後端ノ軸受上部ノ内面ト螺旋軸トノ間隙C(耗ニテ)ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノヨリ大ナルコトヲ得ズ

$$C = 0.013d + 0.15$$

d ハ螺旋軸ノ該部分ニ於ケル被金上ノ徑(耗ニテ)

第五百十八條 發動機ノ電氣點火裝置ノ導線ハ完全ニ絕緣シタルモノニシテ損傷ヲ受クル虞ナク且油管、油槽又ハ油ト接觸セザル様之ヲ敷設スベシ

整流子ハ之ヲ蔽圍スベシ  
點火裝置ノ「コイル」ハ爆發性瓦斯ニ暴露スル虞アル場所ニ之ヲ備フルコトヲ得ズ

燃料油ノ點火又ハ酸化ノ爲燈ヲ使用スルトキハ之ヲ適當ナル臺ニ取附ケ且其ノ火焰ヲ蔽圍スベシ

第五百十九條 發動機ノ酸化器ハ發動機ノ停止シタル場合自働的ニ燃料ノ供給ヲ遮斷スル裝置ト爲スベシ

酸化器ガ油ノ溢出スル虞アルモノナルトキハ金網蓋ヲ有スル油受ヲ設ケ之ニ排油裝置ヲ備フベシ  
氣筒ト酸化器トノ間又ハ酸化器ノ空氣吸入口ニハ成ルベク金網ノ隔膜ヲ備フベシ

第六十條 第四百十二條及前二條ノ規定ハ補機動作ノ發動機ニ之ヲ準用ス

第二節 油槽、油管、潤滑油裝置等

第六十一條 油槽、油管及此等ニ附屬スル弁並ニ「コック」ニ付テハ本節ニ於テ特ニ規定シタルモノノ外第三章

第十節ノ規定ヲ準用ス

第六十二條 發動機ニハ其ノ停止中ニ於テモ手動「ポンプ」其ノ他ノ適當ナル方法ニ依リ氣筒ノ噴油弁ニ燃料油ヲ供給シ得ル裝置ヲ設クベシ

長サ三〇米以上ノ船舶ノ發動機ノ燃料油管ニハ燃料油濾器二組ヲ備ヘ發動機ノ運轉中ト雖モ其ノ一組ヲ解放掃除シ得ル裝置ト爲スベシ

第六十三條 重油管ニ非ザル油管ニハ適當ニ熱處理ヲ爲シタル引拔銅管ヲ用キ其ノ配置ハ伸縮ノ自由ヲ妨ゲザルモノト爲シ其ノ連結ハ金屬製ノ圓錐形又ハ球面形接合ト爲スベシ

第六十四條 重油管ニハ成ルベク引拔銅管ヲ用キ其ノ配置ハ伸縮ノ自由ヲ妨ゲザルモノト爲スベシ  
噴油「ポンプ」ト氣筒トヲ連絡スル重油管ノ連結ハ成ルベク金屬製ノ圓錐形又ハ球面形接合ト爲スベシ

第六十五條 燃料油管ハ容易ニ檢査スルコトヲ得且外部ヨリ損傷ヲ受クル虞ナキ様敷設スベシ

第六十六條 燃料油槽ハ之ヲ汽罐、汽管、廢氣管、消音器其ノ他ノ高熱物ヨリ適當ニ隔離シ其ノ弁又ハ「コック」等ハ外部ヨリ損傷ヲ受クル虞ナキ安全ナル場所ニ取附クベシ



第六十七條 油槽ノ開口ニハ容易ニ取外シ得ル堅牢ナル金網膜ヲ裝置スベシ

揮發油槽ニハ逃田弁ヲ備ヘ之ニ排氣管ヲ設ケ排氣管ハ甲板ノ安全ナル場所ニ導キ其ノ端ヲ下方ニ屈曲シ内徑ニ五耗ヲ超ユルモノニ在リテハ其ノ端ニ金網膜ヲ附スベシ

第六十八條 燃料油槽ノ充油管ハ專用ノモノトシテ成ルベク甲板上ニ違セシメ開口部ハ堅牢ナル蓋ヲ以テ密閉シ得ルモノト爲スベシ

燃料油槽ニハ空氣管ヲ設ケ其ノ端ヲ暴露甲板上排氣ニ因ル危険ナキ場所ニ導キ且排氣ノ流通ヲ阻害シ又ハ波浪ノ浸入スル虞ナキモノト爲スベシ

第六十九條 船體ノ一部ヲ成サザル燃料油槽ニハ排油裝置ヲ設ケ且内部ヲ検査シ得ル様検査孔ヲ設クベシ

前項ノ油槽ニハ金屬製油受ヲ備ヘ之ニ排油裝置ヲ設クベシ

第七十條 前三條ノ規定ハ小形油槽ニ付テハ管海官廳ニ於テ差支ナシト認ムル場合ニ限り之ヲ適當ニ斟酌スルコトヲ得

第七十一條 強壓ヲ受クル燃料油槽ノ強力ハ氣槽ノ強力ニ準ジ之ヲ算定スベシ

第六十七條第二項ノ規定ハ前項ノ油槽ニ之ヲ準用ス

消音器ハ容易ニ掃除シ得ルモノト爲スベシ

二箇以上ノ發動機ノ廢氣ヲ一箇ノ消音器ニ導クトキハ停止セル發動機ノ氣筒内ニ廢氣ノ浸入セザル様裝置スベシ

廢氣管ノ端ヲ船外ノ水線附近ニ開放スルトキハ氣筒ニ水ノ浸入セザル業裝置スベシ

前四項ノ規定ハ補機動作用發動機ニ之ヲ準用ス

第七十五條 長サ三〇米以上ノ船舶ニシテ單働掃除空氣「ポンプ」一箇ノミヲ備フルモノニ在リテハ其ノ二分ノ一以上ノ能力ヲ有シ且隨時使用シ得ル副働掃除空氣「ポンプ」ヲ備フル場合ニ於テ該送風機又ハ「ポンプ」ガ其ノ動源ノ二分ノ一以上ノ能力ヲ有シ且隨時使用シ得ル他ノ動源ニ依リ容易ニ動作セラルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第七十六條 空氣噴油式發動機ヲ備フル船舶ニ在リテハ其ノ全力運轉ニ必要ナル壓縮空氣ヲ供給シ得ル噴油用空氣壓縮機ノ外該壓縮機中最大能力ノモノノ二分ノ一以上ノ能力ヲ有シ且隨時使用シ得ル噴油用副空氣壓縮機ヲ備フベシ

壓縮空氣ニ依リ始動スル發動機ヲ備フル船舶ニ在リテハ壓縮空氣ニ依ラズシテ始動シ且動力ニ依リ動作セラルル

第七十二條 相當ノ壓力ヲ以テ潤滑油ヲ循環セシムルコトヲ要スル發動機ヲ備フル船舶ニ在リテハ常用動力潤滑油「ポンプ」ノ外該「ポンプ」中最大能力ノモノト同等ノ能力ヲ有シ且遲滯ナク使用シ得ル配置ト爲シタル豫備動力潤滑油「ポンプ」ヲ備ヘ且油冷却器ヲ備フルトキハ二様ノ冷却水送水裝置ヲ備フベシ

前項ノ豫備潤滑油「ポンプ」ハ管海官廳ニ於テ差支ナシト認ムルトキハ之ヲ手動「ポンプ」ト爲スモ妨ナシ

「クランク」室ヲ潤滑油溜トシテ使用スル「クランク」室密閉式發動機ニハ「クランク」室内ノ油ヲ隨時排出シ得ル裝置ヲ備ヘ木船ニ在リテハ此ノ排油ガ木製部分ヲ浸潤セザル様裝置スベシ

前項ノ發動機ヲ備フル船舶ニ在リテハ潤滑油ノ清淨機又ハ濾器ヲ備フベシ

潤滑油管系ニハ適當ノ位置ニ潤滑油ノ流動狀況ヲ見易キ様適當ノ裝置ヲ備フルカ又ハ壓力計ヲ備フベシ

第七十三條 機關室及燃料油槽ヲ設置シタル區畫室ハ通風良好ナルモノト爲スベシ

第三節 廢氣裝置及空氣壓縮機

第七十四條 廢氣管及消音器ハ循環水ニ依リ之ヲ冷却スルカ又ハ之ニ適當ナル防熱裝置ヲ施スベシ

應急用空氣壓縮機ヲ備フベシ但シ管海官廳ニ於テ差支ナシト認ムル場合ニ限り之ヲ手動空氣壓縮機ト爲シ又ハ之ヲ備ヘザルコトヲ得

第七十七條 空氣壓縮機ノ壓縮筒ニハ安全弁又ハ逃田弁ヲ備ヘ各壓縮筒内ノ最大壓力ノ一・一倍以下ノ壓力ニ於テ逃氣スル様之ヲ調整スベシ

壓縮空氣ノ冷却器ハ容易ニ解放シテ検査及掃除ヲ爲シ得ル構造ト爲スベシ

第四章 氣 槽

第七十八條 發動機ノ始動用氣槽ノ容量ハ計畫壓力ニ充氣シタル場合補充セズシテ引續キ十二回以上始動セシメ得ルモノナルコトヲ要ス但シ壓縮空氣ニ依ラズシテ推進器ヲ反轉セシメ得ル發動機ニ付テハ之ヲ半減スルコトヲ得

第七十九條 空氣噴油式發動機ヲ備フル船舶ニ在リテハ噴油用氣槽ハ二箇以上トシ其ノ一箇ヲ使用セザルモ發動機ノ運轉ニ支障ナキ裝置ト爲スベシ但シ始動用氣槽ノ強力ガ噴油用空氣壓力ニ對シ充分ナルモノナルトキハ始動用氣槽ヲ以テ噴油用氣槽ノ全部又ハ一部ト爲スコトヲ得

第八十條 氣槽ノ構造ニ關シテハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外第三章第二節ノ規定ヲ準用ス

除クノ外第三章第二節ノ規定ヲ準用ス



第八十一條 氣槽ノ制限壓力ハ前條ノ規定並ニ第八十  
五條乃至第八十八條ノ規定ニ依リ算定シタル氣槽各部  
ノ強力ニ對スル制限壓力中最小ノモノトス

第八十二條 無接合筒形氣槽ノ胴板ノ第一號試驗片ニ依  
ル抗張試驗ニ於ケル標點間伸長百分率ハ第十六條第一號  
ノ表中其ノ他ノ鋼板ニ對スルモノヨリ二ヲ減ジタルモノ  
ト爲スコトヲ得

第八十三條 氣槽ハ内部ノ検査及掃除ヲ爲スニ適當ナル  
構造ト爲スベシ

氣槽ニハ制限壓力及水壓試驗壓力ヲ適當ニ表示スベシ  
氣槽ノ制限壓力ガ之ニ連絡スル空氣壓縮機ノ最大壓力ヨ  
リ小ナルトキハ氣槽ニ適當ナ安全弁又ハ逃弁ヲ備ヘ制  
限壓力ノ一・一倍以下ノ壓力ニ於テ逃氣スル様之ヲ調整  
スベシ

氣槽ニハ取扱者ノ見易キ位置ニ壓力計ヲ備フベシ  
氣槽ニハ適當ナル排水装置ヲ備ヘ成ルベク二重ニ排水弁  
又ハ排水「コック」ヲ設クベシ

氣槽ニ接続スル管ニハ槽ニ接続スル部分ニ於テ弁又ハ  
「ロック」ヲ備フベシ

第八十四條 氣槽ハ其ノ各部ヲ瓦斯銲接又ハ電氣銲接ニ  
依リ接合スルコトヲ得ズ但シ制限壓力毎平方糎一〇疋以

$$P = \frac{2078(F-1.5)^2}{D^2}$$

P ハ制限壓力(毎平方糎疋ニテ)

D ハ銲又ハ螺釘ヲ以テ鏡板ヲ胴ニ固著シタル場合ニ  
ハ銲又ハ螺釘心圈ノ徑(糎ニテ)、平板ヲ胴ニ銲接  
シタル場合ニハ胴ノ内徑(糎ニテ)

T ハ鏡板ノ厚サ(糎ニテ)但シ鏡板ニ人孔ヲ設ケタル  
トキハ其ノ厚サヨリ三糎ヲ減ジタルモノ

S ハ鏡板ノ抗張力(毎平方糎疋ニテ)

第八十七條 筒形氣槽ノ支柱ヲ有セザル皿形鏡板ノ強力  
ニ對スル制限壓力ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノトス

$$P = \frac{2385(F-1.5)^2}{T^2}$$

P ハ制限壓力(毎平方糎疋ニテ)

S ハ鏡板ノ抗張力(毎平方糎疋ニテ)

T ハ鏡板ノ厚サ(糎ニテ)但シ鏡板ニ人孔ヲ設ケタル  
トキハ其ノ厚サヨリ三糎ヲ減ジタルモノ

d ハ鏡板ノ曲線ノ彎曲起點ヲ連ナル圓ノ徑但シ曲線  
ノ彎曲ノ内半徑ガ鏡板ノ曲線部ノ厚サノ二・五倍  
ヨリ大ナルトキハ胴ノ内徑ヨリ鏡板ノ曲線部ノ厚  
サノ七倍ヲ控除シタルモノ(糎ニテ)

第八十八條 筒形氣槽ノ内徑ヨリ大ナラザル半徑ヲ有ス

下ニシテ鋼板ノ厚サ六糎以上ノモノニ付管海官廳ノ適當

ト認ムル所ニ依リ銲接スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ  
前項但書ノ規定ニ依リ氣槽ノ縱接合ヲ銲接シタルトキハ  
鏡板取前検査ヲ受クベシ

無接合氣槽又ハ鍛合若ハ瓦斯銲接シタル氣槽ハ附屬具取  
附ノ爲ノ機械工事ヲ行フ前之ニ適當ナル熱處理ヲ爲スコ  
トヲ要ス電氣銲接シタル氣槽ニ付管海官廳ニ於テ必要ト  
認メタル場合亦同ジ

第八十五條 無接合筒形氣槽又ハ鍛合若ハ銲接シタル筒  
形氣槽ノ胴ノ強力ニ對スル制限壓力ハ左ノ算式ニ依リ算  
定シタルモノトス

$$P = \frac{0.55(F-1.5)}{D}$$

P ハ制限壓力(毎平方糎疋ニテ)

S ハ胴板ノ抗張力(毎平方糎疋ニテ)

D ハ胴ノ内徑(糎ニテ)

T ハ胴板ノ厚サ(糎ニテ)

C ハ無接合氣槽ニ在リテハ五・二、鍛合又ハ銲接シタ  
ル氣槽ニ在リテハ三・六

第八十六條 筒形氣槽ノ支柱ヲ有セザル扁平鏡板ノ強力  
ニ對スル制限壓力ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノトス

$$P = \frac{0.55(F-1.5)}{R}$$

ル球面狀ノ鏡板ニシテ支柱ヲ備ヘザルモノノ強力ニ對ス  
ル制限壓力ハ左ノ算式ニ依リ算定シタルモノトス

P ハ制限壓力(毎平方糎疋ニテ)

S ハ鏡板ノ抗張力(毎平方糎疋ニテ)

T ハ鏡板ノ厚サ(糎ニテ)但シ鏡板ニ人孔ヲ設ケタル  
トキハ其ノ厚サヨリ三糎ヲ減ジタルモノ

R ハ鏡板球面ノ内半徑(糎ニテ)

C ハ鏡板ガ氣槽ノ外方ニ突出スルモノナルトキハ二  
五・七、内方ニ突出スルモノナルトキハ二〇・五  
前項ノ鏡板ト胴トヲ接合スル爲曲線シタル部分ノ彎曲内  
徑ハ鏡板ノ厚サノ四倍未満ナルコトヲ得ズ

第五節 排水、吸水及冷却水ニ關スル裝置

第八十九條 排水、吸水及冷却水ニ關スル裝置ニ付テハ

第九十條、第九十一條及第九十二條ノ規定並ニ本節ニ於テ  
特ニ規定スル場合ヲ除クノ外第三章第七節ノ規定ヲ準用  
ス

第九十條 發動機ノ冷却水ヲ船外ヨリ吸引スル管ニハ適  
當ナル芥除ヲ備ヘ且之ヲ解放又ハ掃除ヲ爲ス場合ニ於テ  
モ當該發動機ヲ停止スルコトヲ要セザル裝置ト爲スベシ



冷却水又ハ冷却油ノ排出管ニハ溫度計ヲ備ヘ且成ルベク管内ノ流動狀況ヲ見得ル装置ヲ設クベシ  
 冷却「ポンプ」ニ故障ヲ生ジタル場合ニ於テモ雜用「ポンプ」、海水「ポンプ」等ヲ利用シ遲滞ナク充分冷却水又ハ冷却油ヲ供給セシメ得ル様装置スベシ  
 氣筒二箇以上ヲ備フル發動機ニ在リテハ各氣筒ニ供給スル冷却水又ハ冷却油ノ量ヲ加減シ得ル装置ヲ設クベシ  
 氣筒ノ水包室及冷却水管ノ最低部ニハ排水装置ヲ備フベシ  
 前五項ノ規定ハ小形船ニ付テハ管海官廳ノ見込ニ依リ適當ニ之ヲ斟酌スルコトヲ得  
 冷却水又ハ冷却油ハ冷却スベキ部分ノ成ルベク高キ箇所ヨリ之ヲ排出セシムベシ  
 第九十一條 脚荷水「ポンプ」ハ機關室ノ海水ヲ直接吸引シ得ル様装置スベシ

第六節 水壓試驗

第九十二條 「ディーゼル」式發動機ノ氣筒、内筒、氣筒蓋、鑄造「ピストン」、氣筒高壓部ニ附屬スル諸弁匣又ハ噴油「ポンプ」ハ之ヲ製造シ削仕上ヲ爲シタルトキ左表ニ依リ水壓試驗ヲ執行スベシ但シ内外全面ヲ削仕上ゲタル内筒ハ管海官廳ノ見込ニ依リ之ヲ省略スルコトヲ得

水壓試驗執行部分	試驗 壓力
氣筒ノ高壓部ニシテ行長ノ三分ノ一ニ相當スル間	氣筒内ノ最大壓力ノ一・五倍ノ壓力
氣筒蓋ノ高壓高壓ノ氣體ニ接觸スル部分	同 右
「ピストン」ノ高壓高壓ノ氣體ニ接觸スル部分	同 右
氣筒高壓部附屬諸弁匣	同 右
「ピストン」ノ冷却部	每平方糎四疋
氣筒水包室、氣筒蓋ノ冷却部	每平方糎二疋
噴油「ポンプ」	最大壓力ノ一・五倍ノ壓力

前項ノ規定ハ船舶ノ推進ニ關係ヲ有スル發電機又ハ空氣壓縮機ヲ動作スル「ディーゼル」式發動機ニ之ヲ準用ス  
 第九十三條 「ディーゼル」式發動機ノ噴油用又ハ始動用ノ空氣壓縮機ノ壓縮筒、壓縮筒蓋若ハ壓縮空氣弁匣ハ之ヲ製造シ削仕上ヲ爲シタルトキ空氣部ハ最大壓力ノ一・五倍、水部ハ每平方糎二疋ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行スベシ  
 壓縮空氣冷却器ハ之ヲ製造シタルトキ空氣部ハ該部ニ於ケル空氣ノ最大壓力ノ一・五倍、水部ハ該部ニ於ケル冷

却水ノ常用最大壓力ノ二倍ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行スベシ

第九十四條 潤滑油「ポンプ」、燃料油「ポンプ」又ハ冷却「ポンプ」ノ油筒、水筒又ハ扇車匣ハ之ヲ製造シ削仕上ヲ爲シタルトキ常用最大壓力ノ二倍ノ壓力ヲ以テ試験スベシ

油冷却器又ハ清水冷却器ハ之ヲ製造シタルトキ附屬具ヲ取附ケタル儘常用最大壓力ノ二倍ノ壓力ヲ以テ試験スベシ

第九十五條 氣槽ハ左ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行スベシ

- 一 銲接合又ハ無接合ノモノナルトキ 制限壓力ノ一・五倍ノ壓力
- 二 鍛合又ハ銲接合ノモノナルトキ 制限壓力ノ二・〇倍ノ壓力

氣槽ニ附屬スル弁若ハ「コック」、氣槽ニ連絡スル空氣管又ハ之ニ附屬スル弁若ハ「コック」ハ之ヲ製造シ削仕上ゲタルトキ制限壓力ノ一・五倍ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行スベシ

第九十六條 燃料油槽ハ之ヲ製造シタルトキ附屬具ヲ取附ケタル儘頂板上ニ・五米ヨリ少カラザル高サニ相當スル水高壓力ヲ以テ試験スベシ但シ強壓油槽ノ試験壓力ハ

油槽ノ常用壓力ノ二倍トス

第九十七條 機關室内ニ在ル燃料油管系ハ噴油管系ヲ除クノ外船内取附後每平方糎二疋ノ壓力ヲ以テ試験スベシ  
 第九十八條 燃料油加熱用蒸汽管ハ船内取附後常用最大汽壓ノ二倍ノ壓力ヲ以テ水壓試驗ヲ執行スベシ  
 第九十九條 第二百一十一條及第二百二十二條ノ規定ハ發動機ヲ備フル船舶ニ付之ヲ適用ス

第七節 補汽罐

第二百條 補汽罐ノ構造、附屬品、給水装置其ノ他ニ付テハ蒸汽機關ヲ備フル船舶ノ補汽罐ニ關スル規定ヲ適用ス但シ發動機ノ廢氣ニ依リ加熱スル補汽罐ノ安全弁ノ面積ノ算定ニ當リテハ第七十八條第一項ノ算式中定數Kハ三・三ト爲スベシ

第五章 艤裝品及備品

第二百一十一條 艤裝品ハ其ノ用途ニ應ジ適當ニ之ヲ構造スルコトヲ要ス

管海官廳必要アリト認ムルトキハ艤裝品ニ付適當ノ試験ヲ執行スルコトアルベシ  
 第二百一十二條 備品ハ左表ニ依リ之ヲ機關室又ハ船内適當ノ場所ニ備フベシ



蒸汽機關ヲ備フル船舶ノ機關備品表

名稱	航行區域					摘	要
	遠洋區域	近海區域	沿海區域	平水區域			
「ピストン」環	各一組同	上	上	上	上		
「ピストン」發條	各一組同	上	上	上	上	同形ニシテ相轉用シ得ルモノハ一組ニ止ムルコトヲ得	
「ピストン」抑環螺釘及母螺	六箇同	上三	上	上	上		
滑弁桿	各形一箇	上	上	上	上		
偏心器桿	各形一箇	上	上	上	上		
連接桿上下ノ栓受金	一桿分同	上	上	上	上		
連接桿上下ノ螺釘及母螺	一桿分同	上	上	上	上		
「クランク」軸受螺釘及母螺	各種一組同	上	上	上	上		
「ローター」軸受金	各形一組同	上	上	上	上	廢汽「タービン」用ナルトキハ之ヲ備ヘザルモ妨ナシ	
「ローター」軸受螺釘及母螺	各種一組同	上	上	上	上		
減速裝置軸受金	各形一組同	上	上	上	上		
減速裝置ノ軸受螺釘及母螺	各種一組同	上	上	上	上		

「ローター」推力受	各「タービン」ニ付一組同	上	上	上	上	同右
「ローター」軸ノ汽密環及發條	各填座毎ニ一組同	上	上	上	上	同右
接軸鈔螺釘及母螺	各種一組同	上	上	上	上	同右
單環式推力軸推力受	片面分同	上	上	上	上	
復水器管	總數ノ四十分ノ一但シテ最少十本	上	上	上	上	
復水器管填筒	總數ノ三十分ノ一但シテ最少三十箇	上	上	上	上	
抽氣「ポンプ」桿	一箇同	上	上	上	上	扇車「ポンプ」ナルトキハ桿ノ代リニ扇車軸ヲ備フベシ
抽氣「ポンプ」弁	一組同	上	上	上	上	
循環水「ポンプ」桿	一箇同	上	上	上	上	扇車「ポンプ」ナルトキハ桿ノ代リニ扇車軸ヲ備フベシ
循環水「ポンプ」弁	一組同	上	上	上	上	
給水「ポンプ」弁	一組同	上	上	上	上	
塗水「ポンプ」弁	一組同	上	上	上	上	
潤滑油「ポンプ」弁及發條	一組同	上	上	上	上	
逃出發條	各種一箇同	上	上	上	上	



給水制限弁	一組同	上同	汽罐四箇以上ナルトキハ更ニ一組増備スベシ
安全弁發條	一各罐ニ付同	上一	同形ニシテ相轉用シ得ルモノナルトキハ三箇ニ止ムルコトヲ得
火床棧	總數ノ五分同	上	汽罐四箇分ニ止ムルコトヲ得
燃油裝置用噴油器	一各罐ニ付同	上同	
微粉炭燃燒裝置用噴油器	一各罐ニ付同	上同	
微粉炭燃燒裝置用碎炭具	一組同	上	
示面計硝子管	四各罐ニ付同	上六	
管擴器	一各罐ニ付同	上	
管塞器	四各罐ニ付同	上	汽罐四箇分ニ止ムルコトヲ得
滑車及綱	二組一	組	
螺旋切道具	一組同	上	
鑽孔器	一組同	上	
輔	一各罐ニ付同	上	

發動機ヲ備フル船舶ノ機關備品表

金數	一	同	上	
据附萬力	一	同	上	
鋼板	各種若干同	上		
鋼棒	各種若干同	上		
螺釘及母螺	各種若干同	上		
機關室小道具	一揃同	上		
驗鹽器	二	同	上	湖沼ノミヲ航行スル船舶ニハ之ヲ備フルヲ要セズ
溫度計	二	同	上	

備考 汽機又ハ「ポンプ」ニシテ同形ノモノ二箇以上ヲ備フル船舶ニ在リテハ「ピストン」環乃至  
逃田弁發條ハ之ヲ汽機又ハ「ポンプ」一箇分ニ止ムルコトヲ得

航行區域	遠洋區域	近海區域	沿海區域	平水區域	摘	要
氣筒蓋弁其ノ他ノ附屬品ノ完備セルモノ	各型一組同	上	一	一	長サ五〇米以上ノ船舶ニ備フル「ディーゼル」式發動機ニ限ル	



「ピストン」完備セルモノ	「ピストン」環	噴油弁座、弁匣、發條其ノ他附屬品ノ完備セルモノ	吸氣弁座、弁匣、發條其ノ他附屬品ノ完備セルモノ	廢氣弁座、弁匣、發條其ノ他附屬品ノ完備セルモノ	噴油管及接合金具	「ピストン」冷却用伸縮嵌合管又ハ搖動管	主軸受螺釘及母螺	連接桿上下ノ栓受金	連接桿上下ノ螺釘及母螺	接軸鈔螺釘及母螺	正副空氣壓縮機ノ壓縮筒ノ「ピストン」環	正副空氣壓縮機ノ吸入弁及排出弁並ニ發條
一組同	二組一組	氣筒二箇又ハ其ノ端數ノ每ニ一組	氣筒四箇又ハ其ノ端數ノ每ニ一組	氣筒一箇每ニ一組	揃同	一組同	一組同	一桿分同	一桿分同	各種一組同	各形一組同	各形半組同
上	組	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
同右	同右	同右	同右	同右	機ニ限ル	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右

掃除空氣「ポンプ」弁及發條	噴油「ポンプ」ノ動作部	氣筒、氣筒蓋、「ピストン」等ノ冷却「ポンプ」ノ扇車軸	氣筒、氣筒蓋、「ピストン」等ノ冷却「ポンプ」弁及發條	潤滑油「ポンプ」ノ弁及發條	移油「ポンプ」ノ弁及發條	海水「ポンプ」弁	燒球	點火栓	電池	電線	始動用燈	滑車及綱
一組同	氣筒一箇每ニ一氣筒分	一	各形二組同	一	一	一	氣筒一箇每ニ一箇	氣筒一箇每ニ一箇	常用ト同數同	若干同	常用ノ外同	二組一組
上	氣筒二箇又ハ其ノ端數ノ每ニ一氣筒分	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
同右	氣筒五箇以上ナルトキハ氣筒四箇分ニ止ムルコトヲ得	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右



螺旋切道具	鑽孔器	輔	金敷	据附萬力	鋼板	鋼棒	螺釘及母螺	機關室小道具	溫度計
一 組同	一 組同	一 筒同	一 筒同	一 筒同	各種若干同	各種若干同	各種若干同	一 揃同	二 筒同
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
								上	筒同
								上	上

備考 發動機又ハ「ポンプ」ニシテ同形ノモノニ筒以上ヲ備フル船舶ニ在リテハ氣筒蓋乃至點火栓ハ之ヲ發動機又ハ「ポンプ」ニ筒分ニ止ムルコトヲ得

附則

本令ハ昭和九年三月一日ヨリ之ヲ施行ス  
 本令施行前製造シ又ハ製造ニ著手シタル機關ノ構造若ハ寸法又ハ機關ニ關スル設備ニシテ管海官廳ニ於テ差支ナシト認ムルモノニ付テハ仍從前ノ例ニ依ラシムルコトヲ得

●遞信省令第十一號〔官報號外〕

造船規程中第二編ヲ削除シ昭和九年三月一日ヨリ之ヲ施行ス

昭和九年二月一日

遞信大臣 南

弘



● 遞信省令第十四號

危險物船舶運送及貯藏規則左ノ通定ム

昭和九年二月五日

遞信大臣 南

弘

危險物船舶運送及貯藏規則

第一條 船舶ニ依ル危險物ノ運送又ハ船舶ノ常用危險物ノ貯藏ニ關シテハ本令ノ定ムル所ニ依ル但シ船舶ノ全部ヲ以テ軍事輸送ノ用ニ供スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ  
船舶ノ常用危險物ノ範圍ニ付テハ開港港則施行規則第十八條ノ規定ヲ準用ス

第二條 本令ニ於テ危險物トハ別表第一號表ニ定ムルモノヲ謂ヒ火藥類トハ同表第一號乃至第八號ニ掲グルモノヲ謂フ

第三條 火藥類ヲ貨車積ノ儘鐵道連絡ノ爲船舶ニ積ミ運送ヲ爲ス場合ニハ第二十一條及之ニ基ク第二十七條ノ罰則ノ規定ヲ除クノ外本令ヲ適用セズ火藥類鐵道運送規程ニ依ル

第四條 危險物ノ荷送人ハ危險物ノ容器及包裝ニ關シテハ別表第二號表ニ定ムル所ニ依ルベシ但シ陸海軍ノ託送ニ係ルモノハ其ノ定ムル所ニ依ルコトヲ得

船長ハ危險物ノ積付ノ方法及場所ニ關シテハ別表第二號表ニ定ムル所ニ依ルベシ

第五條 危險物ノ荷送人ハ危險物ノ容器又ハ包裝ノ外部見易キ所ニ品名(火藥類ニ在リテハ火藥、爆藥、火工品及普通火工品ノ別)ヲ朱記シ又ハ朱記シタル標札ヲ附シ且取扱上ノ注意事項ヲ表示スベシ

第六條 火藥類ハ其ノ容器、包裝及内容ノ表示ニ關シ前二條ノ規定ニ依リタルモノニ非ザレバ之ヲ船積スルコトヲ得ズ  
火藥類ノ荷送人ガ銃砲火藥類取締法施行細則ノ規定ニ依リ當該官廳ノ運搬許可證ヲ受クベキ場合ニ於テハ船長ガ其ノ許可證ヲ檢閲シタル後ニ非ザレバ之ヲ船積スルコトヲ得ズ

第七條 危險物ヲ外國ニ於テ船積シ又ハ外國ニ於テ船積シタル危險物ヲ日本ニ於テ積換フルトキハ其ノ容器、包裝及内容ノ表示ニ關シ第四條及第五條ノ規定ヲ適用セズ

第八條 火藥類(普通火工品ヲ除ク)ハ管海官廳ノ許可ヲ受ケ又ハ遞信大臣ノ認定シタル積荷ノ檢定ヲ行フ公益法人ノ檢定ヲ經タルトキニ限り之ヲ火藥庫以外ノ場所ニ積藏スルコトヲ得  
前項ノ許可ヲ受ケントスル者ハ附録書式ノ申請書二通ヲ

船積地ニ在ル管海官廳ニ提出シ當該官廳ノ指定スル所ニ從ヒ手數料ヲ納付スベシ但シ官廳又ハ公共團體ノ申請ニ係ルモノニ付テハ手數料ヲ徴收セズ

手數料ハ當該官吏ノ臨檢一回毎ニ三十圓トス  
手數料ハ其ノ金額ニ相當スル收入印紙ヲ手數料納付書ニ貼附シテ之ヲ納付スベシ

手數料ハ申請者ノ都合ニ依リ其ノ申請ヲ取下ゲタルトキト雖モ當該官吏ガ船舶ニ臨檢シタル後ナルトキハ之ヲ徴收ス

第九條 管海官廳ハ前條ノ申請アリタルトキハ當該官吏ヲシテ船舶ニ臨檢セシメ申請ヲ適當ト認ムルトキハ申請書ノ一通ニ許可ノ與書ヲ爲シ許可ヲ爲シタル年月日及官廳名ヲ記載シ官廳印ヲ押捺シ之ヲ申請者ニ還付ス

第十條 積荷ノ檢定ヲ行フ公益法人第八條第一項ノ認定ヲ受ケントスルトキハ申請書ニ左ニ掲グル事項ヲ記載シタル書面ヲ添附シテ之ヲ遞信大臣ニ提出スベシ

- 一 積荷ノ檢定ニ關スル規則
  - 二 手數料及旅費ニ關スル規則
  - 三 積荷檢定員ノ氏名及履歷
- 遞信大臣ノ認定ヲ受ケタル積荷ノ檢定ヲ行フ公益法人積荷檢定員ヲ選任セントスルトキ又ハ前項第一號若ハ第二

號ニ掲グル規定ヲ變更セントスルトキハ遞信大臣ノ認可ヲ受クベシ

遞信大臣ハ第八條第一項ノ認定ヲ爲シタルトキ又ハ其ノ認定ヲ取消シタルトキハ之ヲ告示ス

第十一條 甲板ヲ有セザル船舶旅客ヲ搭載スルトキハ火藥類ヲ船積スルコトヲ得ズ

甲板ヲ有スル船舶ト雖モ旅客ヲ搭載スルトキハ雷酸鹽(雷汞ノ類)其ノ他ノ起爆劑及爆藥ヲ裝填シタル火工品ヲ船積スルコトヲ得ズ但シ陸海軍ノ託送ニ係ルモノハ此ノ限ニ在ラズ

第十二條 湖川港内ニ於テ火藥類ノ船積若ハ陸揚ヲ爲ス船舶又ハ火藥類ヲ積藏シ湖川港内ニ於テ航行、碇泊若ハ繫留セントスル船舶ハ船積地、陸揚地、發航地、碇泊地又ハ繫留地ヲ管轄スル警察官署ニ其ノ品名及數量並ニ其ノ日時及場所ヲ届出ヅベシ

第十三條 石油類ヲ積藏スル船艙ハ他ノ船艙、機關室、石炭庫、軸路、旅客室、船員室又ハ料理室等ニ其ノ發生ガスヲ漏洩セシメザル水密隔壁其ノ他ノ設備ヲ有シ且該船艙ノ換氣管ハ二重細目金網製ヲ施シタルモノナルコトヲ要ス



石油類ヲ積藏シタル船舶内ノ電線ニハ電流ヲ通ズルコトヲ得ズ但シ船舶設備規程第二百六條ノ規定ニ依ル電氣設備ヲ有スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第十四條 危險物ノ積藏、船積又ハ陸揚中ノ船舶ニ於テハ危險ヲ及ボス惧アル修繕工事ヲ爲スコトヲ得ズ

第十五條 火藥類ハ旅客ノ乗船又ハ下船ト同時ニ船積又ハ陸揚ヲ爲スコトヲ得ズ

第十六條 火藥類ヲ船積、陸揚又ハ荷繰スルトキハ之ヲ投下シ又ハ激突セシムベカラズ

第十七條 銃砲火藥類取締法施行規則第十八條各號ニ掲グル以外ノ火藥類ハ所轄警察官署ノ許可ヲ得タル場合ヲ除クノ外日没ヨリ日出迄ノ間ニ於テ之ヲ船積、陸揚又ハ荷繰スルコトヲ得ズ

第十八條 危險物ノ船積若ハ陸揚ヲ爲ス場所又ハ之ヲ積藏シタル場所ニ於テハ裸火若ハ燐寸其ノ他發火シ易キ物品ヲ携帯シ、鐵釘ヲ附シタル靴類ヲ穿チ又ハ喫煙スルコトヲ得ズ

第十九條 火藥類及石油類其ノ他可燃ガスヲ發スル危險物ヲ積藏シタル船舶ニ於テハ安全燈ヲ除クノ外懐中電燈其ノ他ノ燈火ヲ使用スルコトヲ得ズ又當該船舶ノ閉閉ニ當リ金槌等ヲ使用スル場合ハ火花ヲ發セザル様適當ナル措

置ヲ講ズベシ

第二十條 危險物ノ船積又ハ陸揚作業ヲ中止又ハ完了シタルトキハ直ニ火藥庫又ハ船舶ヲ閉鎖スベシ

第二十一條 銃砲火藥類取締法施行規則第二十八條ノ規定ニ依リ倉庫ニ貯藏スルコトヲ得ベキ數量ヲ超過スル火藥類ヲ積藏スル船舶湖川港内ニ於テ航行、碇泊又ハ繫留スルトキハ晝間ハ赤旗ヲ夜間ハ紅燈一箇ヲ橋頭其ノ他見易キ場所ニ掲グベシ但シ船舶ノ常用火藥類及第二十四條ニ掲グル火藥類ノミヲ積藏スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第二十二條 船舶ニハ其ノ常用外ノ火藥類ヲ貯藏スルコトヲ得ズ但シ業務用トシテ貯藏スル場合又ハ銃砲火藥類取締法施行規則ノ規定ニ依リ繫留船若ハ倉庫船ニ貯藏スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第二十三條 旅客ハ火藥類ヲ携帯シテ乗船スルコトヲ得ズ但シ船長ノ許可ヲ得テ少量ノ銃用火藥類及玩具用普通火工品ヲ携帯スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第二十四條 銃用實包、銃用空包、銃用雷管、爆管、信管門管、緩燃導火線、濕藥（箱内ノ火藥又ハ爆藥ヲ爆發ノ危險ナキニ至ル迄十分濕潤ノ上箱ヲ密閉シ該箱ノ上ニ濕藥ト明記シタルモノ）、芳香系列ノ硝化物又ハ之ヲ主トスル混和物ニシテ起爆劑ヲ附セザルモノ、硝酸アンモニア

ヲ主トスル爆藥中ニトログリセリン又ハ硝化纖維素ヲ含有セザルモノニシテ起爆劑ヲ附セザルモノ、煙火及玩具

用普通火工品ニハ第十一條及第十五條ノ規定ヲ適用セズ

第二十五條 船長ハ船舶ニ積藏シタル貨物が本令ニ違反シタル惧アリト認ムルトキハ何時ト雖モ證人立會ノ上之ヲ開封シテ検査スルコトヲ得

第二十六條 管海官廳又ハ警察官署ハ危險物ノ運送及貯藏ニ關シ必要アリト認ムルトキハ何時ニテモ當該官吏ヲシテ船舶ニ臨檢セシメ且危險豫防ノ爲必要ナル處分ヲ爲サシムルコトヲ得

第二十七條 船舶所有者又ハ船長第六條、第十一條乃至第十五條、第十七條、第二十一條又ハ第二十二條ノ規定ニ違反シタルトキハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十八條 第十八條又ハ第十九條ノ規定ニ違反シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九條 第四條、第五條又ハ第二十三條ノ規定ニ違反シタル者ハ三月以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十條 地方長官ハ遞信大臣ノ認可ヲ受ケ船舶ニ依ル危險物ノ運送及貯藏ニ關シ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

附 則

第三十一條 本令ハ昭和九年三月一日ヨリ之ヲ施行ス

法 令 篇

第三十二條 明治四十四年四月遞信省令第九號火藥類船舶運送及貯藏規則ハ之ヲ廢止ス

第三十三條 第三十條ニ掲グル規定ニシテ本令施行ノ際現ニ存スルモノハ同條ニ依ル遞信大臣ノ認可ヲ受ケタルモノト看做ス

附 錄 書 式

火藥類火藥庫外積藏許可申請書

- 一 船種、船名
  - 二 國籍、船籍港
  - 三 船舶所有者名
  - 四 船積港、發航日時及陸揚港
  - 五 積藏火藥類ノ品目及數量
  - 六 積藏場所及其ノ設備
  - 七 積藏貨物ノ品目及數量
- 右火藥庫外積藏許可相成度危險物船舶運送及貯藏規則第八條ニ依リ及申請候也
- 年 月 日
- 申請人 船舶所有者又ハ船長
- 住 所(所在地)
- 氏 名(名稱)

管海官廳宛



別 表

第一 號 表

- 一 酸鹽類其ノ他ノ起爆劑  
(雷汞、雷銀、雷酸カドミニウム、窒化鉛、硫化窒素、ヂアゾパークロレート等白色、灰色又ハ黃色様物質ニシテ爆藥ノ起爆劑ニ應用セラレ爆發力強大ナルモノ)
- 二 爆藥類ヲ裝填シタル火工品  
(爆藥ヲ裝填シ又ハ加工シタル彈丸又ハ信管類ニシテ摩擦、動搖又ハ衝擊ニ對シ危險度大ナルモノ)
- 三 硝酸鹽混合火藥類  
(硝石ヲ主劑トセル粉狀、粒狀、扁平、圓柱、六稜等ノ緩性火藥類ニシテ摩擦、動搖又ハ衝擊ニ對シ危險ナルモノ)
- 四 硝基化合物火藥類  
(硝酸エステル、ニトロ化合物火藥類ヲ指稱シニトログリセリン及之ヲ主トスル爆發藥及綿藥、芳香系列ノ硝化物及之ヲ主トスル混和物等ニシテ各種ダイナマイト類、トリニトロトルオール、トリニトロフエノール、テトリール等之ニ屬ス)
- 五 鹽素酸鹽爆藥  
(綿藥又ハニトログリセリンヲ含有スルモノハ自然發火ノ危險アルヲ以テ溫度及通風ニハ特ニ注意ヲ要スベキモノ)
- 六 過鹽素酸鹽爆藥  
(スプレングル氏火藥、鹽斗藥ニシテ自然發火ノ惧アルヲ以テ溫度及通風ニ注意ヲ要スベキモノ)
- 七 火工品  
(カリソナイト、カーリット等)
- 八 普通火工品  
(爆藥ヲ裝填又ハ加工シタル火工品中比較的安全ナルモノニシテ雷管、爆管、門管、銃用實包、銃用空包等)
- (緩燃導火線、發雷信號、信號焰管、星火ヲ發スル榴彈、火箭等ノ煙火)

- 九 鹽素酸鹽類  
類似品、打上煙火、ベンガリー煙火、線香花火等ノ玩具用普通火工品)
- 十 過鹽素酸鹽類  
(鹽素酸カリ、鹽素酸ソーダ、鹽素酸バリウム等ニシテ無色結晶體ヲ成シ酸化力極メテ強ク分解スルトキハ酸素ガスヲ多量ニ放出シ衝擊又ハ摩擦ニ因リ發火シ他ノ可燃體ト混ズルトキハ其ノ程度特ニ著シキモノ)
- 十一 ニトロ染料類  
(過鹽素酸アンモン、過鹽素酸カリ、過鹽素酸ソーダ等ニシテ白色結晶體ヲ成シ其ノ性質鹽素酸鹽類ニ同ジ)
- 十二 黃磷類  
(ピクリン酸ノ如ク爆發性ヲ有スルモノ)
- 十三 金屬ナトリウム  
(帶黃白色蠟狀物質ニシテ空氣ニ接スル時ハ黃綠色ノ焰ヲ發スル有毒物)
- 十四 金屬カリウム  
(銀白色ノ軟金屬ナリ水ニ接スルトキハ反應強烈ニシテ燃燒シ苛性ナリダヲ生ズルモノ)
- 十五 磷化カルシウム  
(黃磷、石灰、木炭ヲ原料トシテ製造シタル褐色固體ニシテ水ニ接スルトキハ磷化水素ヲ生ジ自然發火スルモノ)
- 十六 硫化磷  
(白色又ハ黃色結晶様物質ニシテ硫黃ヲ含有スルヲ以テ自然發火スルモノ)
- 十七 過酸化ソーダ  
(帶黃色ノ粉末ニシテ空氣中ノ濕氣ヲ吸收發熱シ有機質ノ混在ニ因リ發火スルモノ)
- 十八 過酸化バリウム  
(白色ノ粉末ニシテ空氣中ノ濕氣ヲ吸收發熱シ有機質ノ混在ニ因リ發火スルモノ)
- 十九 カーバイド  
(白色又ハ灰色ノ塊狀ヲ成シ濕氣ニ接スルトキハ非常ニ燃燒シ易キアセチレン)



二十 晒粉

二十一 マグネシウム粉末  
二十二 ニトロセルローズ  
及其ノ製劑

チレンガスヲ發生スルモノ)

(鹽素ガスヲ消石灰中ニ吸收セシメタル白色粉末ニシテ團塊ヲ成スコトアリ鹽素類ニ類似セル強烈ナル刺激性ノ臭氣トガスヲ發散スルモノ)  
(銀色粉末ニシテ空氣中ノ濕氣ヲ吸收シテ發熱シ自然發火スルモノ)  
(ニトロセルローズハセルロイド、コロデオン等ノ原料ニシテ植物纖維素ヲ濃厚硝酸、硫酸混液ニ因リ硝化セルモノヲ謂ヒ燃焼極メテ早ク摩擦又ハ日光等ニ依リ發火ス)  
(其ノ製劑コロデオンハニトロセルローズヲアルコール、エーテルノ混和液又ハアセトンニ溶解セル無色透明粘稠ノ液ニシテ容易ニ引火シ燃焼スルモノ)

二十三 セルロイド

二十四 硝石類

(無色透明ナルモノニ顔料ヲ混ジタルモノアリ樟腦ノ香氣ヲ有シ彈力アル固體ニシテ燃焼シ易キモノ)  
(硝石、智利硝石等ニシテ白色結晶體ヲ成シ酸化力強ク容易ニ酸素ヲ放出シ發火スルモノ)

二十五 油紙油布類

二十六 酸類

(亞麻仁油等ノ乾燥性油ニ不乾燥性油及動物油ヲ混ジ塗布シタル防水紙又ハ防水布ニシテ油類ノ自己酸化ニ因リ發火スルモノ)  
發煙硫酸 (硫酸中ニ無水亞硫酸ヲ吸收セシメタルモノニシテ硫酸ニ比シ危險度高キモノ)  
強硫酸 (油狀ノ液ニシテ酸化力強ク有機質、無機質ヲ酸化シ高熱ヲ生ジ自然發火スルモノ)  
發煙硝酸 (硝酸中ニ次硝酸ヲ吸收セシメタルモノニシテ硝酸ニ比シ危

二十七 二硫化炭素

二十八 石油類

二十九 可燃性液體類

三十 壓縮ガス及液化ガス類

危險度高キモノ)

強硝酸 (無色又ハ黃褐色ノ液ニシテ強キ酸性ヲ有シ有機質ヲ酸化シ自然發火スルモノ)  
(無色又ハ帶黃色ノ液體ニシテ揮發シ易ク不快臭アリ空氣ト混ズルトキハ爆發性ヲ有シ攝氏零下二十度ニ於テ引火スルモノ)  
第一種石油、第二種石油 (未製石油及其ノ蒸溜產物又ハ變成石油ニシテアベール又ハベンスキー閉塞發焰試驗器ヲ用ヒ七百六十ミリメートルノ氣壓ニ於テ攝氏二十一度未滿ノ溫度ニテ發焰スルモノヲ第一種石油トシ二十一度以上七十度未滿ノ溫度ニテ發焰スルモノヲ第二種石油トス)  
(エーテル、メタノール、ペンゾール、トルオール、ソルベントナフサアルコール、アセトン、キシロール、テレピン油、アミールアルコール、ブチールアルコール、芳香系列ノ炭化水素等)  
アセチレンガス (カーバイドニ水ヲ作用セシメテ生ズル無色ガスニシテ爆發シ易キモノ)  
油ガス (石油類ヲ分解シテ得ラルル下級炭化水素ヲ含有スルモノニシテ燈用ガスナリ)  
水素ガス (無色無臭ノ輕キガスニシテ酸素ト混合スルトキハ爆發スルモノ)  
硫化水素ガス (硫化物ニ酸ヲ作用セシメテ得ラルルモノニシテ空氣又ハ酸素ト混合シタル場合火氣ヲ近ヅクルトキハ容易ニ爆發スルモノ)



第二號表

番號	類名	品名	容器	施封法	包	裝	法	積付ノ方
一	雷酸鹽類 起爆劑	雷汞 窒化鉛	雷酸鹽類ハ清水ヲ滿タセル 蓋附硝子器ニ收納ス 其ノ他ノ起爆劑ハ亞鉛、 銅、アルミニウム等ノ罐 木箱ノ板ハ乾キタル杉、松、 ゾ松又ハ之ト同等以上ノ強度ヲ	木製容器ニ收容シ、摩擦、 動搖又ハ火藥庫ニ積藏 法ヲ講ズ				積付ノ方 法及場所

一酸化炭素ガス (炭素ノ不完全燃焼ニ因リ生ズルモノニシテ酸素又ハ  
空氣ト混合シ火花ニ依リ爆發スルモノ)  
石炭ガス (石炭ヲ乾溜シテ得ラルルガスニシテ空氣中百分ノ八  
乃至二十三ヲ混ズルトキハ爆發性ヲ具備スルモノ)  
天然ガス (石油地帯等ニ天然ニ噴出スルガスニシテ空氣ト混ズ  
ルトキハ爆發スルモノ)  
亞硫酸ガス (無色ニシテ稍臭氣アリ熱シタル金屬類ヲガス中ニ投ズルトキハ發火ス  
ルモノ)  
アンモニアガス (特有ノ刺戟臭アルモノニシテ鹽素ガス又ハ沃度ト混ズルトキハ爆發ス  
ルモノ)  
鹽素ガス (刺戟臭ヲ有スル重キ黃色ガスニシテ腐蝕性大ナルモノ)  
酸素ガス (無色ニシテ化合力強キモノ)  
窒素ガス (無色ニシテ化合力弱キモノ)  
炭酸ガス (無色ニシテ僅カニ刺戟性アリ消火力大ナルモノ)  
亞酸化窒素ガス (無色無臭可燃性ニシテ水素ニ混ズルトキハ引火爆發スルモノ)

番號	類名	品名	容器	施封法	包	裝	法	積付ノ方
二	爆藥類 裝填シタ ル火工品	彈丸、信管	第一號ニ掲ゲル其ノ他ノ 起爆劑ニ同ジ但シ形狀ハ 巨大ナルモノニ在リテハ 摩擦、動搖又ハ衝擊ヲ豫 防シ得ル様方法ヲ講ズ	厚紙箱、布袋、紙袋、木 箱、フアイバー器等ニ收 容シ内容物ノ動搖ヲ豫防 シ密封ス	有スルモノヲ用ヒ板ノ厚サハ各 部共一・三厘以上トシ、間隔ヲ以 テ・〇・三厘ニシテ適當ノ間隔ヲ 打込ミ蓋ハ長サ三・〇厘以上 ノ釘又ハ沈頭木螺ニテ適當ノ間 隔ヲ以テ釘付ス尙必要アル場合 ハ箱ノ兩側ニハ厚サ一・五厘 以上ノ幅・三・〇厘以上ノ厚サ 又ハ・九・〇厘以上ノ厚サヲ附シ 外部ニ鐵類ヲ露出セザルコト			右ニ同ジ
三	硝酸鹽混 合火藥類	黑色有煙火 藥、褐色有煙火 藥	亞鉛、銅、アルミニウム ブリキ製等ノ罐、厚紙箱 布袋、紙袋、木箱、フアイ バー器等ニ收容シ内容物 ノ動搖ヲ豫防シ密封ス	木箱又ハ之ト同等以上ノ強度ヲ 有スル金屬罐、フアイバー製箱 得ル様適當ノ處置ヲ施ス豫防シ				右ニ同ジ
四	硝基化合 火藥類	綿業	黑色有煙火藥ニ同ジ但シ 水蓄セルモノハ漏水セザ ル様金屬罐ニ收容ス	黑色有煙火藥ニ同ジ				右ニ同ジ
	無煙火藥		黑色有煙火藥ニ同ジ	右ニ同ジ				右ニ同ジ
	ダイナマイ ト類	紙包ト爲シ内箱ニ納ム但 シ硝酸アンモン等吸濕性	右ニ同ジ	右ニ同ジ				右ニ同ジ







十九	十八	十七	十六	十五
智利硝石	過酸化バリウム	過酸化ソーダ	三硫化磷	五硫化磷
カールバイド	右ニ同ジ	右ニ同ジ	完全ナル罐詰ト爲ス	目張ヲ施ス
入り厳封シシ繩掛ト爲ス	入り厳封シシ繩掛ト爲ス	入り厳封シシ繩掛ト爲ス	入り厳封シシ繩掛ト爲ス	入り厳封シシ繩掛ト爲ス
右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ
右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ
右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ

二十四	二十三	二十二	二十一	二十
智利硝石	硝酸カリ	硝酸カリ	硝酸カリ	晒粉
麻袋ノ露出セザル二重ノ	木箱、木樽又ハドラム入	硝子壺ニ入レ嚴封ス	硝子壺ニ入レ嚴封ス	硝子壺ニ入レ嚴封ス
撒積ノ場合ヲ除ク外内	木箱ニ入レ壺ノ周圍ニ鋸屑、鉋屑、藁ノ類ヲ填充ス	堅牢ナル木製容器入トス	堅牢ナル木製容器入トス	堅牢ナル木製容器入トス
右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ
右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ
右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ







ヲ挿入シテ帽蓋ヲ完全ニ圍繞シ  
尙之ヲ徑〇・九厘以上ノ麻繩ヲ  
以テ作リタル網袋(目ノ太サ四・  
五・四厘平方以下ノモノ)又ハ籐  
製ノ籠ニ入レ其ノ口ヲ緊縛ス

備考

- 一 火薬類以外ノ危険物ニ付テハ事情ニ應ジ本表ニ定ムル事項ニ適當ナル變更ヲ加フルコトヲ妨  
グズ
- 二 本表ニ掲グル火薬庫ニハ持運式火薬庫ヲ包含ス
- 三 火薬類ノ積藏ニ付テハ左ノ各號ニ依ルベシ
  - (イ) 艙口ヨリ容易ニ接近シ得ル場所ナルコト
  - (ロ) 燃焼シ易キ貨物其ノ他爆發ノ誘因トナルベキ惧アル貨物ニ接近セシメザルコト
  - (ハ) 外板ニ接觸セル場所、震動ヲ受クル場所及旅客室、船員室、油槽、機關室、蓄電池、發電  
機、石炭庫、料理室其ノ他火氣又ハ熱氣アル場所ヲ避クルコト
  - (ニ) 他ノ貨物ノ下積ト爲サザルコト
  - (ホ) 露出セル鐵類トノ接觸ヲ避クルコト
- 四 銃砲火薬類取締法施行細則ノ規定ニ依リ別棟ノ火薬貯藏所ニ貯藏スベキモノハ之ヲ同一ノ火  
薬庫又ハ船艙ニ積藏スベカラズ
- 五 甲板ナキ船舶ニ在リテハ前項ノ火薬類ヲ同一船舶ニ積藏スベカラズ
- 六 船舶ノ常用火薬類ハ木製ノ箱ニ容レ且容易ニ取出シ得ベキ安全ナル場所ニ之ヲ貯藏スベシ
- 七 火工品中安全實包及安全空包ハ火薬類ヲ裝填セザル雷管附又ハ爆管附藥莖ト同一ノ取扱ヲ爲  
ス

遞信省令第十五號

明治三十二年五月遞信省令第十九號中左ノ通改正ス

昭和九年二月五日

遞信大臣 南

弘

第三號書式中(三)ノ第十二號ノ次ニ左ノ六號ヲ加フ

十	三	船舶安全施行規則第七十四條ニ定ムル遭難者救助ニ 赴カサリシコト
十	四	航行中開放ヲ禁セラレタル開口ヲ碇泊中閉閉シタルコ ト
十	五	石炭庫及機關室内等ノ水密戸ヲ航行中閉閉シタルコト
十	六	水密戸等ノ操作ノ操練及點檢ヲ爲シタルコト
十	七	端艇操練ヲ行ヒタルコト
十	八	補助電源ノ全能力ヲ維持シタルコト及緊急自働受信機 ヲ試験シタルコト











- 一 第二條第一項第一號乃至第六號ニ掲グル者救命艇手適任證書ノ交付ヲ申請スルトキ 二十錢
- 二 第二條第一項第七號又ハ第八號ニ掲グル者救命艇手適任證書ノ交付ヲ申請スルトキ 三十錢
- 三 救命艇手適任證書ノ再交付又ハ書換ヲ申請スルトキ 十錢

手数料ハ其ノ金額ニ相當スル收入印紙ヲ納付書ニ貼附シ

第一號書式(表)

救命艇手適任證書交付申請書

救命艇手適任證書交付相成度此段及申請候也

年 月 日

管海官廳宛

(裏)

テ之ヲ納付スベシ

第六條 本令ニ依ル事務ハ左ノ管海官廳ニ於テ之ヲ行フ  
東京遞信局、東京遞信局海事部横濱出張所、大阪遞信局、大阪遞信局海事部神戸出張所、熊本遞信局、札幌遞信局

附 則

本令ハ昭和九年三月一日之ヲ施行ス

申請人 氏

名印

氏名	本籍
出生年月日	
船員手帖番號	號
船種船名	總噸數
航行區域	職名
乘船年月日	下船年月日
在船期間	

※	年 月 日	年 月 日	年 月 日
	年 月 日	年 月 日	年 月 日
期間合計	年 月 日		

備考

救命艇手適任證書交付規則第二條第一項第一號乃至第五號ニ依リ申請スル者ハ其ノ旨

※印欄ニ記載シ乗船履歴ハ之ヲ記載スルニ及バズ

氏名ニハ片假名ヲ以テ傍訓ヲ附スベシ

第二號書式

第 號

救命艇手適任證書

本籍

氏

出生年月日

名

右者救命艇手適任證書交付規則ニ依リ救命艇手ニ適スル者ト認メ此證書ヲ付與ス

年 月 日

管海官廳名

印

備考 裏面ニ英譯ヲ附記ス



● 遞信省令第十七號

船用品取締規則左ノ通定ム  
昭和九年二月五日

遞信大臣 南 弘

船用品取締規則

目次

- 第一章 總則
- 第二章 製造免許
- 第三章 型式承認
- 第四章 檢定
- 第五章 監査
- 第六章 手数料
- 第七章 罰則

附 則

船用品取締規則

第一章 總則

第一條 法令ニ依リ船舶ニ備フベキ船用品ニシテ別表第一號ニ掲グルモノヲ製造スル者ハ當該船用品ノ型式毎ニ第二章ノ規定ニ依リ遞信大臣ノ製造免許ヲ受クルコトヲ要ス但シ船用品檢査試驗規則ニ依ル船用品合格證明書(以下

下單ニ合格證明書ト稱ス)ヲ受クル目的ヲ以テ製造スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

船用品ニ付製造免許ヲ受ケタル者(以下單ニ免許製造人ト稱ス)其ノ製造免許船用品ヲ製造シタルトキ又ハ當該船用品若ハ之ト同種類ノモノノ要部ヲ修繕シタルトキハ第四章ノ規定ニ依リ製造免許船用品檢定又ハ船用品修繕檢定ヲ受クルコトヲ要ス

第二條 前條ニ定ムル船用品ノ要部ノ修繕ハ當該船用品又ハ之ト同種類ノモノノ免許製造人ニ非ザル者ヲシテ之ヲ爲サシムルコトヲ得ズ但シ航海中其ノ他免許製造人ヲシテ修繕ヲ爲サシムルニ著シク困難ナル事情アルトキハ此ノ限ニ在ラズ

前項ノ修繕ヲ爲サシムル場合ニハ船燈ニ付テハ其ノ合格證明書又ハ船燈檢定證明書ヲ修繕人ニ提示スベシ

第一項但書ノ規定ニ依リ修繕ヲ爲シタルトキハ船舶所有者、船舶管理人、船舶借入人又ハ船長ニ於テ現品ニ付第四章ノ規定ニ依リ船用品修繕檢定ヲ受クルコトヲ要ス

第三條 別表第二號ニ掲グル船用品ニ付テハ其ノ型式毎ニ第三章ノ規定ニ依リ遞信大臣ノ型式承認ヲ受クルコトヲ得

別表第二號ニ掲ゲザル船用品ト雖モ遞信大臣ニ於テ必要

アリト認ムルモノニ付亦前項ニ同ジ

型式承認船用品ヲ製造又ハ輸入シタル者ハ第四章ノ規定ニ依リ型式承認船用品檢定ヲ受クルコトヲ得

第四條 第一條ニ定ムル船用品ハ船用品檢査試驗規則ニ依ル甲號檢印又ハ本令ニ依ル檢印ヲ附シタルモノナルコトヲ要ス

第五章 本令ニ於テ船用品ノ試驗規程ト稱スルハ船燈ニ付テハ船燈試驗規程、信號器ニ付テハ信號器試驗規程、救命器具ニ付テハ救命器具試驗規程、防毒面ニ付テハ防毒面試驗規程、消火器ニ付テハ消火器試驗規程、火災警報装置ニ付テハ火災警報裝置試驗規程、艙口覆布ニ付テハ艙口覆布試驗規程ヲ謂フ

第六條 本令ニ依リ遞信大臣ニ申請書若ハ届書ヲ提出シ又ハ證書ヲ返還スル場合ニ於テハ主タル營業所所在地ヲ管轄スル管海官廳ヲ經由スベシ

第七條 本令中船長ニ關スル規定ハ船長ニ代リテ其ノ職務ヲ行フ者ニ之ヲ適用ス

第二章 製造免許

第八條 船用品ニ付製造免許ヲ受ケントスルトキハ標本ニ付合格證明書ノ交付ヲ受ケ船用品製造免許申請書(第一號書式)ヲ遞信大臣ニ提出スベシ

前項ノ申請書ニハ事業資金額、製造所ノ設備、使用人員數、會社其ノ他ノ法人ニ在リテハ定款又ハ之ニ準ズベキモノ及代表者ノ氏名ヲ記載シタル書類並ニ當該船用品

ノ合格證明書ノ寫ヲ添附スベシ

彈榴、火箭、信號青焰、信號紅焰、救命胴衣、救命焰又ハ救命索發射器ニ關スル申請書ニハ第二十二條ノ規定ニ依リ說明書ヲモ添附スベシ尙榴彈、火箭、信號青焰、信號紅焰又ハ救命索發射器ニ關スル申請書ニハ銃砲火藥類取締法ニ依リ火藥類ノ製造ニ關スル許可ヲ受ケタルコトヲ證明スル書類ノ寫ヲモ添附スベシ

第九條 遞信大臣前條ノ申請ニ依リ船用品ノ製造ヲ免許シタルトキハ船用品製造免許證書(第二號書式)ヲ申請人ニ交付ス

船用品製造免許期間ハ五年以内トス

第十條 左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ遞信大臣ハ製造免許ヲ取消スコトアルベシ

- 一 本令ノ規定ニ違反シタルトキ
- 二 標本又ハ製造品ニ關シ不正ノ所爲アリタルトキ
- 三 製造所ノ設備ノ變更其ノ他ノ事由ニ依リ製造免許船用品ノ製造ヲ爲スニ適セズト認ムルニ至リタルトキ
- 四 銃砲火藥類取締法ニ依ル火藥類ノ製造ニ關スル許可



ヲ取消サレタルトキ

五 第十二條ニ掲グル標本ノ要部ガ當該品ノ試験規程ノ改正ニ依リ之ニ適合セザルニ至リタルトキ

六 其ノ他遞信大臣ニ於テ特ニ必要アリト認メタルトキ

第十一條 遞信大臣船用品ノ製造ヲ免許シタルトキ又ハ製造免許ヲ取消シタルトキハ之ヲ告示ス

第十二條 免許製造人ハ製造免許船用品ノ型式毎ニ合格證明書ノ交付ヲ受ケタル標本ヲ各製造所ニ保管シ且第二十條ノ規定ニ依リ製造免許船用品檢定ヲ受ケントスル遞信省管船局船舶試験所(以下單ニ船舶試験所ト稱ス)、船舶試験所支所又ハ管海官廳ニ差出スベシ

前項ノ規定ニ依リ保管シ又ハ差出シタル標本ガ滅失又ハ損傷シタルトキハ免許製造人ハ更ニ標本ヲ當該製造所ニ保管シ又ハ當該船舶試験所、船舶試験所支所若ハ管海官廳ニ差出スベシ

第一項又ハ第二項ノ規定ニ依リ差出シタル標本ハ第二十条各號ノ一ニ該當スルニ至リタルトキ之ヲ還付ス

第十三條 免許製造人ハ製造免許船用品ノ標本ノ合格證明書ニ附屬セル明細書寫(通數ハ其ノ都度指定ス)ヲ船舶試験所ニ差出スベシ

第十四條 免許製造人ハ製造品毎ニ當該官吏ノ適當ト認ム

ル方法ニ依リ船燈、信號器又ハ救命器具ニ在リテハ其ノ品名、型式、製造番號、製造人ノ氏名又ハ名稱及製造年月ヲ、船燈部分品ニ在リテハ製造番號及製造人ノ記號ヲ、救命索ニ在リテハ其ノ品名、型式、寸法、製造番號、製造人ノ氏名又ハ名稱及製造年月ヲ標示スベシ

第十五條 左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ免許製造人ハ船用品製造免許證明書ノ書換ヲ遞信大臣ニ申請スベシ

一 氏名又ハ名稱ヲ變更シタルトキ

二 主タル營業所ヲ移轉シタルトキ

三 主タル營業所ニ付行政區畫ノ名稱又ハ地番號ノ變更アリタルトキ

第十六條 左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ免許製造人ハ遞信大臣ニ之ヲ届出ヅベシ

一 事業資金額ヲ變更シタルトキ

二 會社其ノ他ノ法人ニ在リテハ定款若ハ之ニ準ズベキモノ又ハ代表者ヲ變更シタルトキ

三 營業所(主タル營業所ヲ除ク)若ハ製造所ヲ移轉若ハ増減シ又ハ製造所ノ設備ヲ變更シタルトキ

四 銃砲火藥類取締法ニ依ル火藥類ノ製造ニ關スル許可ヲ取消サレタルトキ

第十七條 免許製造人ガ死亡シタルトキハ其ノ相續人ニ限

其ノ製造ヲ繼續スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ製造ヲ繼續セントスルトキハ相續證明書ノ書換ヲ添テ船用品製造免許證明書ヲ書換テ遞信大臣ニ申請スベシ

第十八條 船用品製造免許證明書滅失若ハ毀損シタルトキハ當該免許製造人ハ船用品製造免許證明書ノ再交付ヲ遞信大臣ニ申請スベシ

第十九條 免許製造人第十五條、第十七條又ハ前條ノ規定ニ依リ船用品製造免許證明書ノ交付ヲ受クルトキハ之ト引換ニ舊證明書ヲ遞信大臣ニ返還スベシ

第二十條 左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ免許製造人又ハ船用品製造免許證明書ノ保管者ハ其ノ事由ヲ具シ遲滯ナク船用品製造免許證明書ヲ遞信大臣ニ返還スベシ

一 船用品製造免許期間満了シタルトキ

二 免許製造人廢業シタルトキ

三 免許製造人死亡シ其ノ相續人製造ヲ繼續セザルトキ

四 製造免許ヲ受ケタル法人解散シタルトキ

五 製造免許ヲ取消サレタルトキ

第二十一條 免許製造人ハ其ノ製造品ニ付製造所毎ニ每三月中ノ製造販賣高統計表(第三號書式)ヲ作成シ翌月十日迄ニ當該製造所所在地ヲ管轄スル管海官廳ニ之ヲ届出ヅ

ベシ

第二十二條 第一條ニ定ムル船用品ヲ販賣スルニ當リテハ船燈ニ在リテハ一箇毎ニ船燈檢定證明書一通ヲ、榴彈ニ在リテハ十二箇又ハ其ノ端數毎ニ略圖ヲ附シタル使用方法說明書一通及打上臺一箇ヲ、火箭、信號青焰又ハ信號紅焰ニ在リテハ十二箇又ハ其ノ端數毎ニ略圖ヲ附シタル使用方法說明書一通ヲ、救命胴衣ニ在リテハ二十箇又ハ其ノ端數毎ニ圖解ヲ附シタル著用法說明書一通ヲ、救命焰ニ在リテハ一箇毎ニ又救命索發射器ニ在リテハ一組毎ニ各略圖ヲ附シタル使用方法說明書一通ヲ添附スベシ

第二十三條 第一條ニ定ムル船用品ニシテ合格證明書ヲ有スルモノヲ販賣スルニ當リテハ船燈ニ在リテハ一箇毎ニ合格證明書ヲ添附スベシ其ノ他ノモノニ在リテハ前條ノ規定ヲ準用ス

第三章 型式承認

第二十四條 船用品ニ付型式承認ヲ受ケントスルトキハ船用品型式承認申請書(第四號書式)ヲ遞信大臣ニ提出スベシ

前項ノ申請書ニハ當該船用品ノ合格證明書ノ寫又ハ船用品檢査試驗規則ニ依ル船用品檢査試驗成績書ノ寫ヲ添附スベシ



第二十五條 遞信大臣前條ノ申請ヲ適當ト認ムルトキハ當該船用品ノ型式ヲ承認ス

第二十六條 左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ遞信大臣ハ型式承認ヲ取消スコトアルベシ

一 型式承認ヲ受ケタル船用品ノ要部ガ當該品ノ試験規程ノ制定又ハ改正ニ依リ之ニ適合セザルニ至リタルトキ

二 其ノ他遞信大臣ニ於テ特ニ必要アリト認メタルトキ

第二十七條 遞信大臣船用品ノ型式ヲ承認シタルトキ又ハ型式承認ヲ取消シタルトキハ之ヲ告示ス

第四章 檢定

第二十八條 製造免許船用品檢定又ハ型式承認船用品檢定ヲ受ケントスルトキハ申請書(第五號書式又ハ第六號書式)ヲ現品ト共ニ船舶試驗所、船舶試驗所支所又ハ製造所(當該船用品ガ輸入品ナルトキハ營業所)所在地ヲ管轄スル管海官廳ニ提出スベシ但シ型式承認船用品檢定ノ場合現品ヲ差出シ難キトキハ當該官廳ニ於テ差支ナシト認ムル場合ニ限り現品ノ所在地ニ於テ檢査ヲ受クルコトヲ得

前項ノ場合第一條ニ定ムル船燈ニ付テハ一箇毎ニ標本ノ合格證明書ニ附屬セル明細書寫ニ製造番號及製造年月ヲ

ニ檢印ヲ附シタル上、其ノ他ノモノハ其ノ儘之ヲ申請人ニ還付シ尙第一條ニ定ムル船燈ニ在リテハ其ノ合格證明書又ハ船燈檢定證明書ノ裏面ニ修繕檢定年月日及修繕箇所ヲ記載シ當該官吏捺印ノ上之ヲ申請人ニ還付ス

船用品修繕檢定ニ於テ現品ガ當該船用品ノ試験規程ニ適合セズト認メタルトキハ複線ヲ以テ檢印ヲ抹消シ之ヲ申請人ニ還付シ尙第一條ニ定ムル船燈ニ在リテハ其ノ合格證明書又ハ船燈檢定證明書ニ消印ノ上之ヲ申請人ニ還付ス

第三十二條 船燈檢定證明書ヲ滅失又ハ毀損シタル場合ニ於テハ船燈檢定證明書再交付申請書(第十號書式)ヲ船舶試驗所、船舶試驗所支所又ハ最寄管海官廳ニ提出シ船燈檢定證明書ノ再交付ヲ受クルコトヲ得

前項ノ再交付ヲ受クルコト能ハザルトキハ船燈再檢定申請書(第十一號書式)ヲ船舶試驗所又ハ船舶試驗所支所ニ提出シ現品ノ再檢定ヲ受クルコトヲ得

第三十三條 前條第二項ノ申請アリタルトキハ船舶試驗所又ハ船舶試驗所支所ハ現品ヲ檢査シ船燈試驗規程ニ適合スト認メタルトキハ更ニ檢印ヲ附シ且船燈檢定證明書ヲ交付シ現品ガ船燈試驗規程ニ適合セズト認メタルトキハ

記載シタルモノヲ添付スベシ

第二十九條 前條第一項但書ニ依リ檢査ヲ受クル者ハ當該官廳ノ指定スル所ニ從ヒ該船用品檢査ノ爲當該官吏ノ出張ニ要スル成規ノ旅費ヲ納付スベシ

第三十條 船用品修繕檢定ヲ受ケントスルトキハ申請書(第七號書式)ヲ現品ト共ニ船舶試驗所、船舶試驗所支所又ハ最寄管海官廳ニ提出スベシ此ノ場合第一條ニ定ムル船燈ニ在リテハ其ノ合格證明書又ハ船燈檢定證明書ヲ添付スベシ

第三十一條 第二十八條及前條ノ申請アリタルトキハ船舶試驗所、船舶試驗所支所又ハ管海官廳ハ現品ヲ檢査シ當該船用品ノ試験規程又ハ型式承認ニ適合スト認メタルトキハ左ノ各號ノ一ニ依リ之ヲ處理ス

一 製造免許船用品又ハ型式承認船用品ノ檢定ノ場合ニ於テハ現品ニ檢印(別記雛形)ヲ附シ之ヲ申請人ニ還付シ尙第一條ニ定ムル船燈ニ在リテハ一箇毎ニ船燈檢定證明書(第八號書式)ヲ、型式承認船用品ニ在リテハ型式承認船用品檢定證明書(第九號書式)ヲ申請人ニ交付ス

二 船用品修繕檢定ノ場合ニ於テハ第三十五條第一項ノ規定ニ依リ檢印ノ效力ヲ停止セラレタル現品ハ更ニ之

複線ヲ以テ檢印ヲ抹消シ之ヲ申請人ニ還付ス

第五章 監査

第三十四條 船舶試驗所、船舶試驗所支所又ハ管海官廳ハ隨時當該官吏ヲシテ免許製造人又ハ型式承認船用品製造人ノ營業所若ハ製造所ニ就キ第十條又ハ第二十六條ノ適用ニ關シ必要ナル監査ヲ爲サシメ若ハ船舶ニ就キ第一條及第三條ニ定ムル船用品ノ檢査ヲ爲サシムルコトヲ得

第三十五條 當該官吏ハ前條ノ監査又ハ檢査ニ當リ船用品ガ其ノ試験規程又ハ型式承認ニ適合セズト認ムルトキハ複線ヲ以テ檢印ヲ抹消スベシ但シ第一條ニ定ムル船用品ニシテ修繕ノ上當該品ノ試験規程ニ適合スル見込アルモノニ付テハ檢印ニ單線ヲ附シ其ノ效力ヲ停止スベシ

第一條ニ定ムル船燈ニ在リテハ前項ノ規定ニ依リ其ノ檢印ヲ取消シタルトキハ其ノ合格證明書又ハ船燈檢定證明書ニ消印ヲ捺シ檢印ノ效力ヲ停止シタルトキハ其ノ旨合格證明書又ハ船燈檢定證明書ノ裏面ニ記載シ當該官吏捺印スベシ

第三十六條 當該官吏ハ第三十四條ノ監査又ハ檢査ノ爲必要ト認ムルトキハ第一條又ハ第三條ニ定ムル船用品ヲ提出セシメ之ヲ試験ニ供スルコトヲ得

第六章 手数料















- 六 製造番號
  - 七 檢定成績 別記明細書ノ通
- 右船用品取締規則ニ依リ檢定シタル結果船燈試驗規程ニ適合スルモノト認ム

年 月 日

遞信省管船局船舶試驗所  
(又ハ同支所若ハ管海官廳) 名印

第九號書式

(何船檢又ハ何海檢)第 號

型式承認船用品檢定證明書

- 一 船用品型式承認番號
  - 二 船用品ノ品名、型式及箇數
  - 三 檢定申請者ノ主タル營業所及氏名又ハ名稱
  - 四 製造所ノ位置及名稱
  - 五 製造年月
  - 六 製造番號
- 右船用品取締規則ニ依リ檢定シタル結果承認型式ニ適合スルモノト認ム

年 月 日

遞信省管船局船舶試驗所 名印  
(又ハ同支所若ハ管海官廳)

第十號書式

- 一 船燈檢定證明書再交付申請書
  - 二 船用品製造免許證書ノ番號
  - 三 製造人ノ氏名又ハ名稱
  - 四 製造年月
  - 五 製造番號
  - 六 檢定官廳
  - 七 再交付申請ノ事由
- 右船用品取締規則第三十二條第一項ニ依リ船燈檢定證明書再交付申請候也

年 月 日

住所(當該官廳ヨリ通知ヲ受クベキ場所)  
申請人 氏

申請人 氏

名印

第十一號書式

船燈再檢定申請書

- 一 船燈ノ品名及型式

右船用品取締規則第三十二條第二項ニ依リ船燈再檢定申

請候也

年 月 日

住所(當該官廳ヨリ通知ヲ受クベキ場所)

申請人 氏

名印

第十二號書式

手數料納付書

手 數 料 ノ 種 別	手數料算定ノ基礎	手數料
船用品製造免許證書(交付、再交付、書換)手數料	通	圓
船燈檢定證明書再交付手數料	通	圓
製造免許船用品檢定手數料	通	圓
型式承認船用品檢定手數料	筒	錢

右 年 月 日 附申請ノ手數料トシテ納付候也

申請人 氏

名印

遞信大臣(遞信省管船局船舶試驗所、同支所又ハ管海官廳)宛



●遞信省令第十八號

船用品検査試験規則中左ノ通改正ス

昭和九年二月五日

遞信大臣 南

弘

別表第一號中船燈ノ項備考欄ヲ「無色透鏡、著色透鏡、無色圓筒形硝子、著色圓筒形硝子又ハ著色挿入硝子カ船用品取締規則ニ依ル檢印ヲ附セサルモノナルトキハ當該品ニ對スル手數料ヲ加算ス」ニ改メ取扱試験所名欄「船舶試験所」ノ次ニ「同大阪支所」ヲ加ヘ紅燈ノ次ニ

水先燈同

一箇六・〇〇

ヲ加ヘ操舵目標燈ノ次ニ

信號燈同

同

一箇五・〇〇

安全燈同

同

一箇五・〇〇

ヲ加ヘ船燈部分品ノ項ヲ

船燈部分品ノ項ヲ		船燈試験規	
無色透鏡	效力試験	一箇一〇・〇〇	試驗品ノ箇數ヲ計上 スルニハ試驗ノ爲毀 損シタルモノハ之ヲ 算入セス
著色透鏡	同	一箇五・〇〇	
無色圓筒形硝子	同	一箇一・〇〇	
著色圓筒形硝子	同	一箇五・〇〇	
著色挿入硝子	同	一箇五・〇〇	
其ノ他ノモノ	同	一箇一・〇〇	
		船舶試験所	

ニ改メ信號器ノ項取扱試験所名欄「船舶試験所」ノ次ニ「同大阪支所」ヲ加ヘ同項中

救命焰同

同

一箇一・五〇

ヲ削リ救命具及救命具部分品ノ項ヲ

救命具		救命器		救命救	
救命艇試驗及檢査	救命器具試驗規程	救命浮器	救命浮環	救命胴衣	救命索發射
發動機ヲ有セサルモノ	發動機ヲ有スルモノ	同	效力試験	同	同
一箇二〇・〇〇	一箇三〇・〇〇	一箇一〇・〇〇	同	一箇一・五〇	一箇五・〇〇
試驗品ノ箇數ヲ計上 スルニハ毀損ノ爲消 ハハ之ヲ算入セス	試驗品ノ箇數ヲ計上 スルニハ毀損ノ爲消 ハハ之ヲ算入セス	試驗品ノ箇數ヲ計上 スルニハ毀損ノ爲消 ハハ之ヲ算入セス	試驗品ノ箇數ヲ計上 スルニハ毀損ノ爲消 ハハ之ヲ算入セス	試驗品ノ箇數ヲ計上 スルニハ毀損ノ爲消 ハハ之ヲ算入セス	試驗品ノ箇數ヲ計上 スルニハ毀損ノ爲消 ハハ之ヲ算入セス
		船舶試験所		同大阪支所	







其ノ他ノモ

同

一箇一〇〇

ヲ加ヘ表ノ末尾ノ船燈ニ關スル備考、信號器ニ關スル備考及救命具ニ關スル備考ヲ削ル  
附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行前ノ依頼ニ依ル検査又ハ試験ノ手数料ニ付テハ仍  
從前ノ例ニ依ル

●遞信省令第十九號

船燈試驗規程左ノ通定ム

昭和九年二月五日

遞信大臣 南

弘

船燈試驗規程

目次

- 第一章 總則
- 第二章 油船燈
- 第一節 通則
- 第二節 檣燈
- 第三節 舷燈
- 第四節 兩色燈
- 第五節 白燈
- 第六節 紅燈

- 第七節 三色燈
- 第八節 船尾燈
- 第九節 操舵目標燈
- 第十節 信號燈
- 第十一節 安全燈
- 第三章 電氣船燈
- 第一節 通則
- 第二節 檣燈
- 第三節 舷燈
- 第四節 白燈
- 第五節 紅燈
- 第六節 三色燈
- 第七節 船尾燈
- 第八節 安全燈
- 附則
- 船燈試驗規程
- 第一章 總則
- 第一條 船燈ノ金屬部ハ銅又ハ眞鍮ヲ以テ堅牢ニ製造シ其

ノ接合部ハ密著セシメテ鐵附シ且要部ハ總テ鉄附ト爲ス  
ベシ但シ安全燈ニ在リテハ當該官吏ノ承認ヲ受ケ銅又ハ  
眞鍮以外ノ材料ヲ使用スルコトヲ得

檣燈、舷燈、甲種兩色燈、三色燈、船尾燈及信號燈ノ燈  
胴ト燈蓋及燈底トノ接合竝ニ甲種白燈及紅燈ノ燈胴ト燈  
蓋トノ接合ハ折曲抱合ト爲シ乙種兩色燈ノ燈胴ト燈蓋ト  
ノ接合ハ折曲ト爲シ甲種白燈及紅燈ノ燈胴ト燈底トノ接  
合ハ鉄附ト爲スベシ

燈胴及外部煙筒ヲ構造スル金屬板ノ周縁ニハ適當ナル眞  
鍮針金ヲ捲込ムベシ但シ乙種兩色燈、丁種白燈及操舵目  
標燈ノ燈胴及外部煙筒下部ニ在リテハ此ノ限ニ在ラズ  
船燈ニハ其ノ種類ニ應ジ適當ナル掛具、燈足又ハ通索環  
ヲ裝置スベシ

燈窓ニ堅ニ取附クル梓棒ノ徑又ハ幅ハ七ミリメートルヲ  
超ユルコトヲ得ズ

第二條 燈窓硝子及著色挿入硝子ハ有害ナル氣泡其ノ他ノ  
瑕疵ヲ有セズ且冷熱ニ堪フル品質ニシテ兩面ヲ滑ニ磨キ  
タルモノナルコトヲ要ス但シ著色透鏡、無色棗形硝子及  
無色球形硝子ノ兩面ハ磨カザルモ妨ナシ

第三條 無色透鏡ハ二・九ノ密度(公差正負〇・〇七)ヲ有  
スル無色鉛硝子ヲ以テ成ルベク薄ク製造シ内面ハ圓筒形

ト爲シ外面ニハ中央ニ一帯ノ凸形ヲ設ケ其ノ上下ニ各三  
帶ノ折形ヲ設クベシ

無色透鏡ノ形狀ハ透鏡ノ中央橫截面ノ中心ニ於ケル燈火  
ヲ該面ノ上下各一〇度ノ範圍ニ集束シ其ノ照度ハ該燈火  
ノ照度ニ比シ白燈及紅燈用透鏡ニ在リテハ上下各二・五  
度以內ノ方向ニ於テ、其ノ他ノ透鏡ニ在リテハ上下各五  
度以內ノ方向ニ於テ二倍以上ニシテ且上下各一〇度ノ方  
向ニ於テ一倍以上トナラシメ其ノ他ノ方向ニ於テハ漸次  
ニ其ノ倍率ヲ變化スルモノナルコトヲ要ス

無色透鏡ノ堅截面ノ形狀ハ各截面ニ於テ差異ナキモノナ  
ルコトヲ要ス  
無色透鏡ニハ密度測定用試験片ヲ附シ置クベシ  
無色透鏡ノ高さ及橫截面内半径ノ公差ハ各正負〇・五ミ  
リメートルトス

第四條 著色透鏡ハ著色硝子ヲ以テ成ルベク薄ク製造シ外  
面ハ球形ト爲シ内面ニハ中央ニ一箇ノ凸形ヲ設ケ其ノ周  
圍ニ九帶ノ折形ヲ設クベシ  
著色透鏡ノ形狀ハ透鏡ノ中央截面ノ中心ニ於ケル燈火ヲ  
該面ノ各側五度ノ範圍ニ集束スルモノナルコトヲ要ス  
著色透鏡ノ中央截面ノ形狀ハ各截面ニ於テ差異ナキモノ  
ナルコトヲ要ス



著色透鏡ノ徑ノ公差ハ正負〇・五ミリメートルトス

第五條 圓筒形ノ燈窓硝子及著色挿入硝子ノ厚サ、高サ及横截内面半徑ノ公差ハ各正負〇・五ミリメートルトシ無色球形硝子及無色球形硝子ノ厚サノ公差ハ正負一ミリメートルトス

第六條 著色燈窓硝子、著色挿入硝子及著色透鏡ハ適當ナル色調ヲ有シ濃度ニ不同ナク且一〇%乃至一五%ノ全透率ヲ有スルモノナルコトヲ要ス

第七條 船燈各部ノ構造及寸法ニシテ本令ニ規定ナキモノニ付テハ當該官吏ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第八條 本令ノ規定ニ該當セザル船燈ハ當該官吏ニ於テ本令ノ規定ニ該當スルモノト同一ノ效力ヲ有スト認ムルモノニ限リ之ヲ本令ニ適合スルモノト看做ス

第二章 油船燈

第一節 通則

第九條 燈籠ハ口金及燈筒ヲ裝置シタル油壺ヲ挿入シ得ルモノナルコトヲ要ス

煙筒ハ火口ノ直上ニ設クベシ  
燈窓ニ堅ニ取附クル棒棒ハ火口ノ延長線上ニ置クコトヲ得ズ

第十條 船燈ハ無風高氣温ノ場合ニ於テモ通氣十分ニシテ

燈火ガ不同ナク十分ニ燃照スル構造ノモノナルコトヲ要ス

船燈ハ風又ハ船舶ノ動搖等ニ依リ油煙ヲ生ズルコトナク又消火セザル様通氣孔ノ大サ及配置ヲ適當ニシ且飛沫ノ浸入ニ依リ光度ニ影響ヲ及ボスコトナキ構造ノモノナルコトヲ要ス

第十一條 油壺ハ燈火ガ信號燈及安全燈ニ在リテハ五時間以上、乙種兩色燈、丁種白燈及操舵目標燈ニ在リテハ八時間以上、其ノ他ノ船燈ニ在リテハ一六時間以上繼續シテ安全ニ燃照シ得ル油量ヲ貯ヘ得ルモノナルコトヲ要ス  
油壺ノ形狀ハ燈火ノ各點ヨリ燈窓ニ向フ直射光線ヲ遮斷セザルモノナルコトヲ要ス  
油壺ニハ氣孔ヲ有スル注油栓ヲ裝置シ且油壺ノ内部ニハ燈油ノ動搖ヲ防グ裝置ヲ設クベシ

第十二條 火口ノ形狀ハ一字形ニシテ第一表ニ掲グル幅ノ平燈心ニ適合スルモノナルコトヲ要ス

口金ニハ燈心調整裝置ヲ附シ引火防具及氣孔ヲ裝置スベシ但シ種油用ノモノニ在リテハ引火防具及氣孔ヲ裝置スルコトヲ要セズ

第十三條 油壺及口金ノ挿入裝置ハ口金ヲ裝置シタル油壺ヲ燈籠ニ挿入スルトキ火口ガ正規ノ位置外ニ止マル虞ナ

キモノナルコトヲ要ス

第十四條 石油燈ニハ燈筒ヲ使用スベシ燈筒ハ無色透明ナル良質ノ硝子ヲ以テ成ルベク薄ク且厚サニ不同ナク製造シ形狀及寸法ハ當該官吏ニ於テ適當ト認ムルモノナルコトヲ要ス

第十五條 反射鏡ハ燈火ノ各點ヨリ燈窓ニ向フ直射光線ヲ遮斷セザル限リ大形ト爲シ其ノ表面ハ燈火ノ最輝點ヲ中心トスル球面ノ一部ニシテ十分磨キタル後銀色鍍ヲ施シタルモノナルコトヲ要ス但シ乙種兩色燈及操舵目標燈ノ反射鏡ノ表面ハ圓筒形ト爲スコトヲ得

第十六條 油船燈ニハ石油ヲ使用スベシ但シ丁種白燈及操舵目標燈ニハ種油ヲ使用スルコトヲ得

第十七條 油船燈各部ノ寸法ハ第一表ニ依ル

第十八條 水先燈ノ構造及寸法ハ本節ノ規定ニ依ルノ外當該官吏ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第二節 橋燈

第十九條 燈窓ニハ甲種橋燈ニ在リテハ無色透鏡ヲ、乙種橋燈ニ在リテハ無色圓筒形硝子ヲ裝置スベシ

第二十條 燈窓硝子ノ各側部ニ於ケル留金ノ縁ハ該縁及燈窓硝子ノ垂直軸ヲ含ム平面ガ船燈ノ對稱面ト一一二・五度ノ角度ヲ爲ス位置ニ在ルコトヲ要ス

第二十一條 火口ハ燈籠ノ後面ニ平行ニ置キ且火口ノ後縁ノ中央ヲ燈窓硝子ノ垂直軸上ニ置クベシ

第二十二條 口金ハ普通ノ燈心及油ヲ使用シ一六時間繼續燃照後甲種橋燈ニ在リテハ一〇燭光以上、乙種橋燈ニ在リテハ七燭光以上ノ燈光ヲ發シ得ルモノナルコトヲ要ス

第二十三條 橋燈ニハ反射鏡ヲ備フベシ

第二十四條 橋燈ニハ燈窓外面ニ於テ燈蓋ト燈胴下部トノ間ニ金屬製ノ棒棒ヲ取附クベシ

第三節 舷燈

第二十五條 甲種舷燈ノ燈窓ニハ無色透鏡ヲ裝置シ其ノ内面ニ接シ左舷舷燈ニ在リテハ紅色圓筒形硝子ヲ、右舷舷燈ニ在リテハ綠色圓筒形硝子ヲ挿入スベシ

乙種舷燈ノ燈窓ニハ左舷舷燈ニ在リテハ紅色圓筒形硝子ヲ、右舷舷燈ニ在リテハ綠色圓筒形硝子ヲ裝置スベシ

第二十六條 燈窓硝子ノ後部留金ノ縁ハ該縁及燈窓硝子ノ垂直軸ヲ含ム平面ガ燈籠ノ側面ト一一二・五度ノ角度ヲ爲ス位置ニ在ルコトヲ要ス

燈窓硝子ノ前部留金ノ縁ヨリ燈籠ノ側面ニ至ル距離ハ該側面ヨリ火口ノ中心ニ至ル距離ヨリ一五ミリメートル以上小ナルコトヲ要ス

第二十七條 著色挿入硝子ノ挿入裝置ハ硝子ガ正規ノ位置



外ニ止マル虞ナク且左舷燈用ノ硝子ヲ右舷燈ニ、右舷燈用ノ硝子ヲ左舷燈ニ挿入シ得ザル構造ト爲スベシ

著色挿入硝子ニハ金屬製ノ枠ヲ取附クベシ

著色挿入硝子ノ金屬枠及挿入裝置ハ燈火ノ各點ヨリ燈窓ニ向フ直射光線ヲ遮斷セザルモノナルコトヲ要ス

第二十八條 油壺ノ挿入裝置ハ左舷燈用ノ油壺ヲ右舷燈ニ、右舷燈用ノ油壺ヲ左舷燈ニ挿入シ得ザル構造ト爲スベシ

第二十九條 火口ハ燈籠ノ側面ト一・二・五度ノ角度ヲ爲ス方向ニ置キ且火口ノ後縁ノ中央ヲ燈窓硝子ノ垂直軸上ニ置クベシ

第三十條 口金ハ普通ノ燈心及油ヲ使用シ一六時間繼續燃照後甲種燈ニ在リテハ一〇燭光以上、乙種燈ニ在リテハ五燭光以上ノ燈光ヲ發シ得ルモノナルコトヲ要ス

第三十一條 燈籠側部ノ掛具及隔板ニ取附クル突起金具ノ形狀及寸法ハ第一圖ニ依ル

隔板ノ形狀及寸法ハ第二圖乃至第四圖ニ依ル

第三十二條 舷燈ニハ反射鏡ヲ備フベシ

第三十三條 甲種燈ニハ燈窓外面ニ於テ燈蓋ト燈胴下部トノ間ニ金屬製ノ枠棒ヲ取附クベシ

第四節 兩色燈

第三十四條 甲種兩色燈ノ燈窓ニハ左舷側ニ紅色圓筒形硝子ヲ、右舷側ニ綠色圓筒形硝子ヲ裝置スベシ

乙種兩色燈ノ燈窓ニハ左舷側ニ紅色透鏡ヲ、右舷側ニ綠色透鏡ヲ裝置スベシ

第三十五條 甲種兩色燈ノ各側ノ燈窓硝子ノ後部留金ノ縁ハ該縁及燈窓硝子ノ垂直軸ヲ含ム平面ガ船燈ノ對稱面ト一・二・五度ノ角度ヲ爲ス位置ニケルコトヲ要ス

第三十六條 燈窓硝子ノ前面中央ニハ堅ニ隔障ヲ設クベシ隔障ハ燈籠ノ前面ニ銀附ト爲スベシ

甲種兩色燈ノ燈窓硝子ノ前部留金ノ幅ハ隔障中心ヨリ測リ左右各四ミリメートルヲ超ユルコトヲ得ズ

第三十七條 火口ハ燈籠ノ後面ニ平行ニ置キ且火口ノ後縁ノ中央ヲ甲種兩色燈ニ在リテハ燈窓硝子ノ垂直軸上ニ、乙種兩色燈ニ在リテハ著色透鏡ノ焦點ヲ過ギル垂直軸上ニ置クベシ

第三十八條 口金ハ普通ノ燈心及油ヲ使用シ甲種兩色燈ニ在リテハ一六時間繼續燃照後五燭光以上、乙種兩色燈ニ在リテハ八時間繼續燃照後三燭光以上ノ燈光ヲ發シ得ルモノナルコトヲ要ス

第三十九條 兩色燈ニハ反射鏡ヲ備フベシ

第五節 白燈

第四十條 燈窓ニハ甲種白燈ニ在リテハ無色透鏡又ハ無色圓筒形硝子ヲ、乙種白燈及丙種白燈ニ在リテハ無色球形硝子ヲ、丁種白燈ニ在リテハ無色球形硝子ヲ裝置スベシ

第四十一條 火口ハ其ノ中心ヲ燈窓硝子ノ垂直軸上ニ置クベシ

第四十二條 口金ハ普通ノ燈心及油ヲ使用シ一六時間繼續燃照後甲種白燈ニシテ無色透鏡ヲ裝置スルモノニ在リテハ四燭光以上、無色圓筒形硝子ヲ裝置スルモノニ在リテハ七燭光以上、乙種白燈ニ在リテハ四燭光以上、丙種白燈ニ在リテハ二燭光以上ノ燈光ヲ發シ得ルモノナルコトヲ要ス

第四十三條 甲種白燈ニハ燈窓外面ニ於テ燈蓋ト下部燈胴トノ間ニ、其ノ他ノ白燈ニハ上部燈胴ト下部燈胴トノ間ニ金屬製ノ枠棒ヲ取附クベシ

第四十四條 油壺ヲ燈底ヨリ挿入スル白燈ニ在リテハ油壺ノ逸脱ヲ防止スルニ適當ナル裝置ヲ設クベシ

第六節 紅燈

第四十五條 燈窓ニハ無色透鏡ヲ裝置シ其ノ内面ニ接シ紅色圓筒形硝子ヲ挿入スベシ

第四十六條 紅色挿入硝子ノ挿入裝置ハ硝子ガ正規ノ位置

第四節 兩色燈

第三十四條 甲種兩色燈ノ燈窓ニハ左舷側ニ紅色圓筒形硝子ヲ、右舷側ニ綠色圓筒形硝子ヲ裝置スベシ

乙種兩色燈ノ燈窓ニハ左舷側ニ紅色透鏡ヲ、右舷側ニ綠色透鏡ヲ裝置スベシ

第三十五條 甲種兩色燈ノ各側ノ燈窓硝子ノ後部留金ノ縁ハ該縁及燈窓硝子ノ垂直軸ヲ含ム平面ガ船燈ノ對稱面ト一・二・五度ノ角度ヲ爲ス位置ニケルコトヲ要ス

第三十六條 燈窓硝子ノ前面中央ニハ堅ニ隔障ヲ設クベシ隔障ハ燈籠ノ前面ニ銀附ト爲スベシ

甲種兩色燈ノ燈窓硝子ノ前部留金ノ幅ハ隔障中心ヨリ測リ左右各四ミリメートルヲ超ユルコトヲ得ズ

第三十七條 火口ハ燈籠ノ後面ニ平行ニ置キ且火口ノ後縁ノ中央ヲ甲種兩色燈ニ在リテハ燈窓硝子ノ垂直軸上ニ、乙種兩色燈ニ在リテハ著色透鏡ノ焦點ヲ過ギル垂直軸上ニ置クベシ

第三十八條 口金ハ普通ノ燈心及油ヲ使用シ甲種兩色燈ニ在リテハ一六時間繼續燃照後五燭光以上、乙種兩色燈ニ在リテハ八時間繼續燃照後三燭光以上ノ燈光ヲ發シ得ルモノナルコトヲ要ス

第三十九條 兩色燈ニハ反射鏡ヲ備フベシ

外ニ止マル虞ナキ構造ト爲スベシ

紅色挿入硝子ニハ金屬製ノ枠ヲ取附クベシ  
紅色挿入硝子ハ二箇以上ノ硝子ヲ幅七ミリメートル以下ノ金屬枠ヲ以テ堅ニ接合シタル構造ト爲スコトヲ得  
前項ノ硝子堅接合ノ金屬枠ハ火口ノ延長線ノ位置外ニ止マルコトヲ要ス

紅色挿入硝子ノ上縁及下縁ニ於ケル金屬枠ハ燈火ノ各點ヨリ燈窓ニ向フ直射光線ヲ遮斷セザルモノナルコトヲ要ス

第四十七條 火口ハ其ノ中心ヲ燈窓硝子ノ垂直軸上ニ置クベシ

第四十八條 口金ハ普通ノ燈心及油ヲ使用シ一六時間繼續燃照後一〇燭光以上ノ燈光ヲ發シ得ルモノナルコトヲ要ス

第四十九條 紅燈ニハ燈窓外面ニ於テ燈蓋ト下部燈胴トノ間ニ金屬製ノ枠棒ヲ取附クベシ

第五十條 油壺ヲ燈底ヨリ挿入スル紅燈ニ在リテハ油壺ノ逸脱ヲ防止スルニ適當ナル裝置ヲ設クベシ

第七節 三色燈

第五十一條 燈窓ニハ無色透鏡ヲ裝置シ其ノ内面ニ接シ左舷側ニ紅色圓筒形硝子ヲ、右舷側ニ綠色圓筒形硝子ヲ挿



入スベシ

第五十二條 燈窓硝子ノ各側部ニ於ケル留金ノ縁ハ該縁及燈窓硝子ノ垂直軸ヲ含ム平面ガ船燈ノ對稱面ト一一二・五度ノ角度ヲ爲ス位置ニ在ルコトヲ要ス

第五十三條 燈窓ノ前面ニハ燈窓硝子ノ垂直軸ヲ含ミ船燈ノ對稱面ト左右各二二・五度ノ角度ヲ爲ス平面内ニ中心面ヲ有スル隔障ヲ設クベシ

隔障ハ燈籠前面ニ銀附ト爲スベシ

第五十四條 著色挿入硝子ノ挿入裝置ハ硝子ガ正規ノ位置外ニ止マル虞ナク且紅色硝子ト綠色硝子トヲ挿入スル虞ナキ構造ト爲スベシ

著色挿入硝子ニハ金屬製ノ枠ヲ取附クベシ

著色挿入硝子ノ前縁ニ於ケル金屬製ノ幅ハ七ミリメートルヲ超ユルコトヲ得ズ

著色挿入硝子ノ上縁、下縁及後縁ニ於ケル金屬製枠及挿入裝置ハ燈火ノ各點ヨリ燈窓ニ向フ直射光線ヲ遮斷セザルモノナルコトヲ要ス

第五十五條 著色挿入硝子ノ前縁ニ於ケル金屬製枠ノ幅ノ中心線ハ該縁及燈窓硝子ノ垂直軸ヲ含ム平面ガ船燈ノ對稱面ト二二・五度ノ角度ヲ爲ス位置ニ在ルコトヲ要ス

第五十六條 火口ハ燈籠ノ後面ニ平行ニ置キ且火口ノ後縁

ノ中央ヲ燈窓硝子ノ垂直軸上ニ置クベシ

第五十七條 口金ハ普通ノ燈心及油ヲ使用シ一六時間繼續燃照後一〇燭光以上ノ燈光ヲ發シ得ルモノナルコトヲ要ス

第五十八條 三色燈ニハ反射鏡ヲ備フベシ

第五十九條 三色燈ニハ燈窓外面ニ於テ燈蓋ト燈胴下部トノ間ニ金屬製ノ枠ヲ取附クベシ

第八節 船尾燈

第六十條 燈窓ニハ無色圓筒形硝子ヲ裝置スベシ

第六十一條 燈窓硝子ノ各側部ニ於ケル留金ノ縁ハ該縁及燈窓硝子ノ垂直軸ヲ含ム平面ガ船燈ノ對稱面ト六七・五度ノ角度ヲ爲ス位置ニ在ルコトヲ要ス

第六十二條 火口ハ燈籠ノ後面ニ平行ニ置キ且火口ノ後縁ノ中央ヲ燈窓硝子ノ垂直軸上ニ置クベシ

第六十三條 口金ハ普通ノ燈心及油ヲ使用シ一六時間繼續燃照後四燭光以上ノ燈光ヲ發シ得ルモノナルコトヲ要ス

第六十四條 船尾燈ニハ反射鏡ヲ備フベシ

第九節 操舵目標燈

第六十五條 燈窓ニハ無色圓筒形硝子ヲ裝置スベシ

第六十六條 燈窓硝子ノ各側部ニ於ケル留金ノ縁ハ該縁及燈窓硝子ノ垂直軸ヲ含ム平面ガ船燈ノ對稱面ト九〇度ノ

角度ヲ爲ス位置ニ在ルコトヲ要ス

第六十七條 火口ハ燈籠ノ後面ニ平行ニ置キ且火口ノ後縁ノ中央ヲ燈窓硝子ノ垂直軸上ニ置クベシ

第六十八條 操舵目標燈ニハ反射鏡ヲ備フベシ

第十節 信號燈

第六十九條 燈窓ニハ無色透鏡ヲ裝置スベシ

第七十條 燈窓硝子ノ各側部ニ於ケル留金ノ縁ハ該縁及燈窓硝子ノ垂直軸ヲ含ム平面ガ船燈ノ對稱面ト二二・五度ノ角度ヲ爲ス位置ニ在ルコトヲ要ス

第七十一條 火口ハ燈籠ノ後面ニ平行ニ置キ且火口ノ中心ヲ燈窓硝子ノ垂直軸上ニ置クベシ

第七十二條 口金ハ普通ノ燈心及油ヲ使用シ五時間繼續燃照後五燭光以上ノ燈光ヲ發シ得ルモノナルコトヲ要ス

第七十三條 信號燈ニハ反射鏡ヲ備フベシ

第七十四條 遮光板ハ敏速ニ開閉シ得ルモノニシテ滑動遮光板ニ在リテハ中央ヨリ兩側ニ開クモノナルコトヲ要ス  
鍵盤ハ之ヲ押ヘ付クルニ必要ナル重量ガ四五〇グラム以上九〇〇グラム以下ニシテ其ノ作動距離ハ一〇ミリメートルヲ標準トス

第十一節 安全燈

第七十五條 燈窓ニハ無色圓筒形硝子ヲ裝置スベシ

第七十六條 安全燈内部ニハ燈火ガ直接外氣ニ通ズル部分ニ二重ノ金網ヲ設クベシ

前項ノ金網ハ徑〇・三二ミリメートル乃至〇・四〇ミリメートルノ針金ヲ使用シ一平方センチメートルニ付一四四以上ノ網目ヲ有スルモノナルコトヲ要ス

第七十七條 安全燈ハ鍵又ハ特殊ノ方法ニ依ラザレバ開放シ得ザル構造ト爲シ且結合部ノ自然的弛緩ヲ防止シ得ル適當ナル裝置ヲ備フルコトヲ要ス

第七十八條 安全燈ニハ之ヲ開放セズシテ點火シ得ル裝置ヲ設クベシ

第七十九條 安全燈ハ之ヲ高サ一・五メートルノ箇所ヨリ木床上ニ連續三回墜落セシメ異狀ヲ呈セザルモノナルコトヲ要ス

第八十條 安全燈ハ可燃性混氣中ニテ漏火セザルモノナルコトヲ要ス

第八十一條 口金ハ普通ノ燈心及油ヲ使用シ五時間繼續燃照後一・五燭光以上ノ燈光ヲ發シ得ルモノナルコトヲ要ス

第八十二條 安全燈ニハ燈窓外面ニ於テ上部燈胴ト下部燈胴トノ間ニ金屬製枠ヲ取附クベシ

前項ノ枠ハ相隣レル枠ノ外側ヲ連ネタル直線ガ燈窓



硝子ニ接觸セザル構造ト爲スコトヲ要ス  
第三章 電氣船燈  
第一節 通則

第八十三條 燈籠ハ燈蓋部ニ於テ開閉シ得ル構造ト爲スベシ  
燈籠ハ電線ヲ挿入セル部分ヨリ飛沫ガ浸入セザル構造ト爲スベシ

第八十四條 電線ハ電氣工作物規程ニ依ル第四種絶縁電線ニシテ導體ノ直徑一ミリメートル以上ノ單線又ハ公稱切斷面積〇・九平方ミリメートル以上ノ撚線ナルコトヲ要ス  
電線相互間及電線ト燈籠トノ間ノ絶縁抵抗ハ船燈毎ニ二メガオーム以上ナルコトヲ要ス

第八十五條 電球承口ハ内徑二三ミリメートルノ挿込承口ト爲シ上向ニ取附ケ且電球ガ一定ノ位置ヨリ移動セザル構造ト爲スベシ  
電球承口ノ垂直軸ハ白燈、紅燈及安全燈ニ在リテハ燈窓硝子ノ垂直軸上ニ、其ノ他ノ船燈ニ在リテハ燈窓硝子ノ垂直軸ノ後方九ミリメートルノ位置ニ在ルコトヲ要ス  
電球承口取附臺ハ亞麻仁油ヲ以テ絶縁處理ヲ爲シタル樺材又ハ櫻材ナルコトヲ要ス

第九十四條 燈窓硝子ノ後部留金ノ縁ハ該縁及燈窓硝子ノ垂直軸ヲ含ム平面ガ燈籠ノ側面ト一・二・五度ノ角度ヲ爲ス位置ニ在ルコトヲ要ス  
燈窓硝子ノ前部留金ノ縁ヨリ燈籠ノ側面ニ至ル距離ハ該側面ヨリ電球承口ノ中心ニ至ル距離ヨリ一五ミリメートル以上小ナルコトヲ要ス

第九十五條 著色挿入硝子ノ挿入裝置ハ硝子ガ正規ノ位置外ニ止マル虞ナク且左舷燈用ノ硝子ヲ右舷燈ニ、右舷燈用ノ硝子ヲ左舷燈ニ挿入シ得ザル構造ト爲スベシ  
著色挿入硝子ニハ金屬製ノ枠ヲ取附クベシ  
著色挿入硝子ノ金屬枠及挿入裝置ハ燈火ノ各點ヨリ燈窓ニ向フ直射光線ヲ遮斷セザルモノナルコトヲ要ス

第九十六條 電球ハ甲種燈ニ在リテハ四〇ワット、乙種燈ニ在リテハ二〇ワットノモノナルコトヲ要ス  
第九十七條 燈籠側部ノ掛具及隔板ニ取附クル突起金具ノ形狀及寸法ハ第一圖ニ依ル  
隔板ノ形狀及寸法ハ第五圖乃至第七圖ニ依ル

第九十八條 甲種燈ニハ燈窓外面ニ於テ燈胴上部ト燈胴下部トノ間ニ金屬製ノ枠棒ヲ取附クベシ

第四節 白燈

法令篇

第八十六條 電球ハ籠形金屬纖維ヲ使用セル眞空式白熱電球ナルコトヲ要ス

第八十七條 電氣船燈各部ノ寸法ハ第二表ニ依ル  
第八十八條 兩色燈、三種白燈、丁種白燈、水先燈及操舵目標燈ノ構造及寸法ハ本節ノ規定ニ依ルノ外當該官吏ノ適當ト認ムル所ニ依ル  
第二節 橋燈

第八十九條 燈窓ニハ無色圓筒形硝子ヲ裝置スベシ  
第九十條 燈窓硝子ノ各側部ニ於ケル留金ノ縁ハ該縁及燈窓硝子ノ垂直軸ヲ含ム平面ガ船燈ノ對稱面ト一・二・五度ノ角度ヲ爲ス位置ニ在ルコトヲ要ス

第九十一條 電球ハ甲種橋燈ニ在リテハ四〇ワット、乙種橋燈ニ在リテハ二〇ワットノモノナルコトヲ要ス  
第九十二條 橋燈ニハ燈窓外面ニ於テ燈胴上部ト燈胴下部トノ間ニ金屬製ノ枠棒ヲ取附クベシ  
第三節 舷燈

第九十三條 甲種舷燈ノ燈窓ニハ無色圓筒形硝子ヲ裝置シ其ノ内面ニ接シ左舷燈ニ在リテハ紅色圓筒形硝子ヲ、右舷燈ニ在リテハ綠色圓筒形硝子ヲ挿入スベシ  
乙種舷燈ノ燈窓ニハ左舷燈ニ在リテハ紅色圓筒形硝子ヲ、右舷燈ニ在リテハ綠色圓筒形硝子ヲ裝置スベシ

第九十九條 燈窓ニハ無色圓筒形硝子ヲ裝置スベシ  
第一百條 電球ハ甲種白燈ニ在リテハ四〇ワット、乙種白燈ニ在リテハ二〇ワットノモノナルコトヲ要ス  
第一百一條 白燈ニハ燈窓外面ニ於テ上部燈胴ト下部燈胴トノ間ニ金屬製ノ枠棒ヲ取附クベシ  
第五節 紅燈

第一百二條 燈窓ニハ無色圓筒形硝子ヲ裝置シ其ノ内面ニ接シ紅色圓筒形硝子ヲ挿入スベシ  
第一百三條 紅色挿入硝子ノ挿入裝置ハ硝子ガ正規ノ位置外ニ止マル虞ナキ構造ト爲スベシ  
紅色挿入硝子ニハ金屬製ノ枠ヲ取附クベシ  
紅色挿入硝子ハ二箇以上ノ硝子ヲ幅七ミリメートル以下ノ金屬枠ヲ以テ堅ニ接合シタル構造ト爲スコトヲ得  
紅色挿入硝子ノ上縁及下縁ニ於ケル金屬枠ハ燈火ノ各點ヨリ燈窓ニ向フ直射光線ヲ遮斷セザルモノナルコトヲ要ス

第一百四條 電球ハ四〇ワットノモノナルコトヲ要ス  
第一百五條 紅燈ニハ燈窓外面ニ於テ上部燈胴ト下部燈胴トノ間ニ金屬製ノ枠棒ヲ取附クベシ  
第六節 三色燈

第一百六條 燈窓ニハ無色圓筒形硝子ヲ裝置シ其ノ内面ニ接

第六節 三色燈

法令篇



シ左舷側ニ紅色圓筒形硝子ヲ、右舷側ニ綠色圓筒形硝子ヲ挿入スベシ

第七條 燈窓硝子ノ各側部ニ於ケル留金ノ縁ハ該縁及燈窓硝子ノ垂直軸ヲ含ム平面ガ船燈ノ對稱面ト一・二・五度ノ角度ヲ爲ス位置ニ在ルコトヲ要ス

第八條 燈窓ノ前面ニハ燈窓硝子ノ垂直軸ヲ含ミ船燈ノ對稱面ト左右各二・五度ノ角度ヲ爲ス平面内ニ中心面ヲ有スル隔障ヲ設クベシ

隔障ハ燈籠前面ニ銀附ト爲スベシ

第九條 著色挿入硝子ノ挿入裝置ハ硝子ガ正規ノ位置外ニ止マル虞ナク且紅色硝子ト綠色硝子トヲ挿違スル虞ナキ構造ト爲スベシ

著色挿入硝子ニハ金屬製ノ枠ヲ取附クベシ

著色挿入硝子ノ前縁ニ於ケル金屬枠ノ幅ハ七ミリメートルヲ超ユルコトヲ得ズ

著色挿入硝子ノ上縁、下縁及後縁ニ於ケル金屬枠及挿入裝置ハ燈火ノ各點ヨリ燈窓ニ向フ直射光線ヲ遮斷セザルモノナルコトヲ要ス

第十條 著色挿入硝子ノ前縁ニ於ケル金屬枠ノ幅ノ中心線ハ該縁及燈窓硝子ノ垂直軸ヲ含ム平面ガ船燈ノ對稱面ト二・五度ノ角度ヲ爲ス位置ニ在ルコトヲ要ス

第十一條 電球ハ四〇ワットノモノナルコトヲ要ス

第十二條 三色燈ニハ燈窓外面ニ於テ燈胴上部ト燈胴下部トノ間ニ金屬製ノ枠ヲ取附クベシ

第七節 船尾燈

第十三條 燈窓ニハ無色圓筒形硝子ヲ裝置スベシ

第十四條 燈窓硝子ノ各側部ニ於ケル留金ノ縁ハ該縁及燈窓硝子ノ垂直軸ヲ含ム平面ガ船燈ノ對稱面ト六七・五度ノ角度ヲ爲ス位置ニ在ルコトヲ要ス

第十五條 電球ハ二〇ワットノモノナルコトヲ要ス

第八節 安全燈

第十六條 燈窓ニハ無色圓筒形硝子ヲ裝置スベシ

第十七條 蓄電池ヲ使用スル安全燈ニ在リテハ顛倒シタル場合電液ノ流出セザルモノナルコトヲ要ス

第十八條 電池ノ容量ハ五時間以上有效ニ點燈シ得ルモノナルコトヲ要ス

第十九條 開閉器其ノ他電氣的接續部ハ防焰密閉室内ニ在ルコトヲ要シ開閉器ハ外部ヨリ操作シ得ルモノナルコトヲ要ス

第二十條 安全燈ハ鍵又ハ特殊ノ方法ニ依ラザレバ開放シ得ザル構造ト爲シ且結合部ノ自然的弛緩ヲ防止シ得ル適當ナル裝置ヲ備フルコトヲ要ス

第二十一條 安全燈ニハ損傷又ハ故障ニ依リ漏火セザル様適當ナル「フューズ」其ノ他ノ安全裝置ヲ設クベシ

第二十二條 安全燈ハ之ヲ高サ一・五メートルノ箇所ヨリ木床上ニ連續三回墜落セシメ異狀ヲ呈セザルモノナルコトヲ要ス

墜落試験ノ際ニハ電池ヲ等型等重ノ他ノモノト交換スル

モ妨ナシ

第二十三條 安全燈ハ可燃性混氣中ニテ點滅ノ際漏火セザルモノナルコトヲ要ス

第二十四條 電球ハ五ワット以上ノモノナルコトヲ要ス

第二十五條 安全燈ニハ燈窓外面ニ於テ上部燈胴ト下部燈胴トノ間ニ金屬製枠ヲ取附クベシ

前項ノ枠ハ相隣レル枠ノ外側ヲ連ネタル直線ガ燈窓硝子ニ接觸セザル構造ト爲スコトヲ要ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

昭和四年六月遞信省令第十九號船燈試驗規程ハ之ヲ廢止ス



油 燈 第 二 表 法 寸 法 表

燈 類	光 燈 障	射 光 度	型 種	燈 罩		子 子		燈 罩 寸 法		火 口 寸 法								
				種 類	透 視 面 角 度	透 視 面 角 度	透 視 面 角 度	透 視 面 角 度	透 視 面 角 度	透 視 面 角 度	透 視 面 角 度	透 視 面 角 度						
甲種燈	5海里以上	225°	第一種	無色圓筒形	230°	115	180	6	300	300	340	0.60	320	0.45	32	0.45	—	
			第二種	無色圓筒形	230°	95	165	6	230	230	330	0.50	320	0.45	32	0.45	—	
乙種燈	3海里以上	225°	—	無色圓筒形	230°	95	130	6	230	230	280	0.45	260	0.45	25	0.45	—	
甲種燈	2海里以上	112.5°	第一種	無色圓筒形	125°	125	180	3	260	260	340	0.60	320	0.45	32	0.45	—	
			第二種	無色圓筒形	125°	105	165	3	210	210	330	0.60	320	0.45	32	0.45	—	
乙種燈	1海里以上	112.5°	—	無色圓筒形	125°	100	130	3	200	200	280	0.45	260	0.45	25	0.45	—	
甲種兩色燈	1海里以上	112.5°	—	無色圓筒形	115°	100	130	3	220	220	280	0.45	260	0.45	25	0.45	—	
乙種兩色燈	1海里以上	—	—	無色圓筒形	—	—	122	—	160	160	190	0.40	200	0.40	15	0.35	—	
甲種白燈	3海里以上	360°	第一種	無色圓筒形	360°	92	165	6	260	260	320	0.60	320	0.45	32	0.45	—	
			第二種	無色圓筒形	360°	95	165	6	260	260	320	0.60	320	0.45	32	0.45	—	
乙種白燈	2海里以上	360°	—	無色圓筒形	360°	—	200	4	—	—	190	0.40	200	0.45	25	0.45	—	
丙種白燈	1海里以上	360°	—	無色圓筒形	360°	—	220	4	—	—	280	0.45	260	0.45	25	0.45	—	
丁種白燈	—	360°	—	無色圓筒形	360°	—	160	4	—	—	260	0.40	260	0.45	32	0.45	—	
三色燈	2海里以上	90°	第一種	無色圓筒形	230°	115	180	3	300	300	340	0.60	320	0.45	32	0.45	—	
			第二種	無色圓筒形	230°	95	165	3	230	230	330	0.50	320	0.45	32	0.45	—	
船尾燈	2海里以上	135°	—	無色圓筒形	140°	85	130	5	220	220	280	0.45	260	0.45	25	0.45	—	
操舵目標燈	—	180°	—	無色圓筒形	185°	65	100	3	160	160	190	0.40	200	0.45	15	0.35	25	0.40
信號燈	—	45°	—	無色圓筒形	50°	95	165	—	230	230	280	0.45	260	0.45	15	0.35	—	
安全燈	—	360°	—	無色圓筒形	360°	95	165	5	—	—	—	—	—	—	15	0.35	—	

電 氣 船 燈 寸 法 表

燈 類	光 燈 障	射 光 度	型 種	燈 罩		子 子		燈 罩 寸 法		火 口 寸 法							
				種 類	透 視 面 角 度	透 視 面 角 度	透 視 面 角 度	透 視 面 角 度	透 視 面 角 度	透 視 面 角 度	透 視 面 角 度	透 視 面 角 度					
甲種燈	5海里以上	225°	第一種	無色圓筒形	230°	115	180	6	300	300	340	0.60	320	0.45	32	0.45	—
			第二種	無色圓筒形	230°	95	165	6	230	230	330	0.50	320	0.45	32	0.45	—
乙種燈	3海里以上	225°	—	無色圓筒形	230°	95	130	6	230	230	280	0.45	260	0.45	25	0.45	—
甲種燈	2海里以上	112.5°	第一種	無色圓筒形	125°	125	180	3	260	260	340	0.60	320	0.45	32	0.45	—
			第二種	無色圓筒形	125°	105	165	3	210	210	330	0.60	320	0.45	32	0.45	—
乙種燈	1海里以上	112.5°	—	無色圓筒形	125°	100	130	3	200	200	280	0.45	260	0.45	25	0.45	—
甲種白燈	3海里以上	360°	—	無色圓筒形	360°	95	165	6	—	—	260	0.40	260	0.45	32	0.45	—
乙種白燈	2海里以上	360°	—	無色圓筒形	360°	95	130	6	—	—	260	0.40	260	0.45	32	0.45	—
紅 燈	2海里以上	360°	—	無色圓筒形	360°	95	165	6	—	—	260	0.40	260	0.45	32	0.45	—
三色燈	2海里以上	90°	第一種	無色圓筒形	230°	115	180	3	300	300	340	0.60	320	0.45	32	0.45	—
			第二種	無色圓筒形	230°	95	165	3	230	230	330	0.50	320	0.45	32	0.45	—
船尾燈	2海里以上	135°	—	無色圓筒形	140°	85	130	3	220	220	280	0.45	260	0.45	25	0.45	—
安全燈	—	360°	—	無色圓筒形	360°	95	165	5	—	—	—	—	—	—	15	0.35	—



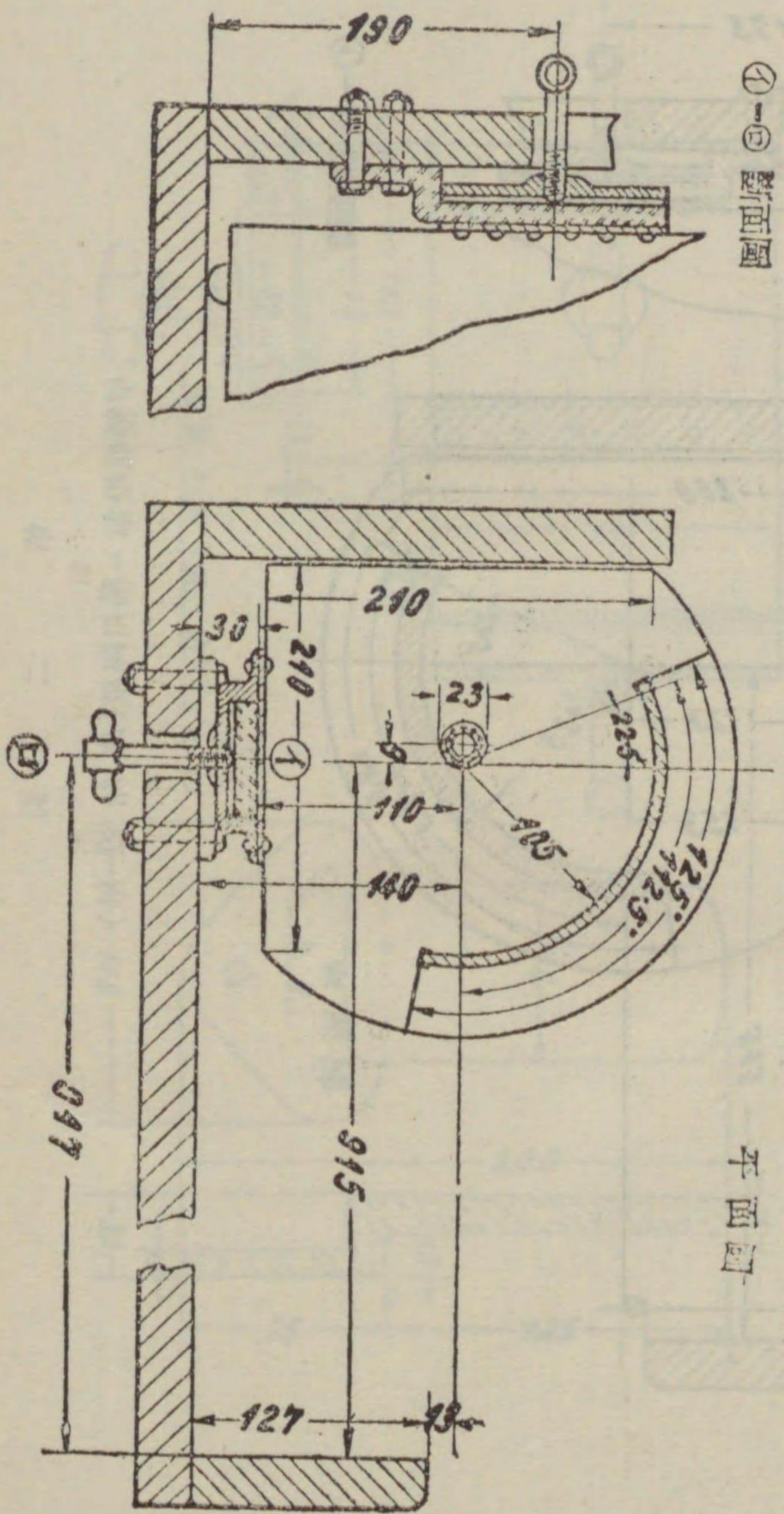




第 三 圖

甲種舷燈第二種用隔板(油 船 燈 用)

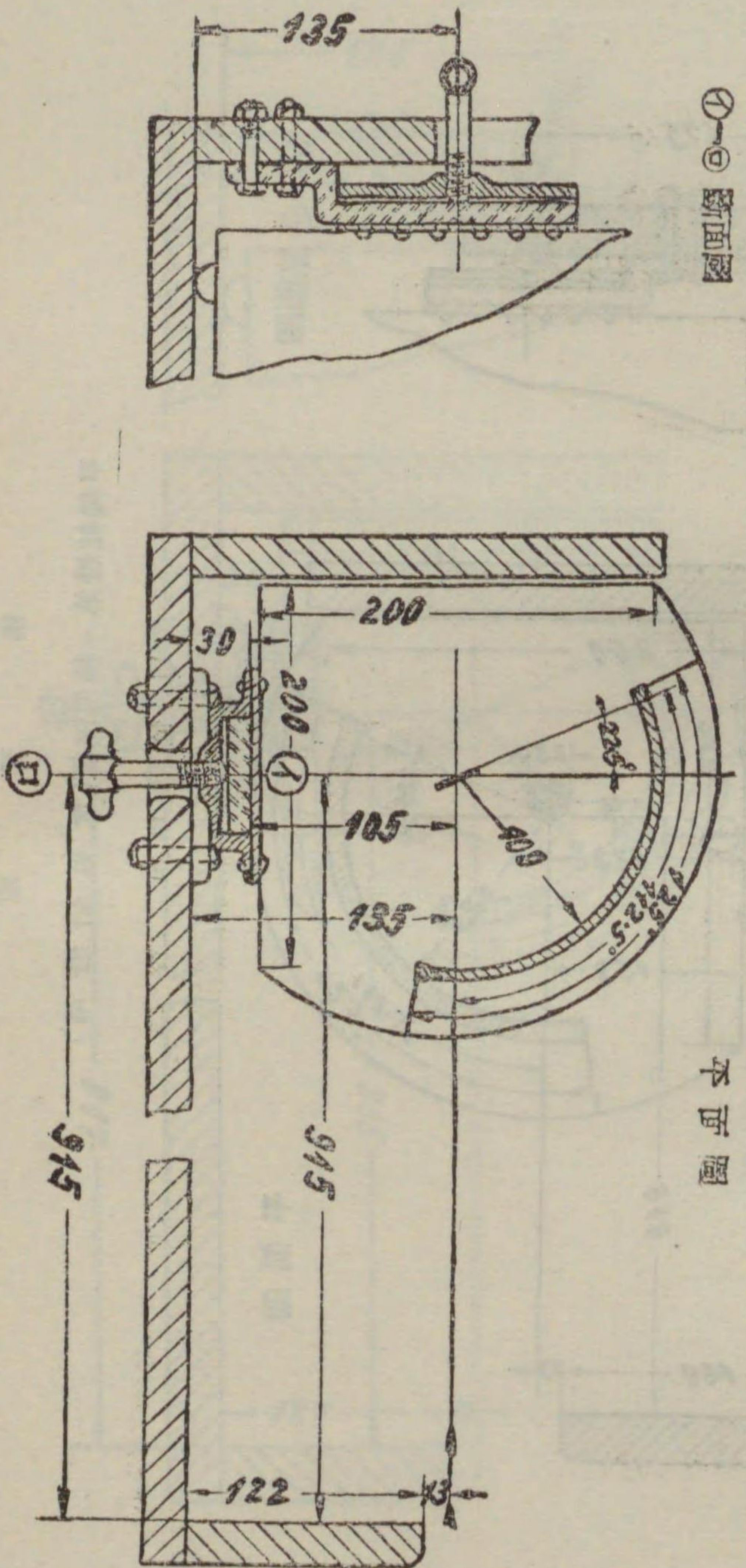
單 位 m m



第 四 圖

乙種舷燈用隔板(油 船 燈 用)

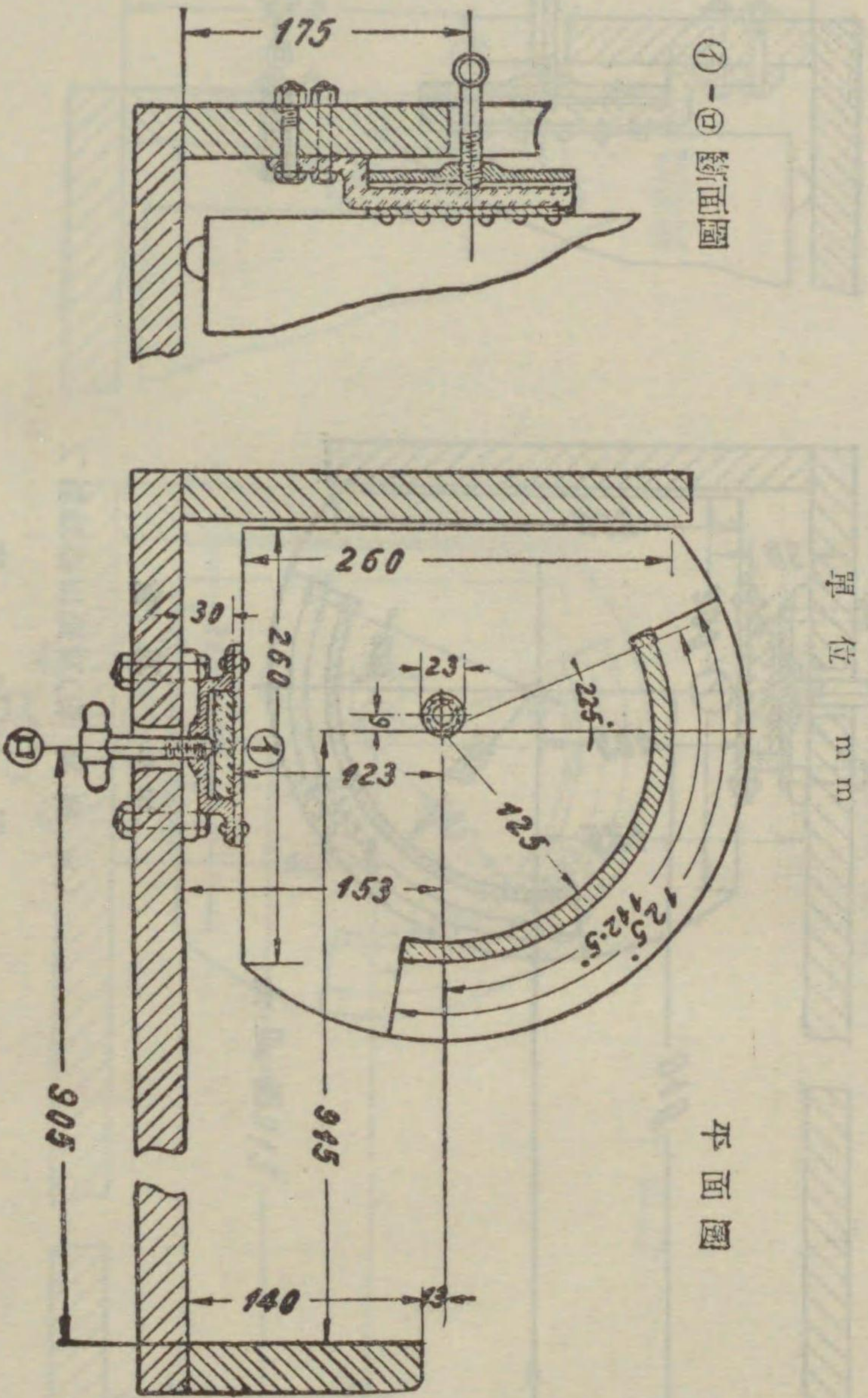
單 位 m m





第 五 圖

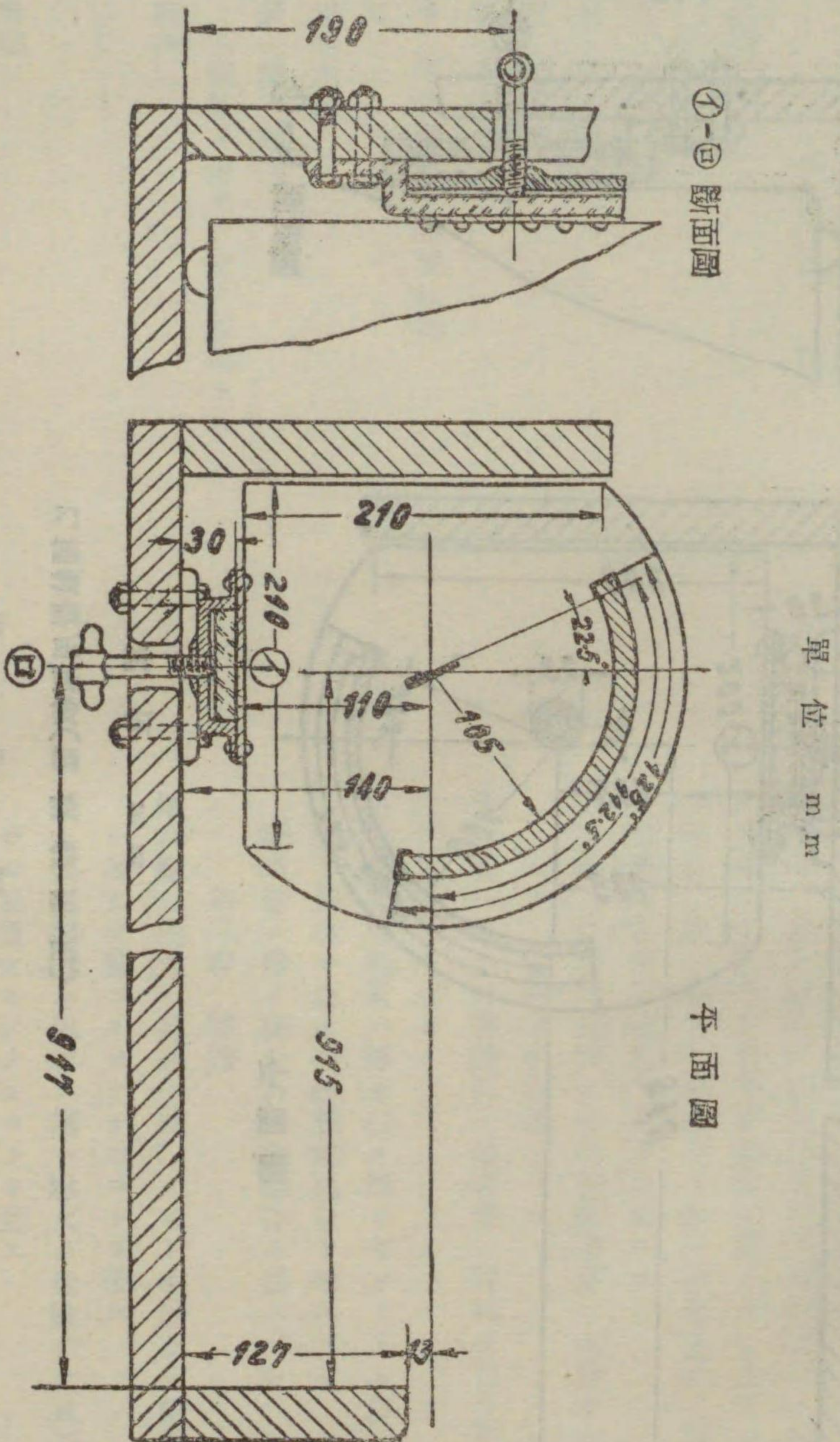
甲種較燈第一種用隔板(電氣船燈用)



單位 m m

第 六 圖

甲種較燈第二種用隔板(電氣船燈用)



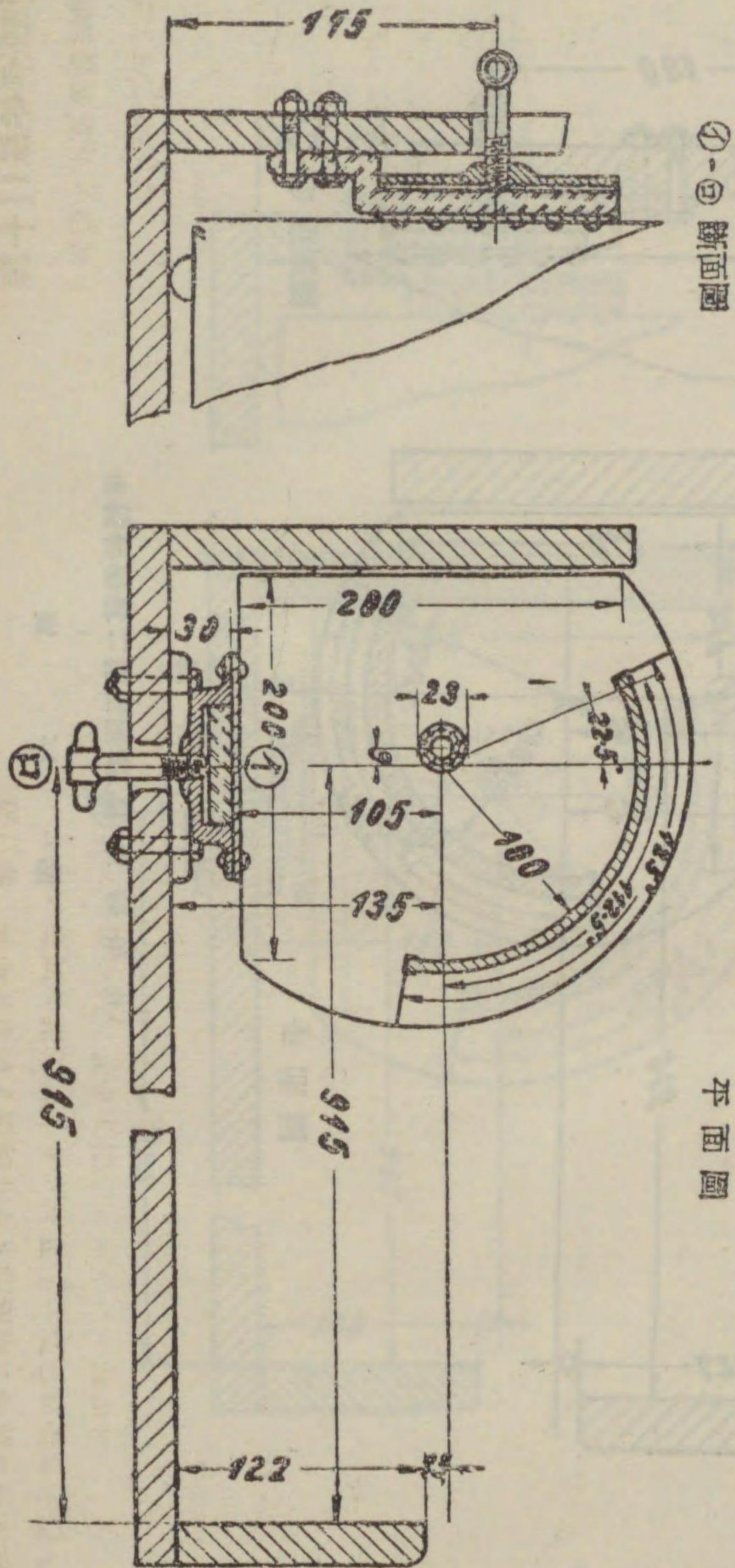
單位 m m



第七圖

乙種舷燈用隔板(電氣船燈用)

單位 m m



●遞信省令第二十號

信號器試驗規程左ノ通定ム

昭和九年二月五日

遞信大臣 南

弘

信號器試驗規程

目次

- 第一章 總則
- 第二章 霧中號角
- 第三章 榴彈
- 第四章 火箭
- 第五章 信號青焰及信號紅焰

附則

信號器試驗規程

第一章 總則

第一條 信號器ヲ分チテ左ノ五種トス

- 霧中號角
- 榴彈
- 火箭
- 信號青焰
- 信號紅焰

法令篇

第二條 本令ノ規定ニ該當セザル信號器ハ當該官海ニ於テ本令ノ規定ニ該當スルモノト同一ノ效力ヲ有スト認ムルモノニ限リ之ヲ本令ニ適合スルモノト看做ス

第二章 霧中號角

第三條 霧中號角ハ手動ヲ以テ一海里以上ノ距離ニ達スル

音響ヲ六秒時以上連續發聲シ得ルモノナルコトヲ要ス

第四條 霧中號角ノ構造及寸法ハ本章各條ノ規定ニ依ルノ

外當該官吏ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第五條 風室ハ良質ノ革及無節堅質ノ木材ヲ以テ製造シ革

ト板トハ銅鋳ニテ固著スベシ

第六條 歌口ハ眞鍮其ノ他適當ノ材料ヲ以テ製造シ之ヲ風

室ニ固著スベシ

第七條 喇叭管ハ厚サ〇・四ミリメートル以上ノ亜鉛板ヲ

以テ製造シ之ニ眞鍮製螺込口ヲ附スベシ

喇叭管ノ縱ノ接合ハ折曲抱合ト爲スベシ

第三章 榴彈

第八條 榴彈ハ昇高一五〇メートル以上ノ箇所ニ於テ爆發

シ星火ヲ發スルモノナルコトヲ要ス

第九條 榴彈ハ保存ニ堪ヘ點火ニ危險ナク且不時ニ發火セ

ザル品質ノモノナルコトヲ要ス

第十條 榴彈ニハ取附位置ヲ異ニセル自發點火裝置及豫備



點火裝置ヲ納メ置クベシ  
 自發點火裝置ハ雷管式ニシテ之ニ長サ二メートル以上ノ  
 強靱ナル引索ヲ附スベシ  
 豫備點火裝置ハ之ニ點火シタル後榴彈ガ昇騰ヲ開始スル  
 迄ニ三秒時以上ノ餘裕アルモノナルコトヲ要ス  
 第十一條 榴彈ノ打揚筒ハ破裂セザル構造ノモノナルコト  
 ヲ要ス  
 第十二條 榴彈ノ底部ニハ之ヲ打揚臺ニ挿込ム爲徑三〇ミ  
 リメートル長サ四〇ミリメートルノ突起ヲ設クルコトヲ  
 要ス  
 打揚臺ハ眞鍮ヲ以テ製造シタル内徑三一ミリメートル、  
 深サ四〇ミリメートル以上、厚サ五ミリメートルノ圓筒  
 ニシテ木甲板又ハ手摺ニ之ヲ取附クル爲ノ鑿ヲ有スルモ  
 ノナルコトヲ要ス  
 第十三條 榴彈ハ一箇毎ニ防濕塗料ヲ施シ且硫酸紙ヲ以テ  
 包裝シ「アラビヤ」護謨ニテ密封スベシ  
 第十四條 火箭ハ箭竿ト共ニ昇騰シ高サ一五〇メートル以  
 上ノ箇所ニ於テ爆發シ星火ヲ發スルモノナルコトヲ要ス  
 第十五條 火箭ハ保存ニ堪ヘ點火ニ危險ナク且不時ニ發火  
 セザル品質ノモノナルコトヲ要ス

第四章 火箭

第十六條 火箭ニハ荒天ニ於テモ點火シ得ル適當ナル點火  
 裝置ヲ納メ置クベシ  
 第十七條 内筒ハ厚サ〇・四ミリメートル以上ノ亜鉛鍍鐵  
 鋼板ヲ以テ製造シ其ノ縱接合ハ折曲抱合鑲附ト爲スベシ  
 第十八條 箭竿ノ材料及寸法ハ當該官吏ノ適當ト認ムルモ  
 ノナルコトヲ要ス  
 箭竿挿ハ厚サ〇・四ミリメートル以上ノ亜鉛鍍鐵鋼板ヲ  
 以テ製造シ適當ナル銅線ヲ以テ筒ニ縛著シ置クベシ  
 箭竿挿ト銅線トハ鑲附ト爲スベシ  
 第十九條 火箭ハ一箇毎ニ防濕塗料ヲ施シ且硫酸紙ヲ以テ  
 包裝シ「アラビヤ」護謨ニテ密封スベシ  
 第五章 信號青焰及信號紅焰  
 第二十條 信號青焰ハ一二〇燭光以上ヲ有スル青色ノ焰ヲ  
 信號紅焰ハ一二〇燭光以上ヲ有スル紅色ノ焰ヲ三分時  
 以上連續發焰シ得ルモノナルコトヲ要ス  
 第二十一條 信號青焰及信號紅焰ハ保存ニ堪ヘ點火ニ危險  
 ナク且不時ニ發火セザル品質ノモノナルコトヲ要ス  
 第二十二條 信號青焰及信號紅焰ニハ自發點火裝置及豫備  
 點火裝置ヲ納メ置クベシ  
 第二十三條 信號青焰及信號紅焰ハ一箇毎ニ防濕塗料ヲ施  
 シ且硫酸紙ヲ以テ包裝シ「アラビヤ」護謨ニテ密封スベシ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス  
 昭和四年六月遞信省令第二十號信號器試驗規程ハ之ヲ廢止  
 ス

遞信省令第二十一號

救命器具試驗規程左ノ通定ム

昭和九年二月五日

遞信大臣 南

弘

救命器具試驗規程

救命器具試驗規程

第一章 總則

第一條 救命器具ヲ分チテ左ノ七種トス

- 目次
- 第一章 總則
- 第二章 救命艇
  - 第一節 通則
  - 第二節 第一級救命艇
  - 第三節 第二級救命艇
  - 第四節 發動機附救命艇
  - 第五節 救命艇ノ容積及面積
  - 第六節 定員
  - 第七節 雜則
- 第三章 救命筏
- 第四章 救命浮器

- 一 救命艇
  - 二 救命筏
  - 三 救命浮器
  - 四 救命浮環
  - 五 救命胴衣
  - 六 救命焰
  - 七 救命索發射器
- 第二條 本令ノ規定ニ該當セザル救命器具ハ當該官吏ニ於  
 テ本令ノ規定ニ該當スルモノト同一ノ效力ヲ有スト認ム  
 ルモノニ限り之ヲ本令ニ適合スルモノト看做ス
- 第二章 救命艇
- 第一節 通則
- 第三條 救命艇ヲ分チテ左ノ五種トス



- 一 第一級甲型救命艇 内部浮體ノミヲ有シ固定舷側ヲ有スル無甲板救命艇
- 二 第一級乙型救命艇 内部浮體及外部浮體ヲ有シ固定舷側ヲ有スル無甲板救命艇
- 三 第二級甲型救命艇 内部浮體及外部浮體ヲ有シ舷側ノ上部ヲ疊込ミ得ル無甲板救命艇
- 四 第二級乙型救命艇 固定水密舷塔又ハ疊込ミ得ル水密舷塔ヲ有スル有甲板救命艇
- 五 發動機附救命艇 第一級救命艇ニシテ發動機ヲ備フルモノ
- 第四條 救命艇ハ其ノ構造適當ニシテ海上ニ於テ十分ナル復原性ヲ有シ且人及艤裝品ヲ滿載シタルトキ十分ノ乾舷ヲ有スルモノナルコトヲ要ス
- 救命艇ハ人及艤裝品ヲ滿載シテ之ヲ安全ニ水面ニ卸シ得ルニ十分ナル強力ヲ有スルモノナルコトヲ要ス
- 第五條 救命艇ノ浮力ハ其ノ使用ニ先チ艇體ノ主要部分ニ付特別ノ操作ヲ要セズシテ得ラルモノナルコトヲ要ス
- 第六條 救命艇ノ重量ハ人及艤裝品ヲ滿載シタル場合ニ〇・三〇〇キログラムヲ超ユルコトヲ得ズ
- 第七條 救命艇ノ容積ハ三・五立方メートル未滿ナルコトヲ得ズ

- 第八條 第六節ノ規定ニ依リ算出シタル定員ガ一〇〇人以上トナルベキ救命艇ハ發動機附救命艇ト爲スコトヲ要ス
- 第九條 救命艇ノ内部浮體ニハ左ノ各號ノ條件ニ適合スル金屬製水密空氣箱ヲ使用スベシ
  - 一 空氣箱ハ厚サ〇・六〇ミリメートル以上ノ良質ノ銅板、黃銅板又ハ當該官吏ノ適當ト認ムル耐久材料ニテ構成スルコト(亞鉛板、亞鉛鍍鐵鋼板又ハ銅鍍鐵鋼板ヲ使用スルコトヲ得ズ)
  - 二 空氣箱ノ長サハ一二〇センチメートルヲ超エザルコト
  - 三 空氣箱ニハ波形ノ金屬板ニテ構成スルモノヲ除キ其ノ長サ一〇〇センチメートルヲ超ユルモノナルトキハ補強ノ爲空氣箱内部ニ仕切板ヲ設クルコト
  - 四 空氣箱ヲ構成スル金屬板ノ繼目ハ幅一〇ミリメートル以上ノ二重折曲抱合ト爲シ且ク槌打シ且銀附スルコト但シ端部ノ繼目ハ折曲ト爲スモ妨ナキコト
  - 五 空氣箱ヲ波形ノ金屬板ニテ構成スル場合ニハ繼目ニ於ケル波形ノ部分ニ裂痕ノ發生スルコトヲ防止スル爲空氣箱ヲ構成スルニ先チ板ヲ十分撓鈍スルコト
  - 六 空氣箱ニハ之ニ木製ノ仕切板ヲ取附クル等ノ爲穿孔セザルコト

- 七 空氣箱ハ每平方センチメートル〇・七キログラムノ空氣壓ヲ以テ試験シ空氣ノ漏洩セザルモノナルコト
- 八 空氣箱ノ表面ニハ煮沸セル亞麻仁油又ハ良質ノ「ワニス」若ハ當該官吏ノ適當ト認ムル塗料ヲ塗布スルコト
- 九 空氣箱ヲ取附クルニハ之ヲ鐵鋼部ニ接觸セシメザルコト
- 第十條 救命艇ノ外部浮體ハ左ノ各號ノ條件ニ適合スルモノナルコトヲ要ス
  - 一 外部浮體ハ「コルク」又ハ之ト同等ノ效力ヲ有スル材料ヲ以テ構成スルコト(「コルク」層若ハ散粒狀材料ヲ使用スルコトヲ得ズ)
  - 二 外部浮體ヲ構成スル「コルク」ハ之ヲ良質ノ防水帆布ヲ以テ包ミタル上適當ノ塗料ヲ塗布スルコト
  - 三 外部浮體ハ空氣ニ依リ膨脹セシメラレタルモノナラザルコト
  - 四 「コルク」以外ノ材料ヲ以テ構成シタル外部浮體ノ容積及配置ハ救命艇ノ浮力及復原性ガ「コルク」製浮體ヲ備フル場合ト同等トナル様之ヲ定ムルコト
  - 五 外部浮體ハ救命艇ヲ卸ストキ船側ニ接スルモ裂損ヲ生ズルコトナキ形狀ト爲シ其ノ下縁ガ救命艇ノ滿載吃

- 水線ヨリ稍高キ位置ニ在ル様之ヲ艇體ニ取附クルコト
- 六 外部浮體ハ各舷三箇ヲ連續シタルモノト爲シ必要ニ應ジ艇體ヨリ取外シ得ルモノナルコト
  - 第二節 第一級救命艇
    - 第十一條 第一級救命艇ノ船首材及船尾材ニ於テ測リタル舷弧ノ高サノ平均ハ艇ノ長サノ四%以上ナルコトヲ要シ其ノ水密空氣箱ノ配置ハ荒天ノ際滿載狀態ニテ艇ノ復原性ヲ確保シ得ルモノナルコトヲ要ス
    - 第十二條 第一級甲型木製救命艇ノ水密空氣箱ノ容積ハ艇ノ容積ノ一〇%以上ナルコトヲ要ス
    - 第十三條 第一級乙型木製救命艇ノ水密空氣箱ノ容積ハ艇ノ容積ノ七・五%以上、「コルク」製外部浮體ノ容積ハ艇ノ容積ノ三・三%以上ナルコトヲ要ス
    - 第十四條 第一級金屬製救命艇ニ在リテハ其ノ浮力ガ第十條又ハ前條ノ規定ニ依ル第一級木製救命艇ト同等トナル様浮體ノ容積ヲ定ムベシ
  - 第三節 第二級救命艇
    - 第十五條 第二級甲型救命艇ノ疊込舷側ハ水密ナルコトヲ要ス
    - 第十六條 第二級甲型救命艇ノ長サノ中央ノ舷側ニ於ケル固定艇體ノ上面ヨリ測リタル乾舷ハ滿載狀態ニ於テ淡水



中ニテ左表ニ掲グルモノヨリ小ナラザルコトヲ要ス

救命艇ノ長サ (米)	最小乾舷 (耗)
七・九〇	二〇〇
八・五〇	二二五
九・一五	二五〇

備考

救命艇ノ長サガ表ニ掲グルモノニ該當セザルトキハ挿問法ニ依リ最小乾舷ヲ求ムベシ

第十七條 第二級甲型木製救命艇ノ水密空氣箱ノ容積ハ定員一人ニ付四三立方デシメートル以上、「コルク」製外部浮體ノ容積ハ定員一人ニ付六立方デシメートル以上ナルコトヲ要ス

第十八條 第二級甲型金屬製救命艇ニ在リテハ其ノ浮力ガ前條ノ規定ニ依ル第二級甲型木製救命艇ト同等ナル様浮體ノ容積ヲ定ムベシ

第十九條 第二級乙型救命艇ハ栓孔ヲ有セザルモノニシテ甲板上ヨリ水ヲ排除スルニ有效ナル装置ヲ備フルモノナルコトヲ要シ且甲板ノ形狀ニ應ジ左ノ各號ノ一ニ適合スルモノナルコトヲ要ス

三 船首材及船尾材ニ於テ測リタル舷弧ノ高サノ平均ガ艇ノ長サノ三%ヨリ小ナルトキハ最小乾舷ハ表ニ掲グルモノニ艇ノ長サノ三%ト該平均トノ差ノ一四・三%ヲ加ヘタルモノト爲スベシ

第四節 發動機附救命艇

第二十條 發動機附救命艇ハ左ノ各號ノ條件ニ適合スルモノナルコトヲ要ス

- 一 第一級救命艇ニ關スル規定ニ適合シ且發動機、探照燈及無線電信設備並ニ其ノ附屬物ノ重量ト此等ヲ除キタルトキ艇ニ追加收容シ得ベキ人員ノ重量トノ差ヲ補フニ足ル様十分ニ浮體ノ容積ヲ増加スルコト
- 二 發動機及其ノ附屬物ハ荒天狀態ニ於テモ確實ニ操作シ得ル様適當ニ之ヲ蔽圍スルコト
- 三 後退ノ爲メノ裝置ヲ備フルコト
- 四 速力ハ滿載狀態ニテ平水ニ於テ一時間ニ付六海里以上ナルコト
- 五 一〇〇人以上ノ定員ヲ有スル發動機附救命艇ニ在リテハ浮體ノ容積ヲ該當官吏ノ適當ト認ムル所ニ從ヒ増加スルコト

第五節 救命艇ノ容積及面積

第二十一條 第一級救命艇ノ容積(立方メートルニテ)ハ

- 一 四甲板救命艇ニ在リテハ四甲板ノ面積ハ甲板全面積ノ三〇%以上ト爲シ四甲板ノ水面上ノ高サハ其ノ最低箇所ニ於テ艇ノ長サノ〇・五%以上、其ノ兩端ニ於テ艇ノ長サノ一・五%以上ト爲シ且乾舷ハ三五%以上ノ豫備浮力ヲ供スルモノト爲スコト
- 二 平甲板救命艇ニ在リテハ艇ノ長サノ中央ノ舷側ニ於ケル甲板ノ上面ヨリ測リタル乾舷ハ滿載狀態ニ於テ淡水中ニテ左表ニ掲グルモノヨリ小ナラザルコト

救命艇ノ深サ	耗	最小乾舷 (耗)
三一〇	七〇	
四六〇	九五	
六一〇	一三〇	
七六〇	一六五	

備考

- 一 救命艇ノ深サハ長サノ中央ニ於テ龍骨翼板ノ下面ヨリ舷側ニ於ケル甲板ノ上面迄ノ垂直距離トス
- 二 救命艇ノ深サガ表ニ掲グルモノニ該當セザルトキハ挿問法ニ依リ最小乾舷ヲ求ムベシ

左ノ算式ニ依リ算定スベシ

$$\text{深さ} = \frac{1}{12} (4A + 2B + 4C)$$

ハ船首材ニ於ケル外板ノ内面ヨリ船尾ノ形狀尖形ナルトキハ船尾材ニ於ケル外板ノ内面迄、方形ナルトキハ船尾横板ノ内面迄測リタル救命艇ノ長サ(メートルニテ)

A、B及Cハ左ノ一端ヨリ順次其ノ四分ノ一、二分ノ一及四分ノ三ノ箇所ニ於ケル艇體ノ横截面積(平方メートルニテ)

第二十二條 前條ノ横截面積(平方メートルニテ) A、B及Cハ夫々左ノ算式ニ依リ算定スベシ

$$\text{面積} = \frac{h}{12} (a + 4b + 2c + 4d + e)$$

ハ外板ノ面積ニ於テ龍骨ヨリ舷端迄測リタル當該横截面ノ深サ(メートルニテ)  
a 及 e ハハノ兩端ニ於ケル外板ノ内面ヨリ内面迄ノ幅(メートルニテ)  
b、c 及 d ハハノ一端ヨリ順次其ノ四分ノ一、二分ノ一及四分ノ三ノ箇所ニ於ケル外板ノ内面ヨリ内面迄ノ幅(メートルニテ)



前項ノ算式ニ依リ横截面ヲ算定スルニ當リテハ左ノ規定ニ依ルベシ

- 一 横截面積A又ハCノ算定ニ於テ當該横截面ニ於ケル舷弧ノ高サガ艇ノ長サノ一%ヲ超ユルトキハ超過部分ニ相當スル面積ハ之ヲ横截面積ニ算入スベカラズ
- 二 中央横截面積Bノ算定ニ於テ當該横截面ニ於ケル舷端迄ノ深サガ最大内法幅ノ四五%ヲ超ユルトキハ超過部分ニ相當スル面積ハ之ヲ横截面積ニ算入スベカラズ
- 三 前號ノ場合横截面積A又ハCノ算定ニ於テ當該横截面ニ於ケル舷端迄ノ深サガ中央横截面ノ最大内法幅ノ四五%ニ艇ノ長サノ一%ヲ加ヘタルモノヲ超ユルトキハ超過部分ニ相當スル面積ハ之ヲ横截面積ニ算入スベカラズ

第二十三條 發動機附救命艇ノ容積ハ第二十一條ノ規定ニ依ル容積ヨリ發動機、探照燈及無線電信設備並ニ其ノ附屬物ノ占ムル容積ヲ控除シタルモノトス

第二十四條 第二級甲型救命艇ノ固定舷側内ノ面積(平方メートルニテ)又ハ第二級乙型救命艇ノ甲板面積(平方メートルニテ)ハ左ノ算式ニ依リ算定スベシ

$$\text{面積} = \frac{1}{12} (2a + 1.5b + 4c + 1.5d + 2e)$$

第二十六條 第一級救命艇ノ定員ハ其ノ容積(立方メートルニテ)ヲ左表ニ掲グル單位容積ニテ除シ、第二級救命艇ノ定員ハ固定舷側内又ハ甲板ノ面積(平方メートルニテ)ヲ左表ニ掲グル單位面積ニテ除シ之ヲ定ムベシ

救命艇ノ種類	單位容積又ハ單位面積
第一級甲型救命艇	〇・二八三立方メートル
第一級乙型救命艇	〇・二五五立方メートル
第二級救命艇	〇・三二五平方メートル

第二十七條 有甲板救命艇ニ在リテハ座席設備ニ相當スル人員ガ前條ノ定員ヨリ大ナルトキハ當該官吏ハ實地試験ノ上其ノ定員ヲ増加スルコトヲ得但シ甲板面積平方メートル數ヲ〇・二八〇ニテ除シテ得タル數ヲ超ユルトコトヲ得ズ

前項ノ試験ニ於テ四甲板救命艇ノ側部ニ於ケル甲板ノ高マリタル部分ハ之ヲ座席ニ充ツルコトヲ得

第二十八條 救命艇ノ定員ハ前二條ノ規定ニ拘ラズ必要ニ應ジ左ノ各號ノ規定ニ依リ之ヲ制限スベシ

- 一 前二條ノ規定ニ依ル定員ガ座席設備ニ相當スル人員ヨリ多キトキハ定員ヲ座席設備ニ相當スル人員ニ止ム

ハ外板ノ外面ト船首材トノ交點ヨリ船尾材ニ於ケル之ニ相當スル點迄ノ長サ(メートルニテ)

第二十五條 第一級救命艇ノ容積(立方メートルニテ)ハ當該官吏ニ於テ差支ナシト認ムルトキハ第二十一條ノ規定ニ依ラズ左ノ算式ニ依リ算定スルコトヲ得

船首材ニ於ケル外板ノ外面ヨリ船尾ノ形狀尖形ナルトキハ船尾材ニ於ケル外板ノ外面迄、方形ナルトキハ船尾横板ノ外面迄測リタル救命艇ノ長サ(メートルニテ)

Bハ艇體最廣部ニ於ケル外板ノ外面ヨリ外面迄測リタル救命艇ノ幅(メートルニテ)

Cハ艇ノ長サノ中央ニ於テ龍骨ニ於ケル外板ノ内面ヨリ舷端迄測リタル救命艇ノ深サ(メートルニテ)

前項ノ算式ニ依リ容積ヲ算定スルニ當リテハDガBノ四五%ヲ超ユルトキハDノ値ハBノ四五%ニ止ム

第六節 定員

ベシ此ノ場合座席設備ニ相當スル人員ハ總員ニ當席シタルトキ權ノ使用ヲ妨ゲザル様之ヲ決定スベシ

第二級救命艇ニ在リテハ滿載狀態ニ於ケル乾舷ガ第十六條又ハ第十九條ニ規定スル乾舷ヨリ小ナルトキハ該規定ニ適合スル迄定員ヲ減少スベシ

第三十條 救命艇ノ實地試験ハ救命胴衣ヲ着用シタル大人ヲ搭載シテ之ヲ行フベシ

第二十九條 鋭尖ナル兩端ヲ有スル救命艇又ハ形狀著シク肥滿セル救命艇ノ定員ノ算定ハ當該官吏ノ適當ト認ムル方法ニ依ル

第三十一條 救命艇ニハ其ノ舷側ノ外周ニ沿ヒ長サ六一センチメートル毎ニ一箇ノ把握部ヲ有スル把索ヲ取附クベシ

第七節 雜則

有甲板救命艇ノ乾舷ノ検査ハ定員一人ニ付七五キログラムノ重量ヲ積載シテ之ヲ行フベシ



前項ノ把握部ノ中央ハ救命艇ノ満載吃水線ニ近キコトヲ要ス

第三十二條 救命艇ニハ明瞭且耐久ノ文字ヲ以テ左ノ各號ノ標示ヲ爲スベシ

一 型式承認番號(型式承認ヲ受ケタルモノニ限ル)

二 製造番號

三 寸法(第二十五條第一項ニ示スL、B及D)

四 定員

五 重量(満載状態ノ重量)

六 製造年月

七 製造者ノ氏名又ハ名稱

第三章 救命筏

第三十三條 救命筏ノ定員ハ該救命筏ノ甲板面積平方メートル數ヲ〇・三七二ニテ除シタル數及浮體ノ全容積立方デシメートル數ヲ八五ニテ除シタル數ノ中何レカ小ナルモノヲ超ユルコトヲ得ズ

第三十四條 救命筏ハ上下何レノ面ヲ上ニシテ浮ベタル場合ニ於テモ有效ニシテ定員一人ニ付七五キログラムノ割合ノ鐵片ヲ其ノ重心ガ筏ノ甲板面ヨリ〇・六メートルノ位置ニ在ル様ニ搭載シ且屬具ヲ搭載シタル場合相當ノ復原性及乾舷ヲ保持スルモノナルコトヲ要ス

テ構成スルコト(亜鉛板、亜鉛鍍鐵鋼板又ハ銅鍍鐵鋼板ヲ使用スルコトヲ得ズ)

二 空氣箱ノ長サハ一二〇センチメートルヲ超エザルコト

三 空氣箱ニハ波形ノ金屬板ニテ構成スルモノヲ除キ其ノ長サガ七五センチメートルヲ超ユルモノナルトキハ補強ノ爲空氣箱内部ニ仕切板又ハ支肘ヲ設クルコト

四 空氣箱ヲ構成スル金屬板ノ縫目ハ幅一〇ミリメートル以上ノ折曲抱合ト爲シ良ク槌打シ且鎖附スルコト但シ端部ノ縫目ハ折曲ト爲スモ妨ナキコト

五 空氣箱ヲ波形ノ金屬板ニテ構成スル場合ニハ縫目ニ於ケル波形ノ部分ニ裂痕ノ發生スルコトヲ防止スル爲空氣箱ヲ構成スルニ先チ板ヲ十分ニ燒鈍スルコト

六 空氣箱ニハ之ニ木製ノ仕切板又ハ支肘ヲ取附タル等ノ爲穿孔セザルコト

七 空氣箱ハ每平方センチメートル〇・一〇キログラムノ空氣壓ヲ以テ試験シ空氣ノ漏洩セザルモノナルコト

八 空氣箱ノ表面ニハ煮沸セル亞麻仁油又ハ良質ノ「ワニス」若ハ當該官吏ノ適當ト認ムル塗料ヲ塗布スルコト

九 空氣箱ヲ取附クルニハ之ヲ鐵鋼部ニ接觸セシメザル

第三十五條 救命筏ハ之ヲ使用スルニ先チ特別ノ操作ヲ要セズ且容易迅速ニ取扱ヒ得ルモノナルコトヲ要ス

第三十六條 救命筏ハ構造堅牢ニシテ船舶ノ甲板ヨリ之ヲ投下スルモノニ在リテハ救命筏搭載甲板ヨリ該船舶ノ最低航海吃水線迄ノ高サニ等シキ高サヨリ水面ニ墜落セシメ異狀ヲ呈セザルモノナルコトヲ要シ機械的裝置ニ依リ進水セシムルモノニ在リテハ其ノ強力ハ當該官吏ノ適當ト認ムルモノナルコトヲ要ス

第三十七條 救命筏ノ重量ハ七五〇キログラムヲ超ユルコトヲ得ズ但シ機械的裝置ニ依リ進水セシムル救命筏ニ在リテハ此ノ限ニ在ラズ

第三十八條 救命筏ノ浮體ハ水密ナル空氣箱又ハ當該官吏ニ於テ適當ト認ムル浮力材料ヨリ成ルコトヲ要シ浮體ノ浮力ガ空氣ニ依ルモノナル場合ニハ膨脹セシムル必要ナキモノナルコトヲ要ス

第三十九條 浮體ハ出來得ル限り救命筏ノ側部ニ近ク之ヲ配置スルコトヲ要ス

第四十條 金屬製空氣箱ハ左ノ各號ノ條件ニ適合スルモノナルコトヲ要ス

一 空氣箱ハ厚サ〇・六〇ミリメートル以上ノ良質ノ銅板又ハ黃銅板若ハ當該官吏ノ適當ト認ムル耐久材料ニ

コト

第四十一條 浮體ハ包箱又ハ包枠ヲ以テ之ヲ防護シ動カザル様取附クルコトヲ要ス

第四十二條 救命筏ノ主枠組ニ使用スル木材ハ堅材ナルコトヲ要ス

浮體ヲ防護スル爲ノ包箱、包枠又ハ甲板ニ使用スル木材ハ柔材ナルモ妨ナシ

第四十三條 救命筏ハ其ノ兩面ニ木材、帆布其ノ他適當ナル材料ニテ造リタル固定又ハ疊込ノ舷塔ヲ備フルコトヲ要ス

第四十四條 救命筏ニハ當該官吏ノ適當ト認ムル位置ニ五箇以上ノ櫂架孔ヲ設クルコトヲ要ス

第四十五條 救命筏ニハ其ノ周邊ニ沿ヒ周邊ノ長サ三〇・五センチメートル毎ニ一箇ノ把握部ヲ有スル二列ノ把握部ヲ其ノ一ハ浮體ノ頂面ヨリ稍下部ニ、他ハ浮體ノ底面ヨリ稍上部ニ取附クルコトヲ要ス

前項ノ把握部ハ良質ノ「マニラ」索ニシテ徑一二ミリメートル以上ノモノナルコトヲ要シ把握部ニハ外徑四センチメートル長サ一〇センチメートルノ木製浮子ヲ附スルコトヲ要ス

第四十六條 救命筏ニハ左ノ各號ノ條件ニ從ヒ繫索ヲ備フ



ルコトヲ要ス

一 繫索ノ長サハ救命筏ヲ搭載スル甲板ヨリ該船舶ノ最低航海吃水線迄ノ高サニ二メートルヲ加ヘタルモノ以上ナルコト但シ一八メートルヨリ長キコトヲ要セザルコト

二 繫索ハ良質ノ「マニラ」索トシ其ノ大サハ救命筏ノ重量五〇〇キログラム以下ノモノニ在リテハ徑二四ミリメートル以上、五〇〇キログラムヲ超ユルモノニ在リテハ徑三〇ミリメートル以上ナルコト

三 繫索ヲ救命筏ニ取附クルニハ救命筏ニ堅牢ニ取附ケタル亜鉛鍍セル鍊鐵製又ハ鋼製ノ鑲附螺釘及母螺其ノ他適當ノ方法ニ依ルコト

四 前號ノ鑲附螺釘ノ鑲材ノ徑ハ徑二四ミリメートルノ繫索ニ對シテハ一一ミリメートル、徑三〇ミリメートルノ繫索ニ對シテハ一六ミリメートルナルコト

第四十七條 救命筏ニハ明瞭且耐久ノ文字ヲ以テ左ノ各號ノ標示ヲ爲スベシ

一 型式承認番號(型式承認ヲ受ケタルモノニ限ル)

二 製造番號

三 定員

四 重量

五 墜落試験ノ高サ

六 製造年月

七 製造者ノ氏名又ハ名稱

第四章 救命浮器

第四十八條 救命浮器ノ定員ハ該救命浮器ノ全浮力キログラム數ヲ一四・五ニテ除シタル數及周邊ノ長サセンチメートル數ヲ三〇・五ニテ除シタル數ノ中何レカ小ナルモノヲ超ユルコトヲ得ズ

第四十九條 救命浮器ハ上下何レノ面ヲ上ニシテ浮ベタル場合ニ於テモ有效ニシテ任意ノ邊ニ長サ三〇・五センチメートルニ付七・五キログラムノ割合ノ鍍片ヲ把索ニ吊シタルトキ相當ノ復原性及乾舷ヲ保持スルモノナルコトヲ要ス

第五十條 救命浮器ハ之ヲ使用スルニ先チ特別ノ操作ヲ要セズ且機械的裝置ナクシテ容易迅速ニ取扱ヒ得ルモノニシテ必要ニ應ジ之ヲ搭載セル甲板ヨリ水面ニ投下シ得ルモノナルコトヲ要ス

第五十一條 救命浮器ノ幅ハ一〇五センチメートル以上ナルコトヲ要ス

第五十二條 救命浮器ハ構造堅牢ニシテ之ヲ搭載スル甲板ヨリ該船舶ノ最低航海吃水線迄ノ高サニ等シキ高サヨリ

板ヲ使用スルコトヲ得ズ

二 空氣箱ノ長サハ一一二〇センチメートルヲ超エザルコト

三 空氣箱ニハ波形ノ金屬板ニテ構成スルモノヲ除キ其ノ長サガ七五センチメートルヲ超ユルモノナルトキハ補強ノ爲空氣箱内部ニ仕切板又ハ支肘ヲ設クルコト

四 空氣箱ヲ構成スル金屬板ノ繼目ハ幅一〇ミリメートル以上ノ折曲抱合ト爲シ良ク槌打シ且ツ鑲附スルコト但シ端部ノ繼目ハ折曲ト爲スモ妨ナキコト

五 空氣箱ヲ波形ノ金屬板ニテ構成スル場合ニハ繼目ニ於ケル波形ノ部分ニ裂痕ノ發生スルコトヲ防止スル爲空氣箱ヲ構成スルニ先チ板ヲ十分ニ燒鈍スルコト

六 空氣箱ニハ之ニ木製ノ仕切板又ハ支肘ヲ取附クル等ノ爲穿孔セザルコト

七 空氣箱ハ每平方センチメートル〇・一〇キログラムノ空氣壓ヲ以テ試験シ空氣ノ漏洩セザルモノナルコト

八 空氣箱ノ表面ニハ煮沸セル亞麻仁油又ハ良質ノ「ワニス」若ハ當該官吏ノ適當ト認ムル塗料ヲ塗布スルコト

九 空氣箱ヲ取附クルニハ之ヲ鐵銅部ニ接觸セシメザルコト

水面ニ墜落セシメテ異狀ヲ呈セザルモノナルコトヲ要ス

第五十三條 救命浮器ノ重量ハ一八〇キログラムヲ超ユルコトヲ得ズ

重量一三五キログラムヲ超ユル救命浮器ニ在リテハ之ガ取扱ヲ容易ナラシムル爲適當ナル把手又ハ棧木ヲ取附ケ置クコトヲ要ス

前項ノ把手又ハ棧木ハ船舶ノ手摺ヲ越エテ救命浮器ヲ上リ落サシムルニ支障ヲ來サザルモノナルコトヲ要ス

第五十四條 救命浮器ヲ淡水ニ浮ベタルトキ之ニ吊シ得ル鐵片ノ重量キログラムニテヲ以テ救命浮器ノ全浮力トス

第五十五條 救命浮器ノ浮體ハ水密ナル空氣箱又ハ當該官吏ニ於テ適當ト認ムル浮力材料ヨリ成ルコトヲ要シ浮體ノ浮力ガ空氣ニ依ルモノナル場合ニハ救命浮器ノ使用ニ先チ膨脹セシムル必要ナキモノナルコトヲ要ス

第五十六條 浮體ハ出來得ル限り救命浮器ノ側部ニ近ク之ヲ配置スルコトヲ要ス

第五十七條 金屬製空氣箱ハ左ノ各號ノ條件ニ適合スルモノナルコトヲ要ス

一 空氣箱ハ厚サ〇・六〇ミリメートル以上ノ良質ノ銅板又ハ黃銅板若ハ當該官吏ノ適當ト認ムル耐久材料ニ

テ構成スルコト(亞鉛板、亞鉛鍍鐵鋼板又ハ銅鍍鐵鋼

板又ハ黃銅板若ハ當該官吏ノ適當ト認ムル耐久材料ニテ構成スルコト)

二 空氣箱ハ厚サ〇・六〇ミリメートル以上ノ良質ノ銅

板又ハ黃銅板若ハ當該官吏ノ適當ト認ムル耐久材料ニ

テ構成スルコト(亞鉛板、亞鉛鍍鐵鋼板又ハ銅鍍鐵鋼

板又ハ黃銅板若ハ當該官吏ノ適當ト認ムル耐久材料ニ



第五十八條 浮體ハ包箱又ハ包枠ヲ以テ之ヲ防護シ動カザル様取附クルコトヲ要ス

第五十九條 救命浮器ノ主枠組ニ使用スル木材ハ堅材ナルコトヲ要ス但シ當該官吏ニ於テ差支ナシト認ムル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

浮體ヲ防護スル爲メノ包箱又ハ包枠ニ使用スル木材ハ柔材ナルモ妨ナシ

第六十條 救命浮器ニハ其ノ周邊ニ沿ヒ該救命浮器ノ定員

ト同數ノ把握部ヲ有スル把索ヲ取附クルコトヲ要ス 前項ノ各把握部ニハ外徑四センチメートル長サ一〇センチメートルノ木製浮子ヲ附スルコトヲ要ス

把握部ノ弛ミノ深サハ把索ガ濡レタルトキ一五センチメートル以上二〇センチメートル以下ナルコトヲ要ス

把索ハ深サ三〇センチメートル以下ノ救命浮器ニ在リテハ之ヲ深サノ中央線ニ沿ヒ一列ニ取附クルコトヲ要シ深サ三〇センチメートルヲ超ユル救命浮器ニ在リテハ之ヲ二列トシ其ノ一ハ浮體ノ頂面ヨリ稍下部ニ、他ハ浮體ノ底面ヨリ稍上部ニ取附クルコトヲ要ス

把索ハ良質ノ「マニラ」索ニシテ徑一二ミリメートル以上ノモノナルコトヲ要ス

把索ヲ救命浮器ニ取附クルニハ亞鉛鍍セル鍊鐵製又ハ鋼

製ノ銀附螺釘及母螺ヲ使用スルカ又ハ救命浮器ノ外周ヲ形成スル枠材ニ孔ヲ穿テ之ニ直接把索ヲ通ズベシ

第六十一條 救命浮器ニハ左ノ各號ノ條件ニ從ヒ繫索ヲ備フルコトヲ要ス

一 繫索ノ長サハ救命浮器ヲ搭載スル甲板ヨリ該船舶ノ最低航海吃水線迄ノ高サニ二メートルヲ加ヘタルモノ以上ナルコト但シ一八メートルヨリ長キコトヲ要セザルコト

二 繫索ハ良質ノ「マニラ」索トシ其ノ大サハ救命浮器ノ重量一三五キログラム以下ノモノニ在リテハ徑一六ミリメートル以上、一三五キログラムヲ超ユルモノニ在リテハ徑二〇ミリメートル以上ナルコト

三 繫索ヲ救命浮器ニ取附クルニハ救命浮器ニ堅牢ニ取附ケタル亞鉛鍍セル鍊鐵製又ハ鋼製ノ銀附螺釘及母螺其ノ他適當ノ方法ニ依ルコト

四 前號ノ銀附螺釘ノ銀材ノ徑ハ一一ミリメートルナルコト

第六十二條 救命浮器ノ側部ハ旅客ノ注意ヲ喚起スル爲紅白交互ノ條線ニ塗裝スベシ

第六十三條 救命浮器ニハ明瞭且耐久ノ文字ヲ以テ左ノ各號ノ標示ヲ爲スベシ

一 型式承認番號(型式承認ヲ受ケタルモノニ限ル)

二 製造番號

三 定員

四 重量

五 墜落試験ノ高サ

六 製造年月

七 製造者ノ氏名又ハ名稱

第五章 救命浮環

第六十四條 救命浮環ハ一四・五キログラムノ鐵片ヲ附シ淡水ニ於テ二四時間以上浮ビ得ルモノナルコトヲ要ス

第六十五條 救命浮環ハ高サ一八メートルノ筒所ヨリ水面ニ墜落セシメ異狀ヲ呈セザルモノナルコトヲ要ス

第六十六條 救命浮環ノ内徑ハ四二〇ミリメートルト爲シ外徑ハ七五〇ミリメートル以上、厚サハ一〇〇ミリメートル以上、横截面ノ周ハ四五〇ミリメートル以上ト爲スベシ

第六十七條 救命浮環ノ浮力材料ハ一八箇以内ノ「コルク」塊又ハ「バルサ」塊ヲ木釘ヲ以テ固著シタルモノト爲スベシ

「コルク」ハ黒肌其ノ他ノ瑕疵ヲ有セザル天然「コルク」ニシテ其ノ重量一〇〇立方センチメートルニ付二二・五グ

ラム以下ノモノナルコトヲ要ス

「バルサ」ハ樹皮其ノ他ノ瑕疵ヲ有セズ且十分ニ蒸氣乾燥ヲ施シタル良質ノモノナルコトヲ要ス

第六十八條 救命浮環ハ帆布ヲ以テ外裝シ之ニ酸化亞鉛ヲ主成分トスル防水塗料ヲ三回以上塗布スベシ

帆布ハ一平方メートルニ付三四五グラム以上ノ重量ヲ有シ且幅三〇ミリメートルノ試験片ニ付長サ一〇〇ミリメートルニテ試験シ經緯共四〇キログラム以上ノ強力ヲ有スルモノナルコトヲ要ス

第六十九條 救命浮環ニハ四箇ノ縛帶ヲ縫著シ其ノ一箇ニハ檢印捺捺用ノ孔ヲ設ケ其ノ周縁ハ飾縫ト爲シ且孔蓋ヲ縫著スベシ

縛帶ハ幅六〇ミリメートル以上ト爲シ外裝布ト同一ノ帆布ヲ二重合縫ト爲シタルモノナルコトヲ要ス

第七十條 救命浮環ニハ其ノ周圍ニ把索ヲ附スベシ把索ハ良質ノ「マニラ」索トシ徑一〇ミリメートル以上、總長三メートル以上ニシテ接合部ニ於テモ三〇〇キログラム以上ノ強力ヲ有スルモノナルコトヲ要ス

第七十一條 「ミシン」縫ニハ長サ二〇〇ミリメートルニテ試験シ二キログラム以上ノ強力ヲ有スル亞麻絲又ハ綿絲ヲ使用スベシ



手縫ニハ長サ二〇〇ミリメートルニテ試験シ二三キログラム以上ノ強力ヲ有スル亞麻絲ヲ使用スベシ

第七十二條 「ミシン」縫部ハ二五ミリメートルニ付約八針ノ割合ニテ、手縫部ハ二五ミリメートルニ付約三針ノ割合ニテ縫著スベシ

第六章 救命胴衣

第七十三條 救命胴衣ハ左ノ各號ノ條件ニ適合スルモノナルコトヲ要ス

一 大人及小兒ノ兼用ニ適シ著用法簡易ニシテ前後表裏轉用シ得ルコト

二 水中ニ於テ身體ヲ略垂直ノ位置ニ保チ頭部ヲ十分露出セシメ得ルコト

第七十四條 救命胴衣ハ淡水ニ於テ七・五キログラムノ鐵片ヲ附シ二四時間浮ビタル後更ニ六・五キログラムノ鐵片ヲ附加シテ浮ビ得ルモノナルコトヲ要ス

第七十五條 救命胴衣ノ浮力材料ニハ「カボック」、「コルク」又ハ「バルサ」ヲ使用スベシ

浮力材料	前後各浮袋ノ寸法(浮力材料充填後)		首穴ノ寸法		肩襷ノ幅(耗)
	幅(中央ニテ)	高さ(中央ニテ)	前後ノ徑	左右ノ徑	
カボック	四〇〇	一九〇	一四〇	一四〇	六〇
コルク	四〇〇	一九〇	一一〇	一一〇	六〇

「カボック」ハ良質ノ乳白色「カボック」ニシテ種子其ノ他ノ爽雜物ヲ含有セズ且打綿ヲ施シタルモノナルコトヲ要ス

「コルク」ハ黒肌其ノ他ノ瑕疵ヲ有セザル天然「コルク」ニシテ其ノ重量一〇〇立方センチメートルニ付二二・五グラム以下ノモノナルコトヲ要ス

「バルサ」ハ樹皮其ノ他ノ瑕疵ヲ有セズ且十分ニ蒸氣乾燥ヲ施シタル良質ノモノナルコトヲ要ス

「コルク」塊及「バルサ」塊ハ特殊ノ箇所ニ使用スルモノヲ除クノ外七五〇立方センチメートル以上ノ容積ヲ有スルモノナルコトヲ要ス

第七十六條 救命胴衣ノ前部浮袋及後部浮袋ニハ等量ノ浮力材料ヲ有スルコトヲ要シ「カボック」ヲ使用スルモノニ在リテハ各五〇〇グラム以上ナルコトヲ要ス

第七十七條 救命胴衣ノ仕上寸法ハ左表ニ依ル

バルサ	四〇〇	一九〇	一一〇	一一〇	六〇
-----	-----	-----	-----	-----	----

第七十八條 覆布、肩襷等ノ材料ハ糊附、防水其ノ他ノ粧裝ヲ施サザル綿布又ハ亞麻布ニシテ一平方メートルニ付二四五グラム以上ノ重量ヲ有シ幅三〇ミリメートルノ試験片ニ付長サ一〇〇ミリメートルニテ試験シ經緯共四〇キログラム以上ノ強力ヲ有スルモノナルコトヲ要ス

第七十九條 胴帶ハ亞麻織、綿織又ハ亞麻及綿混織ノ平紐ニシテ幅三〇ミリメートル以上ヲ有シ且長サ一〇〇ミリメートルニテ試験シ九〇キログラム以上ノ強力ヲ有スルモノナルコトヲ要ス

第八十條 「ミシン」縫ニハ長サ二〇〇ミリメートルニテ試験シ一・五キログラム以上ノ強力ヲ有スル亞麻絲又ハ綿絲ヲ使用スベシ

手縫ニハ前項ノ縫絲ヲ二重ト爲シタルモノ又ハ特ニ太キ縫絲ヲ使用スベシ

第八十一條 「ミシン」縫部ハ二五ミリメートルニ付約一〇針ノ割合ニテ、手縫部ハ二五ミリメートルニ付約六針ノ割合ニテ縫著スベシ

浮袋兩面ノ覆布ノ縫著部ハ各布縁ヲ内側ニ折合縫著スベシ

第七十條 救命焰ハ之ヲ開孔シテ水上ニ投ジタルトキ一分時以内ニ自然ニ發火シ風浪中ニ於テモ正シキ位置ヲ保チ一五〇燭光以上ノ焰ヲ三〇分時以上連續發焰シ得ルモノナルコトヲ要ス

第七十條 救命焰ハ之ヲ開孔シテ水上ニ投ジタルトキ一分時以内ニ自然ニ發火シ風浪中ニ於テモ正シキ位置ヲ保チ一五〇燭光以上ノ焰ヲ三〇分時以上連續發焰シ得ルモノナルコトヲ要ス

第八十二條 救命焰ハ之ヲ開孔シテ水上ニ投ジタルトキ一分時以内ニ自然ニ發火シ風浪中ニ於テモ正シキ位置ヲ保チ一五〇燭光以上ノ焰ヲ三〇分時以上連續發焰シ得ルモノナルコトヲ要ス

第八十三條 罐ハ厚サ一〇・四ミリメートル以上ノ亞鉛鍍鍍鋼板ヲ以テ製造スベシ

罐ノ縱接合ハ折曲抱合ト爲シ且鑲附スベシ

外罐ハ筒形ト爲シ其ノ兩端ニ突出セル皿形端板ヲ附スベシ

外罐ノ筒形部ト端板トハ異接ノ上鑲附スベシ

外罐ニハ救命焰ト救命浮環トノ連結ニ使用スル適當ナル通索鑲ヲ附シ置クベシ

外罐ニハ防腐塗料ヲ塗布スベシ

第八十四條 外罐ノ發焰孔及發焰用浸水孔ハ亞鉛板等ヲ以テ塞ギ其ノ上部ニ引剝用鑲ヲ附スベシ



引割用鐵ハ徑四ミリメートルノ眞鍮針金製ニシテ内徑二  
五ミリメートルナルコトヲ要ス  
五 鉛板等ヲ引割グニ要スル荷重ハ救命焰ノ重量ヨリ小ナ  
ラズ且七キログラムヨリ大ナラザルコトヲ要ス  
第八十五條 救命焰ニハ風化セザル發焰用炭化石灰七〇〇  
グラム以上及點火用燐化石灰七五グラム以上ヲ納メ置ク  
ベシ

第八章 救命索發射器

第八十六條 救命索發射器ヲ分チテ左ノ五種トス  
一 第一號救命索發射器 標準到達距離三〇〇メートル  
以上ノモノ  
二 第二號救命索發射器 標準到達距離三〇〇メートル  
未滿二五〇メートル以上ノモノ  
三 第三號救命索發射器 標準到達距離二五〇メートル  
未滿二〇〇メートル以上ノモノ  
四 第四號救命索發射器 標準到達距離二〇〇メートル  
未滿一五〇メートル以上ノモノ  
五 第五號救命索發射器 標準到達距離一五〇メートル  
未滿一二〇メートル以上ノモノ  
標準到達距離ト稱スルハ晴天無風ノ際ニ箭竿又ハ彈丸ガ  
救命索ヲ引キテ到達スル水平距離ヲ謂フ

種類	救命索		
	徑(耗)	長サ(米)	抗張力(斤)
第一號	六〇〇	六〇〇	二五〇
第二號	五〇〇	五〇〇	一八五
第三號	四〇〇	四〇〇	一三〇
第四號	三〇〇	三〇〇	八五
第五號	二五〇	二四〇	六五

救命索ハ水分ヲ吸收スル虞ナキ様水密ニ包裝シ使用ノ際  
容易ニ開裝シ得ルモノナルコトヲ要ス

第九十一條 「ロケット」ハ左ノ各號ノ條件ニ適合スルモノ  
ナルコトヲ要ス

- 一 爆音ヲ發スル火藥ヲ含マズ且星火ヲ發セザルモノナ  
ルコト
  - 二 内筒ハ厚サ〇・四ミリメートル以上ノ亞鉛鍍鐵鋼板  
ヲ以テ製造シタルモノナルコト
  - 三 「ロケット」ハ一箇毎ニ防濕塗料ヲ塗布シ且硫酸紙ヲ  
以テ包裝シ「アラビア」護膜ニテ密封スルコト
- 第九十二條 普通型救命索發射器ニ使用スル「ロケット」ニ  
在リテハ前條ノ規定ニ依ルノ外荒天ニ於テモ點火シ得ル

第八十七條 救命索發射器ノ型ヲ分チテ左ノ三種トス  
一 普通型 「ロケット」ニ點火シ「ロケット」作用ニ依リ  
救命索ヲ引キ行クモノ  
二 短銃型 短銃ニ依リ「ロケット」ヲ發射スルト共ニ之  
ニ點火シ「ロケット」作用ニ依リ救命索ヲ引キ行クモノ  
三 銃砲型 銃砲ニテ彈丸ヲ發射シ之ニ依リ救命索ヲ引  
キ行クモノ

第八十八條 普通型救命索發射器ハ發射臺一箇、箭竿附「ロ  
ケット」四箇及救命索二條ヲ以テ一組トス  
短銃型救命索發射器ハ短銃一箇、箭竿附「ロケット」四箇  
藥莢四箇及救命索二條ヲ以テ一組トス  
銃砲型救命索發射器ハ銃砲一箇、箭竿附彈丸四箇、藥莢  
四箇及救命索二條ヲ以テ一組トス  
第八十九條 救命索發射器ハ特殊ノ習練ヲ經ザル者ニテモ  
之ヲ使用シ得ル程度ニ使用方法簡易ニシテ且使用者ニ危  
險ヲ及ボサザルモノナルコトヲ要ス  
第九十條 救命索ハ良質ノ麻索、綿絲索其ノ他弱カナルモ  
ノニシテ其ノ徑、長サ及抗張力ノ標準ハ救命索發射器ノ  
種類ニ應ジ左表ニ依ル但シ第一號救命索發射器ニシテ標  
準到達距離著シク大ナルモノニ在リテハ救命索ノ徑、長  
サ及抗張力ハ當該官吏ノ適當ト認ムルモノナルコトヲ要

適當ナル點火裝置ヲ備ヘ且該「ロケット」ニ點火シタル後  
「ロケット」作用ヲ開始スル迄三秒時以上ノ餘裕アルコト  
ヲ要ス

第九十三條 短銃型救命索發射器ニ使用スル「ロケット」ニ  
在リテハ第九十一條ノ規定ニ依ルノ外之ヲ短銃ニ依リ發  
射シタル際點火スル爲ノ點火裝置ヲ備フルコトヲ要ス  
第九十四條 箭竿ハ其ノ材料及寸法適當ニシテ使用ノ際  
「ロケット」又ハ彈丸ニ取附クルコトヲ要スルモノニ在リ  
テハ適當ナル取附裝置ヲ備フルコトヲ要ス  
第九十五條 銃砲ハ移動シ得ルモノニシテ且其ノ仰角ハ六  
〇度以上ナルコトヲ要ス  
第九十六條 標準到達距離ハ救命索發射試驗ヲ四回以上行  
ヒ風其ノ他天候ノ影響ヲ除キタル平均到達距離ヲ以テ之  
ヲ定ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス  
昭和四年六月遞信省令第二十一號救命具試驗規程ハ之ヲ廢  
止ス



遞信省令第二十二號

消火器試驗規程左ノ通定ム

昭和九年二月五日

遞信大臣 南 弘

消火器試驗規程

第一條 本令ニ於テ消火器ト稱スルハ船内ニ於ケル火災ノ場合ニ使用スル持運式(携帶用)及移動式ノ消火器ヲ謂フ

第二條 消火器ヲ分チテ左ノ二種トス  
一 液體消火器 消火液ヲ放射スル持運式消火器  
二 泡消火器 消火氣泡ヲ放射スル持運式消火器及移動式消火器

第三條 本令ノ規定ニ該當セザル消火器ハ當該官吏ニ於テ本令ノ規定ニ該當スルモノト同一ノ效力ヲ有スト認ムルモノニ限リ之ヲ本令ニ適合スルモノト看做ス

第四條 消火器ハ起動容易ナルモノナルコトヲ要ス  
消火器ハ人爲的ナラザル振動、顛倒其ノ他ニ依リ起動セザルモノナルコトヲ要ス

第五條 消火器ノ重量ハ一人ノ力ヲ以テ之ヲ有效ニ取扱ヒ得ル程度ニシテ且移動式泡消火器ヲ除キ一七キログラムヲ超エザルコトヲ要ス

五 胴板及端板(皿形ニ爲シタル後)ノ厚サ及銕孔徑ハ容器ノ外徑及使用材料ニ應ジ左表ニ依ルコト

容器ノ外徑	銅 板		銅 板	
	厚サ(銕孔徑)	銕孔徑	厚サ(銕孔徑)	銕孔徑
一五センチ以下	一・二	四・〇	一・〇	四・〇
一五センチ以上 一〇センチ以下	一・二	四・〇	一・〇	四・〇
一〇センチ以上 五センチ以下	一・二	四・〇	一・二	四・〇
五センチ以下	一・二	四・〇	一・二	四・〇

移動式消火器ノ構造及寸法ハ當該官吏ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第九條 裝填口ハ徑七・五センチメートルヨリ小ナラザルモノト爲シ之ニ螺絲部ノ長サ約二センチメートルヲ有スル砲金製螺絲蓋ヲ取附クベシ  
蓋蓋又ハ裝填口ノ螺絲部ニハ消火器ヲ起動セシメタル後消火液又ハ消火氣泡ノ放射孔閉塞ノ場合ニ殘留スル瓦斯ノ壓力ヲ蓋蓋螺絲シ中徐々ニ降下セシムル爲小ナル完全孔若干ヲ穿ツベシ  
螺絲部ノ螺絲ハ連續セルモノト爲スベシ裝填口頂部ノ氣密ヲ保ツ爲ニハ油ヲ浸潤セシメタル良質ノ革、耐酸性護膜其ノ他適當ノ材料ヲ使用スルコトヲ要シ其ノ厚サハ三

消火器ノ容量ハ水準線迄測リ五リットル以上ナルコトヲ要ス

水準線以上ノ空氣部ハ容器ノ全容積ノ五%ヨリ小ナルベカラズ

消火器ニハ水準線ヲ明瞭ニ標示スベシ

第六條 消火液及消火氣泡發生液ノ容器ノ形狀ハ圓筒形又ハ圓錐形ト爲シ圓筒形ナルトキハ兩端板ヲ、圓錐形ナルトキハ大ナル徑ヲ有スル端板ヲ外方ニ突出シタル皿形ト爲スベシ  
端板ノ皿ノ内半徑ハ容器ノ端部ノ内徑ヲ超エザルコトヲ要ス

第七條 容器ノ胴板及端板ニハ銅板又ハ鋼板ヲ使用シ其ノ内面ニハ十分ニ錫引若ハ鉛引ヲ施スベシ

第八條 持運式消火器ノ容器ノ構造及寸法ハ左ノ各號ノ條件ニ適合スルモノナルコトヲ要ス

- 一 接合部ハ果接銕締ト爲シ且鑲附ト爲スコト
- 二 銕孔ハ錐採シ縱接合ニ於テハ心距ヲ二センチメートル乃至二・五センチメートルト爲スコト
- 三 端板ノ周縁ハ折返ト爲サザルコト
- 四 垂直ニ据置ク消火器ニハ下部端板ト胴板トノ接合部ヲ庇護スル金屬製受臺ヲ附スルコト

ミリメートル以下ト爲スベシ

第十條 藥液罐受籠ハ容器ノ掃除及検査ノ爲容易ニ取出シ得ルモノト爲スベシ

第十一條 消火器ニハ其ノ水壓試驗ヲ行フトキ及起動ノ際器内ニ生ズル壓力ヲ確メントスルトキ壓力計ヲ取附クル爲標準螺絲ヲ有スル壓力計取附口ヲ附シ置クベシ

第十二條 放射孔又ハ放射管ニハ適當ナル濾過裝置ヲ取附クベシ

内部放射管ヲ取附クル場合ニハ該管ハ容器ヲ略空虛ト爲スコトヲ得ル長サノモノト爲スベシ

第十三條 内部放射管ヲ備フル消火器ニ在リテハ溫度ノ變化ニ依リ消火液ガ放射孔ノ方ニ押出サレ取附物ヲ腐蝕シ又ハ放射孔ヲ填塞スルコトヲ防グ爲適當ノ膨脹室ヲ設クルカ又ハ其ノ他適當ナル裝置ヲ施スベシ

第十四條 蛇管ヲ使用スル消火器ニ在リテハ蛇管ヲ耐久性ノモノナルコトヲ要ス

第十五條 放射口金ノ孔ノ大サハ徑四ミリメートル以上ト爲シ消火液又ハ消火氣泡ノ放射ハ六〇秒時以上連續的ニシテ消火液又ハ消火氣泡ノ到達スル水平距離ハ放射ノ初期ニ於テ九メートル以上、六〇秒時ニ於テ六メートル以上ナルコトヲ要ス



放射口金端ニハ薄護其ノ他適當ノ塵埃除ヲ附スベシ  
 第十六條 持運式消火器ニハ其ノ持運及取扱ニ便ナル様適  
 當ノ固定把手ヲ設クルコトヲ要シ移動式消火器ニハ移動  
 及取扱ニ便ナル様適當ノ裝置ヲ設クルコトヲ要ス  
 第十七條 消火器ノ裝填物ハ左ニ掲グルモノ其ノ他當該官  
 吏ノ適當ト認ムルモノナルコトヲ要ス  
 液體消火器  
 一 重炭酸曹達又ハ炭酸加里ノ溶液及罐ニ容レタル硫酸  
 又ハ鹽酸  
 二 清水及壓縮炭酸瓦斯  
 泡消火器  
 重炭酸曹達ト氣泡劑トノ混合液及罐ニ容レタル硫酸「ア  
 ルミニウム」溶液

第十八條 裝填物及空氣部ハ液體ノ溫度三八度ノトキ一切  
 ノ孔隙ヲ閉塞シテ起動セシメタル場合ニ生ズル壓力ヲ每  
 平方センチメートル一四キログラム以下ニ調節シタルモ  
 ノナルコトヲ要ス  
 第十九條 容器ハ每平方センチメートル二五キログラムノ  
 壓力ヲ五分時持續スル水壓試驗ニ堪フモノナルコトヲ要  
 ス  
 前項ノ壓力ハ前條ニ掲グル調節セラレタル壓力ノ二倍ニ  
 等ス

止ムルモ妨ナシ  
 第二十條 消火器ニハ左ノ事項ヲ標示スベシ  
 一 型式承認番號(型式承認ヲ受ケタルモノニ限ル)  
 二 消火器ノ種類  
 三 製造番號  
 四 容量  
 五 重量  
 六 製造年月  
 七 製造者ノ氏名又ハ名稱  
 第二十一條 消火器ニハ裝填物ニ關スル明細書ヲ添附スベ  
 シ  
 封緘シタル裝填物ニハ一箇毎ニ説明書ヲ添附スベシ  
 附 則  
 本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

遞信省令第二十三號

火災警報裝置試驗規程左ノ通定ム  
 昭和九年二月五日

遞信大臣 南 弘  
 目 次  
 火災警報裝置試驗規程

第一章 總 則  
 第二章 電氣「サーモスタット」式火災警報裝置  
 第三章 空氣管式火災警報裝置  
 第四章 煙管式火災警報裝置  
 附 則  
 火災警報裝置試驗規程

第一章 總 則  
 第一條 本令ニ於テ火災警報裝置ト稱スルハ船内ニ於ケル  
 火災ヲ自動的ニ警報スル裝置ヲ謂フ  
 第二條 火災警報裝置ヲ分チテ左ノ三種トス  
 一 電氣「サーモスタット」式火災警報裝置  
 二 空氣管式火災警報裝置  
 三 煙管式火災警報裝置  
 第三條 本令ノ規定ニ該當セザル火災警報裝置ハ當該官吏  
 ニ於テ本令ノ規定ニ該當スルモノト同一ノ效力ヲ有スト  
 認ムルモノニ限リ之ヲ本令ニ適合スルモノト看做ス  
 第四條 警報器又ハ探知器ハ火災ノ存在又ハ徵候ヲ船員ガ  
 最速ニ認メ得ベキ場所又ハ消防詰所ニ設置セララルモノ  
 ルナコトヲ要ス  
 第五條 一警報區域ニ含マルル室數ハ五〇ヲ超ユルコトヲ  
 得ズ又一警報區域ノ船首尾方向ノ長サハ四〇メートルヲ

超ユルコトヲ得ズ  
 第六條 水密隔壁又ハ防火隔壁ニテ仕切ラレタル場所ハ之  
 ヲ同一警報區域ニ含マシムルコトヲ得ズ但シ倉庫ニ付テ  
 ハ此ノ限ニ在ラズ  
 法規ニ依リ設クベキ支水隔壁ガ暴露甲板ニ到達セザル船  
 舶ニ在リテハ甲板間ノ場所ハ該隔壁ガ暴露甲板ニ到達セ  
 ルモノト看做ス  
 同一甲板上ニ在ラザル場所ハ之ヲ同一警報區域ニ含マシ  
 ムルコトヲ得ズ但シ船首尾狭部其ノ他ノ場所ニシテ當該  
 官吏ニ於テ差支ナシト認ムルモノハ此ノ限ニ在ラズ  
 第七條 火災警報裝置ハ一警報區域關係ノ裝置ガ動作不能  
 トナリタル場合ニ於テモ他ノ警報區域關係ノ裝置ヲ動作  
 不能トナラシメザルモノナルコトヲ要ス  
 火災警報裝置ハ一箇若ハ同時ニ數箇ノ火災警報信號ヲ爲  
 シ得ルモノナルコトヲ要ス  
 第八條 火災警報裝置ハ火災警報以外ノ信號ノ傳達ニ流用  
 シ得ザルモノナルコトヲ要ス  
 第九條 火災警報裝置ノ電路ハ電氣的接地ヲ有セザルコト  
 ヲ要ス  
 第十條 火災警報裝置ニ使用スル電導體ノ構造、大サ、鉛  
 被、鍍裝、防護、支持其ノ他詳細ハ當該官吏ノ適當ト認



ムル所ニ依ル但シ電線ハ電線式ノ電氣「サーモスタット」ノ電線ヲ除クノ外鉛被ヲ爲シ尙損傷ヲ受クル虞アルモノニ在リテハ鍍装スルコトヲ要ス

第十一條 火災警報装置ハ其ノ全装置ニ付耐久試験ヲ行ヒ故障ナキモノナルコトヲ要ス

第十二條 火災警報装置ニハ一組毎ニ其ノ操作、維持及試験ニ關スル詳細ニ豫備品ノ品目及數量ヲ記載シタル揭示用圖表ヲ添附スルコトヲ要ス

前項ノ圖表ニハ試験ノ執行年月日記入ノ爲並ニ試験ニ立會フ當該船舶職員ノ署名ノ爲餘白欄ヲ存セシメ試験ノ都度之ガ記入ニ便ナラシムベシ

第二章 電氣「サーモスタット」式火災警報装置

第十三條 電氣「サーモスタット」式装置ノ警報器ハ各警報區域ニ付一箇ノ警燈又ハ表示器ヲ有スルモノナルコトヲ要ス

前項ノ警報器ハ火災ノ發生シタル警報區域ヲ明ニ表示シ且特ニ人爲的ニ之ヲ復セシメザル限リ指示又ハ動作ヲ繼續スルモノナルコトヲ要ス

第十四條 警報器ニハ警報中自動的ニ警報音信號ヲ連續鳴響スル警鐘一箇ヲ附屬セシムルコトヲ要ス

第十五條 長サ一〇〇メートル以上ノ船舶ニハ機關室ニ補助警音裝置ヲ設置スルコトヲ要ス

助警音裝置ヲ設置スルコトヲ要ス

第十六條 電氣「サーモスタット」ハ之ヲ各警戒區畫室ノ天井ニ取附クベシ但シ貨物艙以外ノ場所ニ設クル電線式ノ電氣「サーモスタット」ニ在リテハ之ヲ仕切壁若ハ隔壁ニ於テ天井ヨリ三〇センチメートル以内ノ位置ニ架スルコトヲ得

第十七條 平面天井ニ在リテハ電氣「サーモスタット」相互間ノ距離ハ四・五メートルヲ超エザルコトヲ要ス

一箇ノ電氣「サーモスタット」ニ依ル警戒面積ハ一八・五平方メートルヲ超エズ又天井ノ何レノ部分モ電氣「サーモスタット」ヨリノ距離三メートルヲ超エザルコトヲ要ス

電線式ノ電氣「サーモスタット」ニ在リテハ各電路ハ三〇メートルヲ超エザル電線ヨリ成ルコトヲ要シ之ヲ各警戒區畫室ニ配線シ天井ノ何レノ部分モ電線ヨリノ距離三メートルヲ超エザルコトヲ要ス

第十八條 天井ガ深サ二五センチメートル以下ノ梁ニ依リ格子又ハ小間ニ區分セラレタルモノナルトキハ之ヲ平面天井トシテ取扱フベシ

梁ノ深サ二五センチメートルヲ超ユルトキハ梁ニ依リテ仕切ラレタル各區畫ヲ別箇ノ天井トシテ取扱フベシ

第十九條 梁ノ構造ガ特殊ノ爲前二條ノ規定ニ依リ難キ場合ニハ電氣「サーモスタット」ノ配置ハ當該官吏ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第二十條 貨物搭載場所ニ在ル電氣「サーモスタット」及損傷ヲ受クル虞アル電氣「サーモスタット」ハ適當ニ之ヲ防護スベシ

第二十一條 電源及電路ニハ第二十三條ニ規定スル場合ヲ除クノ外故障音信號裝置ヲ備フルコトヲ要ス

故障音信號裝置ハ電源又ハ電路ニ故障ヲ生ジタル場合該故障ヲ修復シ終ル迄明確ナル音信號ヲ自動的ニ連續鳴響スルモノナルコトヲ要ス

故障音信號ヲ停止スル爲閉閉器ヲ設クルモノニ在リテハ別ニ故障燈ヲ備ヘ音信號ヲ停止セシムルト同時ニ自動的ニ故障燈ニ點燈セシメ得ルコトヲ要ス

第二十二條 警鐘ニハ故障音信號裝置ヲ備フルコトヲ要ス但シ數箇ノ警鐘ヲ使用スルトキハ其ノ一箇ニ限り之ヲ備フルモ妨ナシ

第二十三條 故障音信號裝置ニ使用スル電路及之ニ對スル電源並ニ受信盤上ノ常時開放二次電路ニハ故障音信號裝置ヲ備フルコトヲ要セズ多數連結シタル「サーモスタット」ニ付亦同シ

助警音裝置ヲ設置スルコトヲ要ス

第十六條 電氣「サーモスタット」ハ之ヲ各警戒區畫室ノ天井ニ取附クベシ但シ貨物艙以外ノ場所ニ設クル電線式ノ電氣「サーモスタット」ニ在リテハ之ヲ仕切壁若ハ隔壁ニ於テ天井ヨリ三〇センチメートル以内ノ位置ニ架スルコトヲ得

第十七條 平面天井ニ在リテハ電氣「サーモスタット」相互間ノ距離ハ四・五メートルヲ超エザルコトヲ要ス

一箇ノ電氣「サーモスタット」ニ依ル警戒面積ハ一八・五平方メートルヲ超エズ又天井ノ何レノ部分モ電氣「サーモスタット」ヨリノ距離三メートルヲ超エザルコトヲ要ス

電線式ノ電氣「サーモスタット」ニ在リテハ各電路ハ三〇メートルヲ超エザル電線ヨリ成ルコトヲ要シ之ヲ各警戒區畫室ニ配線シ天井ノ何レノ部分モ電線ヨリノ距離三メートルヲ超エザルコトヲ要ス

第十八條 天井ガ深サ二五センチメートル以下ノ梁ニ依リ格子又ハ小間ニ區分セラレタルモノナルトキハ之ヲ平面天井トシテ取扱フベシ

梁ノ深サ二五センチメートルヲ超ユルトキハ梁ニ依リテ仕切ラレタル各區畫ヲ別箇ノ天井トシテ取扱フベシ

第二十四條 火災警報裝置ニ使用スル電源ハ封緘シタル專用ノ蓄電池ニシテ照明系統ノ幹線ヨリ自動的ニ充電セララルモノナルコトヲ要ス

第二十五條 火災警報裝置ニ使用スル電壓ハ二〇ヴォルト以上六〇ヴォルト以下ナルコトヲ要ス

火災警報裝置ハ其ノ標準電壓ノ八〇%ニテ動作スルモノナルコトヲ要ス

第二十六條 火災警報裝置ニ使用スル蓄電池ハ充電ヲ更新スルコトナクシテ四八時間以上電流ヲ供給シ得ルモノニシテ其ノ容量ハ一〇アマペア時以上ナルコトヲ要ス

第二十七條 火災警報裝置ニハ容量三アマペア以上六アマペア以下ノ「フューズ」ヲ充電用電流ヲ供給スル幹線又ハ其ノ附近ニ於テ蓄電池主放電路中ノ充電盤上ニ裝置スルコトヲ要ス

第二十八條 受信盤及其ノ附屬裝置ハ振動ニ依リ影響ヲ受ケズ又四五度傾キタル場合ニ於テモ動作スルモノナルコトヲ要ス

第二十九條 警報音信號ハ鐘ノ徑一五センチメートルヨリ小ナラザル蔽圍型警鐘ニ依リ發スルモノナルコトヲ要ス前項ノ音信號ハ適當ノ裝置ニ依リ之ヲ停止シ得ルコトヲ要ス



第三章 空氣管式火災警報裝置

第三十條 空氣管式裝置ノ警報器ハ各警報區域ニ付一箇ノ警燈又ハ表示器ヲ有スルモノナルコトヲ要ス  
 前項ノ警報器ハ火災ノ發生シタル警報區域ヲ明ニ表示シ且特ニ人爲的ニ之ヲ復セシメザル限リ指示又ハ動作ヲ繼續スルモノナルコトヲ要ス  
 第三十一條 警報器ニハ警報中自動的ニ警報音信號ヲ連續鳴響スル警鐘一箇ヲ附屬セシムルコトヲ要ス  
 第三十二條 長サ一〇〇メートル以上ノ船舶ニハ機關室ニ補助警音裝置ヲ設置スルコトヲ要ス  
 第三十三條 空氣管式裝置ニ於ケル各空氣管回路ハ長サ三〇〇メートルヲ超ゼエルコトヲ要シ且管ハ岐路ヲ有セズ其ノ兩端ヲ一箇ノ檢出器ニ連結スルコトヲ要ス  
 前項ノ檢出器ハ電線ニ依リ警報器ニ連結スルモノナルコトヲ要ス  
 第三十四條 空氣管ハ之ヲ各警戒區畫室ノ天井ニ取附クベシ但シ貨物艙以外ノ場所ニ設クル空氣管ニ在リテハ之ヲ仕切壁若ハ隔壁ニ於テ天井ヨリ三〇センチメートル以内ノ位置ニ取附クルコトヲ得  
 第三十五條 各蔽圍場所又ハ各室ニハ空氣管回路ノ全長ノ少クトモ五%ヲ露出セシムルコトヲ要シ且露出部ノ長サ

ハ如何ナル場合ニ於テモ八メートルヨリ少ナカラザルコトヲ要ス

第三十六條 平面天井ニ在リテハ天井ノ何レノ部分モ空氣管ヨリノ距離三・五メートルヲ超エザルコトヲ要ス

第三十七條 天井ガ深サ二五センチメートル以下ノ梁ニ依リ格子又ハ小間ニ區分セラレタルモノナルトキハ之ヲ平面天井トシテ取扱フベシ  
 梁ノ深サ二五センチメートルヲ超ユルトキハ梁ニ依リテ仕切ラレタル各區畫ニ少クトモ一條ノ空氣管ヲ配置スルコトヲ要ス

第三十八條 梁ノ構造ガ特殊ノ爲前二條ノ規定ニ依リ難キ場合ニハ空氣管ノ配置ハ當該官吏ノ適當ト認ムル所ニ依ル

第三十九條 貨物搭載場所ニ在ル空氣管及損傷ヲ受クル處アル空氣管ハ適當ニ之ヲ防護スベシ  
 區畫室其ノ他ノ場所ニシテ其ノ用途ノ性質上相當高温トナルコトアルベキ箇所ニ在ル空氣管ニハ必要ニ應ジ適當ニ防熱裝置ヲ施スベシ

第四十條 電源及電路ニハ第四十二條ニ規定スル場合ヲ除クノ外故障音信號裝置ヲ備フルコトヲ要ス  
 故障音信號裝置ハ電源又ハ電路ニ故障ヲ生ジタル場合該

故障ヲ修復シ終ル迄明確ナル音信號ヲ自動的ニ連續鳴響スルモノナルコトヲ要ス  
 故障音信號ヲ停止スル爲閉閉器ヲ設クルモノニ在リテハ別ニ故障燈ヲ備ヘ音信號ヲ停止セシムルト同時ニ自動的ニ故障燈ニ點燈セシメ得ルコトヲ要ス  
 第四十一條 警鐘ニハ故障音信號裝置ヲ備フルコトヲ要ス但シ數箇ノ警鐘ヲ使用スルトキハ其ノ一箇ニ限り之ヲ備フルモ妨ナシ  
 第四十二條 故障音信號裝置ニ使用スル電路及之ニ對スル電源竝ニ受信盤上ノ常時開放二次電路ニハ故障音信號裝置ヲ備フルコトヲ要セズ  
 第四十三條 火災警報裝置ニ使用スル電源ハ封緘シタル專用ノ蓄電池ニシテ照明系統ノ幹線ヨリ自動的ニ充電セララルモノナルコトヲ要ス  
 第四十四條 火災警報裝置ニ使用スル電壓ハ二〇ヴォルト以上六〇ヴォルト以下ナルコトヲ要ス  
 火災警報裝置ハ其ノ標準電壓ノ八〇%ニテ動作スルモノナルコトヲ要ス  
 第四十五條 火災警報裝置ニ使用スル蓄電池ハ充電ヲ更新スルコトヲシテ四八時間以上電流ヲ供給シ得ルモノニシテ其ノ容量ハ一〇アムペア時以上ナルコトヲ要ス

第四十六條 火災警報裝置ニハ容量三アムペア以上六アムペア以下ノ「フューズ」ヲ充電用電流ヲ供給スル幹線又ハ其ノ附近ニ於テ蓄電池主放電路中ノ充電盤上ニ裝置スルコトヲ要ス

第四十七條 受信盤及其ノ附屬裝置ハ振動ニ依リ影響ヲ受ケズ又四五度傾キタル場合ニ於テモ動作スルモノナルコトヲ要ス

第四十八條 警報音信號ハ鐘ノ徑一五センチメートルヨリ小ナラザル蔽圍型警鐘ニ依リ發スルモノナルコトヲ要ス前項ノ音信號ハ適當ノ裝置ニ依リ之ヲ停止シ得ルコトヲ要ス

第四章 煙管式火災警報裝置

第四十九條 火災探知器ハ各警戒區畫室ヨリ之ニ導キタル煙管ニ依リ火災ニ伴フ細微稀薄ナル煙ヲ容易ニ判別シ得ルモノナルコトヲ要シ之ニ附隨スル照明裝置ハ夜間航海ニ支障ヲ來サザルモノナルコトヲ要ス  
 第五十條 各警戒區畫室ニハ火災探知器ニ通ズル煙管一箇以上ヲ備フルコトヲ要ス但シ相隣接セル小區畫室ニシテ當該官吏ニ於テ差支ナシト認ムルモノニ在リテハ此等區畫室ヨリノ煙管ハ之ヲ連絡シ一煙管トシテ火災探知器ニ導クモ妨ナシ